佐　　堂

（その１）

近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

財団法人　大阪文化財センター

佐　　堂

（その１）

近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

財団法人　大阪文化財センター

序　文

佐堂遺跡は、河内平野低湿地に広がる美園遺跡、山賀遺跡、久宝寺遺跡等の一連の遺跡群と同様に、地下深く埋没しており、昭和49年に実施した範囲確認調査によって、現地表下約3.5mの深さまで遺物包含層や種々の遺構が存在することが判明したものである。

この調査では「和同開珎」なども出土し特に奈良時代の集落跡として注目されるようになった。

この佐堂遺跡は、日本道路公団によって建設されている近畿自動車道天理～吹田線にかかる13遺跡中の1遺跡であり、昭和56年6月より昭和59年3月にかけて発掘調査を実施したものである。

今回の調査により、検出した遺構、また出土遺物は予期された以上に多く、本書に収められたごとく河内平野の古代から中世にかけての人々の永い営みの証左を得ることが出来、なかでも7世紀末～8世紀初頭の木簡の出土等については学界からも注目されたところである。

調査にあたっては、日本道路公団大阪建設局、財団法人大阪文化財センターはじめ関係各位多数の方々のご協力、ご援助をいただいた。ここに深く感謝の意を表すると共に今後とも温かいご支援を賜わるよう切望してやまない。

昭和59年11月

大阪府教育委員会

文化財保護課長　吉房康幸

序　　文

生駒山麓の西に広がっていた河内湖に流れこむ古大和川と中、小の支流は、河内平野に多くの肥沃な湿潤地を形成してきました。この地に縄文時代晩期から人々が定着し始め、弥生時代からこの地域を水田として開拓を始め、多大な努力を傾けてきました。河内平野の歴史は、この湿潤地の開拓と自然との闘いであったとも言えます。その様相の一端はここに報告する佐堂遺跡でも窺えます。

大阪文化財センターでは、昭和51年から、日本道路公団が建設する近畿自動車道天理・吹田線にかかる14遺跡の発掘調査を大阪府教育委員会とともに継続的に実施してきました。既に新家遺跡・西岩田遺跡・瓜生堂遺跡・巨摩廃寺遺跡・若江北遺跡・友井東遺跡・美園遺跡・佐堂遺跡・亀井遺跡・長原遺跡・大堀城遺跡の調査は終了し、現在、山賀遺跡・久宝寺遺跡・城山遺跡・新たに発見された亀井北遺跡の発掘調査を実施しています。

本書は昭和59年３月に発掘調査を終了した東大阪市金岡４丁目から八尾市佐堂町３丁目にかけて所在する佐堂遺跡（その１）の発掘調査の概要を収録したもので、今回の発掘調査によって、弥生時代中期、後期および古墳時代中期、後期の水田遺構、また平安時代から室町時代の掘立柱建物、井戸、墓等が検出されました。本書が河内平野の古代・中世史を解明する上で、幾ばくかの貢献をなしうるものと確信いたしております。

これらは、ひとえに大阪府教育委員会、日本道路公団大阪建設局、同大阪工事事務所をはじめとして調査関係各位並びに多数の方々の御尽力の賜物と深く感謝いたしております。今後とも温かい御支援を賜わるよう切望してやみません。

昭和５９年１１月

財団法人　大阪文化財センター

理事長　加藤　三之雄

例　　言

1．本書は日本道路公団が建設を進めている近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う発掘調査のうち、八尾市佐堂町に所在する佐堂遺跡（その１）調査区の発掘調査概要報告書である。

2．本調査は大阪府教育委員会及び財団法人大阪文化財センターが、日本道路公団大阪建設局の委託を受けて実施したものである。

3．本調査に要した費用363,142,000円はすべて日本道路公団が負担した。

4．本調査は昭和56年３月19日から昭和59年３月31日までの間実施した。

5．基本的な遺物整理業務は発掘調査と併行して実施した。また、総括的整理及び本書作成の作業等は昭和59年２月11日から昭和59年３月31日までの間に行なった。

6．本調査並びに本書作成は、大阪府教育委員会の指導の下に、財団法人大阪文化財センターが実施したものである。調査並びに本書作成に関係した者は以下のとおりである。

調査関係者組織表

事務局	理事兼事務局長	井上定清（昭和58年３月まで）　小林廣喜
	事務局次長兼総務課長	大塚恭朗（昭和58年４月まで）　尾田勝之
	主幹兼庶務係長	阪上允子、主査　田中喜代子、主事　秋山芳廣 灰本明子、千野和久、田口宗義、鎗山洋子、 宮本哲男
	主幹兼普及係長	福岡澄男、技師　妹尾直子、主事　小島容子
	業務課主幹	椋尾孝彦（昭和58年４月まで）　吉村信男
調査総括責任者	業務課長	中井貞夫（昭和58年３月まで）　石神　怡
	主幹兼業務第１係長	中西靖人
久宝寺分室	業務第３係長	渡邊昌宏、技師　片山彰一、三宅正浩
長吉分室	業務第４係	技師　山口誠治

また調査に際しては、日本道路公団大阪工事事務所、大阪府八尾土木事務所、八尾警察署、築留土地改良区事務所に格別の配慮を受けるとともに、調査にあたっては以下の学生諸君の協力を得た。（アイウエオ順）

浅田善久、池場　稔、石川勝之、乾ゆかり、射水　治、入野　博、上山千賀子、氏野佳美、梅林佐和子、江崎正浩、大槻哲也、大政　直、奥野広子、奥山朋子、楠　直子、塩田武士、島田幹士、進藤　武、高山一敏、中島正巳、中谷喜貞、野藤和也、英　雅人、益田甲治、松永典丈、松山　聡、溝口敬三、光田邦夫、三宅康弘、矢追紀子、簗瀬和孝、山田武則、山本秀樹、吉川由希子。

7．本書第Ⅰ章～Ⅲ章の執筆は三宅正浩が行った。

8．調査の実測基準については、当初は日本道路公団による道路中心線を準用したが、Ａトレンチ部での弥生時代中期水田面の航空測量後は、遺構実測の座標は国土座標を使用した。国土座標はＸ＝151Km000m、Ｙ＝37Km000mを原点とし、m単位で表わした。例えばＸ＝－538、Ｙ＝－260は、Ｘ＝－151Km538m、Ｙ＝－37Km260m を指す。方位は座標北を指す。また標高はＴ．Ｐ．（東京湾標準潮位）を使用した。

9．本書に記載した各遺構番号の付与は、弥生時代＝101～199、古墳時代＝201～299、飛鳥～平安時代＝301～399、中世＝401～499（ピットについては4001～4999）、近世・近世以降＝501～599とした。なお、平安時代後期については中世成立期とみて400番台の単位を使用した。

10．遺構は、種類毎に通し番号を与え、図面・図版に共通した番号を付した。

ＳＡ……畦畔　ＳＢ……建物　ＳＤ……溝　ＳＥ……井戸

ＳＫ……土壙　ＳＸ……その他　ＮＲ……自然流路　Ｐ……柱穴及びピット

11．遺物については基本的には通し番号を与え、図面、図版共に共通している。ただし遺物のうちわずかではあるが図版にあって図面にない場合があり、それにはアルファベット（ａ、ｂ、ｃ、ｄ……）を付与した。

12．本調査にあたっては以下の諸氏の御指導、御教示を得た。記して感謝の意を表する。

大嶋廣喜（築留土地改良区事務所）、勝田邦夫（東大阪市教育委員会）、神谷正弘（高石市教育委員会）、鬼頭清明、佐藤　信（奈良国立文化財研究所）、駒沢　敦、原田昌則、成海佳子（八尾市文化財調査研究会）、米田敏幸（八尾市教育委員会）、西山要一（財団法人元興寺文化財研究所）、樽野博幸（大阪市立自然史博物館）

13．本調査では、種子の鑑定を大阪市立大学粉川昭平教授、大阪府立大学藤下典之教授に依頼し、玉稿を寄せていただいた。また出土木製品の保存処理、及び樹種鑑定については財団法人元興寺文化財研究所、花粉・珪藻微化石の分析はパリノサーヴェイ株式会社に委託した。

また遺構の空中写真・測量（Ａトレンチ弥生時代中期面）についてはアジア航測株式会社に委託した。

14．本調査にあたっては、写真、実測図などの記録を作成するとともに、カラースライドを多数作成した。本書掲載以外の資料については、財団法人大阪文化財センターで保管している。広く利用されることを希望したい。

佐　　堂

（その１）

近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う

埋蔵文化財発掘調査概要報告書

目　　次

例　言

第Ⅰ章　はじめに……1

第Ⅱ章　検出遺構・出土遺物……5

　第１節　基本層序……5

　第２節　弥生時代……9

　第３節　古墳時代（布留式併行期）……11

　第４節　古墳時代中・後期……17

　第５節　飛鳥・奈良・平安時代……21

　第６節　中世……31

　第７節　近世・近世以降……64

第Ⅲ章　まとめ……66

　第１節　佐堂遺跡出土瓦器椀についての若干の整理……66

　第２節　中世の佐堂遺跡について……74

付　章……87

　Ⅰ．佐堂遺跡から出土した植物種子……粉川昭平……89

　Ⅱ．佐堂遺跡から出土したウリ科植物の遺体について……藤下典之……93

挿 図 目 次

第 1 図　佐堂遺跡位置図…… 1
第 2 図　調査区位置図…… 2
第 3 図　トレンチ配置図…… 3
第 4 図　基本土層図……7・8
第 5 図　弥生時代中期水田面実測図…… 9
第 6 図　弥生時代中期水田面直上粗砂層、後期河川出土土器……10
第 7 図　弥生時代後期河川出土木庖丁……11
第 8 図　古墳時代（布留式併行）遺構配置図（北半部分）……12
第 9 図　古墳時代（布留式併行）遺構配置図（南半部分）……13
第 10 図　古墳時代（布留式併行）A、13Aトレンチ遺構群平面図・断面図……14
第 11 図　ＳＥ 201 実測図……15
第 12 図　ＳＥ201（10～13）、ＳＤ209（14～18）、ＳＤ202（19～20）……16
第 13 図　古墳時代中・後期遺構配置図（北半部分）……17
第 14 図　古墳時代中・後期遺構配置図（南半部分）……18
第 15 図　ＳＡ202、ＳＡ205断面図（３Ａトレンチ西壁）……19
第 16 図　ＳＡ204、ＳＡ206断面図……19
第 17 図　古墳時代中・後期畦畔、水田面出土土器……19
第 18 図　暗灰色粘土層（古墳時代中期包含層）出土木槌……20
第 19 図　ＳＤ 213 出土土器……20
第 20 図　飛鳥～平安時代遺構配置図（北半部分）……21
第 21 図　飛鳥～平安時代遺構配置図（南半部分）……22
第 22 図　ＮＲ 301 出土土器……23
第 23 図　暗灰色粘土層（飛鳥時代包含層）出土土器……23
第 24 図　ＮＲ 302 出土土器……24
第 25 図　ＮＲ 302 出土土器……25
第 26 図　ＮＲ 302 出土木製品……26
第 27 図　灰褐色砂層出土木簡……26
第 28 図　ＳＤ 302 土器出土状況……27
第 29 図　ＳＤ 302 出土土器……27
第 30 図　土器群301、土器群302実測図……28
第 31 図　ＳＸ 301 土器棺墓実測図……28
第 32 図　土器群301（84～92）、土器群302（78～83）、ＳＸ301（93、94）……29
第 33 図　包含層出土古銭……30
第 34 図　Ｐ301、Ｐ302出土土器……30
第 35 図　ＳＢ 401 実測図……31
第 36 図　ＳＢ402、ＳＢ403実測図……32
第 37 図　中世遺構群実測図……33
第 38 図　ＳＢ404、ＳＢ405実測図……34

第 39 図　中世井戸位置図……35
第 40 図　ＳＥ402、ＳＥ430、ＳＥ421出土土器 ……35
第 41 図　ＳＥ 413 出土土器……37
第 42 図　ＳＥ402、ＳＥ403、ＳＥ404、ＳＥ410実測図……38
第 43 図　ＳＥ416、ＳＥ417、ＳＥ418、ＳＥ420、ＳＥ421実測図 ……39
第 44 図　ＳＥ415、ＳＥ423、ＳＥ425、ＳＥ419、ＳＥ427実測図 ……40
第 45 図　ＳＥ428、ＳＥ426、ＳＥ411、ＳＥ401実測図……42
第 46 図　ＳＥ408、ＳＥ412実測図……43
第 47 図　ＳＥ 414 実測図……44
第 48 図　ＳＥ 415 出土木製品……46
第 49 図　ＳＥ430、ＳＥ429、ＳＥ424、ＳＥ405、ＳＥ409実測図 ……47
第 50 図　ＳＫ407、ＳＫ408、ＳＫ424実測図 ……49
第 51 図　ＳＸ401、ＳＸ402実測図……50
第 52 図　ＳＫ401（110、111）、ＳＫ408（112）、ＳＥ404（113～115）、ＳＥ420（116～119）、
ＳＸ402（121～133）、ＳＫ415（134～138）、ＳＥ405（120、139、140）、
ＳＫ404（141）……51
第 53 図　ＳＫ403、ＳＫ424、ＳＥ417、ＳＥ416、ＳＥ426、ＳＥ406……52
第 54 図　ＳＥ415（160～168）、ＳＥ408（169～174）、ＳＥ401（175～179）……53
第 55 図　ＳＥ414（180～186）、ＳＥ401（187～192）、ＳＥ412（193～197）……54
第 56 図　ＳＤ424、ＳＤ429断面図……55
第 57 図　ＳＥ403、ＳＥ404、ＳＥ408、ＳＥ410、ＳＥ411出土木製品 ……56
第 58 図　ＳＤ445実測図 ……57
第 59 図　ＳＤ445断面図 ……58
第 60 図　ＳＤ445馬骨出土状況 ……59
第 61 図　ＳＤ445出土木簡 ……59
第 62 図　ＳＤ445出土遺物 ……60
第 63 図　ＳＡ401、ＳＡ402断面図……61
第 64 図　水田面出土宋銭……62
第 65 図　近世～近代井戸配置図……64
第 66 図　ＳＥ502、ＳＥ505実測図……65
第 67 図　瓦器椀分類図……66
第 68 図　遺構配置変遷図……77・78
第 69 図　中世溝と周辺地形図……81
第 70 図　周辺中世遺跡分布図……83

表　目　次

第 1 表　中世井戸一覧表……37

図　版　目　次

図版1　佐堂遺跡周辺航空写真
図版2　佐堂遺跡調査区航空写真（Aトレンチ）
図版3　発掘前全景　南より、北から
図版4　弥生時代中期遺構面　Aトレンチ SA101・SD101（北より）
図版5　弥生時代中期遺構面　Aトレンチ水田面 SA102～SA106（北より）3Aトレンチ足跡面（北より）
図版6　弥生時代遺構面　Aトレンチ溝状落ち込み（東より）　Aトレンチ自然流路（東より）
図版7　古墳時代（布留式併行）遺構面　Aトレンチ SD211・SE201・SD212（北より）Aトレンチ SE201
図版8　古墳時代中・後期遺構面　Aトレンチ SA201（南より）Aトレンチ SA207（北より）
図版9　古墳時代中・後期遺構面　8Aトレンチ SD213（南より）3Aトレンチ SA202（北より）2Aトレンチ SA205（北より）
図版10　奈良～平安時代遺構面　Aトレンチ NR302
図版11　奈良～平安時代遺構面　8Aトレンチ SD302（東より）SD302遺物出土状況　Aトレンチ SX301
図版12　平安後期～鎌倉時代遺構面　Aトレンチ北端部（北より）　Aトレンチ中央付近（北より）　1. Aトレンチ SK402馬歯出土状況、2. Aトレンチ SB401、3. Aトレンチ SK408、4. Aトレンチ SE414
図版13　平安後期～鎌倉時代井戸　Aトレンチ SE401・SE410・SE408・SE412・SE417、SE427
図版14　平安後期～鎌倉時代井戸　3Aトレンチ、1. SE420、2. SE416、3. SE416・417・418・420・421、4. SE415土層断面図、5. 6. SE415遺物出土状況

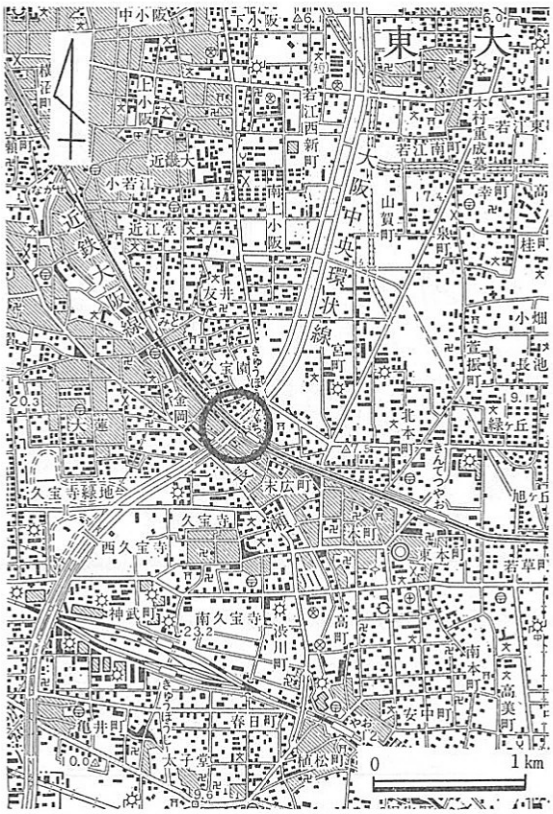
図版15　平安後期～鎌倉時代井戸　　Ａトレンチ ＳＥ404土器出土状況、ＳＥ404、Ａトレンチ ＳＥ403種子出土状況、 ＳＥ403、 Ａトレンチ ＳＥ402、Ａトレンチ ＳＥ411
図版16　平安後期～鎌倉時代遺構　　Ａトレンチ ＳＫ418・ＳＸ401・ＳＸ402
図版17　平安後期～鎌倉時代溝　　Ａトレンチ ＳＤ445　（北より）Ａトレンチ ＳＤ445 馬骨出土状況、２Ａトレンチ ＳＤ445（西より）
図版18　中世水田面　　Ａトレンチ畦畔・鋤跡・足跡　Ａトレンチ鋤跡・足跡
図版19　中世・近世遺構面　　Ａトレンチ中央部畦畔ＳＡ401、ＳＡ402（北より）Ａトレンチ南端部
図版20　中世～近世遺構面　　Ａトレンチ北端部（北より）　Ａトレンチ中央付近（東より）
図版21　工業用水管接続部・水道管・用水路切り替え部
図版22　弥生時代土器
図版23　布留式土器
図版24　布留式土器・古墳時代須恵器・古墳時代木製品
図版25　古墳～奈良時代土器
図版26　奈良～平安時代土器
図版27　奈良～平安時代土器
図版28　奈良～平安時代土器
図版29　奈良～平安時代木製品
図版30　中世土器
図版31　中世土器
図版32　中世土器
図版33　中世土器
図版34　中世土器
図版35　中世土器
図版36　中世土器
図版37　中世木製品・種子
図版38　中世木製品・獣骨

付　図　目　次

付図１　弥生中期遺構面　平面図
付図２　古墳時代（布留式併行）遺構面　平面図
付図３　古墳時代中・後期遺構面　平面図
付図４　古墳時代後期遺構面　平面図
付図５　奈良～平安時代遺構面　平面図
付図６　中世遺構面（平安後期～鎌倉時代）　平面図
付図７　中世遺構面（鎌倉～室町時代）　平面図

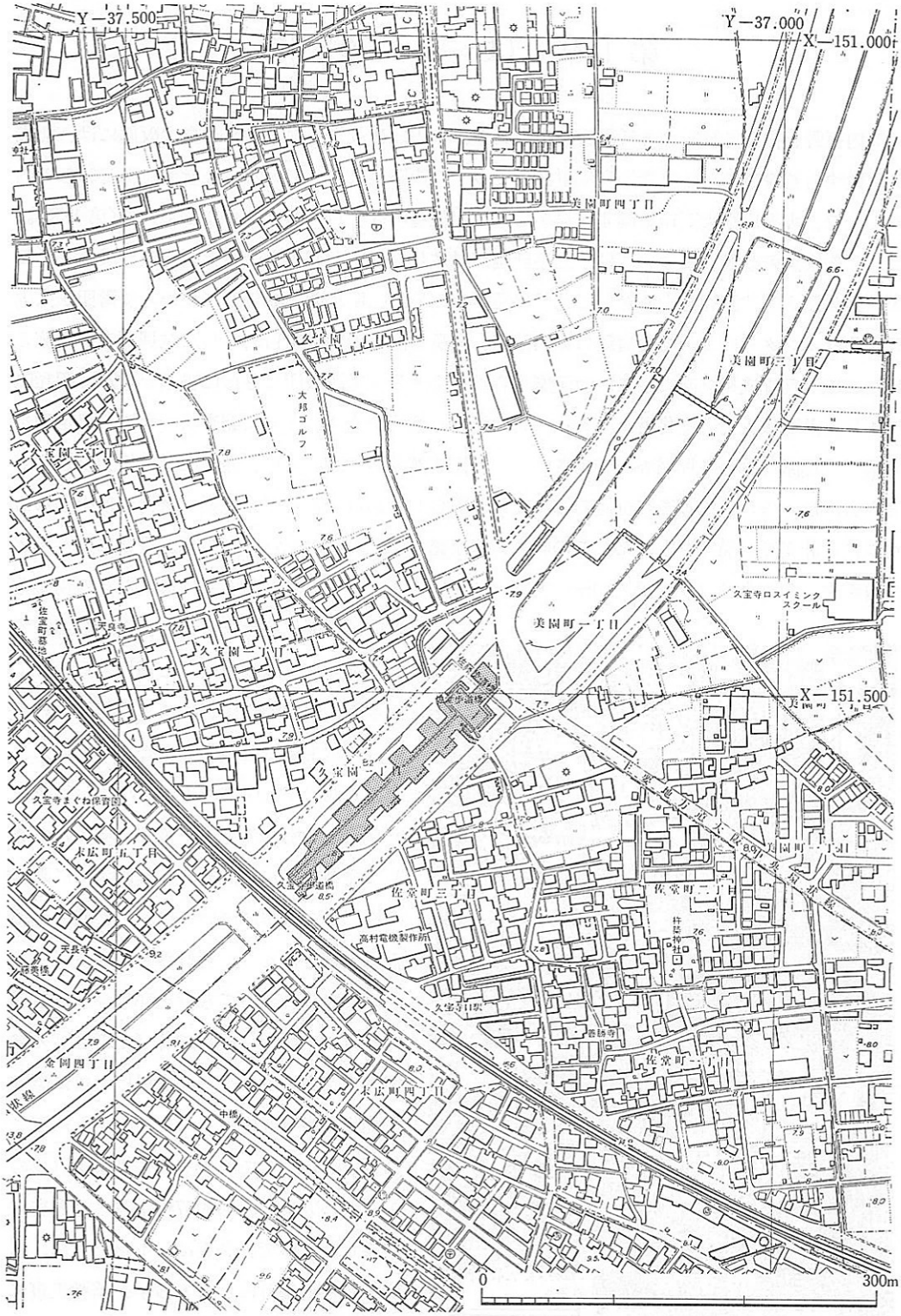
第Ⅰ章　はじめに

河内平野を南北に縦断する近畿自動車道天理、吹田線建設予定地内松原～東大阪間には、北端に位置する新家遺跡から南端の長原遺跡まで多くの遺跡が含まれている。佐堂遺跡もそれらの内の１つで、大阪府東大阪市金岡４丁目から八尾市佐堂町３丁目にかけて所在している(第１図)。これらの遺跡の取扱いについては、工事計画が具体化した昭和46年以来、大阪府教育委員会と日本道路公団大阪建設局を中心として地元協議が重ねられ、昭和48、49年度にわたって財団法人大阪文化財センターによって各遺跡の範囲確認、埋没深度の確認を主目的とした試掘調査が実施された。この調査成果を基にして、大阪府教育委員会と日本道路公団はさらに協議を重ね、昭和51年４月、財団法人大阪文化財センターに現地調査の協力を求め、三者で調査についての協定書を締結し、長原遺跡の発掘調査が着手された。長原遺跡の発掘調査では、発掘面積を極力限定する調査方法がとられ、橋脚予定位置のみにそれが限られたわけであるが、重要な遺構が検出されるたびに設計変更が繰り返された。この調査方法を踏まえ、再検討を行った結果、最初に道路予定敷内中央に遺跡全長に及んで幅10mのトレンチを設定し、その調査結果を基に遺構保存の協議を行い、橋脚位置を決定し、調査区を拡張する「トレンチ調査方式」を採用することになった。昭和53年に初めてこの調査方式をもって瓜生堂遺跡が発掘調査されて以来、新家、西岩田、巨摩廃寺、若江北、山賀、友井東、美園、久宝寺、亀井、城山の各遺跡の発掘調査が順次進められ、すでに調査の終了した遺跡については、その成果が調査概要報告書として刊行されている。



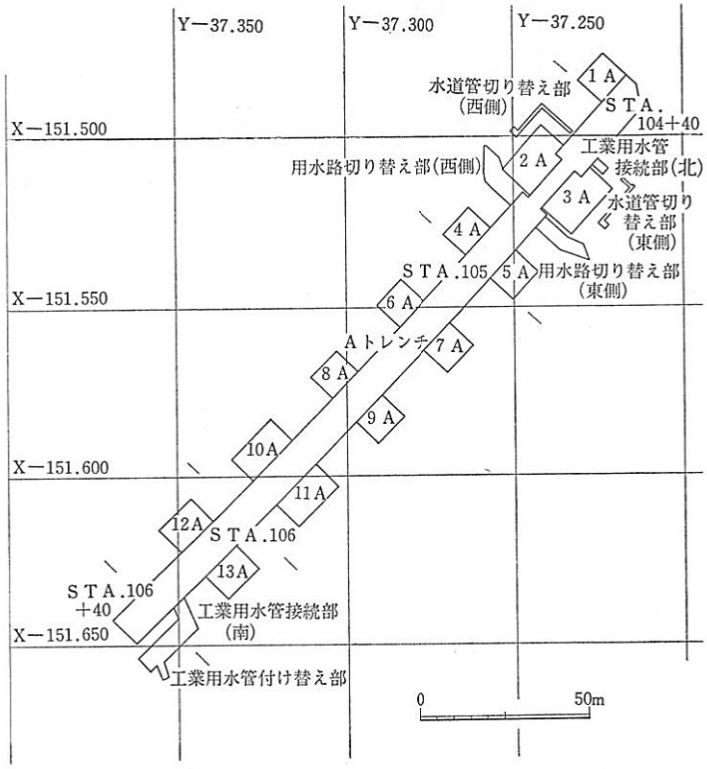
第１図　佐堂遺跡位置図

佐堂遺跡についても昭和56年３月から58年５月まですでに佐堂遺跡（その２）の発掘調査が実施され、その成果はすでに調査概要報告書『佐堂（その２）－１』に記されている。ここで報告する佐堂遺跡（その１）については、昭和57年７月より調査に着手したもので、調査は、トレンチ部、橋脚予定位置部分にとどまらず、橋脚工事に伴って、工業用水管、農業用水路、水道管の移設が必要とされ、これらの移設に伴う


Y −37.500
Y −37.000
X −151.000
X −151.500
美園町四丁目
美園町三丁目
美園町一丁目
久宝園
大邦ゴルフ
久宝園三丁目
久宝園二丁目
久宝園一丁目
久宝寺ロスイミングスクール
久宝寺まぐね保育園
本広町五丁目
本広町四丁目
佐堂町三丁目
佐堂町二丁目
佐堂町一丁目
高村電機製作所
久宝寺口駅
善勝寺
天長寺
傘岡四丁目
中橋
0
300m

第２図　調査区位置図

調査も実施した。工業用水管については、Aトレンチの調査終了部分に新たに用水管を埋設するために、既存の工業用水管との南北2ヶ所の接続部分、及び南側接続部分に続く工業用水管付け替え部分があり、農業用水路と水道管の移設部分については、Aトレンチ南寄り部分をはさんで、東西に2カ所ずつ計4カ所をそれぞれ調査した。



第3図　トレンチ配置図

先に述べた経過のもとに着手した佐堂遺跡（その1）は、はじめに遺跡を縦断する全長220m、幅10mのAトレンチを設定した。調査は鋼矢板による土止め支保工を施し盛土、耕土層を深さ約1m機械によって除去し、表土下4.5〜4.7mまで調査を実施した。Aトレンチは昭和57年7月より調査を開始し、58年6月に弥生時代中期遺構面までの調査を終了した。なお調査精度とスピードアップを計るため、弥生時代中期面で検出された多数の足跡については、航空測量を行なった。この調査結果に基づいて大阪府教育委員会と日本道路公団との間で橋脚位置について協議が行なわれ、その協議の成立を待って決定された橋脚予定位置（切り拡げ部）の13ケ所のトレンチ（1A〜13Aトレンチ）の調査を再度実施した。（第2、3図）

13カ所の切り拡げトレンチ部、農業用水路切りかえ部、水道管切りかえ部については、昭和58年3月から59年2月まで調査を実施し、その間に工業用水管接続部（南北2ケ所）、付け替え部の調査も行なった。農業用水路、水道管切りかえ部についての調査は工事の影響範囲が前者で地表下2m、後者で地表下1.5m以内におさまるため、中世〜近世、近世以降についての遺構・遺物の確認で終わり、前者で平安時代の河川の堆積砂層上面、後者で第7層上面までの検出にとどめた。なお、工業用水管付け替え部については、既存の工業用水管施設工事によってほとんど攪乱されており、東・西両側鋼矢板に沿って0.7〜1.0m幅で、長さ7〜10m程攪乱を受けていない部分が取り残されていた。その部分については、それらが工業用水管と接しており、また土砂崩壊の危険性も考えられることより残念ながら土層断面の記録を中心とした調査にとどまった。

なお、佐堂遺跡の歴史的・地理的環境については、「佐堂（その2）−1」第Ⅲ章「地理的・歴

史的環境」において、要領よくまとめられており、また、これまでの近畿自動車道の調査成果の中で、河内平野の歴史と関連して詳細に叙述した概要報告書が数多くあり、それらを参照していただくことをお願いして、本書では略しておきたい。

第Ⅱ章　検出遺構・出土遺物

第1節　基　本　層　序

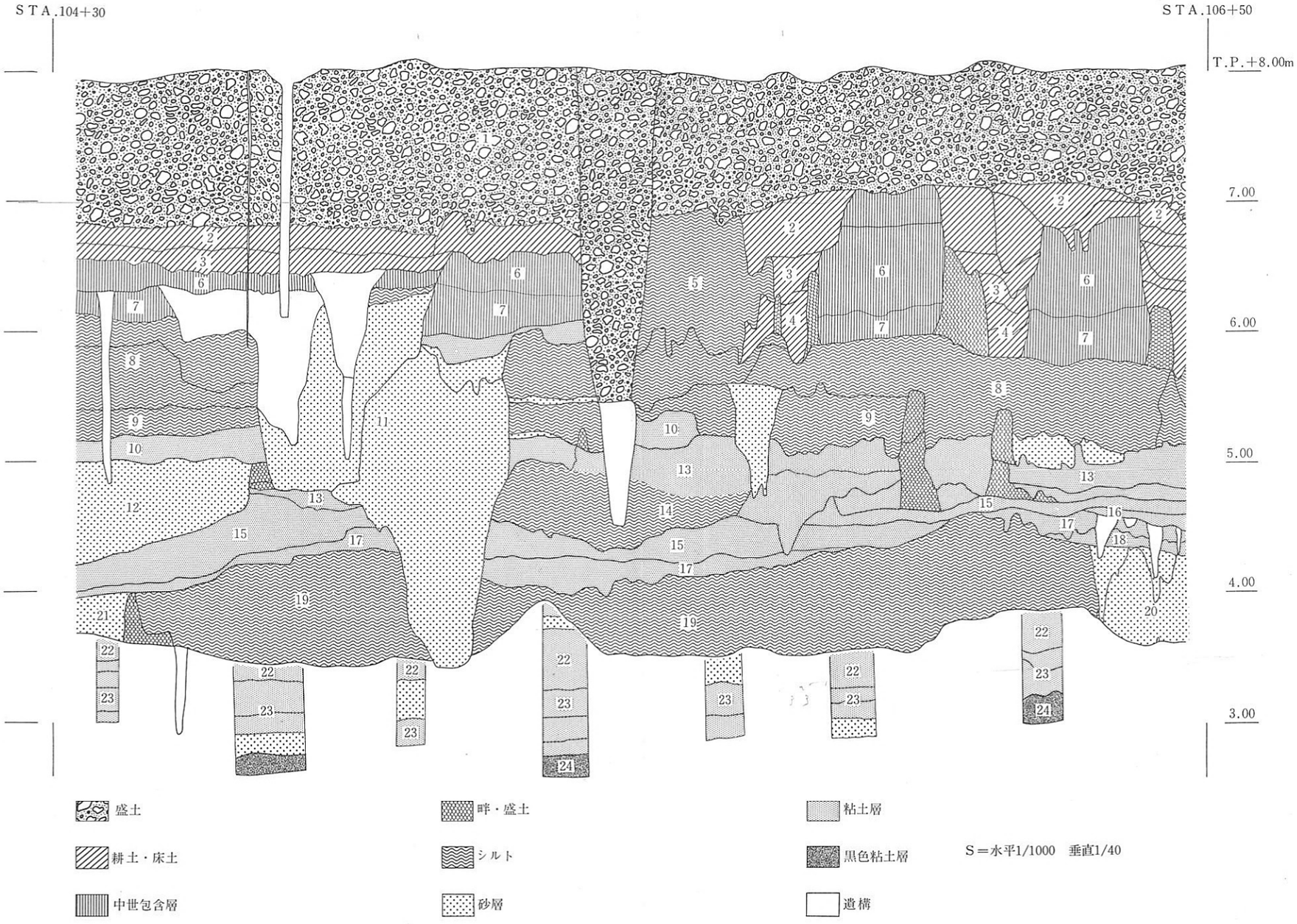
当調査区では深掘り部分も含めて、現地表下5.1～5.5m（T.P.+2.6～3m）までを調査した。現地表面は調査区北端付近（X＝－493、Y＝－220）でT.P.+8.1m、南端付近（X＝－638、y＝－358）でT.P.+7.8mとわずかに北方へ向かって低くなるもののほぼ平坦である。一方、北へ続く美園遺跡の南端部ではT.P.+7.0m前後と低くなり、その比高差は約1mを測る。また南につづく当佐堂遺跡B・Cトレンチでは長瀬川河川敷内が自然堤防地形を形成しておりT.P.+8.5mと0.5m余高くなる。

調査区は長さ約220mに及ぶもので、各地点において層序は複雑な様相を見せている。現時点ではこのような土層を十分に把握しきれているとは言い難いが、遺構面になる層、それらを覆う層を整理すると以下のようになる。

基本層序は上から第1層盛土・カクラン土、第2層暗灰色系砂質・砂礫土層、第3層褐灰色系砂質土層・灰褐色土を基調とする土層、第4層灰褐色砂質土・明黄灰色土を基調とする土層、第5層黄褐色シルト層、緑灰色砂礫土層・砂質土層で構成される土層、第6層黄褐色土層、第7層明黄褐色土層、第8層青灰色シルト層、第9層暗青灰色シルト層、第10層青灰色粘土層、第11層褐色系砂礫土層及び淡黄褐色系砂層、第12層褐色系砂礫土層、第13層暗灰色粘土層、第14層暗灰色シルト層、第15層暗灰色粘土層、第16層暗灰色粘土層（微砂混）、第17層暗灰色シルト層（微砂混）、第18層緑灰色シルト層、第19層暗灰色シルト層、第20層褐色系砂層、第21層暗灰色シルト・砂層の互層、第22層暗灰色粘土層、第23層暗緑灰色粘土層、第24層黒色粘土層、に大別できる。

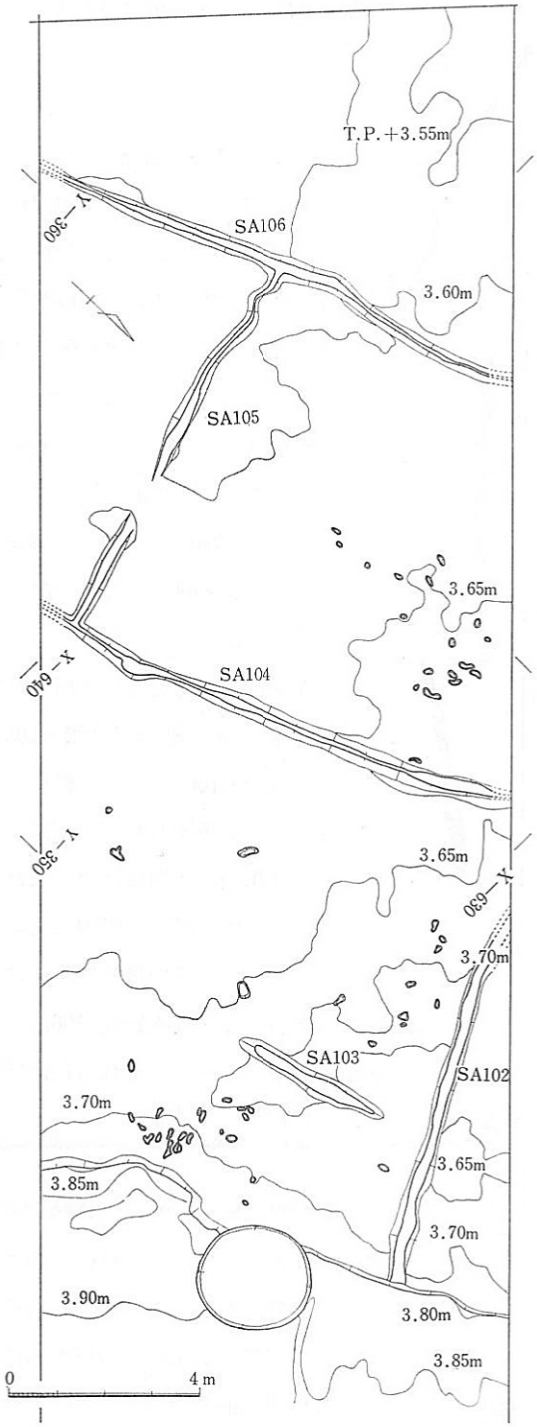
第1層の盛土、カクラン土は旧耕土上に約1mの幅でもって全体にわたって認められる。第2層は現・近代の土層で、酸化鉄を含み幅10～15cmを測る。第3・第4層は耕土・床土で、酸化鉄斑・マンガン斑を含み中世後半～近世に属するもので、部分的であるが洪水で被ったものであろうそれぞれ上面に薄い砂層の堆積が認められ、人・牛の足跡、鋤跡、小畦畔溝が検出されている。10～15cmの層厚を測る。地点によっては、類似した数層の厚い堆積も認められる。第5層は調査区中央付近にひろがる微砂混りのシルトを中心とした土層で、中世後半の遺物を含む。第6・7層は中世包含層で調査区全域に拡がる層である。第6層が第7層に比べ強い褐色味をおびる程度で、二層間の境目は明確にし難い。第6層は層厚0.2～0.5m、第7層0.2～0.3mを測る。第6層上面は13世紀代～14世紀の遺構面、第7層上面は10～12世紀の遺構面と考えられる。また両層ともに、NR302（奈良～平安時代河川）付近では砂礫を含むようになる。第8・第9層は北半部が自然流路NR302で削られている。第8層は層厚0.4～0.5m、第9層は0.2～0.4mで微砂を挟

んで分かれる。ともに出土遺物は殆どみられなかったが、第８層より「隆平永寶」が出土している。第10層は幅20cmを測る層で、飛鳥時代ＮＲ301の堆積砂層の上面にみられた粘土層である。出土遺物はみられなかった。第11層は奈良～平安時代の河流による堆積砂層で、褐色系粗砂中に鉄分が沈着した赤褐色を呈する薄い粗砂層、粘土を含んだ粗砂層等が部分的にみられる。第12層は飛鳥時代の河川による堆積層で、粗砂、細砂の堆積がみられる。第13・第15層は古墳時代の水田耕作土で北半部は河川によって分断されてはいるが、調査区全域にひろがって検出されている。また調査区中央部では第13層と第15層に挾まれて第14層のシルト層が堆積している。第13層は６世紀末～７世紀代、第15層は５世紀末～６世紀代頃と考えられ、それぞれ上面に砂層の堆積がみられた部分では足跡・畦畔が明瞭に検出されている。花粉分析結果によればイネ科の花粉の優先することが確認されている。これらの粘土層にはとぎれとぎれであるが微砂、細砂を挾む部分がみられたが、断面では連続しないようで、遺構面としてその拡がりを把握することは困難であった。また、ビビアナイトも認められた。第16層は層厚0.1～0.2mの古墳時代前期の包含層で砂礫が混じる。比較的遺物を含むが、南寄り部分のみ認められ、途切れてしまう。第17層はシルト層で上面が古墳時代前期の遺構面で北へ向かって全体的に狭くなってゆく。第18層は第20層の上面の微砂を含むシルト層で、弥生中期～後期初頭の浅い流路が検出されている。第19層は調査区中央に広がるシルト層で、南北両端部は部分的に自然流路によって削られており、河流の堆積層である第20・21層が認められる。この砂層及びシルト層には弥生時代前期～中期の遺物が含まれている。第22層は弥生時代中期の水田耕作土で、筋掘りでは調査区全面で検出されており、上面には足跡、畦畔がみられた。花粉分析結果によればイネ科の花粉の優先することが確認されている。筋掘りでは層厚が0.1m～0.2m確認されている。第23層は第22層に類似した粘土で暗緑色～暗灰色まで分層可能である。第24層は黒色粘土で、植物遺体が多く含まれている。第22層と第23層、第24層の間には、部分的にではあるが流路が存在したようで、粗砂層の堆積が認められている。


STA.104+30
STA.106+50
T.P.+8.00m
7.00
6.00
5.00
4.00
3.00
盛土
畔・盛土
粘土層
耕土・床土
シルト
黒色粘土層
S＝水平1/1000　垂直1/40
中世包含層
砂層
遺構

第4図　基本土層図

第2節　弥生時代



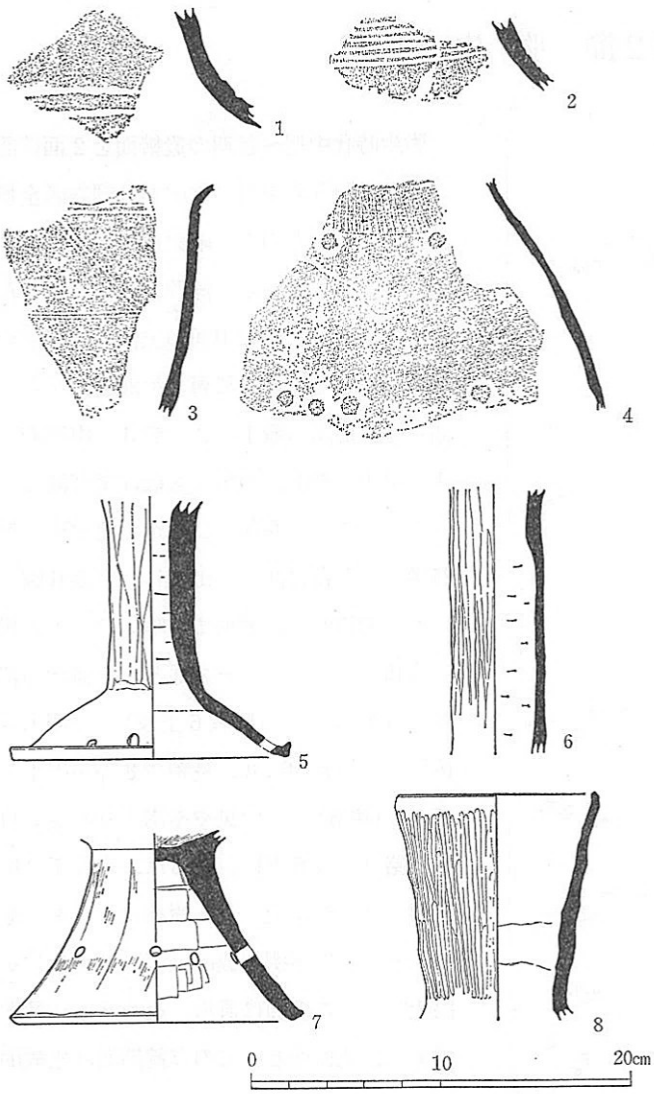
第5図　弥生時代中期水田面実測図

弥生時代中期～後期の遺構面を2面確認した。そのうち下層の水田面は調査区全域で検出されたもので、暗灰色粘土層（第22層）をベース面として畦畔、足跡、溝等が検出できた。この水田面の上面、調査区南端にひろがる流水堆積層（第20層）からは弥生時代前期の壺1、2、甕3、中期の壺4が出土したが、いずれも破片で摩滅している。一方、北端部にひろがる流水層（第21層）から台付鉢7が出土した（第6図）。

また水田面上に堆積する暗灰色シルト層（第19層）上面をベース面として溝状の落ち込みがみられ（図版6上段）、中期末～後期の高杯5、6、a、長頸壺8等が出土しており（第6図）、中央やや南よりの浅い自然流路（図版6下段）からは、木庖丁（第7図―9）が出土した。樹種はクヌギである。[注1] その他に不明木製品（図版22－b）が出土した。この面は遺構、遺物ともに貧弱であり、遺構面としての存続期間は比較的短いものであったものと推定される。

水田面（第5図、図版4・5）

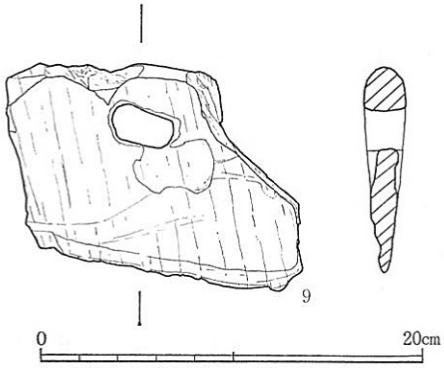
暗灰色粘土上面で検出した水田面で、調査区南端から北へ約25mの範囲にわたって水田面上には砂層が堆積し、SA102～SA106の5条の小畦畔が残る。これより北半部分では状況が異なり、暗灰色粘土上面には水田面を構成する粘土層に類似した粘土層、及びシルト・微砂の堆積がみられ、畦畔を検出することはなかったが、足跡を



第6図　弥生時代中期水田面直上粗砂・シルト層、後期溝状落ち込み出土土器

多数確認している。また4A－5Aトレンチ付近から北端部にかけては再び粗砂層の堆積がみられ、溝SD101、大畦畔SA101を検出した。水田面の標高は、南端部の小畦畔の残る部分でT.P.+3.5mからT.P.+3.7mと北へ向かってしだいに高くなり、0.2m前後の比高差（T.P.+3.7～3.9m）をもった部分が約30mの幅を持って続く。一方、北半部分では奈良時代の河川（NR302）に削られた面がみられる。この面の北端より南方へ約40mの範囲では、T.P.+3.7mからT.P.+3.3mへと逆に北へ向かって低くなっていく。

Aトレンチ南端部で検出した畦畔には、小畦畔SA102・103・104・105・106があり、概ね上幅0.15m、下底幅0.3m前後を測り、高さは0.1mを満たない。これらは基本的に直線状で直角に交差しているが、一筆の区分は明確にできなかった。SA104、106は、方位を北より15°～20°前後西へ振っており、その検出長は、10m余のものである。それらはほぼ等高線に沿って構築されたことが推定される。SA105では中央やや北寄りに明確でないが、水口と推定されるものが設けられている。畦畔の盛土は耕作土と考えられる暗灰色粘土で形成されている。一方、Aトレンチ北端部分で検出された畦畔SA101は下底幅1.1m～1.2m、上幅0.7m、高さ0.3mを測り、断面は台形に近い蒲鉾形を呈する。現検出長は8mであるが、東西方向に伸びるようで溝SD101の東肩堤状の高まりと水口状の凹みをあけて交差する。この畦畔は暗灰色粘土層上面に築かれ、盛土は地盤の粘土に石粒が含まれている。SD101は北西―南東方向に伸び、幅2.5～3m、深さ0.3～0.4m、溝東肩の堤状の高まりは0.1～0.2mを測る。断面は緩やかな逆蒲鉾形を呈し、溝内には粗砂の堆積が著しく、水流があったことを示している。



第7図　弥生時代後期河川出土木庖丁

水田面直上を覆う砂層・シルト層中から弥生時代前期に溯るものが出土しているが、中期の壺、台付鉢も含まれる。また水田面を構成する粘土層より中期後半の甕の小破片を確認していることや砂層上の第18層上面が弥生中期末～後期初頭と推定されることから水田の所属時期は中期後半～末頃に求められよう。

なお、この水田面の花粉分析[注2]（Aトレンチ・X＝－450・Y＝－220、X＝－505・Y＝－225、X＝－553・Y＝－274、X＝－590・Y＝－310、X＝－630・Y＝－350地点）によってもイネ科を中心とした草地が推定され、オモダカ属、ミズワラビ属、サンショウモ等の水田雑草と考えられる花粉・胞子を伴ってあり水田耕作が行なわれたことが裏付けられよう。

注1　(財)元興寺文化財研究所松田隆嗣氏の樹種鑑定による。
注2　分析はパリノサーヴェイ株式会社に委託した。

第3節　古墳時代（布留式併行期）

布留式併行期（第8・9図）

遺構はT.P.＋4.5～T.P.＋4.2mで調査区全域にかけて検出された。それらは暗灰色シルト、青緑色シルト面を掘り込んでおり、南端部分では遺構面を覆って厚さ約0.1～0.2mの包含層（暗灰色シルト層・石粒混）が形成されていた。遺構としては11条の溝と1基の井戸、3基のピットが検出された。

SD201

溝幅は0.5～1mと一定せず深さ0.1m前後を測り、断面は緩やかなU字状を呈する。北は短く終わり、南端はSD202に切られて続かない。その方向性より、溝と言うより帯状の浅い落ち込みと言えるかも知れない。埋土は暗灰色粘土の単一層で遺物は出土しなかった。

SD202

北半部北寄りで検出した南東一北西にほぼ直線的に伸びる溝で、青緑色シルト上面で検出した。溝幅は約0.5m、深さ0.1～0.15mを測る。埋土は暗灰色粘土の単一層で、南寄りで、甕19・20が出土した。19・20ともに口縁内面が肥厚したもので、口縁部～頸部内外面にかけて横撫で、体部外

面は刷毛、内面は篦削りがなされている。19は口縁部と付部の境目に径6㎜の穿孔がなされている（第12図）。

ＳＤ203

ＳＤ202より約10m南西方向に位置する溝で、ＳＤ204を切っている。幅0.5m、深さ0.15mを測る溝で、埋土は暗灰色粘土の単一層である。

ＳＤ204

ＳＤ203に切られた溝で大半は欠失しているが、ＳＤ203とほぼ同じような形状をもっていたものと推定される。

ＳＤ205

Ａトレンチ北半部のほぼ中央で検出した溝で、幅0.9m、深さは0.15～0.18mの南北溝である。断面はゆるやかなＵ字状を呈し、ＳＤ201とほぼ平行して走っている。南側はＮＲ302に切られており、埋土は暗灰色粘土の単一層で、遺物は出土しなかった。

ＳＤ206

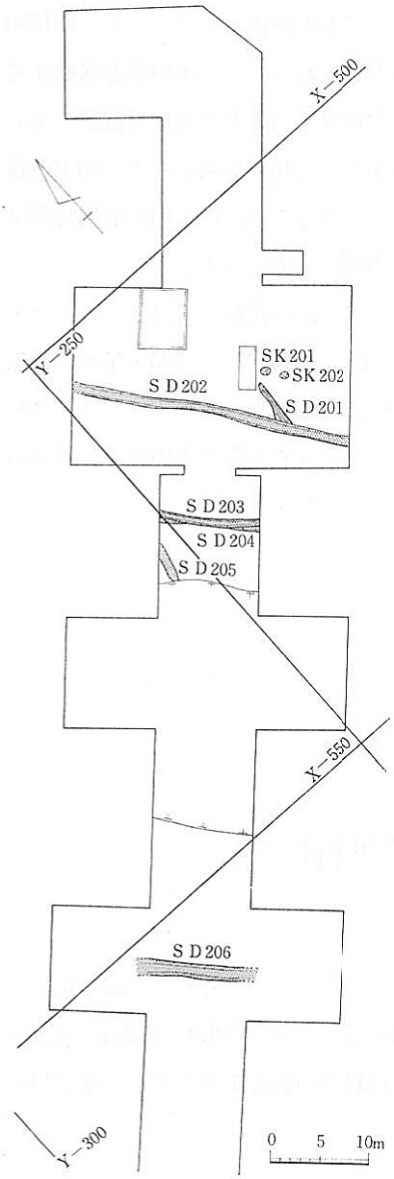
Ａトレンチ北半部南寄りで検出した浅い溝で、Ａトレンチ部での検出に留まった。埋土は暗灰色粘土の単一層である。

ＳＤ207

Ａトレンチ南半部分北寄りで検出した溝で、幅は2.5～3.5mで不揃い、深さは約0.1mを測る。埋土は暗灰色粘土の単一層である。

ＳＤ208

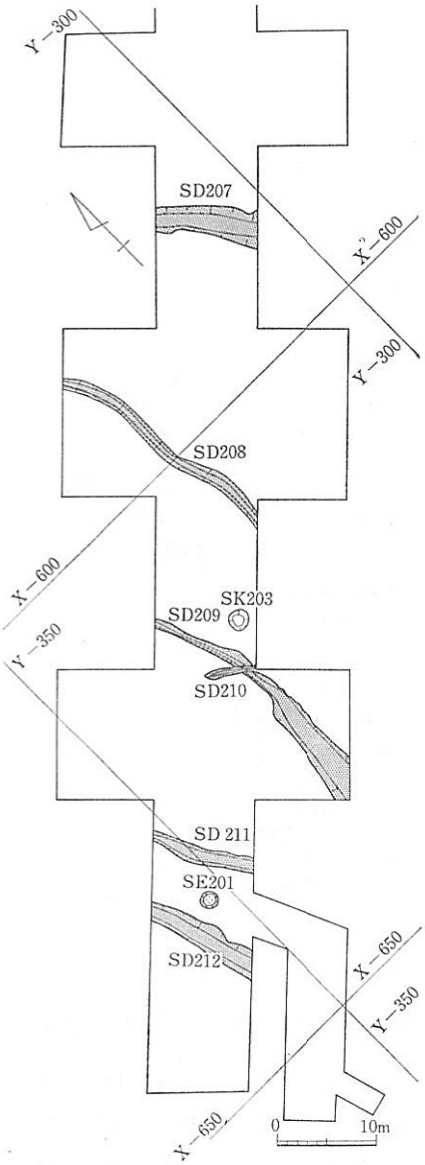
南半部中央で検出した溝で、幅は1.0～1.2m、深さは0.3～0.4mを測る。溝内には下から暗灰色シルト（微砂混）、青灰色シルト（微砂混）、灰褐色粗砂が堆積し、一時期強く水が流れたことが窺われる。底部の標高は北端でＴ.Ｐ.＋4.1m、南端でＴ.Ｐ.＋4.25mでゆるやかに北へ向かって傾斜している。



第８図　古墳時代（布留式併行）Ｓ＝1/750
遺構配置図（北半部分）

ＳＤ209（第９図）

ＳＤ208より約15m南側に位置する溝で、東方にふくらんで緩やかに曲がる。溝幅は北端で0.8m、南端で3.5mと一定ではなく、深さは北端で0.15m、南端で0.4mと深くなり、底面の標高はＴ.Ｐ.＋4.45からＴ.Ｐ.＋4.15mと南へ向かって低くなる。溝内の堆積状況は第10図の通りで、溝の中央より、甕15・16、南東部寄りからは壺14、小型丸底壺17、高杯18が出土している（第12



第９図　古墳時代（布留式併行）
遺構配置図（南半部分）S＝1/750

図、図版23・24)。14は体部から「く」の字に屈曲し、長く伸びる口縁部をもち、端部は外傾し平坦気味である。口縁部内外面は横撫で、胴部外面は刷毛調整、内面は篦削りを施す。灰白色を呈し、金雲母、砂礫を含む。甕16は溝中央に正立して置かれた状態で出土しており、複合口縁の形態を示し、口縁部が途中で角度を変え外反気味に伸びる。口縁部内外面横撫で、体部外面上半は横方向の篦磨き、下半部は縦方向の篦撫で、体部内面は篦削りが施されている。灰白色を呈する。甕15は口縁部が「く」の字形に屈曲し、外反するもので、口縁端部に短い面を持ち、体部はやや上方に最大径がある。口縁部外面は横撫でし、内面は刷毛目の後、横撫でが施される。体部外面は粗い刷毛目、内面篦削りが施される。褐灰色を呈し、金雲母、石英を含み石粒を多量に含む。17の小型丸底壺は厚手のもので、口縁部内外面横撫で、体部内面撫で、外面は篦撫でされている。黄灰色を呈し、胎土に石粒を多く含む。18は高杯で脚部のみであるが、ラッパ状に開く裾部から屈折して急傾斜に軸部が立ち上がるもので、軸部上端は杯部底面に挿入するものである。裾部周縁は丸味をもつもので、軸内面は丁寧に横に篦削りして整え、裾部内面は刷毛で調整されている。

ＳＤ210

ＳＤ209を切る浅い溝でゆるやかに曲がり途中で切れる。

ＳＤ211（第９図、図版７）

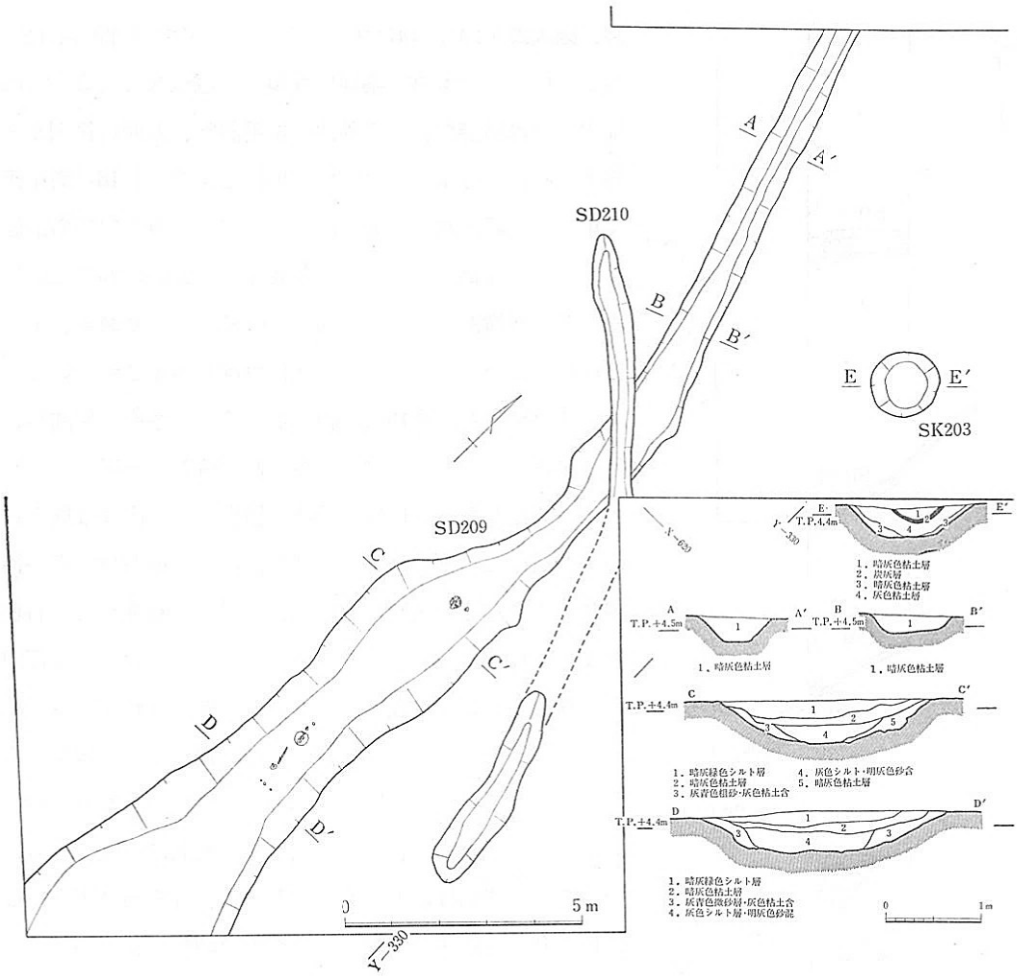
Ａトレンチ南半部南寄りで検出した南方に膨らんでゆるやかに曲がる溝で、幅は約1.5m、深さは0.5mを測り、南北端とも底面の標高はＴ.Ｐ.＋4.2m 前後でほぼ水平である。少量ではあるが甕片が出土している。

ＳＤ212（第９図、図版７）

ＳＤ210の南方約７m離れて位置する。溝幅は２m前後と一定ではない。深さは0.5mを測り南西端でＴ.Ｐ.＋3.9m、北東端でＴ.Ｐ.＋4.1mと南西に向かって低くなる。少量ではあるが甕片が出土している。

ＳＥ201（第11図、図版７）

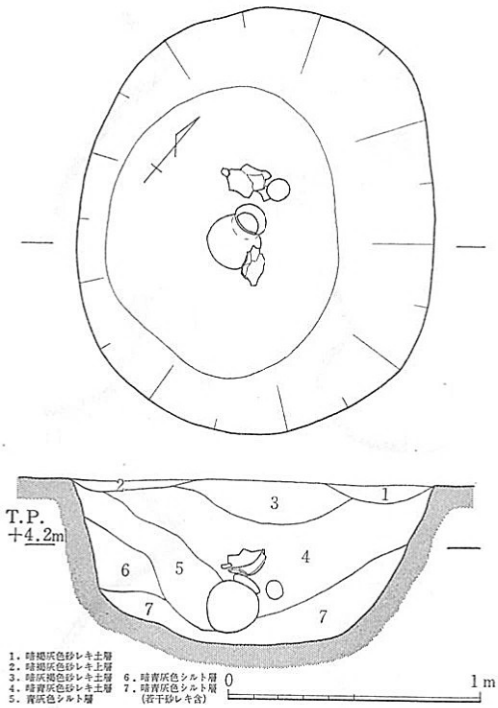
ＳＤ211、ＳＤ212に挟まれて位置する。掘形平面は楕円形で、長径1.7m、短径1.4m、底部の



第10図　古墳時代（布留式併行）A・13Aトレンチ遺構群平面図・断面図

径は長径1.1m、短径0.9mで、検出面から底までの深さは約0.65mを測る。断面形は緩やかなU字状で、井戸底部は灰褐色粗砂層（T.P.+3.8m）まで達している。井戸内埋土は第11図の通りで、青灰色シルト層、暗青灰色砂礫土層より壺10、小型丸底壺12、甕11、高杯13が出土している（第12図、図版23）。10は球形の体部から口縁部が立ち上がり気味に開くもので、底部からは口縁部にかけて叩きが施され、その後体部上位まで刷毛で調整されており、また体部上位は叩きの後、雑に撫でられ、口縁部は横撫でされてはいるが、完全には消されていない。体部外面は全面にわたって刷毛で調整され、明黄褐色を呈している。11は、口縁部が外側斜め上方にのび、ほぼ丸くおさまるもので、口縁部体部外面と刷毛で仕上げ、内面は撫でられている。明黄褐色で、胎土に石粒を多く含む。12は、扁平な球形の体部に、丸味をもって屈曲し内湾気味に開いてのびる口縁部をもつ。口縁部横撫で、体部内外面は篦削りで仕上げられている。13は、脚部のみで、ラッパ状に開く裾部から屈折して急傾斜に軸部が立ち上るもので、裾部周縁は角ばった面を成している。軸部内面は、横方向に篦削りが施されているが、上端にはしぼり目が残っている。

S K201



第11図　ＳＥ201実測図

ＳＤ201の東側に位置する。平面形は円形で、径1.0m、深さ0.2mの浅い土壙で、土壙内には暗灰色粘土が堆積し、遺物は出土しなかった。

ＳＫ202

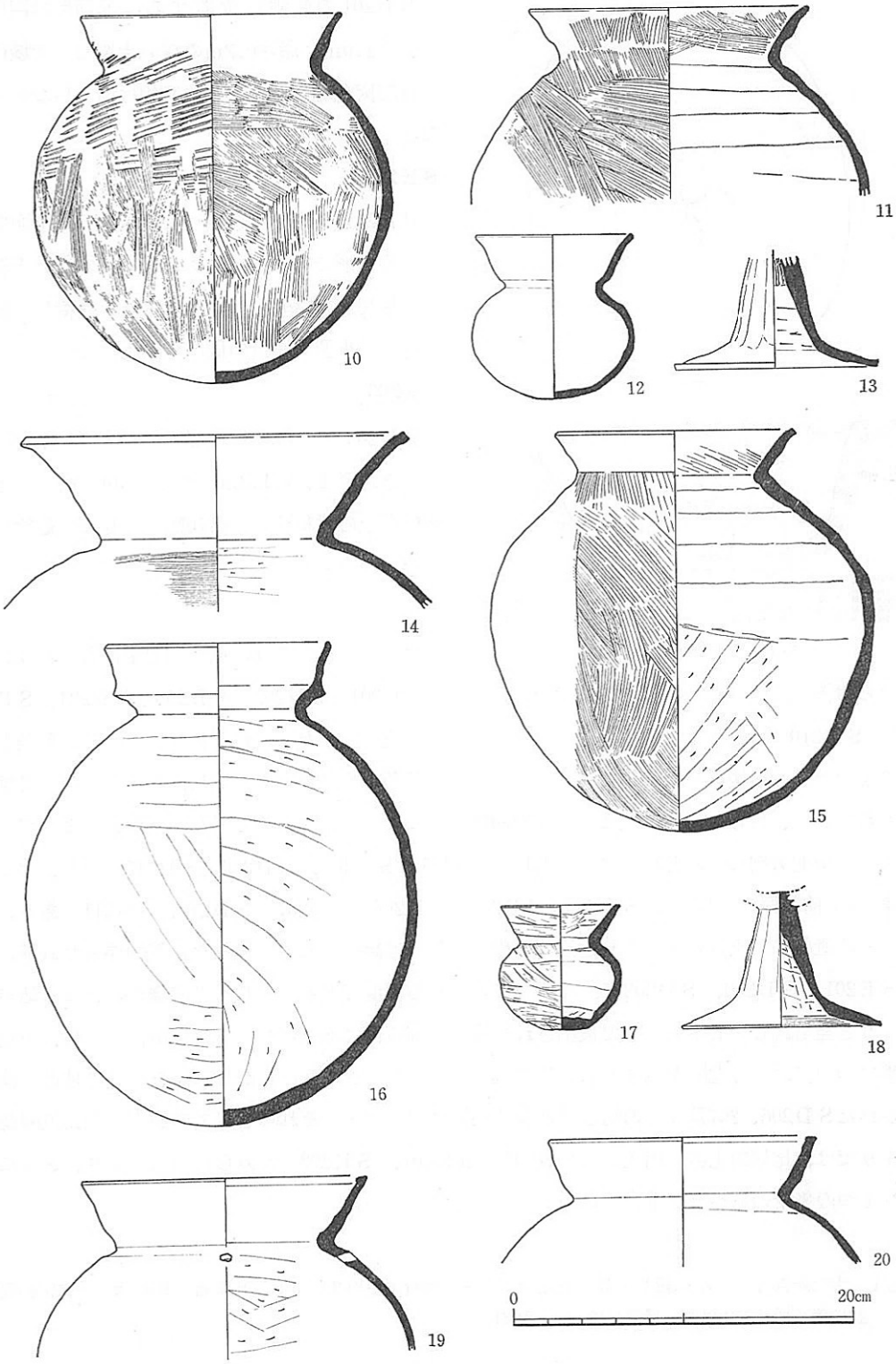
ＳＫ201の南側に近接して位置する。平面形は不整円形で径1.0m、深さ0.15mの浅い土壙で、ＳＫ201と同様に暗灰色粘土が堆積し、高杯、甕、小型丸底壺の破片が出土している。

ＳＫ203

ＳＤ209の東側に近接して位置する。平面形は不整円形で、径1.3m、深さ0.3mを測る。土壙内埋土の堆積状況は第10図の通りで、遺物は出土しなかった。

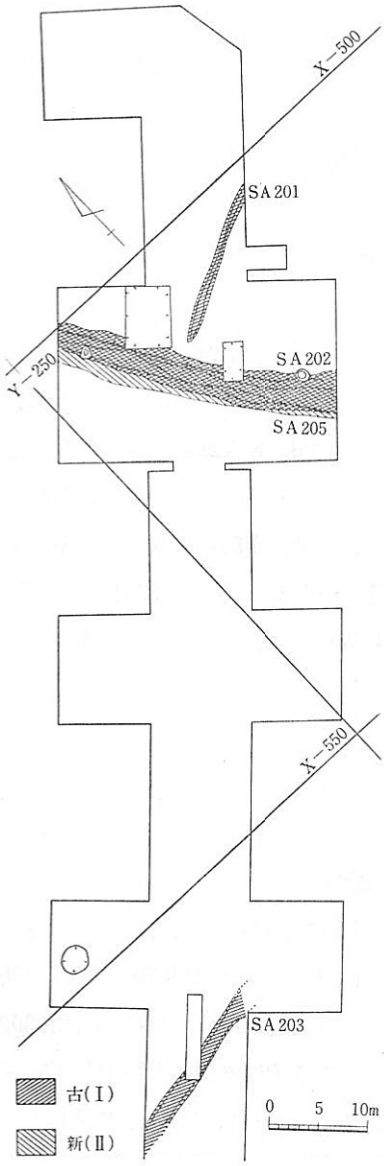
以上に述べたように遺構の大半は溝であり、それらは調査区全域にわたって検出されている。ＳＤ201とＳＤ202、ＳＤ203とＳＤ204、ＳＤ209とＳＤ210には切り合い関係が認められ、２時期以上存続したことが窺われる。また時期差を示すものかどうか明確でないが、溝の方向は地形的影響をうけたためか概ね南から北を向いて掘削されており、さらにそれは北より東方向の振れ幅によって、大きく２通りに分かれるようである。まず南北方向のものとしてはＳＤ201、ＳＤ205、ＳＤ208、ＳＤ209、ＳＤ212があり、北より東へ45°前後振るＳＤ202、ＳＤ203、ＳＤ204、ＳＤ206、ＳＤ207、ＳＤ210、ＳＤ211がある。全体的に遺物の出土は希薄であり近辺での生活の匂いは感じられず、遺物を比較的伴った遺構にはＳＥ201、ＳＤ209、ＳＤ202等、わずかにみられる程度である。これらの遺構から、この地がちょうど当遺跡Ｃ～Ｅトレンチで検出された集落[注1]の周辺部にあたっていることが推定され、一連の溝についてはその北限を示すものとして考えることができよう。しかし、調査区中央付近で検出されたＳＤ206、207及びその附近では全く遺物は出土せず、それらを隔てて調査区北側美園遺跡寄りでは、比較的土器が出土したＳＤ202、ＳＫ201、ＳＫ202等がみられることより、さらにもう１つの集落の拡がりが北方に推定できるかもしれない。

注１　大阪府教育委員会・(財) 大阪文化財センター『佐堂（その２）－１』近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財調査概要報告書－　1984



第12図　ＳＥ201（10～13）、ＳＤ209（14～18）、ＳＤ202（19～20）

第4節　古墳時代中・後期



第13図　古墳時代中・後期遺構配置図
（北半部分）S＝1/750

水田面が2面（水田面Ⅰ・Ⅱ）検出できた（第13・14図）。これらは暗灰色粘土上面で検出されたものである。幅0.2～0.5mに及ぶ暗灰色粘土層の堆積は砂層・シルト層数を挟んで数層に分かれるが、上面が広範囲に粗砂で覆われたものではなく、部分的に薄く粗砂層の堆積した地点においてのみに足跡、畦畔等が確認できた。また所々に砂・シルトが厚く堆積した流路が認められた。

水田面Ⅰは北半部がNR 302（奈良～平安時代河川）によって大きく削られており、南側につづく対応面の検出は困難であった。水田面の標高は北端部（X＝－493、Y＝－220付近）でT.P.＋4.2m、中央部（X＝－581、Y＝－301付近）でT.P.＋4.4m、南端部（X＝－638、Y＝－358付近）でT.P.＋4.8mと北へ向かって低くなっている。

水田面Ⅱは水田面Ⅰと同様に北半部がNR302によって大きく失われており、さらに北へつづいて飛鳥時代河川に切られている。南端部（X＝－638、Y＝－358付近）でT.P.＋5.1m、中央北寄り（X＝－567、Y＝－228付近）でT.P.＋5.2mを測りほぼ平坦に拡がるようであるが、暗灰色粘土上面に粗砂層の堆積の認められる部分と途切れる部分があり、調査区全域にわたっての対応面の検出は困難であった。

水田面Ⅰ

畦畔

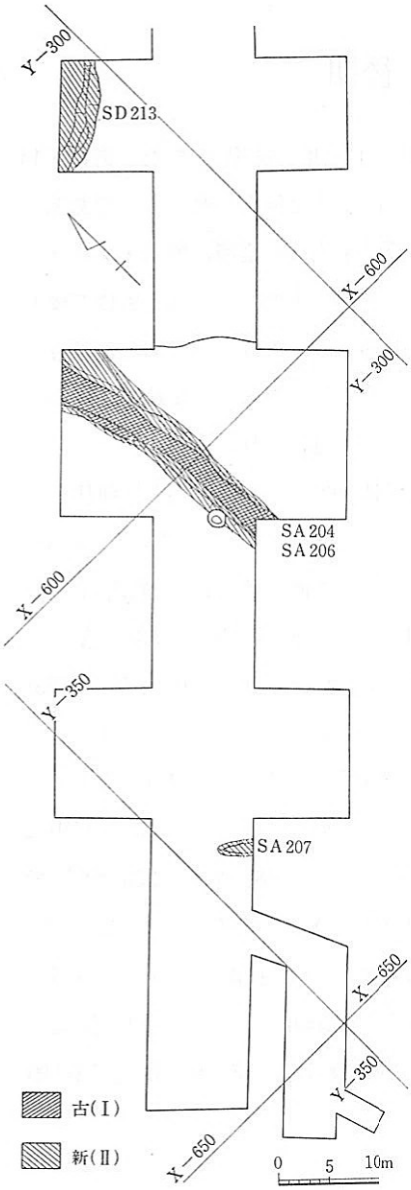
畦畔は大畦畔と小畦畔の2種類みられる。

SA202（第15図、図版9）

下底幅約3.5m、上幅1.5～2m、高さ0.2～0.3mを測る。この大畦畔の南北両側の水田に比高差がみられ、南側で0.15m、北側で0.3mを測る。

SA201（図版8）

大畦畔SA202の北側に位置しほぼ直交して接続するようにのびる小畦畔である。下底幅0.5～0.9m、上幅0.2～0.8mと一定せず、高さ0.05～0.1mを測る。直接SA202とはつながらず、約2mの水口状に途切れた部分がみられる。



第14図　古墳時代中・後期遺構配置図
（南半部分）S＝1/750

ＳＡ203

調査地区中央、東西にのびる大畦畔で、下底幅1.6m、上幅1.0m、高さ0.2mを測る。

ＳＡ204（第14・16図）

Ａトレンチ南寄り、南北方向にのびる大畦畔で、下底幅２～４ｍ、上幅1.5～３ｍと一定ではなく緩やかな円弧状にのびる。高さは0.2～0.3mを測る。

これら４条の畦畔は、水田層と類似した暗灰色粘土で構成されるが、ＳＡ202、ＳＡ204ともに、石粒を比較的多く含んでいる。

以上の畦畔盛土内、及び暗灰色粘土層からの出土遺物には（第17図、図版24）、ＳＡ204盛土中より須恵器杯蓋21、須恵器杯身28、製塩土器36～38、ＳＡ202盛土中より須恵器杯身27、ＳＡ204周辺暗灰色粘土中より須恵器杯蓋22・23、杯身29、瓿34、甕33、土師器壺35があり、また木槌39（第18図、図版24）がＸ＝－612.5、Ｙ＝－334付近、暗灰色粘土層内（Ｔ.Ｐ.＋4.8m）で出土している。樹種はくぬぎである。[注1]

水田面Ⅱ

畦畔

ＳＡ205（第13・15図、図版９）

下底幅2.5m、上幅約１ｍで、ほぼ南北方向にのびる。高さは0.2mを測る。畦畔北側の水田はＮＲ301によって削られ失われており、南側もわずか５ｍ余を残してＮＲ302によって失われている。畦畔盛土は水田層と類似して暗灰色粘土であるが、石粒、暗青灰色粘土ブロックが混じる。

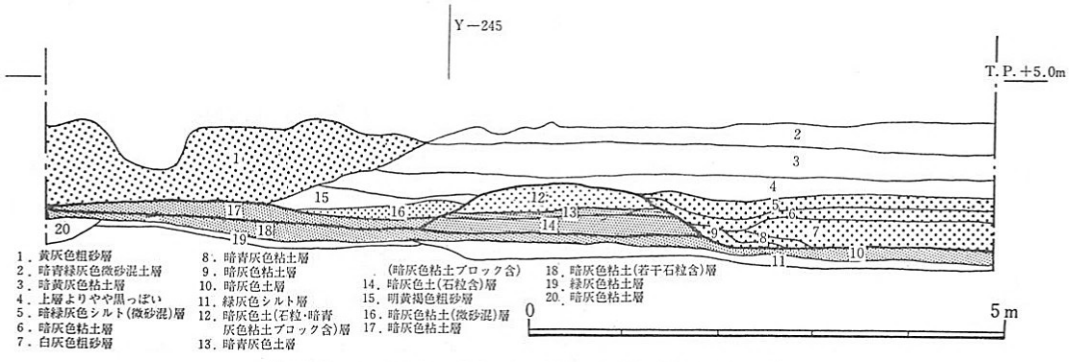
ＳＡ206（第14・16図）

下底幅４～６ｍ、上幅２～４ｍで一定でない。高さは0.3mを測る。盛土は青灰色粘土層である。

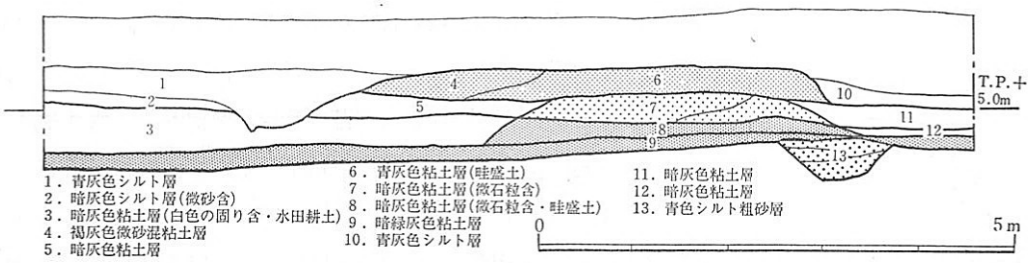
ＳＡ207（第14図、図版８）

Ａトレンチ南寄り東矢板際で検出された畦畔状の高まり。高さ0.2mを測る。

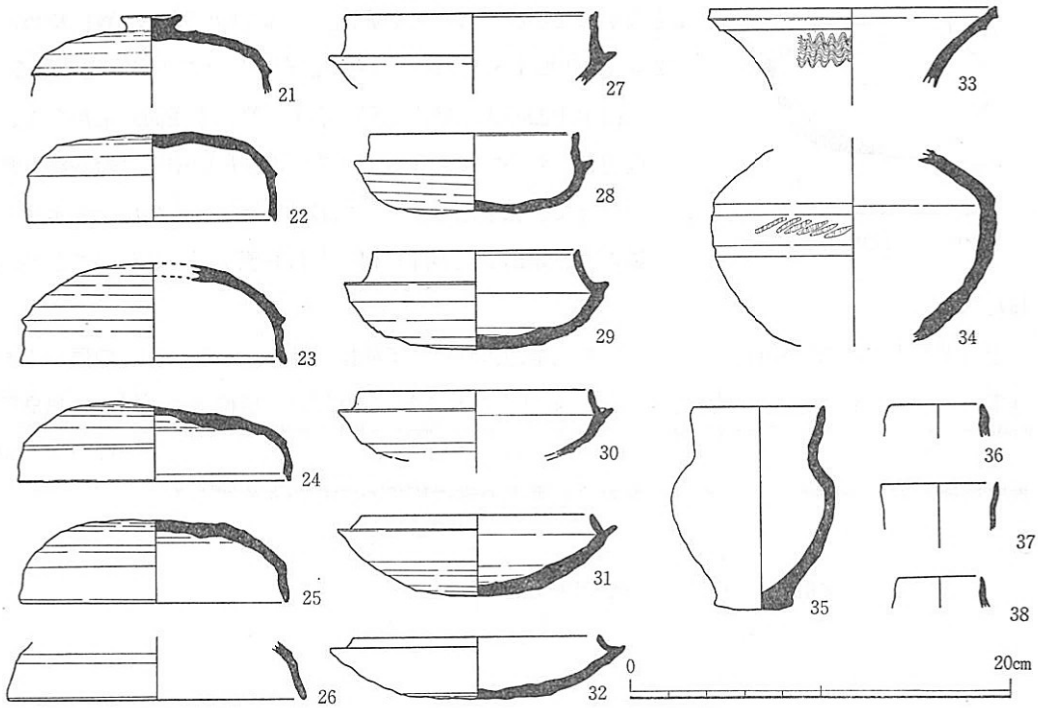
以上の畦畔盛土内及び耕土である暗灰色粘土層からの出土遺物には（第17図、図版24）、ＳＡ206盛土中より須恵器杯蓋26、杯身30・32、その周辺より須恵器杯身31、暗灰色粘土層より須恵



第15図　ＳＡ202、ＳＡ205断面図（３Ａトレンチ西壁）



第16図　ＳＡ204、ＳＡ206断面図



第17図　古墳時代中・後期畦畔、水田面出土土器

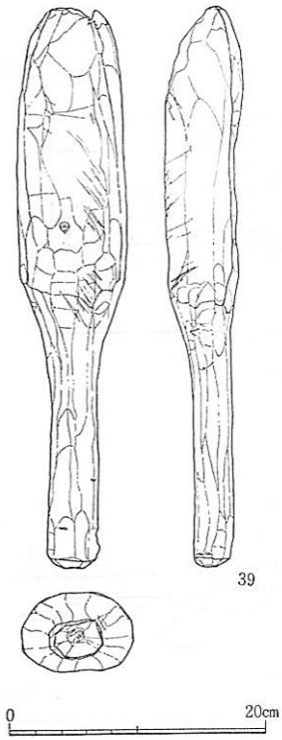
器杯蓋24・25がある。

ＳＤ213（図版９）

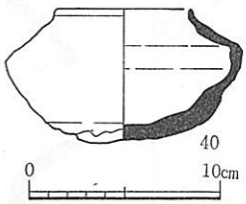
８Ａトレンチ西端で検出された溝で、現検出長は11mを測る。西肩は調査区外のため明確でない。現状では、深さは検出面（Ｔ．Ｐ．＋5.2m）から1.2mを測る。溝内には、灰白色微砂とシルトの互層、及び淡茶灰色細砂と淡青灰色微砂の互層が堆積しており、肩には水流のため抉り取られている部分もみられた。出土遺物は極小量で、数点の摩滅した土師器と短頸壺が出土した。40は全体に歪みが激しく、底部未調整で粗雑なつくりである。（第19図、図版25）

以上、５世紀代末～６世紀代にかけての一世紀余の間、水田面を覆うような大規模な洪水による厚い砂層の堆積は認められない。青灰色シルトと細砂等の互層、及び薄い砂層の堆積が所々地点を変えてみられる程度で、類似した暗灰色粘土の厚い堆積が調査区全域にひろがっている。また、ＳＡ202とＳＡ205、ＳＡ204とＳＡ206の大畦畔はそれぞれ後者は前者の位置を踏襲して形成されており、一時的な途絶はあったにしても、基本的には繰り返し水田造成が行なわれたことが窺い知れる。一方、粘土層の堆積状況からみると、検出できなかったが、少なくとも先述した部分的に薄い砂層に覆われた２面（水田面Ⅰ・Ⅱ）以上の水田が存在したことが推定される。

また出土土器の大半は大畦畔の盛土、及び下底面直上からで、その周辺部においても点在している。これらの中には恰も置かれたかの状況で、完形品もしくは完形品に近い状態の出土を示すものもみられ、水田造成の際に何らかの祭祀が行なわれたことが窺われる。



第18図　暗灰色粘土層（古墳時代中期包含層）出土木槌

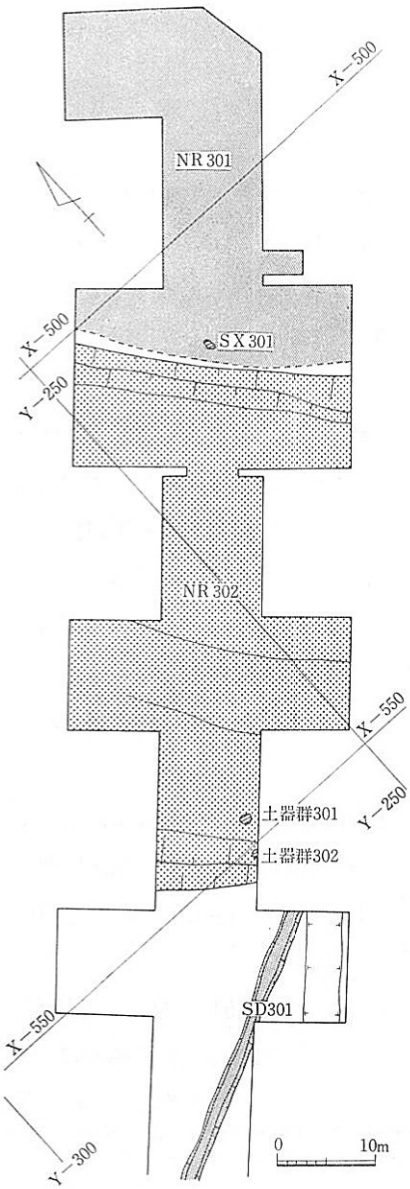


第19図　ＳＤ213出土土器

水田面を構成する暗灰色粘土はほぼ調査区全面にわたって検出されているが、この層の上面（Ｔ．Ｐ．＋5.2m）を覆った青灰色粘土層、暗灰色シルト層（微砂混）、粗砂層の互層が各地点にみられる。これらは、恐らく調査地区南端に位置するＮＲ301が水田面を土砂で覆いながら当調査区流路を変えた時のものであり、その後も洪水の度に堆積を重ねたものであろう。

注１　(財)元興寺文化財研究所松田隆嗣氏の樹種鑑定による。

第5節　飛鳥・奈良・平安時代



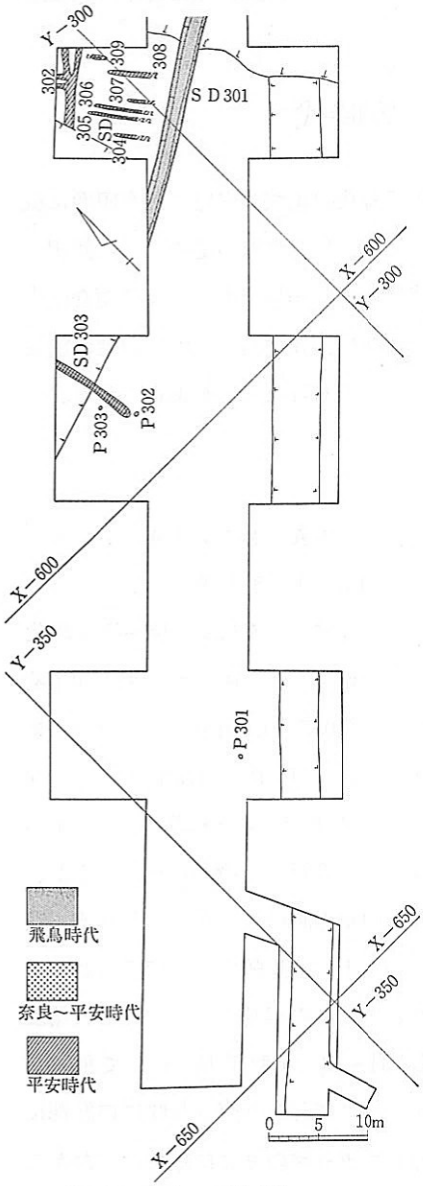
第20図　飛鳥～平安時代
遺構配置図（北半部分）
S＝1/750

7世紀前半には、古墳時代の比較的安定した水田面に微砂を混えたシルト層を中心とした堆積が認められ、河川が流れはじめる。この時期以降、10世紀中葉頃まで調査区内に河川が流れを変えて存在し、3世紀余の間この地が氾濫にみまわれた不安定な状態であったことが推定される。

NR301（第20図）

調査区北半部北寄り、A、1A、2A、3Aトレンチで検出した自然河川で、幅30m以上を測り北端は調査区外へ延びる。南側肩はちょうど南接して流れる奈良～平安時代のNR302の北肩より約0.6m下がった暗灰色粘土上面で認められた。深さは検出面から0.5～0.6mを測り、ほぼ平坦に北方へつづき、底面の標高はT.P.＋4.3mである。河内堆積層は褐色系砂礫土層及び粗砂層・青灰色シルト層で、河底の灰色粘土層上面より足跡が検出されているが、これは流路形成以前の水田耕作時のものと考えられる。遺物はすべて粗砂層からの出土で、比較的少量であるが、7世紀前半を中心とした時期のものが出土している（第22図、図版25）。土師器杯41～44、小型壺45を除いて他は小破片である。41は丸味を持つ底部から直立気味に口縁部に続くもの、42はゆるやかなカーブのまま口縁部につながるもので、ともに外面の篦磨き、内面の暗文は認められない。また43はやや外反する口縁部をもつもので、外面全体は丁寧に撫でて仕上げられており、外面には暗文篦削りは認められない。44は口縁部を横に撫でた後、外面を粗く篦で磨き、底部外面は篦で削って仕上げられている。43、44はともに正放射状の暗文が施される。45は口縁部が強く「く」の字形に短く外反し、平底気味の底部をもつ。

また、土師器杯46（第23図、図版25）はNR301の南肩より南へ約30m離れて、検出面に対応すると思われる調査区4Aトレンチ、暗灰色粘土層（T.P.＋5.2m）で出土した。46は口縁部外面上半横撫で後、横方向の粗い篦磨きが行なわれ、口縁部と底部の曲折部から底部にかけては横



第21図　飛鳥〜平安時代
遺構配置図（南半部分）
S＝1/50

方向の篦削りが施される。内面口縁部上段は右上りの大きく流れる斜放射状暗文、下段も斜放射状暗文がなされ、その境目に左上りの大きく傾く斜放射状暗文が粗く部分的にみえる。内面底部は螺旋状暗文がなされる。明茶色で胎土に少量の砂粒を含む。

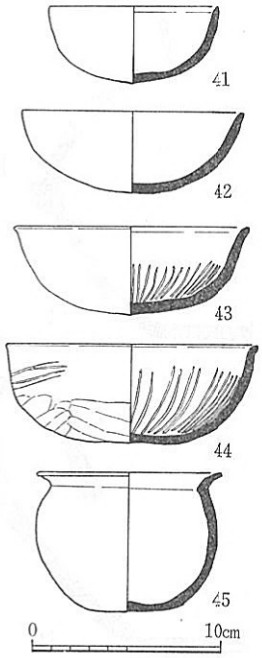
NR302（第20図、図版10）

A・2A・3A・4A・5Aトレンチで検出した自然河川である。かって7世紀前半代よりNR301に見られた大きな流れが、8世紀に入ると再び流路を変えてやや南に移動して流れはじめたもので幅約50mを測る。南岸付近では青灰色シルト上面（T.P.+5.8m）、北岸では暗青緑色（微砂混）土層上面（T.P.+5.5m）で検出された。河底は北岸より約15m南まで比較的緩やかに傾斜し、T.P.+約4.8mで続き、南岸に向って弧状に落ち込みT.P.+約3.6mと深くなる。堆積層の大半は褐色系砂礫層及び淡黄褐色系砂層で、かなりの水量と流速を示すラミナが明瞭にみられた。南岸上位において肩部から流入した青灰色シルト層、底部付近で間層として植物遺体の薄い堆積層が断続的に認められた。

遺物の出土は北岸より約15mまでの浅い部分で、奈良末〜平安時代中期、河川南半で奈良時代の土器、弧状に凹む底部では奈良時代前半の土器が比較的多く包含される傾向が認められる。

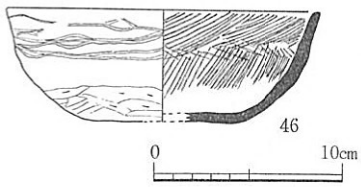
遺物は土器（第24図47〜53、第25図54〜68）、木製品（第26図69〜75）等がみられた。須恵器には、杯、杯蓋47、短頸壺49、広口壺50、長頸壺、甕、平瓶48、横瓶、鉢等の各器種がみられる。また土師器には、杯55・56、皿54・57、小皿61・62・63、椀58・60、高杯64、鉢52、甕65・66・67・68・c・dがあり、他に羽釜f、把手付壺51、竈53・e等がある。

51は肩の張りの弱い胴部から、立気味に外反する口頸部をもち、底部は平底気味で高台は付かない。摩滅しており明瞭でないが胴部下半に横方向の篦磨き、その他は撫でて仕上げられている。淡黄色を呈し胎土は精良である。52は底部に黒斑がみられる片口鉢で、平底に内湾する口縁をつけ、口縁部を1ヵ所曲げて注口をつくる。口縁部・底部内面は撫でて仕上げられ、外面には粘土紐の痕跡が残り、指押えの跡が著しい。淡黄色を呈し、胎土に金雲母、砂粒を含む。54は平



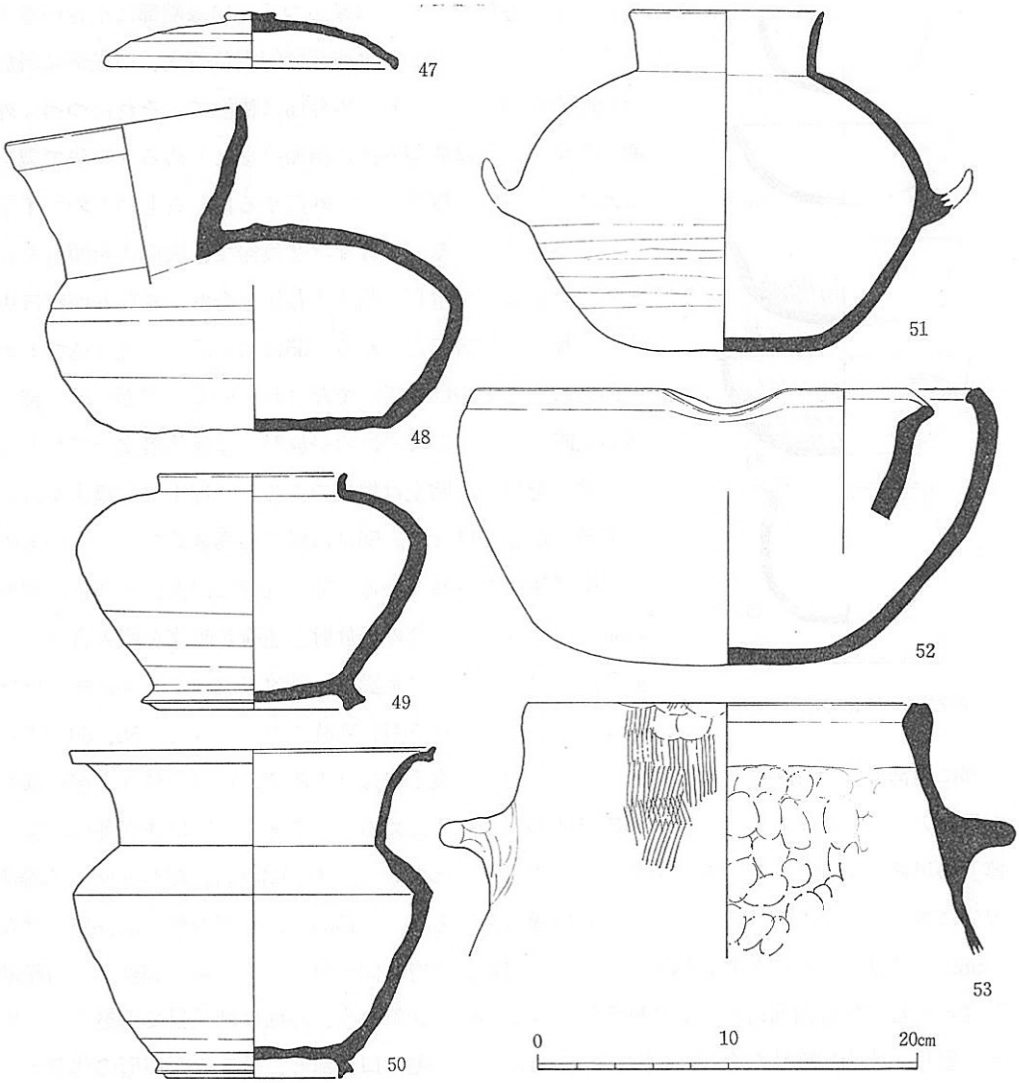
第22図　ＮＲ301出土土器

らな底部に外傾する短い口縁がつく。口縁端部に小さい巻き込みがみられる。内面には底部に螺旋状暗文、口縁部に斜放射状暗文をつける。口縁部内外面は横撫で、それにつづく外面の調整手法には底部外面に指頭痕をとどめるａ手法で調整されている。57は厚手で短く外反する口縁をもつものでｆ手法で調整されている。口縁部は２段撫で、底部に指頭痕をとどめ、明赤褐色を呈し、胎土に石粒を含む。底部外面ほぼ中央に「棹」の墨書がみられる。[注1] 55は口縁端部を巻き込むもので外面の調整手法はb_1手法でなされている。内面には底部に螺旋状暗文、口縁部に一段の斜放射と連弧状暗文を組み合せる。褐色を呈し、胎土は精良である。底部中央に墨書がみられるが、明瞭ではない。56は口縁部の巻き込みが小さいもので、b_0手法でなされている。55と同様に内面には底部に螺旋状暗文、口縁部に一段の斜放射と連弧状暗文を組み合せる。淡黄色を呈し、胎土は金雲母、砂粒が混じる。底部外面ほぼ中央に墨書がみられるが、判読できなかった。58、60は平らな底部に内湾気味に外反する口縁部がつく。外面の調整手法はｅ手法で、口縁部外面上部に横撫でを行ない、それ以下は調整を施さず成形時の凹凸をとどめるものである。58は底部外面中央に「棹」の墨書が認められる。61は小型でｅ手法で作られている。また63は口縁部が外反し、端部が内側に巻き込む、いわゆる「て」の字状口縁の皿である。高杯64は、杯部の残りは良好ではない。68は外反する口縁部と丸い体部からなる。口縁部は内外面を横撫でによって調整し、口縁端部を巻き込む。体部内面にわずかに刷毛目が残るが特に調整せず、外面は刷毛目で調整する。灰白色を呈し、胎土に砂粒を含む。67は斜め上方に大きく開く口縁部と、長手の円筒形の体部からなるであろう甕で、口縁部内面は横方向の刷毛目、外面は横撫での調整である。体部外面は刷毛目によって調整する。66、ｃ、ｄは口縁部内外面横撫で、体部外面は指押えの跡が残る。肩部の稜が明瞭で明赤褐色を呈し、胎土に砂粒を含む。黒斑が体部下半にみられる。65は¼程しか残存せず、墨書の表現は明確でないが、人面墨書土器と思われ目、耳、鼻等の人面の表現が簡略化されているのかもしれない。[注2] 口縁部内外面横撫で、口縁端部に段をもつもので、体部外面は指押えの跡が著しい。淡黄色を呈し、胎土に石粒を含む。53、ｅは共に破片であるが、53は外反する口縁部と尖底気味の砲弾形の体部に水平な鍔をもつ羽釜ｆと一組になるものであろう。



第23図　暗灰色粘土層
（飛鳥時代包含層）出土土器

木製品には、木盤70、杓子形木製品71、曲物底板73、蓋形木板74がみられる。また棒状木製品72、75は、断面が不整円形、六角形に面取りを施したものである。他に面取り



第24図　ＮＲ302出土土器

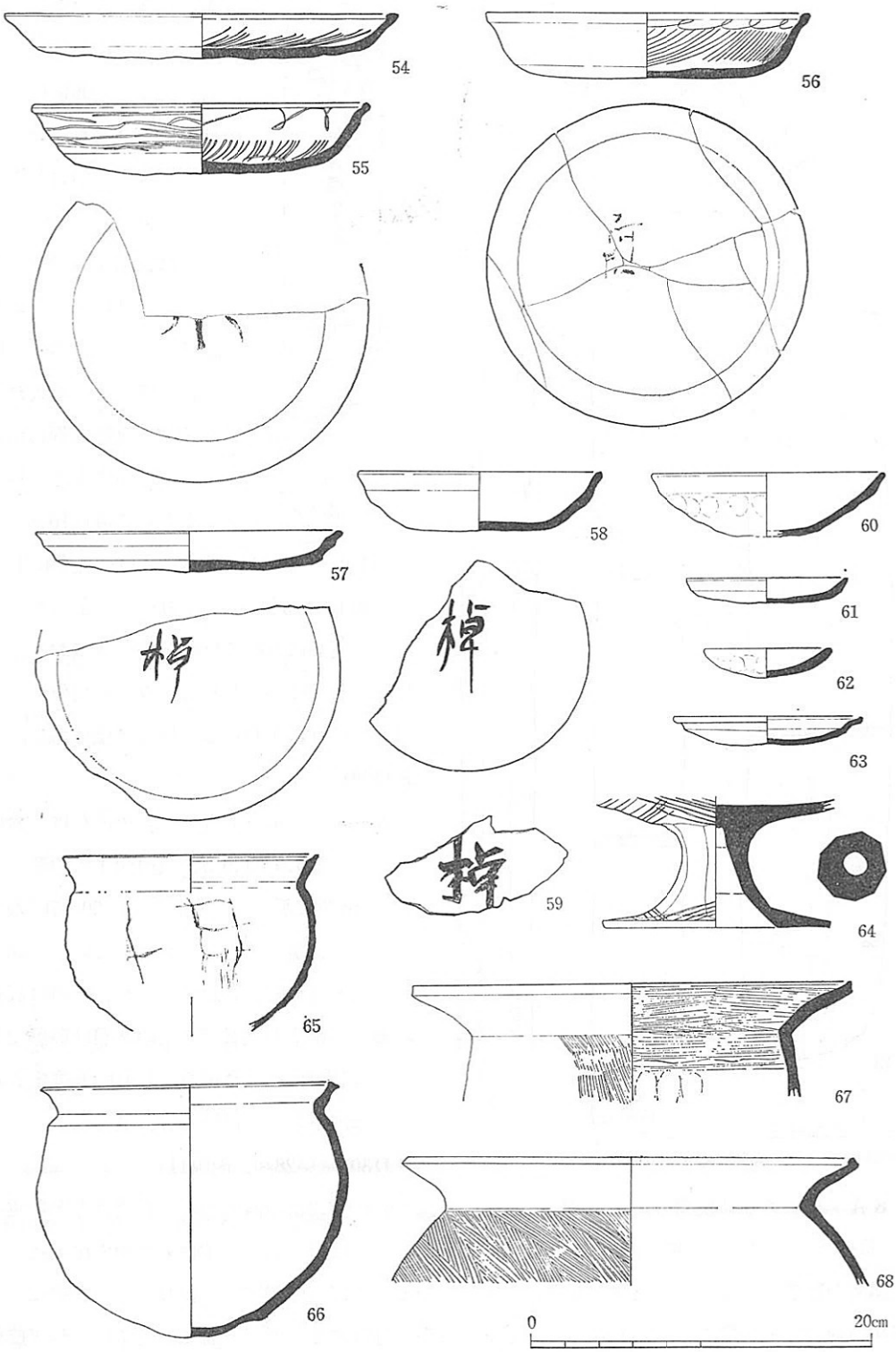
をした部材と推定される69がある。

ＮＲ302南肩より南へ90m余り離れたＸ＝－624、Ｙ＝－344付近の青灰色シルト面に自然に形成された幅４ｍ、深さ0.4m程の落ち込み状の浅い流路内に堆積した粗砂層から若干の自然木類とともに１点の木簡76が出土した（第27図、図版29）。木簡そのものは、投棄された後、すぐに粗砂層内に埋れてしまったのか、あまり摩滅しておらず、墨書も比較的明白である。

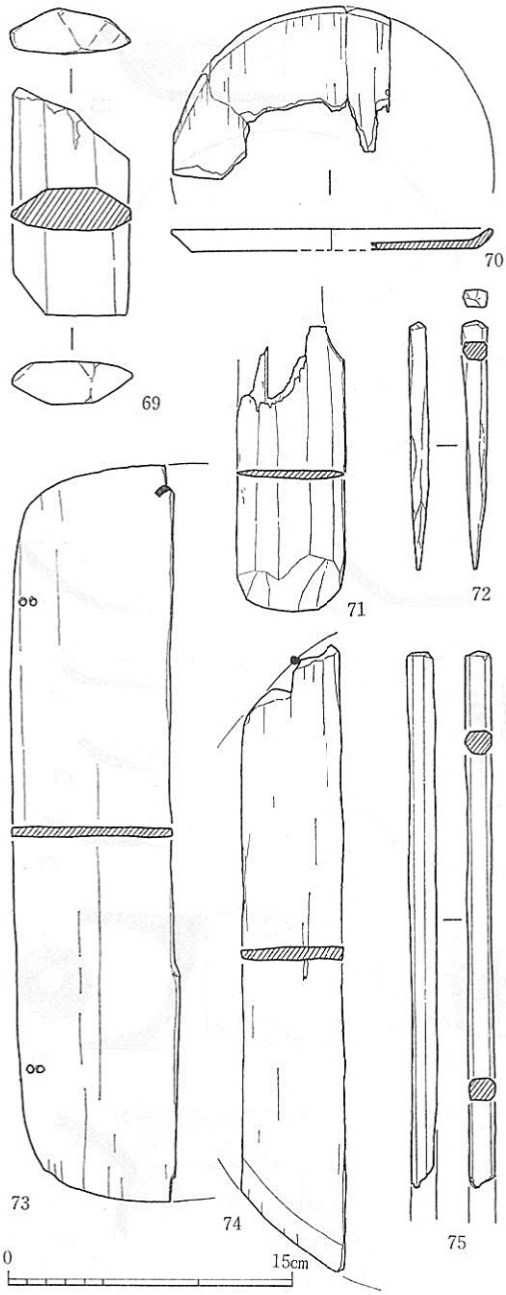
木簡の釈文・内容は次のとおりである。[注3]

〔種カ〕
□田五十戸奈□

第１字は手順を追うと「種」となり、一応空白のままに残し、最も近い「種」の字を付した。



第25図　ＮＲ302出土土器



第26図　ＮＲ302出土木製品

第27図　粗砂層内出土木簡

また「奈」は「奈」で人名と思われるが欠いて不明である。裏面には墨書は認められなかった。

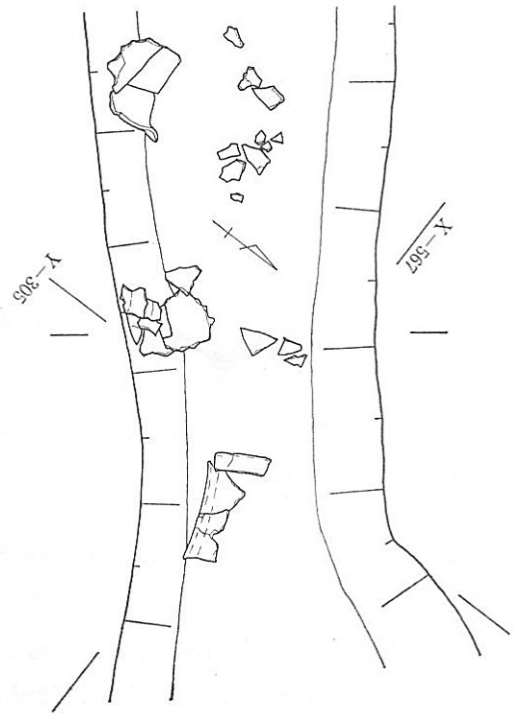
「五十戸」の表記がみられる荷札で、「種田」の地名は、『倭名類聚抄』には認められない。その形態は長方形の材の一端に左右の切り込みを入れたもので、他端は折れ損じており不明である。長さは表左側で最長10.8㎝、幅は2.9㎝、厚さは左右不均一で、左側0.4㎝、右側0.1㎝を測る。また切り込み部分だけでなく、表面にも紐の痕跡が残されており、貢進する荷物にかけた紐に挟み込んで使用されたことがうかがわれる。樹種は桧である。[注4]

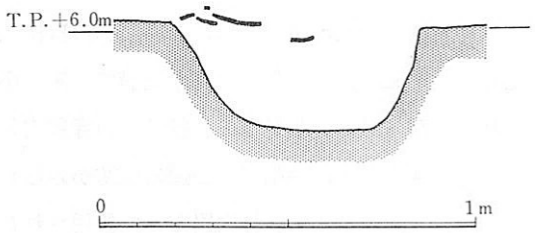
ＳＤ301

Ａトレンチから７Ａトレンチにかけて検出された。幅0.9～1.9m、検出面よりの深さは約1.0mの東西溝で、北から東へ60～70°の方位をもつ、断面は逆台形を呈している。溝内の堆積土は大きく３層に分かれ、下層は灰色の細砂と粘土の互層で、上の２層は砂層であり、激しい水の流れがあったものと推定される。溝内から遺物は出土しなかった。

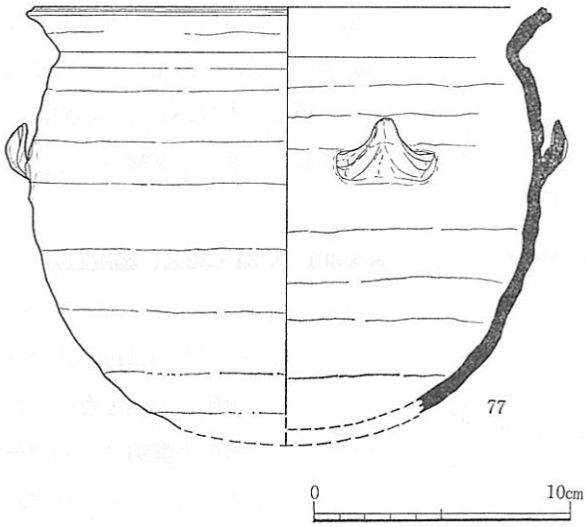
ＳＤ302（第28図、図版11）

８Ａトレンチより検出された。幅0.3～1.0m、深さ0.1～0.3mの溝である。方位は北から東へ50°前後で、北側では北東、北西にそれぞれ２条ずつ細く分かれている。溝内遺物の出土状況は第28図の通りである。溝内上層より甕が出土している。甕77（第29図、図版27）は、半球に近い胴部の両肩に短い把手を持つもので、底部下半に煤が付着する。体部外面は刷毛調整されず成形時の凹凸が著しい。粘土紐の継ぎめが明瞭に残っており粗面である。内面は撫でて平滑にされている。赤褐色を呈し、石粒を多く含む。





第28図　ＳＤ302土器出土状況



第29図　ＳＤ302出土土器

ＳＤ303

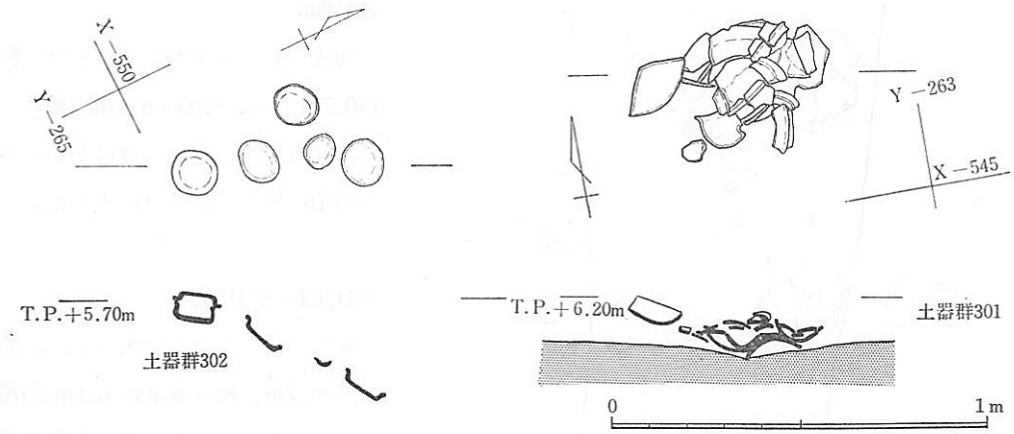
10Ａトレンチより検出された。幅約0.7m、深さ0.05〜0.1mの南北溝でほぼ直線的に走り方位は北から西へ約10°振る。遺物は出土しなかった。

ＳＤ304〜ＳＤ309

８Ａトレンチより検出された。幅0.2〜0.7m、深さ0.05〜0.1mの浅い溝でほぼ直線的に走り、方位は北から西へ30°〜40°である。溝相互の間隔は不均等であるがほぼ平行している。溝内の埋土は明黄褐色土の単一層であり、遺物は出土しなかった。

土器群301（第30・32図、図版28）

Ａトレンチ中央で検出された。土器群302の北４mに位置する。掘形は検出できなかったが、土師器椀84〜89、甕90、蓋91、羽釜92がみられた（第32図）。84〜87はわずかに丸味をもつ平底に内湾する口縁部が付くもので、器壁の厚い86、87と薄い84、85があり、口縁部は横撫でが強いため立ち上がり気味になる。口縁下半から底部にかけて指成形による凹凸が著しく未調整である。明赤褐色を呈し、胎土に雲母、砂粒が混じる。88、89は高台が付くものであるが、高台に大小が見られる。体部外面篦削り後丁寧に撫でられており、胎土は椀84〜87に比べて精良である。甕90は口径14cm前後の小型のも

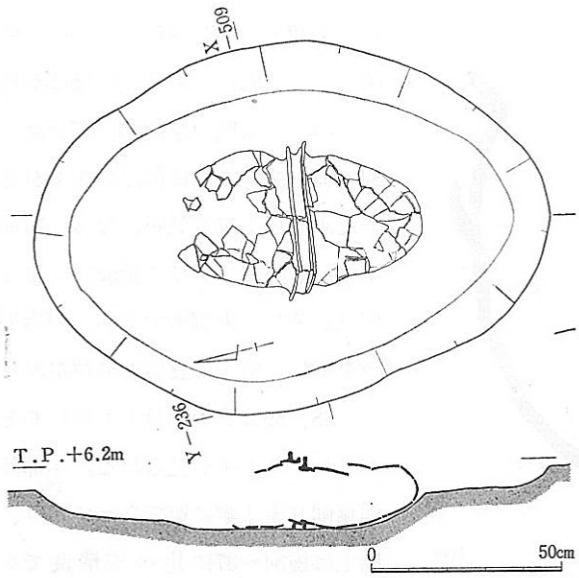


第30図　土器群301、土器群302実測図

ので口縁部は短く外反し、胴部の境を強く横撫でしている。体部外面には指押えの凹凸が著しく、赤褐色の胎土に多量の石・砂粒を含む。蓋91は全体に丸味をもったもので口縁端部は丸味をもっておわり、篦削り後入念な篦磨きが施されている。羽釜92は口縁部が小さく、内面に刷毛、体部内面は指押え、外面は縦刷毛で調整されている。褐色を呈し、胎土に金雲母、角閃石を含む。

土器群302（第30・32図、図版28）

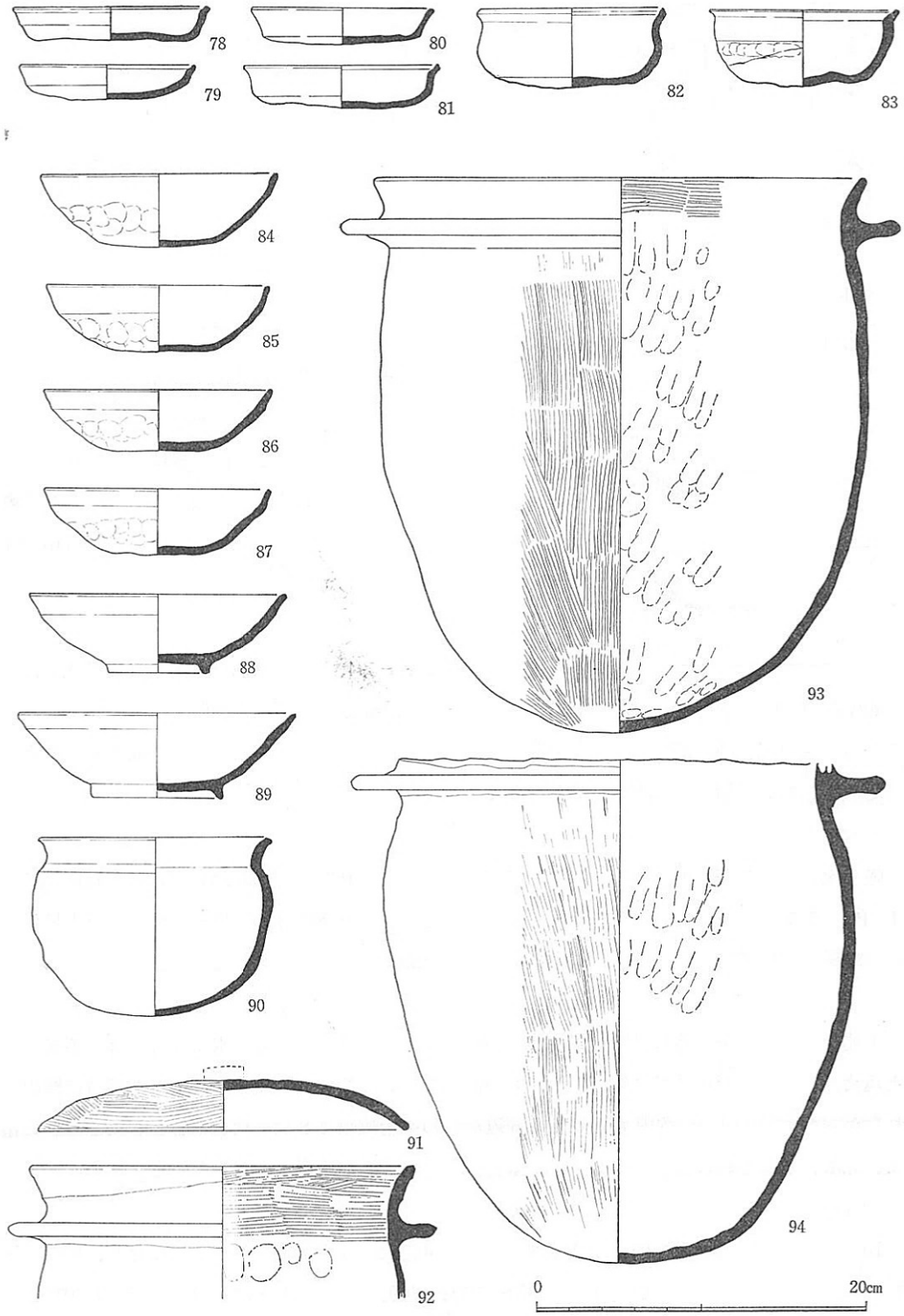
Aトレンチ中央東側矢板際で検出された。矢板打ち抜きの際に攪乱されたためか掘形は検出できなかった。土師器皿4点、小型壺2点が出土した（第32図）。いずれも完形土器で、壺に小皿を蓋のように被せた状態で出土したものもみられた。78〜81は口径が11cm前後で、口縁部内外面横撫で、それ以下は外面成形時の凹凸を残している。4点とも口縁端部に油煙の痕跡がみられることから、灯火器として使用されたことが推定される。82、83は扁平な体部に短く外反する口縁部が付くもので、口縁部内外面は横撫でされているが、体部外面は粘土紐の痕跡が明瞭に残っているものがあり未調整である。



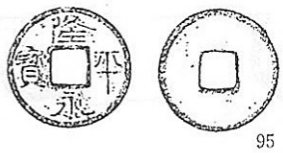
第31図　SX301土器棺墓実測図

SX301（第31・32図、図版11）

調査区北半部に位置する。長径1.4m、短径1.0m、深さ0.1mの浅い掘形のほぼ中央に土師器羽釜を合口においたもので、一方の羽釜94は鍔の部分まで口縁部を丁寧に欠き割り、双方の口縁を咬み合わせている。93、94は、94



第32図　土器群301（84～92）、土器群302（78～83）、ＳＸ301（93、94）



95

96

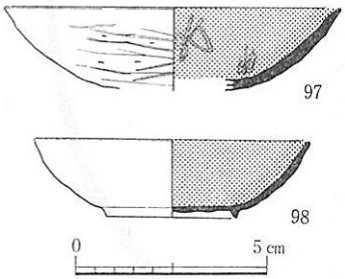
0　4 cm

第33図　包含層出土古銭

が口縁部を欠いているものの、93はほとんど外反しない短い口縁部と丸味をもつ胴部からなり、口縁端部は丸くおさまる。口縁部内面は横刷毛、胴部外面は粗い縦刷毛で内面には指撫での跡が明瞭に残る。淡褐色を呈し、胎土はいわゆる生駒西麓産のものである。いずれもわずかであるが体部外面に煤の付着がみられた。(第32図、図版28)。

P301

Aトレンチ南半部X＝—625、Y＝—340付近で検出した。径0.3m程の不整円形で深さは約0.2mである。黒色土器A類の杯97が出土している（第34図、図版27)。平らになるであろう底部と内湾気味に拡がる口縁部からなる。口縁部内外面横撫で、それ以下は外面全体に篦削りを施す。内面には水平方向の丁寧な篦磨きがなされ、渦状の暗文がみられる。平城宮ＳＤ650Ａ様式黒色土器杯Ａに近似している。[注5]



97

98

0　5 cm

第34図　P301、P302出土土器

P302

4Aトレンチ X＝—594、Y＝—323で検出した。径0.1mの円形で、深さは約0.2mである。黒色土器A類の杯98が出土している（第34図、図版27)。高台の付くもので、摩滅が激しく明瞭でないが内外面ともに篦磨きは認められない。胎土に金雲母、砂粒を多く含む。

隆平永寶（第33図—95）は調査地区北半部、ちょうどＮＲ301の北岸にあたる部分の東壁側溝、Ｔ.Ｐ.＋5.5～6.0m、暗青灰色シルト層から出土した。またＮＲ301の埋没後堆積した中世包含層（暗緑灰色砂礫層）からであるが、富寿神寶（第33図—96）が出土している。

上述したように飛鳥時代以降平安時代にかけて、当調査区は幾度も洪水に見舞われた不安定な土地であったようで特にＮＲ301・ＮＲ302の河川を除いて７・８世紀代には明確な遺構は検出されなかった。しかし流路内およびその周辺からの出土遺物は８世紀代を中心としたものが豊富で、完形、及びそれに近いものも多く、墨書土器、墨書人面土器、木簡等なども含まれることより、近辺に集落が存在したことが推定できよう。

10世紀中葉頃まで命脈を保ったＮＲ302も、９世紀代になると流れが緩やかになり、埋没が進むようである。ＮＲ302の流れの岸辺にはＳＤ302～309、土器群301・302、ＳＸ301、Ｐ301・302にみられるように各遺構が散在して形成されてくる。[注6]時期的に併行して北方約600m離れた美園遺跡では溝、土壙、掘立柱建物が検出されており、河川北方に集落が存在したことが窺われる。

しかし現状では非常に散発的で、それらと河川岸辺で検出された遺構がどのような係りをもったものか明らかにしがたい。

注1　墨書文字の解読については平城宮跡発掘調査部史料調査室の御指導と御援助を受けた。

注2　墨書人面土器については旧長瀬川であるこの流路の下流約1Kmにあたる東大阪市弥刀変電所前の池遺跡と、約1Km上流にあたる八尾市本町から出土している。(田中勝弘『墨書人面土器について』『考古学雑誌』第58巻第4号1973)

注3　木簡解読については平城宮跡発掘調査部史料調査室の御指導と御援助を受けた。さらに鬼頭清明氏、佐藤信氏に種々の教示をえた。

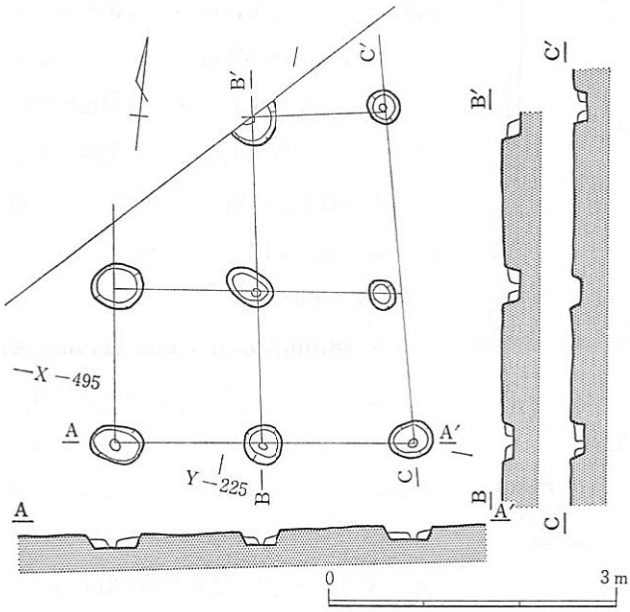
注4　松田隆嗣氏の教示をえた。

注5　奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告Ⅵ—平城京左京一条三坊の調査—』(奈良国立文化財研究所学報第23冊) 1974。

注6　これらの遺構出土遺物の他に、この時期のものとしては破片であるが、越州窯系青磁椀が出土している。

第6節　中　　世

平安後期から室町時代までの遺構として、掘立柱建物、井戸、土壙、土壙墓、溝、畦畔を検出した。ここでは、各遺構を種類ごとに記すにとどめ、時期別の組合せ、その変遷については、後の第Ⅲ章第2節にゆずる。



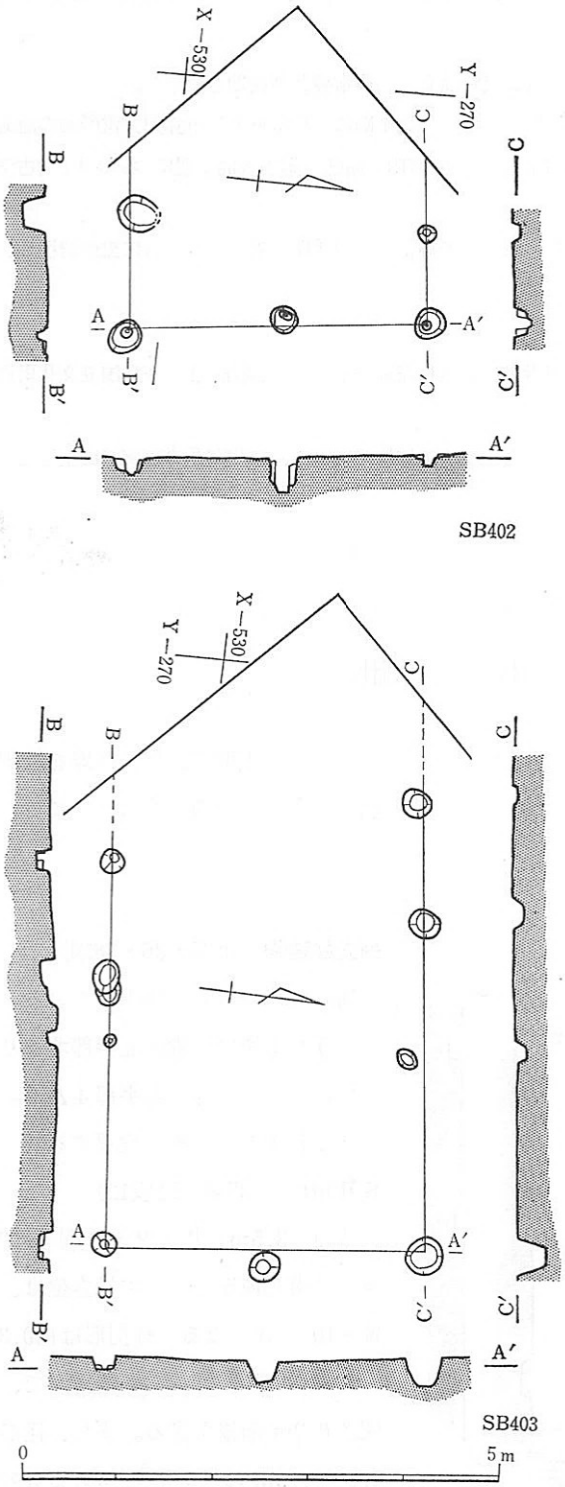
第35図　ＳＢ401実測図（基準レベルはＴ.Ｐ.+6.0m）

掘立柱建物（第35・36・38図）

掘立柱建物は6棟検出している。このうち1棟は調査区北半部北寄りＡトレンチ、5棟は北半部4Ａトレンチと5Ａトレンチに位置する。

ＳＢ401（第35図、図版12）

2間（3.5m）以上？×2間（3.2m）の南北棟建物で、主軸方位は、N—10°—Wとなる。柱掘形は径0.3～0.4mの円形ないしは楕円形で、深さ0.2m前後を測る。また、径が0.1～0.15mの柱痕跡を留めるものもある。柱間は桁行で、北から1.9m、1.6mと不揃いであるが、梁行



第36図　ＳＢ402、ＳＢ403実測図
（標準レベルはＴ．Ｐ．＋6.0m）

は1.6mの等間である。この建物の棟方向は東側桁行の柱筋が、西へ振れており、やや歪んだ建物になっている。

ＳＢ402（第36図）

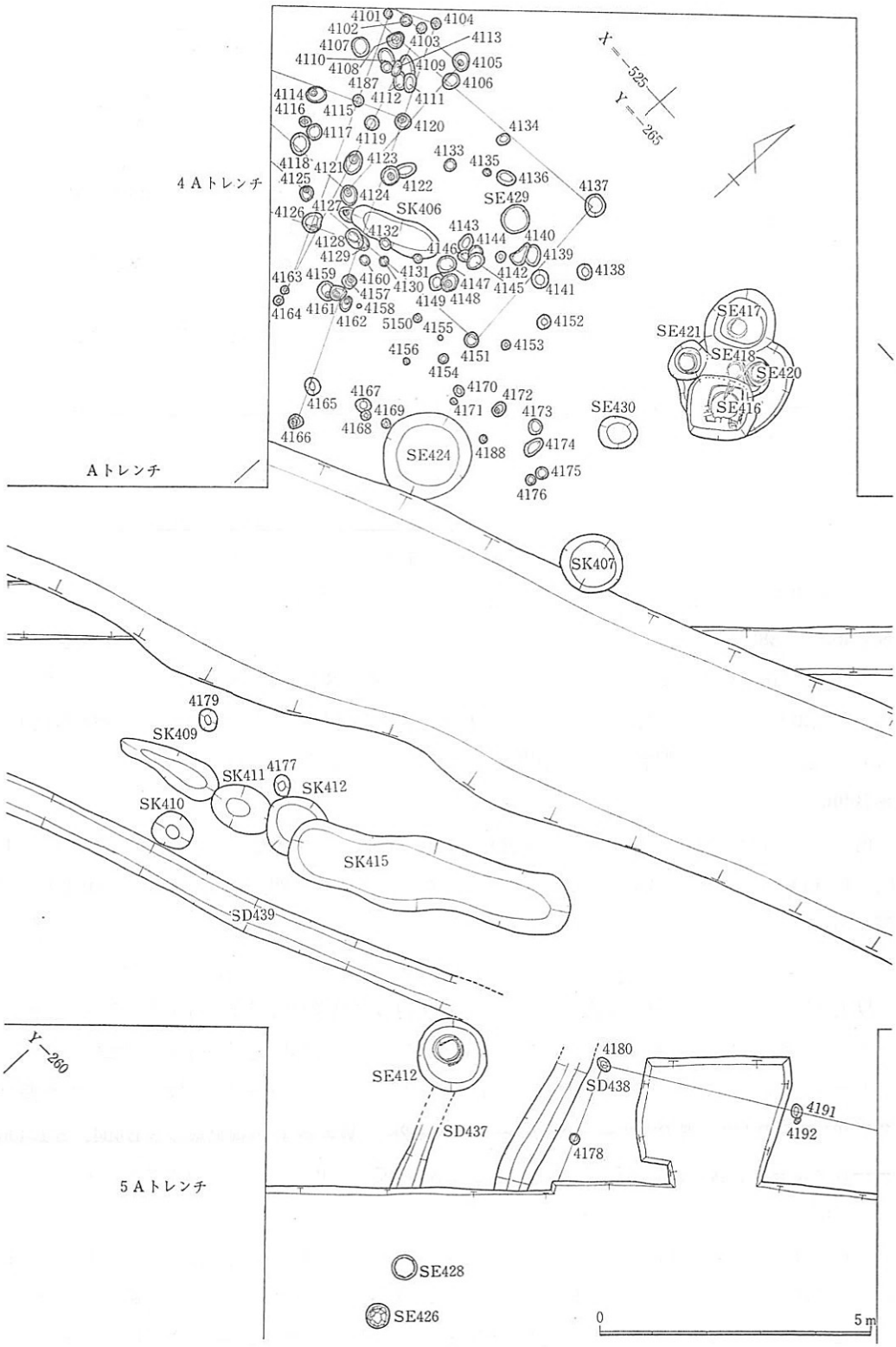
西方は、調査区外に及び、２間（3.2m）×１間（1.4m）以上の東西棟建物と推定される。主軸方位は、N−10°−Wとなる。柱掘形は、径0.2〜0.4mの円形ないしは楕円形で、深さ0.1〜0.3mを測る。径0.1〜0.15mの柱痕跡を留めるものもある。柱間は、桁行で不揃いであるが、梁行は1.6mの等間である。柱掘形埋土より黒色土器、土師器の細片が出土している。

ＳＢ403（第36図）

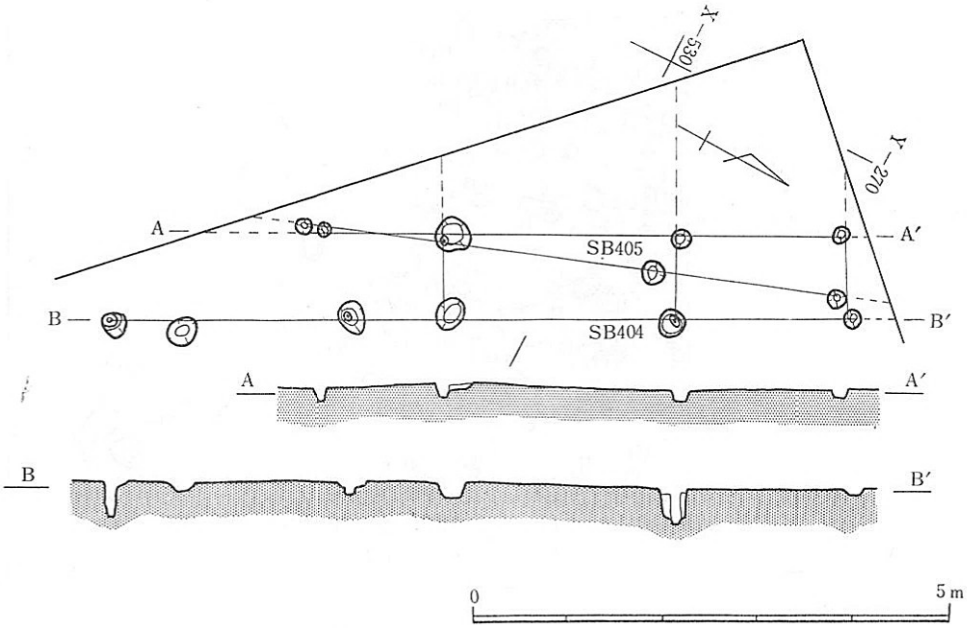
西方は調査区外に及ぶ。ＳＢ402と重複して位置する。３間（4.8m）以上×２間（3.2m）の東西棟建物で、主軸方位はN−7°−Wとなる。柱掘形は0.1〜0.3mの円形ないしは楕円形で、深さ0.1〜0.3mを測る。径0.1mの柱痕跡を留めるものもある。柱間は桁行で不揃いであるが、梁行はＳＢ403と同様で1.6mの等間である。柱掘形埋土より黒色土器Ａ類、黒色土器Ｂ類、口縁「て」の字状の土師器小皿の細片が出土している。

ＳＢ404（第38図）

５間（8.0m）以上×１間（1.0m）以上の建物である。ほとんどが調査区外西方に及ぶものと推定され、全容は明確にし難い。建物の東西庇様の一部にあたる部分かも知れない。主軸方位は、N−28°−Wで、柱掘形は0.2〜0.3mの円形である。柱掘形埋土より瓦器、土師器



第37図　中世遺構群実測図



第38図　ＳＢ404、ＳＢ405実測図（基準レベルはＴ．Ｐ．＋6.0m）

の小片が出土している。

ＳＢ405（第38図）

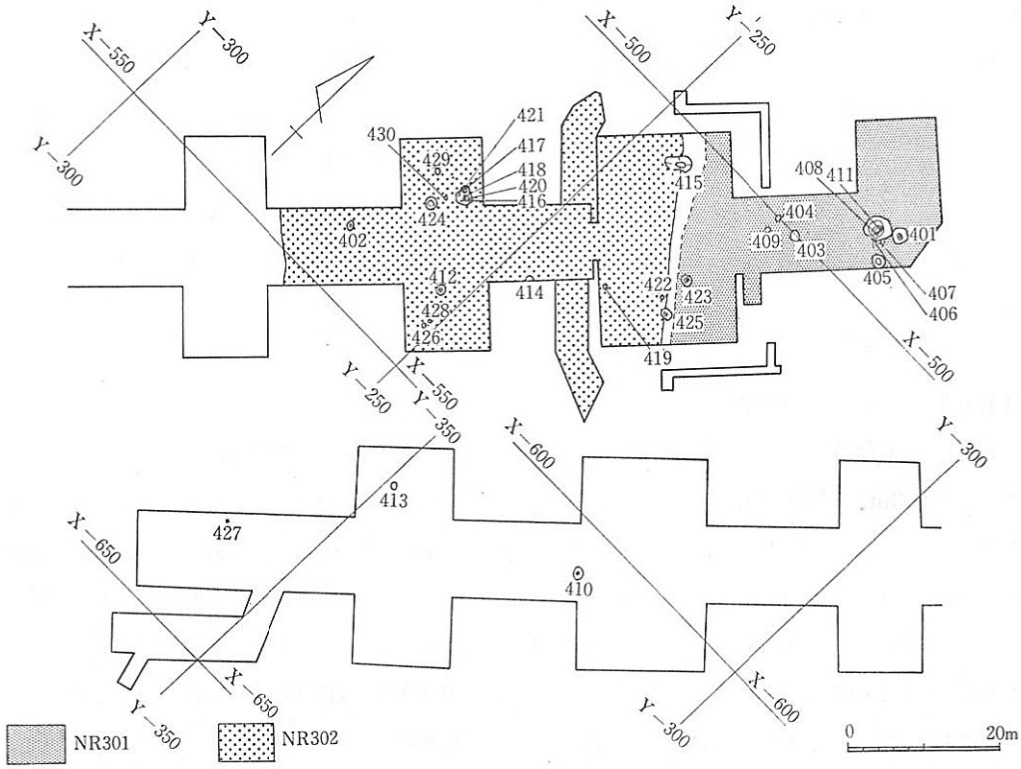
３間（5.7m）以上×１間（1.25m）以上の建物である。ＳＢ404と同様にほとんどが調査区外西方に及ぶものと推定され、全容は明確にし難い。主軸方位はN−21°−Wで、柱掘形は0.2〜0.3mの円形である。柱掘形埋土より瓦器、土師器の小片が出土している。

ＳＢ406

南側は工業用水管施設工事、東側は近世井戸ＳＥ502によって大半を欠失した建物で、西側１間（1.5m）、北側は全長3.7mのみ残している。主軸方位はN−28°−Wで、柱掘形は0.2mの円形である。

以上に述べた６棟の掘立柱建物については、各建物の柱掘形間に明確な切り合い関係が認められず、先後関係は明確にしがたい。また建物主軸方位は、全体的に北西−南東方向に揃えてはいるものの、個別に見るとその主軸方向の振れ幅によって、N−7°〜10°−W前後で主軸を振るＳＢ401、ＳＢ402、ＳＢ403——ａグループ。N−28°−W前後で主軸を振るＳＢ404、ＳＢ406——ｂグループ。N−21°−W前後で主軸を振るＳＢ405——ｃグループ。の３グループに分けることが出来る。

これら３グループの時期的関連については、ａグループの建物を構成する柱掘形埋土より瓦器が１片も出土せず、黒色土器Ｂ類椀がみられるのに対して、ｂ・ｃグループでは瓦器が出土していることより、少なくともそれらの土器の年代が建物の上限を示すことを考慮すれば、ａグループ→ｂ・ｃグループの順序を見い出すことができよう。またｂ・ｃグループは重複しており同時

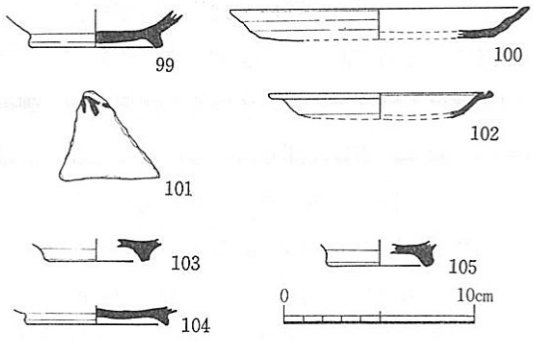


第39図　中世井戸位置図

併存はありえない。その前後関係についてはいま一つ確証はなく、第Ⅲ章第2節で述べるように、他の遺構との関連の中で時期的変遷を追いかけたい。

井　戸

井戸は30基検出した。これらの井戸のうち27基が北半部に集中し、すべてが飛鳥、奈良・平安時代の河川（ＮＲ301、ＮＲ302）上に位置する。また北半部ではこれらの井戸と関連して掘立柱建物等の遺構に附属するように存在するが、それらと離れて用水路ＳＤ445の両岸に位置するものもみられる。このように井戸の涌水は単に飲料用だけでなく、水辺の作業にも利用されたことが窺われる。



第40図　ＳＥ402（99〜102）、ＳＥ430（103、104）、ＳＥ421（105）出土土器

井戸については『長原』（財団法人大阪文化財センター）で分類された井筒の構造に従って、Ａ曲物井戸、Ｂ羽釜井戸、Ｃ曲物羽釜井戸、Ｄ特殊井戸、Ｅ素掘り井戸の順に記述した。

Ａ曲物井戸

ＳＥ402（第42図、図版15）

Ａトレンチ北半部南寄りで検出した。

掘形平面形は不整円形で、径1.2m、検出面から底までの深さは0.9mを測る。掘形上縁より約0.5m下半部北寄りで径0.5mの円形の二段掘りになり、曲物が二段認められた。曲物は上段が径0.4m、高さ0.25m、下段は径0.3m、高さ0.2mで順次口径を増し積み重ねている。掘形埋土は第42図の通りで、曲物内は上層に暗灰色シルト層、下層は灰色粗砂層である。掘形上半部から土師器、黒色土器B類椀の小破片が、曲物内からはわずかであるが黒色土器B類の椀99（第40図、図版27）、土師器皿100、102（第40図、図版27）が出土している。土師器皿101（第40図、図版27）は小破片で墨書が認められるが判読できない。土師器小皿102は口縁部が「て」の字状に屈曲するものである。

ＳＥ403（第42図、図版15）

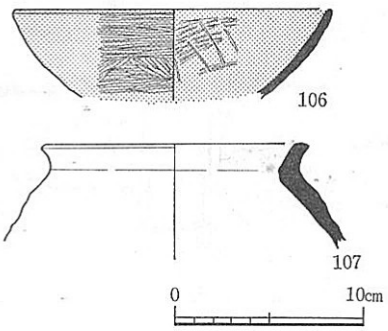
Ａトレンチ北半部北寄りで検出した。掘形平面形は楕円形で、長径3.2m、短径2.7m、底部の径は長径2.3m、短径1.9mで、検出面から底までの深さは約1.0mを測る。検出面より深さ0.7mの中央部で曲物が二段認められた。曲物は上段が径0.4m、高さ0.3m、下段が径0.35m、高さ0.1mで掘形底面に曲物を据えて埋土を行なった後、もう一段積み重ねている。掘形埋土は第42図の通りで、曲物内は上層が暗灰色シルト層、下層は灰色粗砂層である。掘形埋土より少量の土師器・瓦器が出土した。また井筒として使用された曲物201・204（第57図、図版37）は、下段に位置した201の側板には多数の小孔があけられており、上段204に「へぎ板」[注1]がつけられている。他に桃・センダン・トーガンの種子が多数出土した[注2]（図版37―１）。曲物内からは土器が出土しなかった。

ＳＥ404（第42図、図版15）

ＳＥ403の西方近くで検出した。掘形平面形は楕円形で長径1.5m、短径1.2m、検出面から底までの深さは1.5mを測る。検出面より深さ1.2mの掘形中央部で径0.4mの円形の二段掘りになる。曲物は上部が腐朽して失われているが八段残存しており、0.3mの口径の小さなものから0.4m程度のものへ順次口径を増して積み上げている。掘形埋土は第42図の通りで、曲物内は主に暗青灰色シルト層、最下部は灰褐色砂礫層である。掘形下層からは壁に貼り付いて曲物底板206（第57図、図版37）が出土している。また曲物内からは瓦器椀114、瓦器小皿113、土師器皿115が一括出土した（第52図、図版31）。これらの土器は埋め戻しの際に意識的に内側を表に向けて井戸内に入れられたようで、瓦器小皿、土師器皿は完形品であり、瓦器椀は半載され高台が失われていた。113は口径10.0㎝、器高2.5㎝で、口縁部は１段撫でになっている。底部内面、側面は円を描くように回した一体化した篦磨き、口縁部外面は屈曲した部分にはあたっていないが密な篦磨きがなされ、底部に及ぶ部分もあるが、成形時の指押えの痕跡が明瞭に残る。114は口径15.5㎝、器高は高台を欠いて不明であるが瓦器椀Ｂ類に属するものであろう。115は口径15.0㎝、器高3.0㎝で歪みが目立つ。口縁部は２段撫でで底部に指押えの痕跡が残る。曲物202は最下段で検出したもので、ＳＥ403出土下段曲物と同じ様に多数の小孔が設けられている。他にＳＥ403程の量ではないが桃・センダンの種子が出土している。[注3]

井筒の構造	井戸番号	時期及び出土瓦器椀
曲物井戸	ＳＥ402	第Ⅰ期 黒色土器Ｂ類椀
	ＳＥ403	第Ⅱ期
	ＳＥ404	第Ⅱ期 瓦器椀Ｂ類
	ＳＥ410	第Ⅰ期
	ＳＥ411	第Ⅲ期
	ＳＥ413	第Ⅰ期 黒色土器Ｂ類椀
	ＳＥ417	第Ⅲ期 瓦器椀Ｆ・Ｇ類
	ＳＥ418	第Ⅲ期？
	ＳＥ419	第Ⅲ期
	ＳＥ420	第Ⅲ期 瓦器椀Ｃ・Ｅ・Ｆ類
	ＳＥ421	第Ⅰ期 黒色土器Ｂ類椀
	ＳＥ423	第Ⅲ期 瓦器椀Ｆ類
	ＳＥ425	第Ⅲ期 瓦器椀ＦかＧ類
	ＳＥ427	？
	ＳＥ428	第Ⅲ期
羽釜井戸	ＳＥ406	第Ⅲ期 瓦器椀Ｇ類
	ＳＥ407	第Ⅲ期 ？
	ＳＥ408	第Ⅳ期 瓦器椀Ｈ類
	ＳＥ412	第Ⅳ期 瓦器椀Ｉ類
	ＳＥ414	第Ⅳ期 瓦器椀Ｉ類
	ＳＥ426	第Ⅲ期
曲物羽釜井戸	ＳＥ401	第Ⅳ期 瓦器椀Ｉ類
特殊井戸	ＳＥ416	第Ⅲ期 瓦器椀Ｇ類
素掘り井戸	ＳＥ405	第Ⅱ期 瓦器椀Ｃ類
	ＳＥ409	第Ⅱ期 ？
	ＳＥ415	第Ⅳ期 瓦器椀Ｈ類
	ＳＥ422	第Ⅲ期 瓦器椀Ｇ類
	ＳＥ424	第Ⅰ期 黒色土器Ｂ類椀
	ＳＥ429	第Ⅰ期 黒色土器Ｂ類椀
	ＳＥ430	第Ⅰ期 黒色土器Ｂ類椀

第１表　中世井戸一覧表
（時期・出土瓦器椀については第Ⅲ章第1・2節参照）



第41図　ＳＥ413出土土器

ＳＥ410（第42図、図版13）

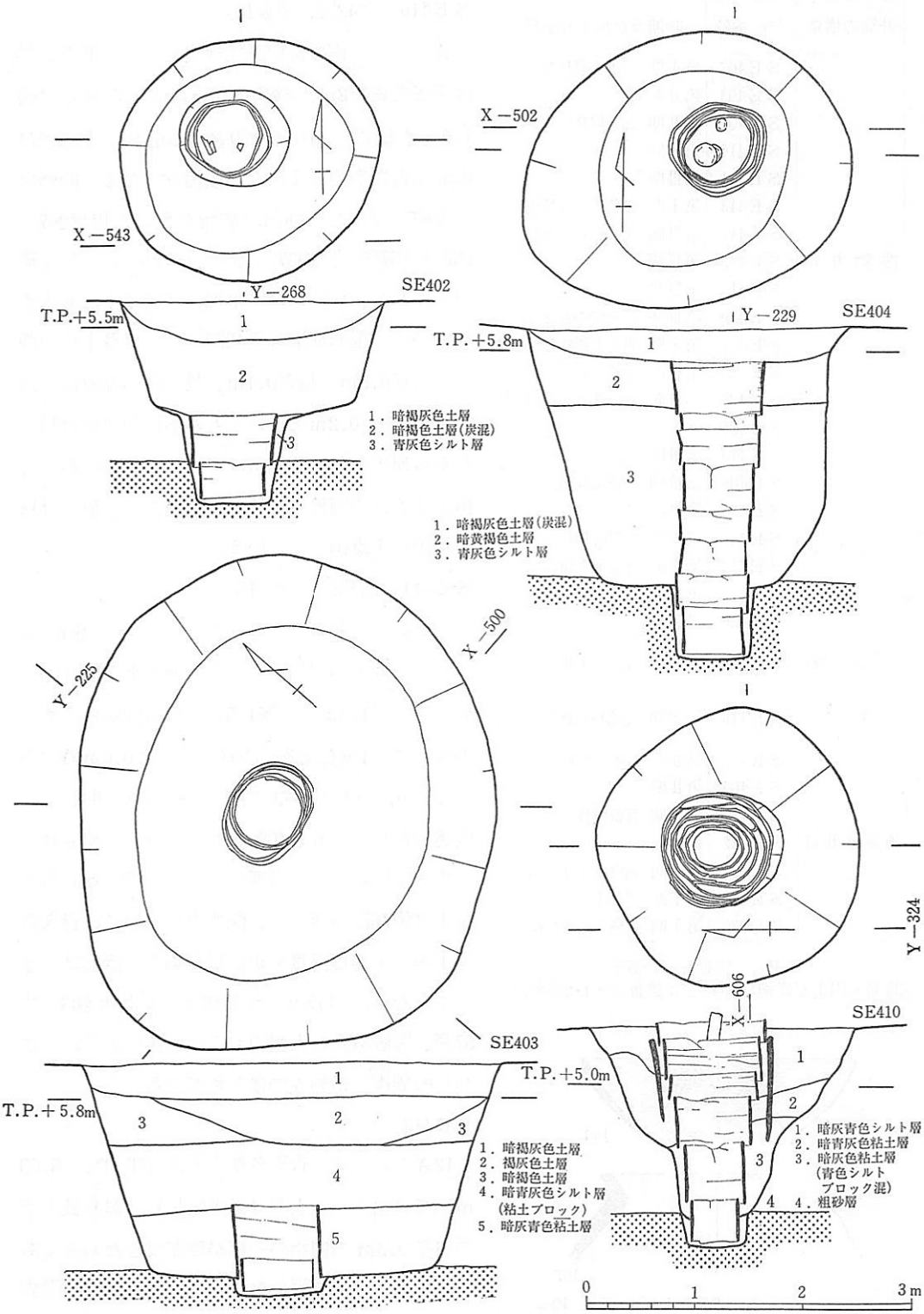
Ａトレンチ南半部中央で検出した。掘形平面形は円形で径1.2m、検出面から底までの深さは約1.0mを測る。検出面より約0.5mの中央部で径0.45mの円形の緩やかな二段掘りになる。曲物は六段確認できた。曲物の底板を割った板材207、208（第57図、図版37）等を「そえ板」として使用しており、それらは下半部の上面まで打ち込まれている。掘形埋土は第42図の通りで最上部の曲物は口径0.5m、高さ0.1m、最下部の曲物は口径0.2m、高さ0.2mで小さなものから順次径を増しながら埋土を行い積み上げている。曲物内からの出土土器は土師器の細片が１点のみで、他には梅の種子が１点出土している。

ＳＥ411（第45図、図版15）

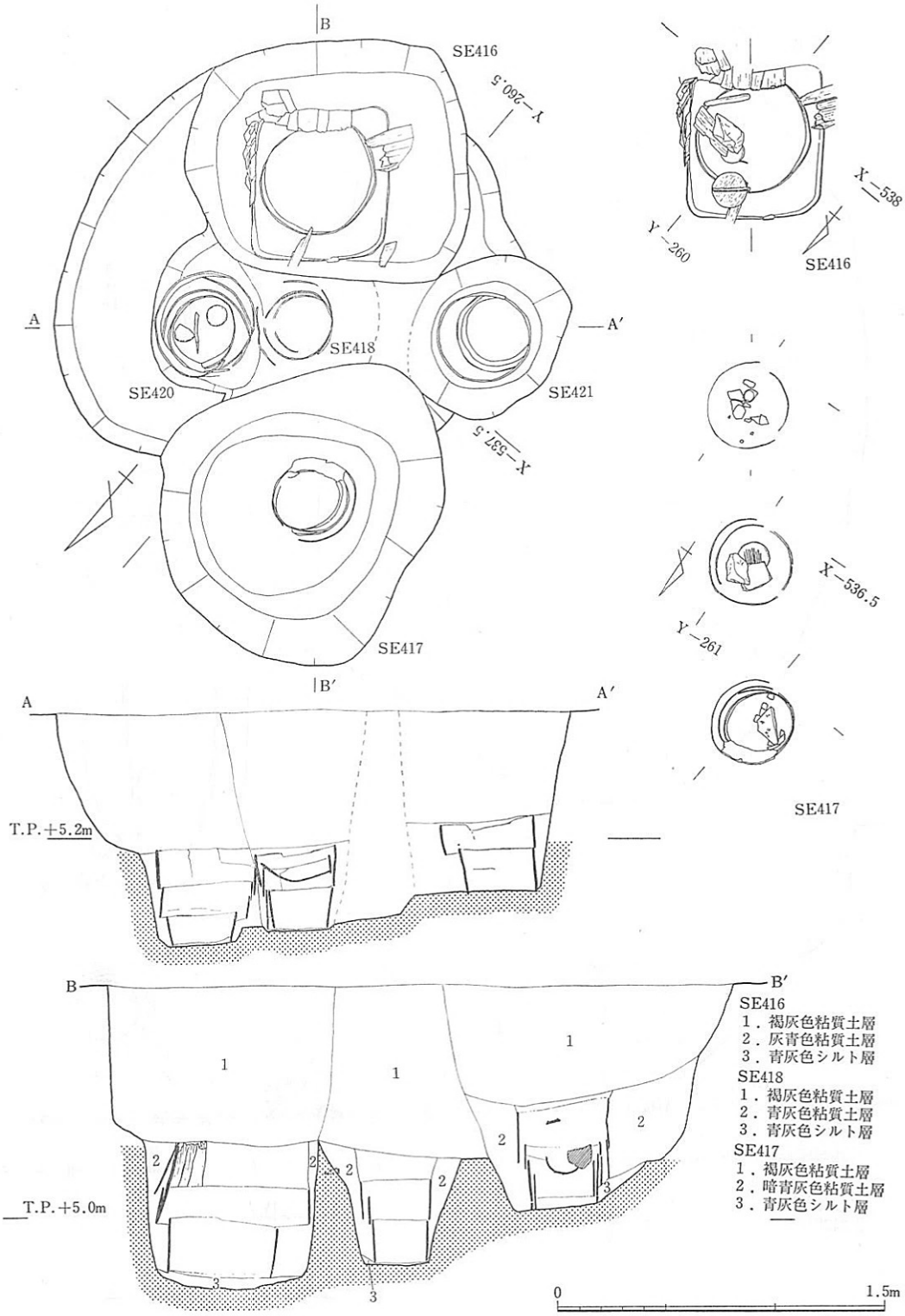
Ａトレンチ北半部北寄りで検出した。ＳＥ408によって掘形が切られている。掘形平面形は楕円形で、長径1.8m、短径1.5m、検出面から底までの深さは1.1mを測る。上縁より深さ0.6mの北寄りで径0.6mの円形の二段掘りになり、曲物が二段認められた。ＳＥ408によって上部を壊されたためか上段の一部は内部に落ち込んでいる。掘形埋土は第45図の通りで、曲物内は上層に暗青灰色粘土層、下層は灰青色粗砂層である。遺物は出土していない。井筒として使用された曲物205（第57図、図版37）は大型のもので本体の上下に「まわしの側板」[注4]が巻きつけられている。

ＳＥ413

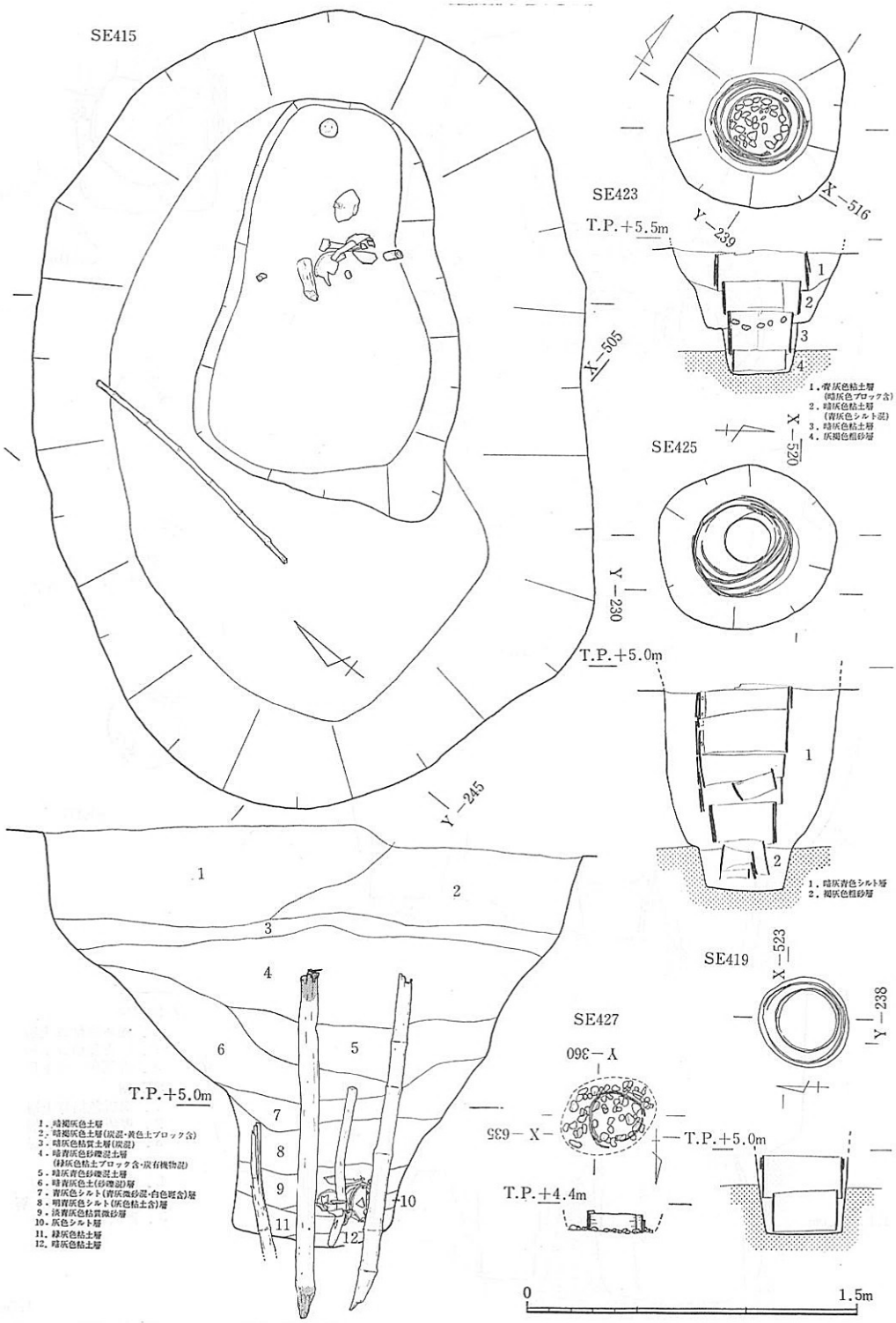
12Ａトレンチ、青灰色粘土上面（Ｔ.Ｐ.＋5.69m）で検出した。上部は大半欠失しており最下部の口径0.3mの曲物の一部が確認できたのみである。曲物内には青灰色シルトが認められ土師器甕107、黒色土器Ｂ類椀106が出土した（第41図、図版27）。106は内面が雑な不揃いの篦磨き、外面は



第42図　ＳＥ402、ＳＥ403、ＳＥ404、ＳＥ410実測図



第43図　ＳＥ416、ＳＥ417、ＳＥ418、ＳＥ420、ＳＥ421実測図



第44図　ＳＥ415、ＳＥ423、ＳＥ425、ＳＥ419、ＳＥ427実測図

密な篦磨きがなされ、口縁端部に浅い沈線を施している。

ＳＥ417（第43図、図版13）

４Ａトレンチで検出した。ＳＥ418、ＳＥ420、ＳＥ421を切った井戸。掘形平面は不整円形で径1.2～1.4m、検出面から底までの深さは1.0mを測る。曲物は３段確認できた。掘形埋土は第43図の通りで、曲物内上層に暗青灰色シルト層、下層は灰青色粗砂層である。瓦器椀153、154（第53図、図版33）は意識的に曲物内におかれたようで、底部近くでは焼けた角礫を上に置いて154が内側を表にして据えられ、さらに0.2m程上位では暗灰色シルト層を挟んで瓦器椀153が割れながらも伏せた状態で出土している。また瓦器椀152は曲物内上層で、瓦器椀151、瓦器小皿150、土師器小皿148、149は底部で出土している。151～154は口径15.5㎝、器高5.5㎝で、152は見込みに粗い格子状の篦磨きの瓦器椀Ｆ類、151、153、154は見込みに平行線状の篦磨きの瓦器椀Ｇ類である。特に154は、151～153程体部外面の篦磨きは粗略化しておらず、瓦器椀Ｃ～Ｄ類に認められるように体部外面には高台と同心円状に指腹部の圧痕が走り、四分割と思われる篦磨きが密に重ねられている。このようにＳＥ417出土瓦器は、口径・器高はほぼ一定しているが、外面の篦磨きの粗密の具合、内面見込みの平行状、格子状の二通りの篦磨きの存在等、調整技法に多彩な点が認められる。他に砥石が出土している。

ＳＥ418（第43図、図版14）

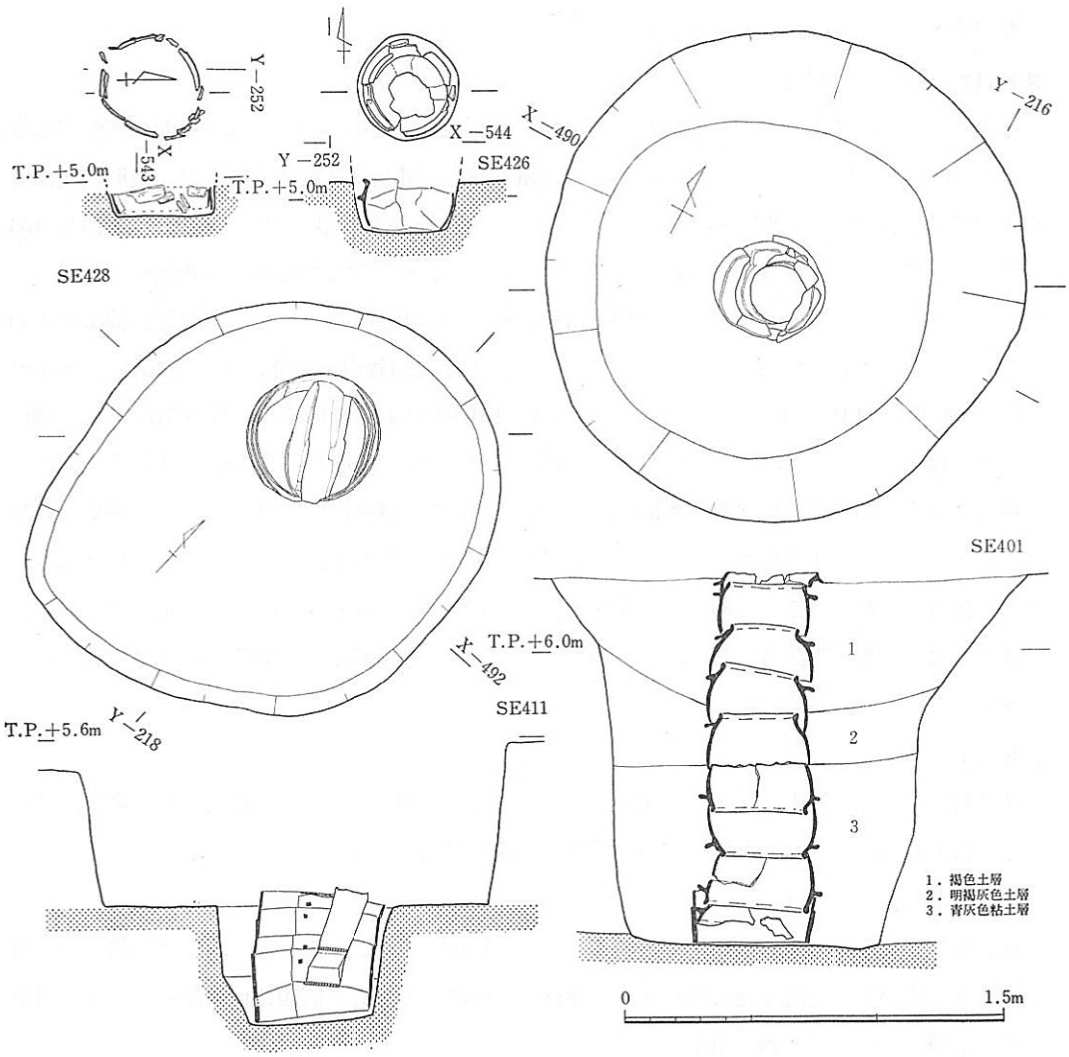
ＳＥ416、ＳＥ417に切られ、ＳＥ420を切った井戸で掘形平面規模は明確でない。検出面より底まで1.0mを測り、検出面から0.7mの深さで三段の曲物が認められた。

ＳＥ419（第44図）

ＳＤ445の南岸寄り溝底で検出した井戸で上部は１m以上欠損している。現状では曲物が二段のみ残存している。上段は径0.4m、高さ0.2m、下段は径0.3m、高さ0.2mで曲物内には灰褐色粗砂が堆積していた。遺物は出土していない。

ＳＥ420（第43図、図版14）

ＳＥ416、ＳＥ417、ＳＥ418に切られた井戸。現状では掘形平面形、規模は明確にし難いが、検出面から底まで1.1mを測り、掘形上縁より0.7mの下半部で径0.6mの円形の二段掘りになるものと推定され、曲物が三段認められた。掘形埋土は第43図の通りで曲物内は上層に青灰色シルト砂礫混土層、下層は灰色粗砂層で上層より瓦器椀118、119が、底部より瓦器小皿116、瓦器椀117が出土した（第52図、図版31）。116は見込みに乱れた格子状篦磨きがみられ、口縁部内外面は比較的粗いが、外面底部では三方向からの篦磨きが重ねられている。瓦器椀117、118、119は器形・内外面・見込みの篦磨き等にそれぞれ異なった側面がみられる。117は瓦器椀Ｆ類、118はやや小型であるが瓦器椀Ｃ類、119は瓦器椀Ｅ類に相当し、見込みの篦磨きについては117が0.5㎝前後の間隔をもつ丁寧な斜格子状、118は体部の篦磨きと一体化した乱れた篦磨きが重ねており、119では格子に平行を加えた篦磨きが施されている。また内外面の篦磨き調整をみると、117→119→118と粗略になっていく傾向が現われる。



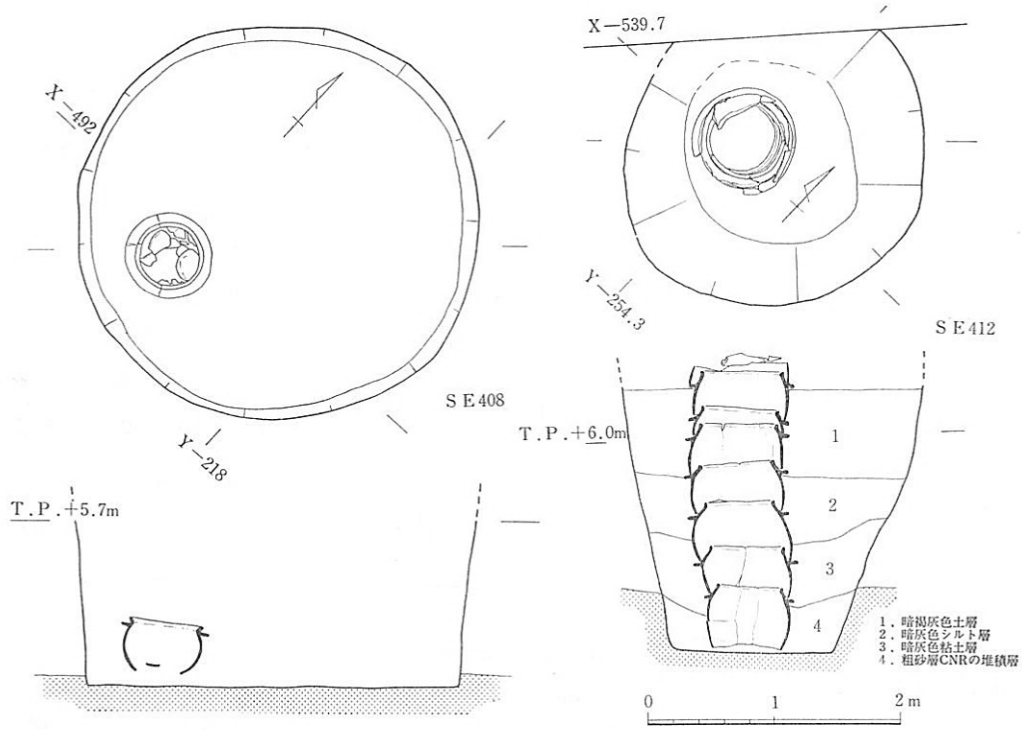
第45図　ＳＥ428、ＳＥ426、ＳＥ411、ＳＥ401実測図

ＳＥ421（第43図、図版14）

ＳＥ417、ＳＥ416に切られた井戸で掘形平面は不整な楕円形で長径0.8m、短径0.7mを測り、検出面から底までの深さは0.8mを測る。曲物は二段残存しており上段は径0.4m、高さ0.15m、下段は径0.3m、高さ 0.2mで曲物内からは黒色土器Ｂ類椀105、土師器皿の破片が出土した（第40図）。105は高台部分のみであるが、高台径の比較的小さいもので、径 5.5cmを 測る厚手のものである。

ＳＥ423（第44図）

３Ａトレンチ ＳＤ445の北岸寄りで検出した井戸で、上部は水道管施設工事の際に削られている。掘形平面形は楕円形で長径 0.9m、短径 0.8m、検出面から底までの深さは約0.6mを測る。掘形上縁より深さ 0.4mの掘形下半部中央で径 0.45mの円形の二段掘りになる。曲物は四段認められた。最上段は径0.45m、高さ0.15m、最下段で径0.2m、高さ0.1mで第44図に見られるよう



第46図　ＳＥ408、ＳＥ412実測図

に順次口径を増し埋土を行いつつ積み重ねている。曲物内には途中で小石を多量に混えた部分もみられたが、主に暗灰青色シルト層が堆積していた。曲物内から瓦器椀Ｆ類に類似した見込みに１㎝程の間隔をもつ斜格子状の篦磨きがなされ、外面には、明瞭ではないが分割性の認められる粗い篦磨きを施した瓦器椀が出土している。

ＳＥ425（第44図）

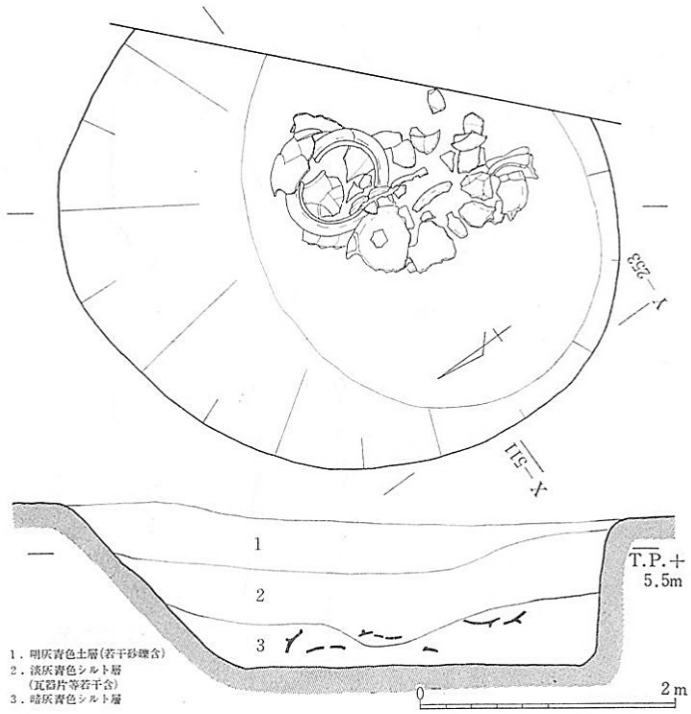
ＳＥ423の南に近接してＳＤ445の北岸寄りで検出した井戸で、上部は工業用水管施設工事によって大きく欠失している。現状では掘形平面形は不整円形で径0.75m、検出面から底までの深さは約0.9mを測り、掘形上縁より深さ 0.9mの下半部中央で径 0.4mの二段掘りになる。曲物は四段認められ、最上段が口径0.4m、高さ0.3m、最下段で口径 0.2m、高さ 0.15mである。曲物内から平瓦片、外面に粗い篦磨きが残る瓦器が出土した。他に曲物容器Ｏ（図版37）が出土している。またセンダンの種子１点が曲物内より出土している。

ＳＥ427（第44図、図版13）

Ａトレンチ南半部南寄りＳＥ505の掘形底部で検出した井戸で、かろうじて最下段の曲物の一部を残すのみである。曲物は口径0.3m、高さ0.1m前後で、底に玉石が敷かれている。土器は出土しなかったが曲物内より桃の種子が１点出土している。

ＳＥ428（第45図）

北半部５Ａトレンチで検出した。工業用水管施設工事で大半が欠失しており、奈良・平安時代



第47図　ＳＥ414実測図

の河川（ＮＲ302）の堆積砂層に最下段の曲物一部が残存するのみである。曲物は口径0.4m、高さ0.1mで遺物は出土しなかった。

Ｂ羽釜井戸

ＳＥ406

Ａトレンチ北半部北寄りで検出した。ＳＥ407に切られた井戸で、掘形平面形は不整円形で径1.8m、検出面から底までの深さは0.7mを測る。掘形南寄りで大きく３つに割れて土師器羽釜が一段残存していた。掘形埋土より瓦器椀155が出土している（第53図、図版33）。155は見込みに平行線状の篦磨きがみられ、体部内面の篦磨きは比較的密で、外面は粗いが底部近くまで施される瓦器椀Ｇ類である。また井筒に使用された土師器羽釜147（第53図、図版33）は、上方へ短く外反する口縁部をもち鍔は水平に付くもので、口縁上端部横撫で、体部内面撫で、外面篦削り調整がなされている。煤の付着が著しく、褐色を呈し胎土に砂粒を多く含む。

ＳＥ407

ＳＥ408に切られ、ＳＥ406を切った井戸で、掘形平面形は明確にし難い。検出面から底までの深さは0.7mを測る。掘形西寄りに一部欠損して土師器羽釜が一段残存していた。

ＳＥ408（第46図、図版13）

ＳＥ407を切った井戸で、掘形平面形は円形で径1.5m、検出面から底までの深さは約0.7mを測る。検出面より深さ0.4mの掘形南寄りで土師器羽釜176（第54図）が一段認められた。掘形埋土は暗青灰色シルト層で瓦器椀173、174、椀203（第57図、図版37）が、羽釜内より瓦器小皿171、瓦器椀172、175が出土している（第54図、図版34）。他に羽釜内よりクロマツの球果が出土した。

172～175はいずれも口径が15.0㎝、器高4.5～5.0㎝を測る瓦器椀Ｈ類で、外面には篦磨きを全く失っており、指押えの痕跡が明瞭に残るものである。171の内面には不定方向の太く粗い篦磨きが認められる。

ＳＥ412（第46図、図版13）

Ａトレンチ北半部中央で検出した。鋼矢板で北側は攪乱されているが平面形はほぼ円形で上縁

1.2m、底部の径は0.7m、検出面から底までの深さは1.1mを測る。掘形中央よりやや西寄りで土師器羽釜八段を検出した。掘形埋土は第46図の通りで、埋土を行いながら羽釜を正立させ積みあげている。掘形内暗褐色土層より瓦器椀195、196、土師器小皿197、198が出土している（第55図）。井筒に転用した土師器羽釜199（第55図、図版35）は口縁端部をわずかにつまみ出しており、外面篦削り調整、内面は撫でが施されており黄褐色を呈し、石粒を多く含む。

ＳＥ414（第47図、図版12）

Ａトレンチ北半部中央で検出した。鋼矢板で南側は大きく攪乱されており、井筒に使用した土師器羽釜が落ち込んだ状態で検出された。平面形はほぼ円形で径２m前後と推定され、検出面から底までの深さは0.6mを測る。出土遺物の大半は底部からで、瓦器椀182～185、瓦器小皿193、瓦器羽釜186、187、土師器小皿189～192、土師器羽釜194、軒平瓦188が出土した（第55図、図版35）。他に桃の種子が出土している。182～185はいずれも瓦器椀Ｉ類で、高台の粘土紐が途切れたものや、高台より底部が突き出したものもみられる。また瓦器小皿193には篦磨きは認められない。瓦器羽釜186、187はともに体部外面に煤の付着が激しい。186は口縁部が短く、内外面横撫で、体部内面は撫で調整され直立気味に底部に続く。体部外面不調整である。187は三足を鍔に接して直下に貼りつけており、ゆるやかに内湾する扁平な体部をもち、内面は刷毛目で調整されている。土師器羽釜194は内傾する口縁部に短く外上方に立ちあがる頸部をもつもので、口縁部内外面横撫で、外面は削り、内面は撫で調整されている。茶褐色を呈し胎土に砂礫を含む。土師器小皿はともに黄褐色を呈するが、口径７～８cmにおさまるもので口縁部をつまみ上げ気味に直立させる189、190、口縁部は１回の横撫でで開き気味に立ちあがる191、192がある。188は瓦当面に対し、右半分を残す均整唐草文の軒平瓦で、平瓦との接合は縦の篦撫で、凸面も縦位の篦撫で、凹面に布目痕がみられる。焼けて煤の付着が著しい。

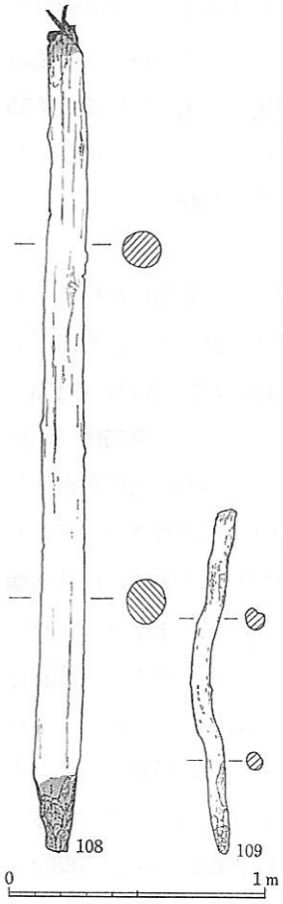
ＳＥ426（第45図）

５Ａトレンチで検出した。工業用水管施設工事で掘形の大半は失われており奈良～平安時代の河川（ＮＲ302）の堆積砂層内に土師器羽釜が一段残存するのみで、遺物は出土していない。羽釜146（第53図）は、球形の体部をもち、口縁部が短く「く」の字形に外反するもので、外面全体にわたって煤が付着している。口縁部内外面横撫で、体部内面撫で、外面は明瞭でないが削り調整されている。

Ｃ曲物羽釜井戸

ＳＥ401（第45図、図版13）

Ａトレンチ北半部北寄りで検出した。掘形平面は不整円形で上縁の径が1.9m、底部の径は1.3m、検出面から底までの深さは1.4mを測る。上部は擂鉢状に掘り抜かれ、下方0.4mですぼまりほぼ直線的に底に達する。掘方のほぼ中央で土師器羽釜八段と曲物一段を検出したが、最上段の羽釜は削平されて口縁部のみ残存していた。曲物は口径0.45mで底部に据えられその上に土師器羽釜を積み重ねている。羽釜の累積方法は、最下段の羽釜から上へ三段まで口縁部を下に倒立さ



第48図　ＳＥ415出土木製品

せており、４段目から７段目までを正立して積み、最上段では再び倒立させて７段目の羽釜の口縁部と咬み合わせている。掘形埋土は第45図の通りで、第２層の明褐灰色土層より瓦、瓦器179、180、土師器小皿177、178、曲物内より瓦器、土師器の小片が出土した（第54図）。井筒に使用された羽釜181（第54図、図版35）は上方へ短く外反する口縁端部をもち、鍔が水平につくもので、赤褐色を呈し胎土に砂粒を多く含んでいる。179、180は瓦器椀Ｉ類である。曲物200（第57図）は井筒として使用されたもので、「まわしの側板」[注5]がつけられており、側板には数ケ所、小孔があけられている。

Ｄ特殊井戸

ＳＥ416（第43図、図版14）

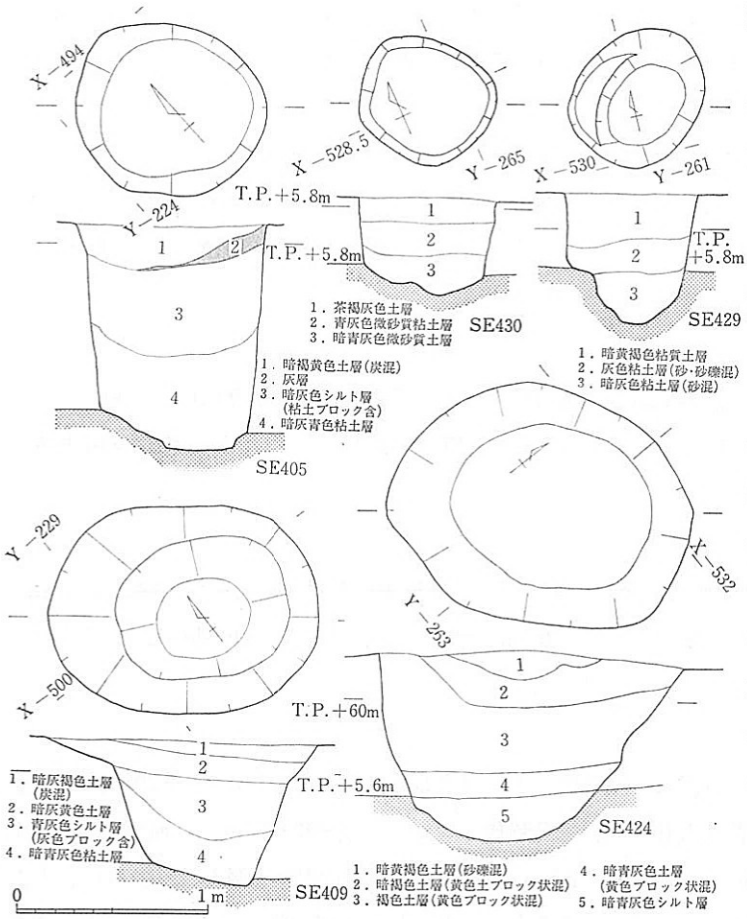
ＳＥ418、ＳＥ420、ＳＥ421を切った井戸で、掘形平面形は不整方形で一辺1.1～1.2m、検出面から底までの深さは1.1mで掘形上縁より0.6mの深さで二段掘りになり、井筒に使用された曲物周囲に巡らした幅0.1m、長さ0.7m、厚さ１㎝前後の縦板が南東隅に残存している。掘形埋土は第43図の通りで最下部に口径0.5m、高さ0.25mの円形の曲物を据え埋土を行うとともに、縦板の下端を固定しその上に縦0.7m、横0.6m、高さ0.15mの隅丸長方形の曲物を縦板の外周を巡るように積み上げていったものと思われる。掘形埋土上層からは瓦器椀、土師器小皿、羽釜砥石、角礫が出土している。また曲物内からは土師器小皿156～158、瓦器椀159、160、土師器甕161が出土している（第53図、図版32）。159、160は口径15～15.5㎝、器高5.0㎝で外面上に粗い篦磨きが施され見込みには７㎜～１㎝の粗い平行線状磨きが認められる。156～158はＳＥ418出土の148、149と類似したもので口縁部に２段撫でが施され、大きく屈曲し、端部が立ち上がるもので、158は２段撫でした小皿であるが、口縁部が立ち上がらず外上方へ伸る。161は外面が刷毛目で調整される。胎土に多くの石粒を含み、暗褐灰色を呈する。他に曲物底板m、n（図版37）、砥石等が出土し、曲物内より桃の種子が出土している。

Ｅ素り掘井戸

ＳＥ405（第49図）

Ａトレンチ北半部北寄りで検出した。掘形平面形は不整円形で上縁の径1.0m、底部の径0.8m、検出面から底部までの深さは1.2mを測る。瓦器椀140、土師器小皿139が出土している。140（第52図）は瓦器椀Ｃ類で、底部外面に「十」状の刻線が見られる。139は、口縁部の折り返しがなくなりかけたものである。

ＳＥ409（第49図）



第49図　ＳＥ430、ＳＥ429、ＳＥ424、ＳＥ405、ＳＥ409実測図

Ａトレンチ北半部北寄りで検出した。掘形平面形は楕円形で長径1.4m、短径1.0m、底部の長径は0.5m、短径0.4mである。検出面から底までの深さは1.4mを測る。

ＳＥ415（第44図、図版14）

２Ａトレンチ ＳＤ445の北岸で検出した。掘形平面形は不整楕円形で長径3.5m、短径2.5mで検出面から底までの深さは1.9mとなる。掘形検出面より深さ1.2mの北寄りで長径1.9m、短径1.0mの楕円形の二段掘りになり、大きく上・下二段に分かれる。掘形の堆積状況は第44図の通りで上層（第１～第４層）、中層（第５～第７層）、下層（第８～第12層）に分けることができる。下段第７層上面で先端を尖らせた杭109（第48図）が、第８層上面では節を抜いた長さ約0.6m、径６㎝の竹が認められた。また上層第４層を掘り下げた時点でも節を抜き先端を尖らせた長さ約1.5m、径９㎝の竹と杭108（第48図）が検出されている。杭109は径３～４㎝、長さ0.7mを測り、上端は平坦な面をなし、先端の一方向を削り尖らせた木の枝のようである。一方、杭108は径８～10㎝、長さ1.6mの丸太杭で両端に焼いた痕跡が認められる。出土遺物は上層から常滑甕、瓦器椀、瓦器羽釜、土師器小皿、土師器羽釜等が、中層からは瓦器椀162、165、土師器小皿164、下層では瓦器椀163、166～170が出土している（第54図）。瓦器椀は口径15.5～16㎝、器高５㎝前後でＨ類に属するが形態的に上層出土の162、165は器高が低く、上段にみられた最終埋没時期までいくらかの時間の経過が考えられるかもしれない。また、先に述べた竹と杭の他に第４層より径2.3㎝、長さ1.2mの細目の竹が倒れて出土している。

ＳＥ422

３Ａトレンチ、ＳＤ445の北岸寄りで検出した。工業用水管施設工事によってほとんどが失わ

れているが、わずかに残った掘形埋土（暗灰青色シルト層）より瓦器、土師器、羽釜片が出土している。瓦器は外面に粗い篦磨きが認められるもので、また土師器、羽釜は口縁部が「く」の字形に短いが強く外反するものである。

ＳＥ424（第49図）

４Ａトレンチで検出した。掘形平面形は不整楕円形で上縁の長径1.6m、短径1.2m、底部の長径1.2m、短径0.8m、検出面から底までの深さは1.0mを測る。掘形埋土は第49図の通りで、黒色土器、土師器の小片が出土している。

ＳＥ429（第49図）

４Ａトレンチで検出した。掘形平面形は楕円形で上縁の長径0.75m、短径0.65mで検出面より深さ0.4mで西寄りが２段掘りになる。掘形埋土は第49図の通りで黒色土器、土師器の小片が出土している。

ＳＥ430（第49図）

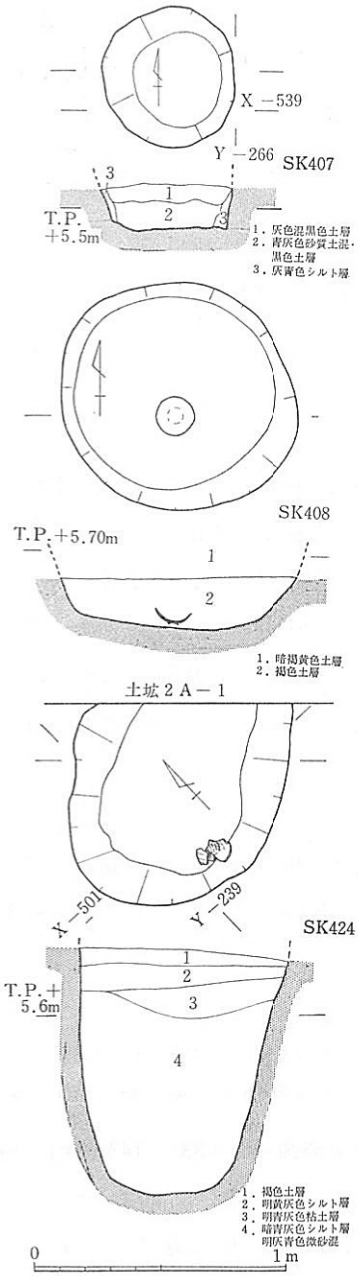
４Ａトレンチ、ＳＥ424の北側で近接して検出した。掘形平面形は不整円形で上縁の径0.8m、底部の径0.6m、検出面から底までの深さは0.5mを測る。掘形埋土は第49図の通りで黒色土器103、104（第40図）、土師器の小片が出土している。

以上に述べた井戸について、種類、時期を中心に整理すると以下のようになる（第39図、第１表）。

まず井戸の大半を占める27基の井戸は、飛鳥時代と奈良から平安時代に流れた河川（ＮＲ301、ＮＲ302）上、つまり遺構面となる第６、７層の黄褐色土層・明黄褐色土層を掘り抜けば、底に地下水流を保つ砂層がひろがっており、どこでも水が得られる地域に集中している。それらと対照的に残りの３基は南半部に点在してみられる。27基の井戸が集中した北半部分においては、掘立柱建物群第Ⅲ期[注6]に属するＳＥ416・ＳＥ417・ＳＥ418・ＳＥ420と第Ⅰ期に属するＳＥ421の５基、第Ⅳ期に属するＳＥ406・ＳＥ407・ＳＥ408とＳＥ411の４基が切り合って位置している。これらの井戸は、前者のように第Ⅲ期と第Ⅰ期にみられるような時期的開きの認められる例もあるものの、多くは同時期、あるいは近い時期で切り合っており、おそらく井戸の占地については特定な場所が選択されたのではないかと思われ、単に居住地が継続して営まれたという意味以外に、祭祀、呪術等の精神生活に関連した側面を多分にもつものと考えられよう。さらには、ＳＥ415のように古井戸埋没に伴う竹筒挿入の儀礼[注7]に類したものも検出した。

また、Ａ曲物井戸、Ｂ羽釜井戸、Ｃ曲物羽釜井戸、Ｄ特殊井戸のそれぞれについては、製作年代を示す井戸掘形内遺物、使用期間を示す井筒底部の遺物、埋没年代を示す井戸内一括遺物等に大きな差は認められず、使用期間は比較的短かかったことが窺い知れる。したがって井戸の年代を製作から埋没までの使用期間として扱い、井戸内出土土器を中心にしてみていくと、はじめに黒色土器Ｂ類椀がみられ、その年代の一点を11世紀代に置くことができるものとして、ＳＥ402、ＳＥ410、ＳＥ413、ＳＥ421、ＳＥ424、ＳＥ429、ＳＥ430がある。ついで瓦器椀の成立過程を示

す瓦器椀B・C・E類を中心としたSE403・SE404・SE405・SE409、瓦器椀G・F類に属するSE406・SE407・SE411・SE416・SE417・SE418・SE419・SE420・SE422・SE423・SE425・SE426・SE428がある。さらに瓦器椀H・I類におよぶものとしてSE401・SE408・SE412・SE414・SE415がある。このように時期別にみた井戸を、井筒種類との関係で対比していくと、種類毎に使用年代が異っていることがわかる。[注8] つまり古くからみられた曲物井戸は概ね第Ⅳ期に入ると姿を消すようで、これに対して新たに第Ⅲ期に現われた羽釜井戸は第Ⅳ期にかけて盛行するようである。



第50図　SK407、SK408、SK424実測図

土　壙

SK402

平面形は径0.6m前後の不整円形で深さは5㎝に満たない浅い土壙である。第6層上面の耕作用溝（SD401〜423）等とともに検出された。中央より馬歯が並んで出土している（図版12）。

SK404

SE403に切られた土壙。平面形は径1.5mの不整円形で深さは検出面より0.2mを測る。埋土は暗褐灰色土層の単一層で瓦器椀141が出土した（第52図）。141の見込みの篦磨きは細かい斜格子状に平行状が加えられて内面はかなり密に施されているが、体部外面の篦磨きは粗雑化している瓦器椀D類である。

SK405

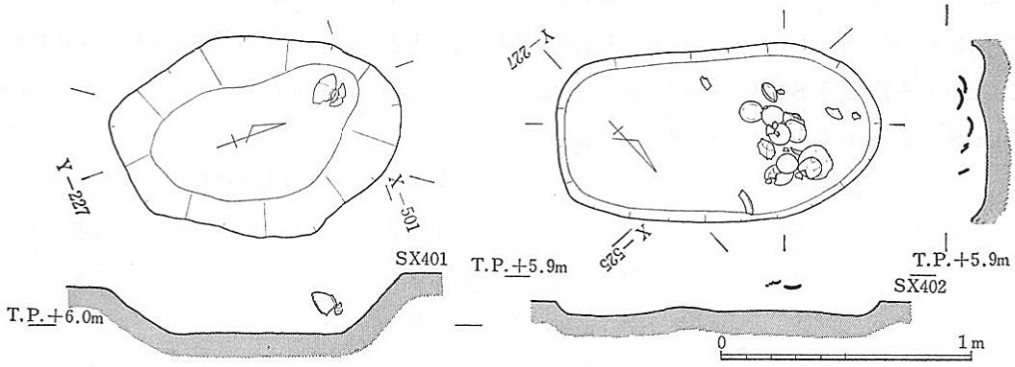
SE406を切った土壙。平面形は1.7×0.6mの不整楕円形で、深さは検出面より0.3mを測る。埋土は暗灰褐色土層の単一層で遺物は出土しなかった。

SK407（第50図）

平面形は径0.5mの不整円形で、深さは検出面より0.25mを測る。上部はSD424に削られている。遺物は出土しなかった。

SK408（第50図、図版12）

平面形は径約1mの不整円形で、深さは検出面より0.2mを測る。上部はSD424によってかなり削平されている。底部中央やや南寄りに瓦器112（第52図、図版30）が一点内側を表にして正立した状態で出土した。112は瓦器椀B類で、



第51図　ＳＸ401、ＳＸ402実測図

厚手で口縁部が屈曲し、外踏ん張りの径の大きな高台がつく。外面は篦削り後、四分割の密な篦磨きを全面に重ねている。内面全体にわたって炭化物が付着しており篦磨きの形状等は不明。外面は淡橙色を呈する。

ＳＫ415

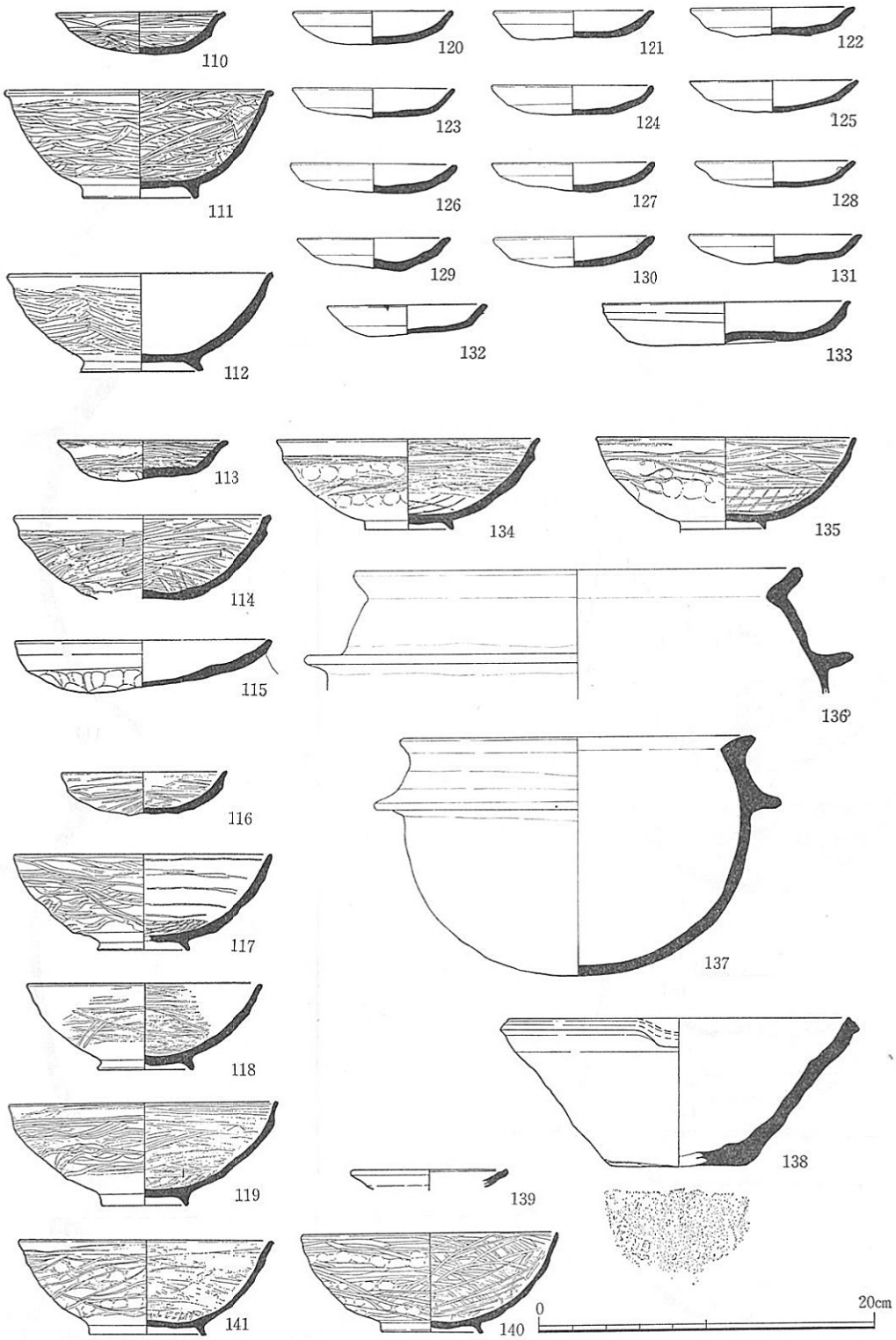
平面形は5.0m×1.5mの細長い楕円形で、深さは検出面より0.2〜0.3mを測る。埋土は暗褐灰色土（炭混）層の単一層で、埋土中より瓦器椀134・135、土師器羽釜136・137、須恵器鉢138等が出土した（第52図、図版32)。134・135は瓦器椀Ｆ類で、粗い斜格子状の篦磨きが見込みから側面にかけてひろく施される。土師器羽釜136は口縁部が「く」の字形に外反し、幅の狭い鍔をめぐらせたものである。小型の土師器羽釜137は球形の体部に短く外反する口縁部をもつもので明赤褐色を呈し、胎土に砂礫を多く含む。口縁部横撫で、内外面撫でによって調整されている。鉢138は東播系の須恵器で片口鉢の小型品である。

ＳＫ418（図版16）

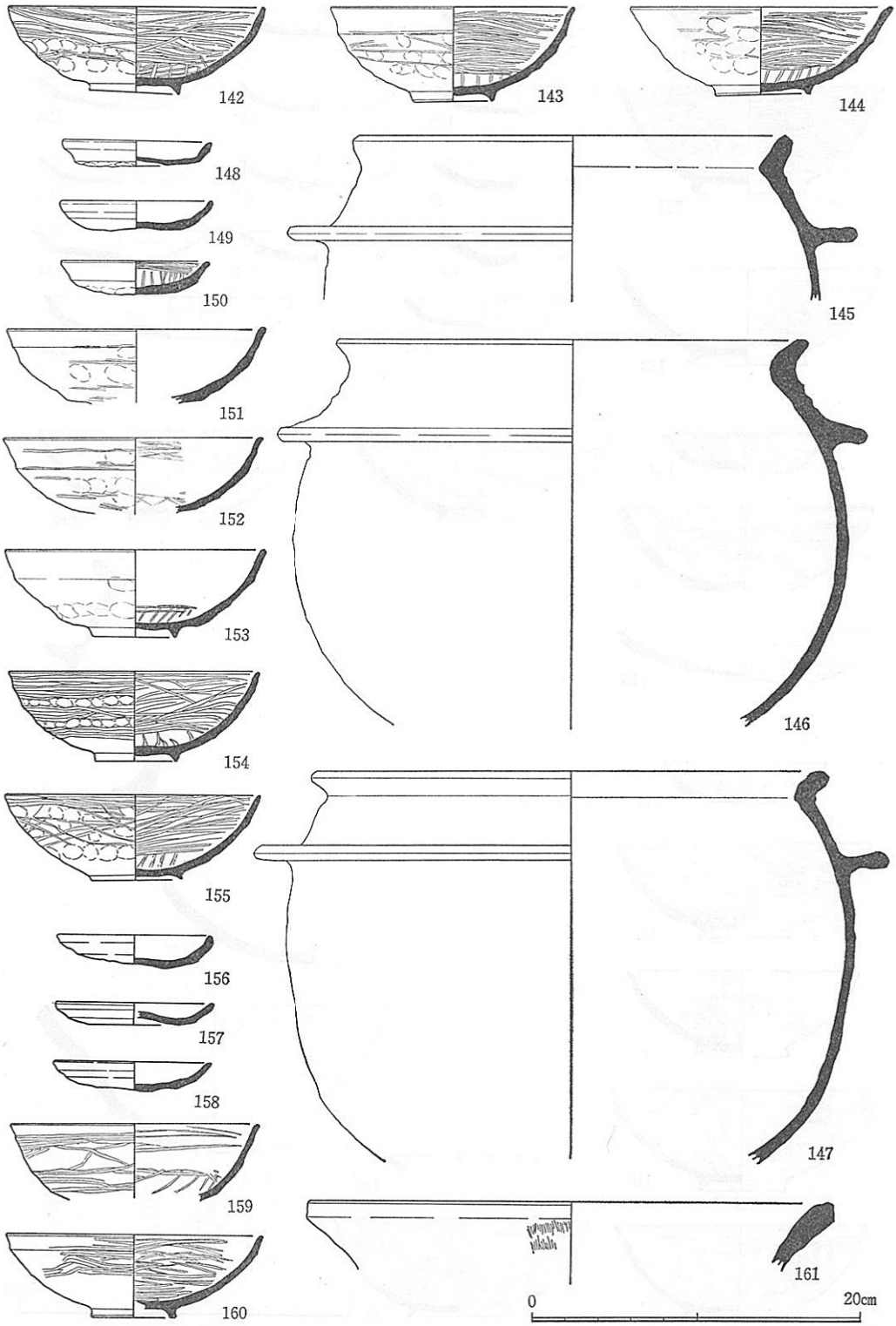
Ａトレンチ北寄りで検出した。ＳＥ409に切られた土壙で掘形平面形は1.0m×0.8mの楕円に近い隅丸方形で深さは検出面より約0.2mを測る。埋土は褐灰色土層の単一層で、埋土中より土師器羽釜、瓦器の破片が出土した。

ＳＫ424（第50図）

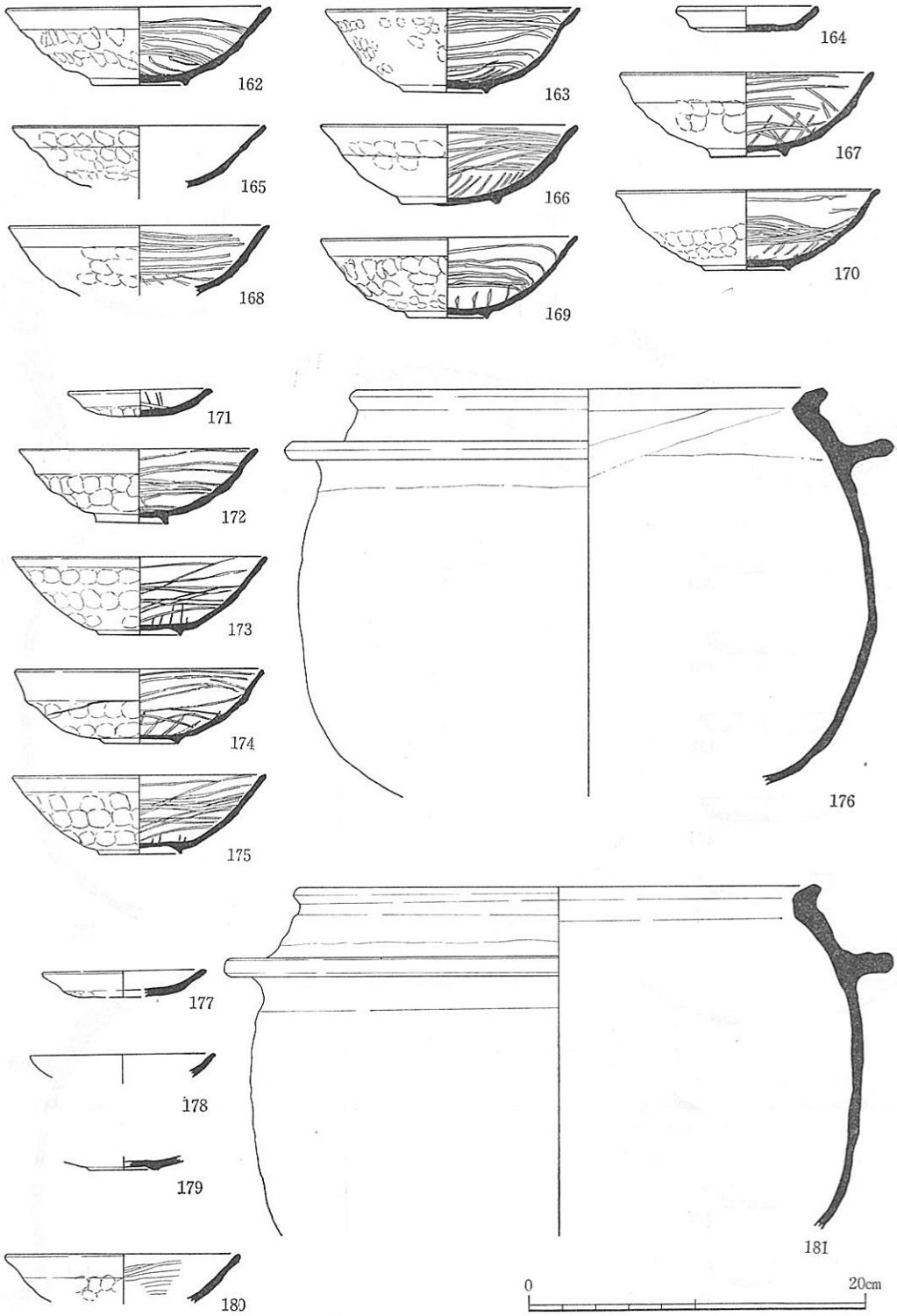
２Ａトレンチで検出した。東側は調査区外に及び全容は確認できないが上部は近世土壙によって削られ平面形は0.9m以上×0.8mの楕円形になるものと推定される。深さは検出面より１mを測る。最下層から瓦器椀143・144、土師器羽釜145が出土した（第53図、図版33)。143・144は高台径に大きく差がみられるが、見込みには丁寧な平行線状の篦磨きが施され、側面はほとんど空白部のみられない篦磨きが巡る。外面は粗雑な篦磨きで底部まで及ばない瓦器椀Ｇ類である。145は口縁部が「く」の字状に外反するもので茶褐色を呈し、胎土に砂粒を含む。



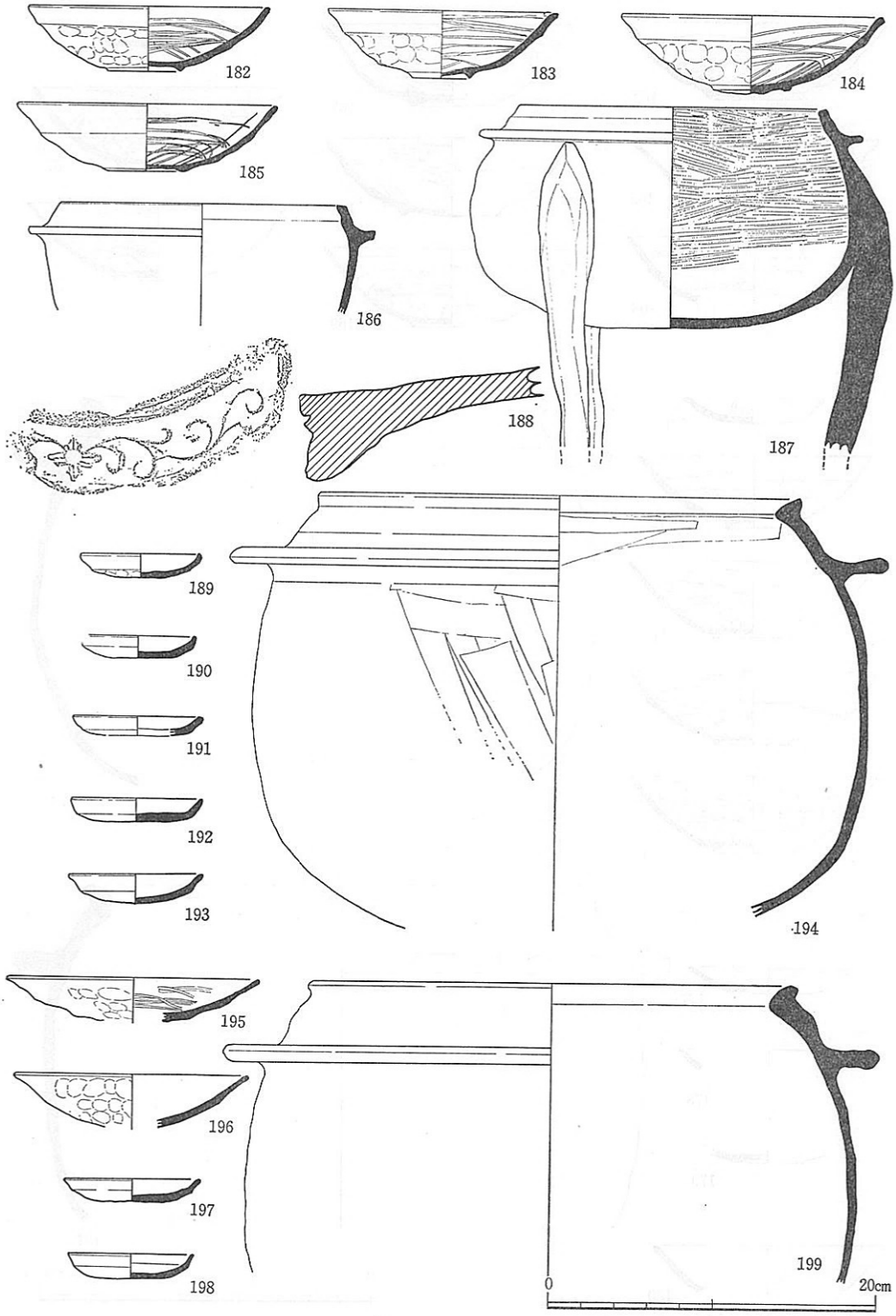
第52図　ＳＸ401（110、111）、ＳＫ408（112）、ＳＥ404（113～115）、ＳＥ420（116～119）、ＳＸ402（120～133）、ＳＫ415（134～138）、ＳＥ405（139、140）、ＳＫ404（141）



第53図　ＳＫ403（142）、ＳＫ424（143～145）、ＳＥ417（148～154）、
ＳＥ416（156～161）、ＳＥ426（146）、ＳＥ406（147、155）



第54図　ＳＥ415（162～170）、ＳＥ408（171～176）、ＳＥ401（177～181）



第55図　ＳＥ414（182～194）、ＳＥ412（195～199）

土壙墓

ＳＸ401（第51図、図版16）

Ａトレンチ北半部北寄りで検出した。掘形平面形は上面で1.2×0.8m、底面で0.9×0.5mの不整楕円形で、深さは検出面より 0.2mを測る。北隅で瓦器椀 111、瓦器小皿110が伏せた状態で出土した（第52図、図版30）。111は瓦器椀Ａ類で、それに伴った110は口径10.0㎝、器高2.5㎝の丸味をもった底部から１段撫でされた口縁部に続く杯に類似したもので、口縁端部は明瞭な凹みをもって外上方につまみ出される。内面底部は乱方向の直線状の篦磨きで、側面は横方向に磨きを重ねて施される。外面底部には５～６方向に分割して篦磨きが全面にわたって重ねて施されている。

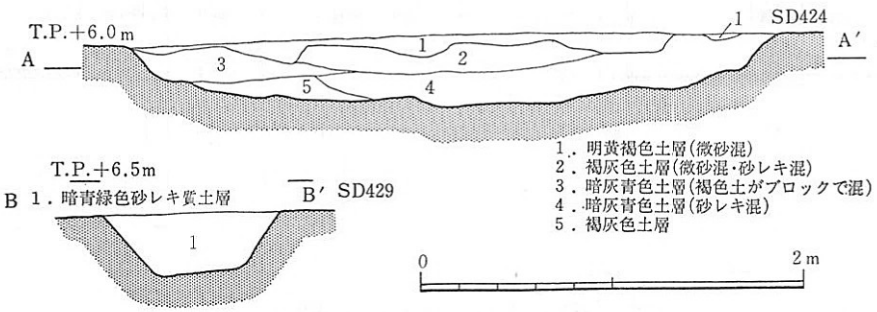
ＳＸ402（第51図、図版16）

Ａトレンチ北半部中央寄りで検出した。掘形平面形は上面で1.4m×0.7m、底面で1.3m×0.6mの楕円に近い隅丸長方形で深さは検出面より５㎝を測る。上部はかなり削平されたようである。底面は平坦でなく凹凸が見られる。遺物は北西寄りに集中しており底面より浮いた状態で土師器小皿13枚、大皿１枚が出土している。土師器小皿 120～132（第52図、図版31）は口径9.5～10㎝、器高1.5～2.0㎝を測り、口縁部１段撫でで弱く外反し端部を丸くおさめるもので、つくりは比較的雑で全体的に歪みが激しい。淡黄白色を呈し、胎土にはクサリ礫、金雲母を含む。土師器大皿133（第52図、図版31）は口径 15㎝、器高 2.5㎝ で口縁部は 二段に横撫でされ弱く外反する。胎土・色調は先述した土師器小皿に類似している。

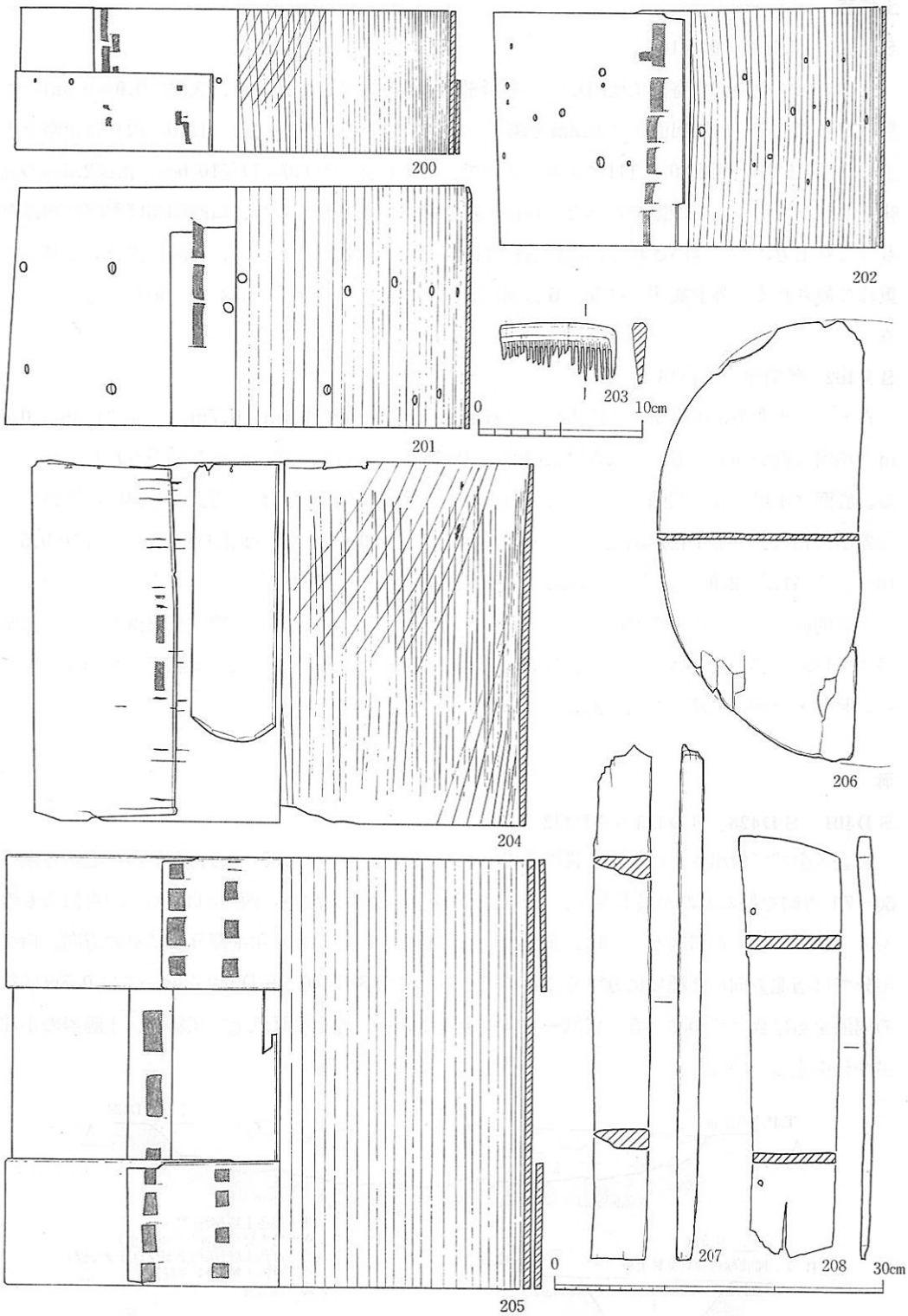
溝

ＳＤ401～ＳＤ423、ＳＤ425～ＳＤ442

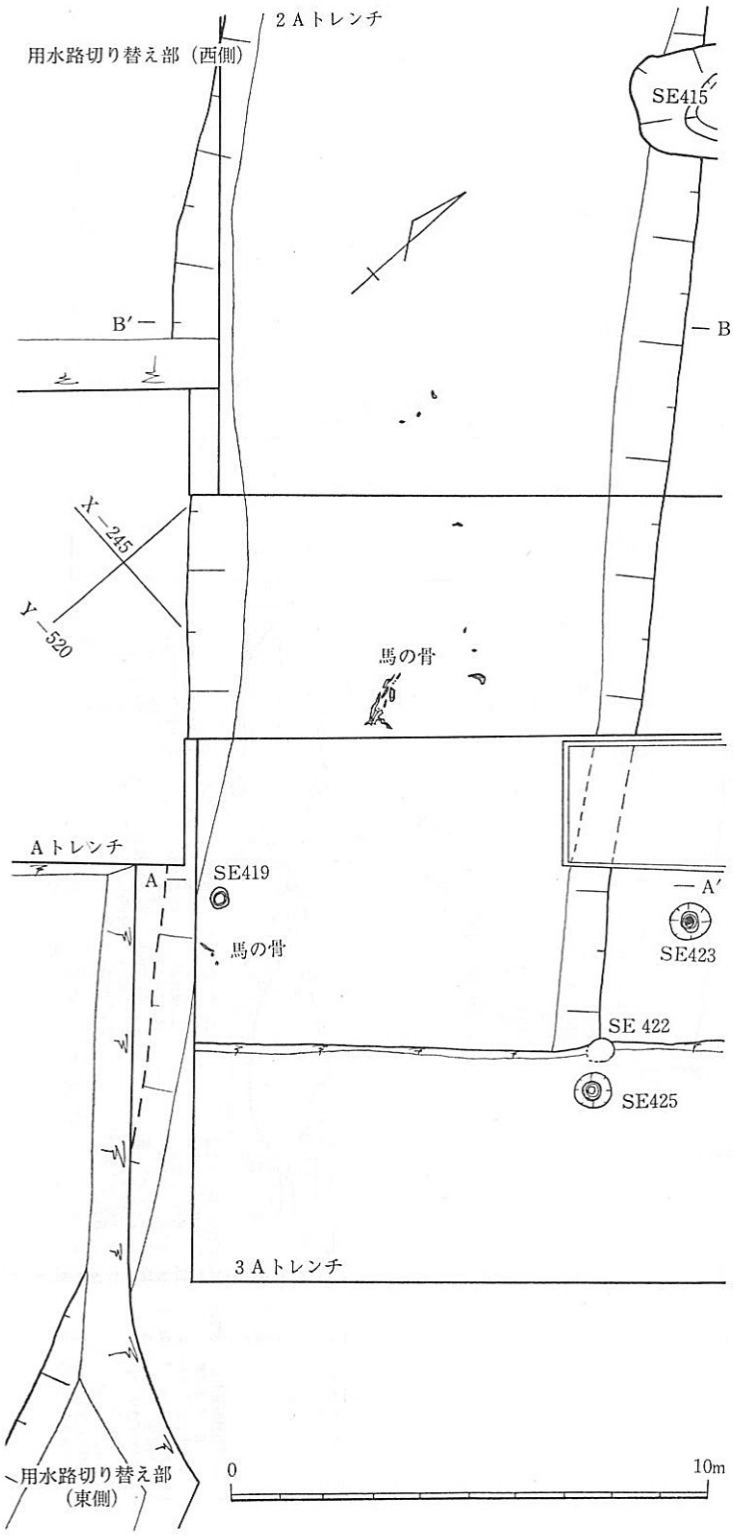
調査区全域で検出された多数の耕作溝で幅 0.1～1.4m、深さ 0.05～0.1mを測る。北から東へ60～70°方向を振るものが最も多く、それらに直交するように北から西へ約30°の方向を振るものもみられる。全体の傾向としては、多少のずれはあるものの調査区北半部分では東西方向、南半部分では南北方向の２種類に分けることができる。またＳＤ440、ＳＤ442を除いては 0.5m前後の間隔をあけ数本ずつまとまって同一方向に走っている。埋土は灰色土で瓦器椀、土師器の小片が少量出土している。



第56図　ＳＤ424、ＳＤ429断面図



第57図　ＳＥ401（200）
ＳＥ403（201、204）、ＳＥ404（202、206）、ＳＥ408（203）、
ＳＥ410（207、208）、ＳＥ411（205）出土木製品



第58図　ＳＤ445実測図

ＳＤ424

Ａトレンチ北半部分の中央付近で検出された。幅約3.9m、深さ約0.4mの東西溝で、直線的に走り、方位は北から東へ約70°である。断面はゆるやかにカーブし底面はほぼ平坦でＳＥ414・ＳＫ408・ＳＫ407などを切っている。溝内の埋土の堆積状況は第56図の通りである。溝内埋土より、瓦器、土師器等が出土しているが、その大半は摩滅した小片である。

ＳＤ443

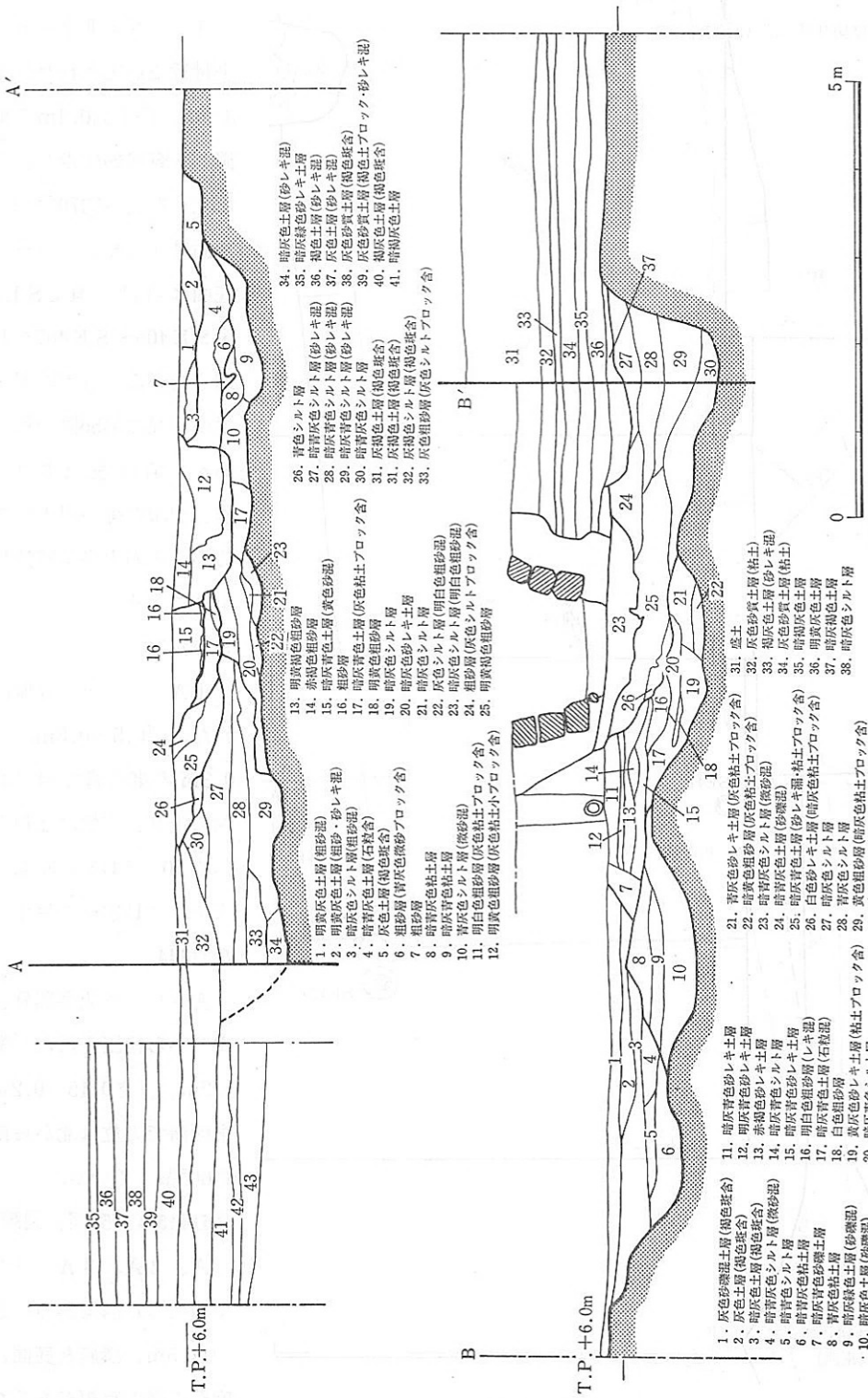
１Ａトレンチより検出された。幅0.5〜0.8m深さ約0.3mの東西溝でほぼ直線的に走り、方位は北から東へ約70°である。断面はゆるやかなＵ字状を呈する。

ＳＤ444

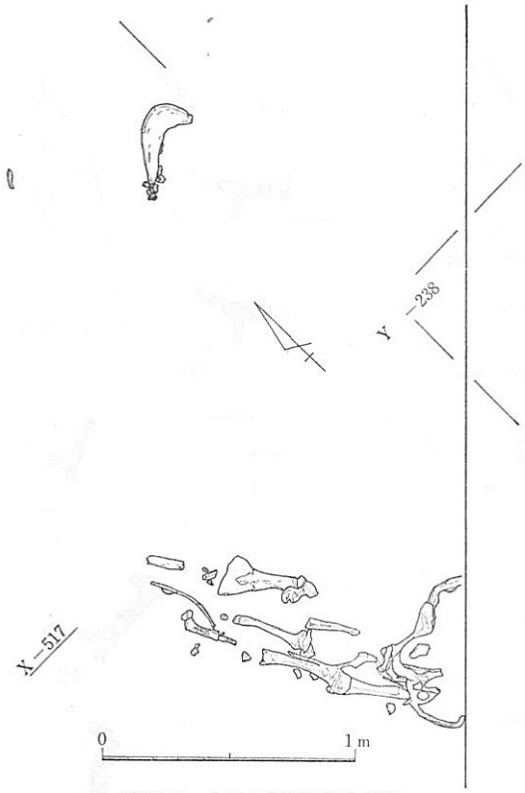
Ａトレンチ北半部分、北寄りから検出された。幅約1.2m、深さ0.15〜0.2mの東西溝で方位は北から南へ約60°振っている。

ＳＤ445（第58図、図版17）

Ａ、２Ａ、３Ａトレンチで検出した溝である。最大幅11.5m、溝肩と底面は幾度かの溝の重複があるために落ち込み等がみられ複雑



第59図　ＳＤ445断面図

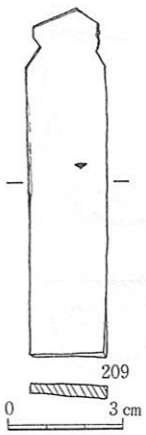


第60図　ＳＤ445馬骨出土状況

な状態を示しており、不用になった時の埋め立てと再掘削が繰り返されていたことが窺われる。深さは一定せず最大が1.3m、最も浅い部分で0.5m前後になっている。調査区範囲内での検出長東西約30mに限れば溝の位置は平安時代の河川（ＮＲ302）に重複してちょうど北岸から掘り込まれており、また南寄りでは現代の石積、コンクリート護岸の用水路とほぼ重なっている。

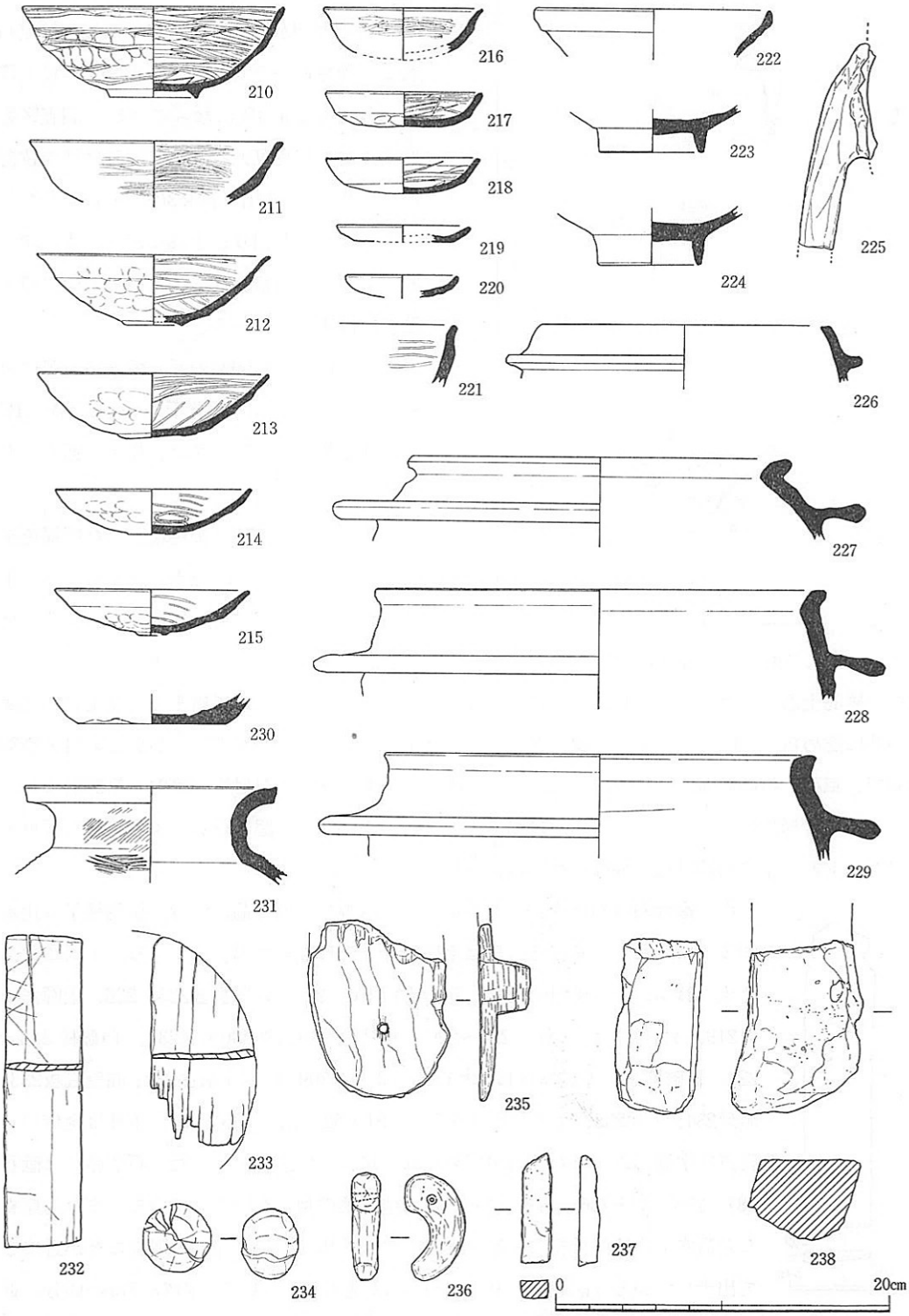
溝内の層序は第59図の通りで堆積状況は複雑で観察地点によって若干異なるが、Ｂ−Ｂ′の断面を整理していけば、以下の通りである。

第１層群としては、褐色斑を含む灰褐色をおびた最上層で人工的埋土と思われる。第１〜第３層、第37層。第２層群としては溝中央の上層の盛土状のもので、土質は一定していない礫混土層でかなり硬い第11〜第13層。第３層群としては溝中央から南肩まで、最上層と底面の間に認められる暗灰青色系の砂礫、粘土ブロックを含み部分的に砂層の間層がある第14〜第30層で、粗砂、砂礫の著しい第14〜第22層と暗青灰色の粘土ブロックが目立つ第24〜第30層にわかれる。第４層群は溝中央から北肩にかけて第１層群から底面の間に認められる土層で、暗灰色系のシルトと粘土の自然堆積で砂礫の含む割合は極端に少ない。



第61図
ＳＤ445出土木簡

出土遺物の中心は土器であるが、瓦、木製品、石製品、獣骨、植物種子も比較的多く含まれており、それらは南岸寄りから目立って出土している。土器には黒色土器Ｂ類、瓦器椀210〜215、瓦器小皿216〜218、瓦器羽釜225、226、土師器小皿219、220、土師器羽釜227〜229、東播系須恵器鉢230・甕231、白磁椀222〜224、青磁椀Ｊ、等がみられ、木製品には木札209、板状木製品232、曲物底板233、木球234、下駄235、火付木Ｐがある（第61・62図、図版36・38）。木札は全体で一行三文字墨書きされた痕跡が認められるが、筆は追えなかった。[注9] 石製品には砥石237、238、勾玉236がある（第62図）。他に桃の種子が出土している。また南岸寄りの溝底では豊穣儀礼の一端を表すものか、馬の下顎、歯、大腿骨などが近接して出土している（図版38−９）。それらは流されてはいるものの ほぼ一頭分に近いと推定される老齢馬[注10]である。このように多彩な出土遺物からみて、この溝は両岸に営なまれた建物に伴う廃棄物を投棄した周辺地域のゴミ捨て場でもあり、日



第62図　ＳＤ445出土遺物

常生活に深く係りをもったものと考えることができる。それらの年代幅については上限は、若干ではあるが黒色土器B類椀がみられることから11世紀代に溯ることが考えられる。また廃棄埋没年代については、214、215にみられる瓦器椀J類がまとまって出土していることから14世代、遅くとも15世紀代の時期に求めることができよう。特にここでは瓦器椀F類からI類の使用時期の遺物が、全体の出土遺物の中で占める割合が多く、この時期（第Ⅲ・Ⅳ期）に、周辺での生活領域の拡大が行なわれたことを裏付けたものであろう。

ＳＤ446

Ａトレンチ北半部分、ＳＤ424の約3.5m南に平行して検出された。幅0.4～0.7m、深さ約0.3mの東西溝でほぼ直線的に走り、方位は北から東へ約70°振る。断面は東側がゆるやかなU字状を西ではほぼ逆台形を呈する。また溝の東端の南肩は、ＳＥ412によって切られている。

ＳＤ447

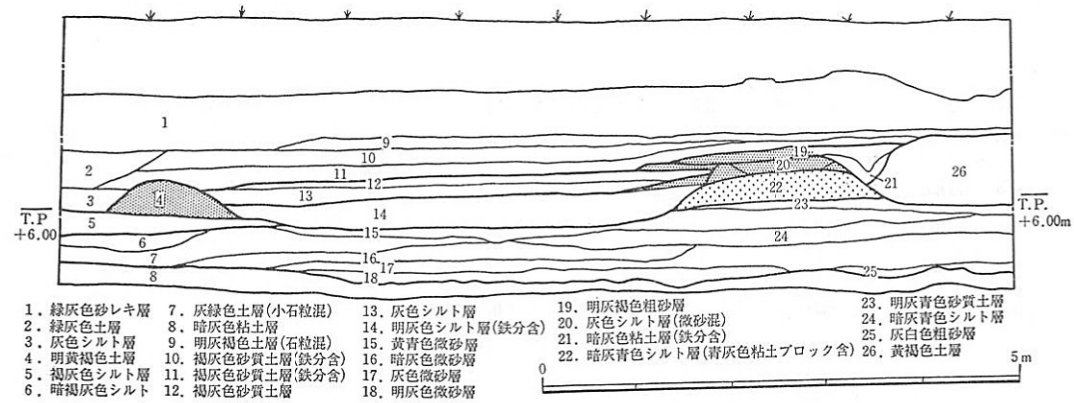
５Ａトレンチより検出された。幅約0.5m、深さ0.2～0.3mの南北溝で方位は北から西へ約30°である。溝の大半は工業用水管によって欠失しており、その全貌は明らかでない。この溝の南北延長線上にＳＥ426、ＳＥ428を確認することができた。しかしＳＥ426、ＳＥ428ともに上部が欠損しており溝との前後関係は明らかではない。

ＳＤ448

５Ａトレンチより検出された。幅約0.7m、深さ約0.3mの南北溝で方位は北から西へ約20°である。ＳＤ447と同様に工業水管によって欠失している。ＳＤ446と直交し、一本の溝であったと思われるが、鋼矢板によって攪乱されており明らかではない。

畦畔

人間、牛の足跡、鋤跡は、調査地区全域にわたって検出されたが、ステップ状遺構が位置する南半部ではその下に人間、牛の足跡、鋤跡が多く確認できた。それらの中で足跡等には無秩序に位置するものもみられるが、鋤跡については、方向性が認められ、ほぼ北より西へ20°前後を振

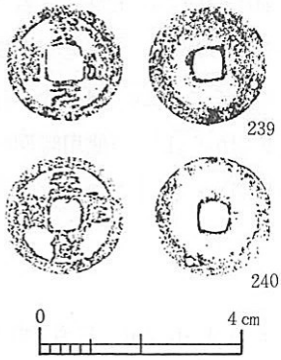


第63図　ＳＡ401、ＳＡ402、ＳＡ403断面図（Ａトレンチ東壁）

って延びていく。

ＳＡ401（第63図、図版19）

Ａトレンチ中央部北寄りに位置する。下底幅1.5～1.0m、上幅0.5mで、高さ0.35m、上部は丸味をもっている。北端部は水口となっていたためか終わっており、北へのびて、それに続く畦畔は調査区外で不明である。褐灰色シルト上面に盛土され築かれており、盛土は明黄褐色の一層である。畦畔の方位はＮ―30°―Ｗで、これに接続する畦畔は検出できなかった。



第64図　水田面出土宋銭

ＳＡ402（第63図、図版19）

ＳＡ401より約５ｍ南に位置する。下底幅2.0m、上幅1.0m、高さ0.3mで、上部分は平坦である。明灰青色砂質土層上面に築かれており、盛土は暗灰青色シルト（青灰色粘土ブロック含）で上面は鉄分を含む灰色シルトである。層位的には、ＳＡ401よりも新しいが、畦畔の方位は、Ｎ―30°―Ｗでほぼ同じ位置で終わっている。規模からみて大畦畔に相当するものであろうがこれにつながっていく小畦畔は検出されず、水田域の拡がりは明らかにできなかった。

ＳＡ403

ＳＡ402と重複して位置する。ステップ状遺構の東側で検出された。灰色シルトを盛土し、拡張したもので、この畦のベース面（明灰色シルト層）で、人間、牛の足跡が多くみられた。Ｘ―187、Ｙ―306付近で宋銭239（第64図）が、Ｘ―585、Ｙ―304付近で宋銭240（第64図）が出土した。２点ともに腐食、錆化しており、文字判読はできなかった。

以上の水田遺構は相互に重複しており、ＳＡ402→ＳＡ401→ステップ状遺構→ＳＡ403の順序変遷を追うことができた。畦畔、鋤跡から方向性をみると、北から東への方位の振れ幅がステップ状遺構が造成される段階で、小さくなり、Ｎ―30°―Ｗから、Ｎ―20°―Ｗに変化していることが窺われる。

注１　南　博史　「絵巻物による田物の一考察」（『平安博物館研究紀要　第７輯』1982）

注２　付章Ⅰ、Ⅱ参照。

注３　前掲注２

注４　前掲注１

注５　前掲注１

注６　掘立柱建物群の時期（第Ⅰ～Ⅳ期）については第Ⅲ章第２節参照。

注７　このような古井戸埋没に伴う竹筒挿入の儀礼については、水野正好氏の研究があり、そこでは例をあげて詳細にふれられている。

水野正好　「竹筒をのこした一井とその呪術」（『草戸千軒』№36　1976年）、「三宝荒神符と天中の呪

句」(『草戸千軒』No.47　1977年)、「金貴大徳の呪句と埋井の呪儀」(『草戸千軒』No.58　1978年)

ＳＥ415では節を抜いた長さ1.5m、径9cmの長い竹と、長さ0.6m、径6cmの短い竹計2本がみられ、それらに恰も対応するように長短2本の杭が打ち込まれていた。

また、杭が打ち込まれた例としては、鎌倉時代の井戸で大園遺跡ＳＥ906がある（大阪府教育委員会「大園遺跡発掘調査概要、Ⅲ」1983.3)。

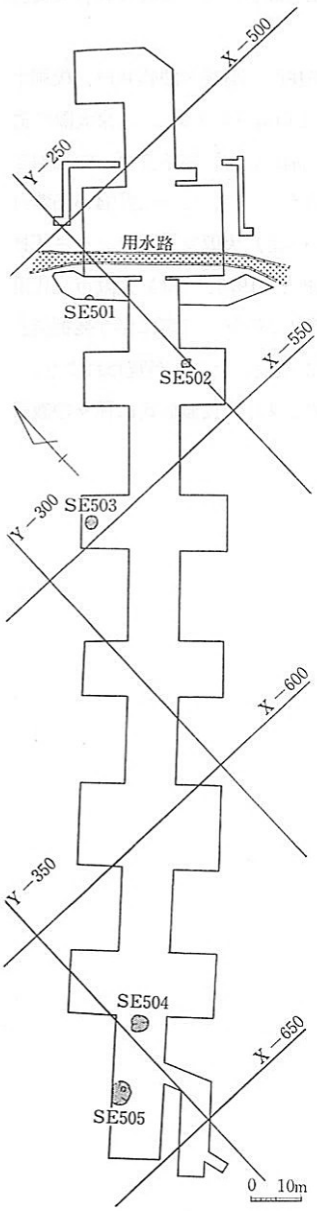
注8　当遺跡より北方約2Kmに位置した若江遺跡では、「13世紀代には羽釜井戸、羽釜十曲物井戸、板側十曲物井戸、桶側十曲物井戸と構築方法にさまざまなものがみられる。」と指摘されている。(東大阪市遺跡保護調査会「若江遺跡発掘調査報告書Ⅰ」1982)。当遺跡においても曲物井戸、羽釜井戸、曲物羽釜井戸、特殊井戸（板側十曲物井戸）等多様な構造をもったものが検出された。また、南方約4.5Km離れた長原遺跡においても同じような状況が窺われる。(大阪府教育委員会・(財）大阪文化財センター『長原』―近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書1978、（財）大阪市文化財協会『大阪市平野区長原遺跡発掘調査報告Ⅱ』―大阪市高速電気軌道第2号線延長工事に伴う発掘調査報告書―1982)。13世紀代に中河内地域においてこのような各種の井戸が普及したことが窺われよう。

注9　木簡解読については平城宮跡発掘調査部史料調査室の所指導と御援助る受け、佐藤信氏に種々の教示をえた。

注10　樽野博幸氏の教示をえた。

第7節　近世・近世以降

検出された遺構は主に水田遺構である。耕作土が厚く堆積した部分もみられ、主要地方道大阪中央環状線が開通する最近まで長く耕地であったことが窺い知れる。耕作に伴う遺構として井戸、野壺、溝等がある。



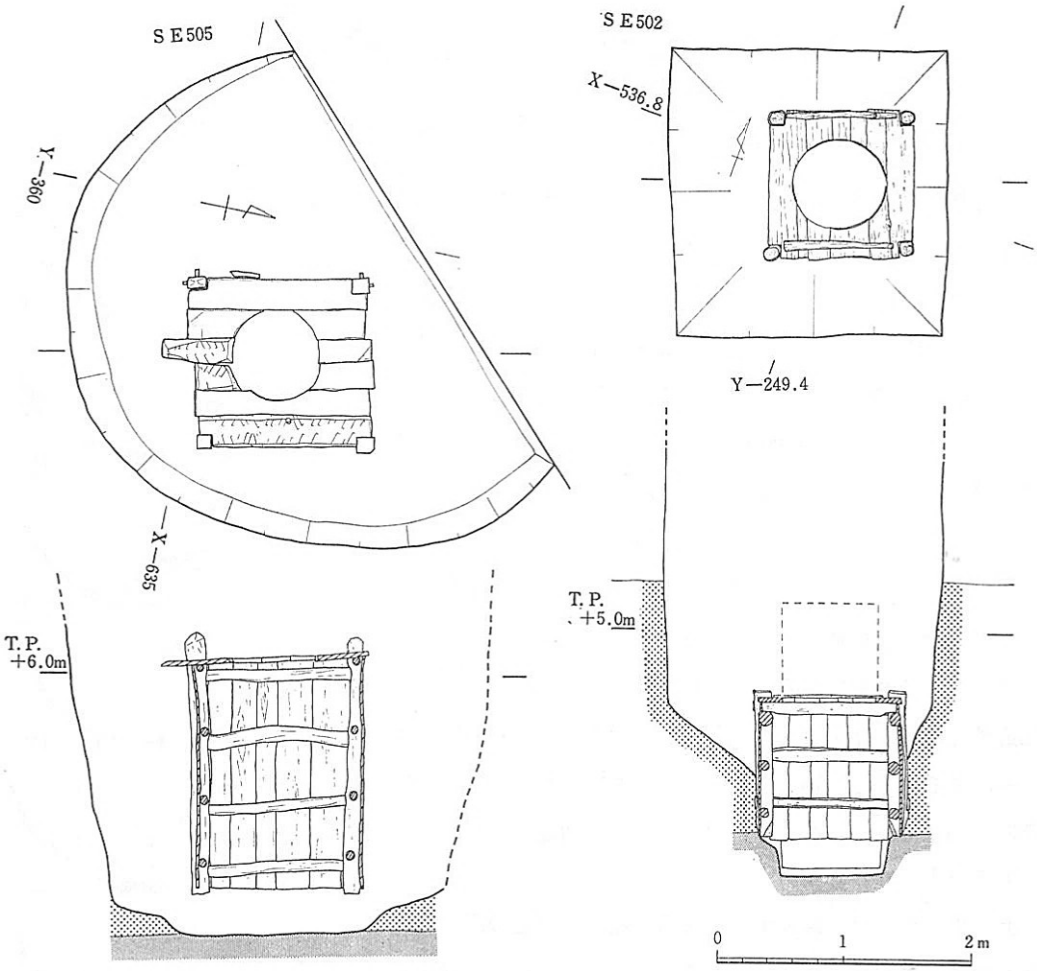
第65図　近世～近代井戸配置図
S＝1/1500

灌漑用井戸が5基検出された。ＳＥ501、ＳＥ502は埋没した奈良～平安時代の河川（ＮＲ302）と位置的には一致し、他のＳＥ503は中央付近、ＳＥ504、ＳＥ505は南端部に存在し、それらは弥生時代中期末の水田面上に堆積した砂層まで深く掘り抜かれている。

ＳＥ501～ＳＥ505（第66図）

ＳＥ501、ＳＥ503、ＳＥ504は井戸側は抜き取られ、最上段の一部をなしていたと思われる平瓦が掘形内に転落しており、掘形のみが確認された。ＳＥ502、ＳＥ505は比較的残存状態が良好である。ＳＥ502は上段が抜き取られているが、桶を締めていた箍のみが遺存していた。中段は一辺1.2m、高さ1.2mの立方体で、太目の梁をもつ木組の側に側板を縦に当てており、下段にはわずかであるが桶が残存していた。井筒内からは枠組として最上段に積まれていたであろう瓦が出土しており、中には凸面にすべり止めのために「く」の字の刻み目を入れた瓦もみられた。ＳＥ505は中段のみ遺存していた。ＳＥ502に比べやや高く、一辺1.5m、高さ2.0mの直方体でＳＥ502と同じように太目の梁をもつ木組の側に側板を当てたものである。埋土上層より伊万里焼染付椀、瓦が出土した。

前節では中世溝ＳＤ445が、主要地方道大阪中央環状線をよぎって走る現代の石積、コンクリートで護岸された溝とほぼ同位置を保っていることを指摘した。近世にもその付近を用水路がひきつがれて流れていたようで、伊万里焼染付椀や、瓦類などが出土している。また調査区全域ではないが、数層に堆積した水田耕作土がみられる部分もある。そこでは洪水による河川氾濫で被ったものであろう灰色土の耕土上にうすく粗砂の堆積が認められ、明瞭ではないが人間の足跡、鋤跡等が検出されている。調査区中央部Ｘ―580、Ｙ―295付近において寛永通宝が2枚出土した。



第66図　S E 502、S E 505実測図

これらは遺構にともなうものではなく床土あるいは床土下の褐灰色系砂質土層からの出土である。

第Ⅲ章　ま　と　め

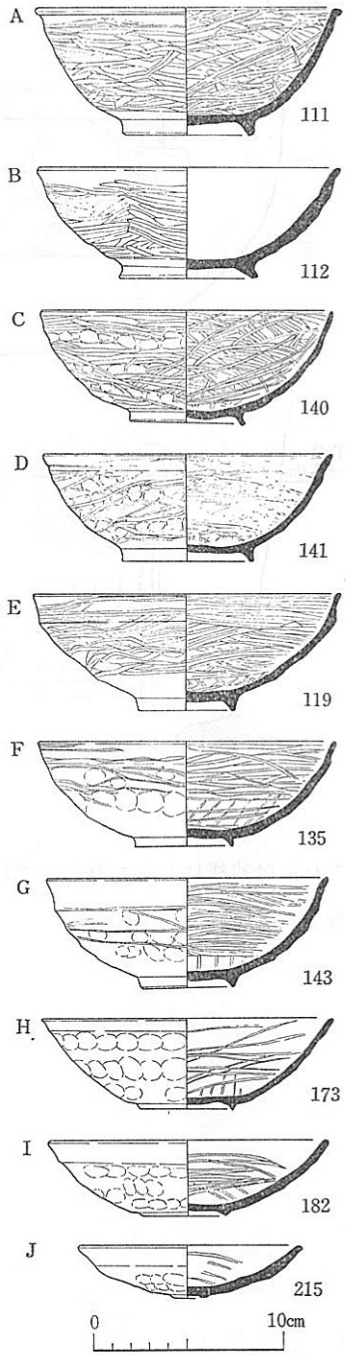
第1節　佐堂遺跡出土瓦器椀についての若干の整理

遺構及び包含層から多量の瓦器椀が出土した。それらは僅か数点の小破片を除けば現在和泉、河内地域で通常みられる「和泉型」[注1]の範疇にはいるものである。「和泉型」の特徴をもつ瓦器椀については、形態、器面調整等を中心にして変遷が述べられ、実年代を知り得る資料、もしくは「大和型」、「楠葉型」等の他地域の資料との共伴関係を中心にして年代が位置づけられてきた。本遺跡においては、残念ながら紀年銘をもった遺物や他地域の瓦器椀との明確な共伴関係は認められなかった。従って出土瓦器椀については今回検出された多数の中世遺構を整理していく上での時期決定の物差にするためにも、これまで進められてきた長原遺跡[注2]、挟山遺跡[注3]、若江遺跡[注4]等の編年作業をもとに各遺構出土土器の相互関係を比較検討する中でその特徴を明らかにしていきたい。なお整理期間の都合もあり、ここでは取り敢えず一括遺物と判断されるものを中心に扱った。

瓦器椀の変遷は、現象的には法量の縮少、高台の形骸化、器面調整の簡略化に現われている。ここではそれらの変化を中心にして瓦器椀A～J類に分類した。以下、分類に従い個別に記述する（第67図）。

A類　口径16.2cm、器高6.7cmで深い椀形を呈する。口縁部は短く外反させ、丸くしており高台は開かずほぼ垂直に付けられている。篦磨き調整前に篦削りが加えられている。体部外面篦磨きに明確な分割性は認められないが、密に幾度も重ねている。見込みの篦磨きは不規則であるが密になされており、体部にかけて一体化した乱れた放射状の篦磨きが施されている。

B類　口径16.0cm、器高5.9cm。口径に比べ器高は低く杯形を呈する。高台は径の大きな外踏んばりのものである。A類と同様、篦磨き調整前に篦削りが加えられている。体部外面篦磨きは明瞭ではないものの4方向に分割し幾度も重ねたも



第67図　瓦器椀分類図

のである。内面全体には炭化物が付着して篦磨きの状態は明確にはできなかった。

C類　口径15.4㎝。器高5.8㎝。口縁部は外反せず丸味をもった椀形を呈する。器壁はA・B類に比べ薄く、高台は比較的細い断面台形状である。体部外面篦磨きは明瞭に5方向に分割して施されているが、体部外面には高台と同心円状に3～4段にわたって指腹部の圧痕がほぼ水平に走り、その凹んだ部分には篦磨きは及ばない。内面の篦磨きはA類よりも空白部が目立つものの比較的密になされており、見込みから体部にかけ一体化した乱れた放射状に施されている。

D類　口径15.3㎝、器高5.8㎝でやや外反する口縁部をもつ。高台は比較的細くC類に類似して断面台形状を呈する。体部外面篦磨きは明瞭に分割して施されず粗くなる。またC類と同じように体部外面には高台と同心円状に3段の指腹部の圧痕が水平方向に走り、その凹部分には篦磨きがなされていない。内面の篦磨きは明確に見込みと側面に分化し、見込みに細かく斜格子状とさらに一方向の篦磨きが加えられる。

E類　口径16.2㎝、器高6.2㎝で丸味をもった椀形を呈し、口縁部は立ち上がり気味に開く。高台は縮少する。体部外面篦磨きはほぼ全面に及ぶが、分割して施されない。内面の篦磨きは見込みと側面に分化しており、見込みに太目の粗い斜格子状に並行を加えた篦磨きがなされ側面は傾斜をもたない横方向の篦磨きが密に施される。

F類　口径15.8㎝、器高5.6㎝で、ゆるやかなカーブをもった椀形を呈する。体部外面篦磨きは粗くなり、体部下位までは及ばない。内面の篦磨きは側面に横方向の空白部があまりみられないもので、見込みに1㎝前後の間隔をもつ斜格子状の篦磨きがなされる。

G類　口径15.0㎝、器高5.8㎝で比較的深味をもち、口縁部の横撫でが顕著で外反する。高台は縮少し、断面三角形を呈する。体部外面の篦磨きは粗く、体部中位でとどまる。内面の篦磨きは側面に横方向の空白部のあまりみられないもので、見込みに0.5～1㎝の間隔をもつ平行線状の篦磨きがなされる。

H類　口径15.4㎝、器高4.8㎝で口径に比べ器高が低下する。高台は鋭さを失い断面が半円状にくずれた部分もみられる。体部外面に篦磨きは全く施されず、成形時の指押えの跡がほぼ全面にわたってみられる。内面の篦磨きは側面に空白部をもった粗い圏線状で、見込みに1～1.5㎝間隔をもつ平行線状の篦磨きが側面にまで拡がり、粗雑になされる。

I類　口径14.8㎝、器高4.0㎝。高台は扁平になり、底部より部分的に低いところもみられ高台としての機能を有さないものと思われる。体部に篦磨きは全く施されず、成形時の指押えの跡がほぼ全面にわたってみられる。内面には側面に数条の篦磨きが巡り、見込みに1.5㎝前後の間隔をもつ乱れた平行線状の篦磨きが側面にまで拡がり粗雑になされる。

J類　口径11.9㎝、器高2.85㎝で小型化し、高台をもつものの高さを失って底部が突出したもので全く機能を失っている。内面には粗い渦状の篦磨きが認められる。炭素の付着が悪く灰白色を呈する。

以上、A～J類にみられるように、法量の縮少、器形の変化は内外面の篦磨きの粗略化と相関

性をもって新旧の流れを示している。なかでも、見込みに施された篦磨きの形状は最も強く変化するようである。A・B類は見込みが体部内面の篦磨きと一体化したもので、見込みから体部にかけて放射状の篦磨きが密になされている。C類では内面篦磨きがA・B類と同じ様に施されるが、空白部がみられるようになる。またD類では、はじめて見込みの篦磨きと体部内面篦磨きが分化し、見込みに施される磨きの形状は格子状に平行状を密に加えたものとなり、文様化が始まるようである。そしてE類では粗い格子に平行、F類では格子、G～I類は平行、J類では失われて体部の粗い圏線状の篦磨きと一体化している。また、内面の篦磨きはA・B・C類では先述した通りであるが、D～G類の段階から比較的密な圏線状に変化し、H～J類では粗い数条の圏線となり、外面の篦磨きも失われている。また、法量はA類が群を抜いて大きく、B～G類にかけては口径15～16㎝、器高5.5～6㎝前後の範囲に収まるもので、一定しており、形態的に固定したようである。そして、H類を境にして縮小化の一途をたどっていく。特に高台については傾向としてA～D類が断面逆台形、E～G類が断面逆三角形、H～J類は扁平な粘土紐を貼り付けた程度になる。器壁は、外面に篦削りの認められるA・B類が他と比べて厚い。

次にこれまで進められてきた編年作業から、年代比定の根拠となすべき良好な資料をみていきたい。それらの大半を論述したものとして白石太一郎氏の研究が挙げられる。[注5] その中で年代をおさえることのできるものとして、(1)永暦二（1161）年を上限とする奈良県当麻寺曼荼羅堂創建時の埋納品（白石氏編年Ⅱ－2型式）。(2)治承四（1181）年の奈良県興福寺菩提院大御堂焼失資料（白石氏編年Ⅲ－3型式）。(3)寛元元年（1243）年の奈良県当麻寺曼荼羅堂仏壇製作時のもの（白石氏編年Ⅲ－1型式）があり、これらは大和における瓦器椀の編年基準資料として使用されている。そして白石氏編年を通じて「大和型」瓦器椀と「和泉型」瓦器椀の共伴例をとりあげ、また、紀年銘を有した遺物との伴出例を加えて先きに分類した本遺跡出土瓦器椀と対比し、その年代を推定すると、下記のとおりになる。

「大和型」、「和泉型」瓦器椀の共伴例として大阪府東大阪市神並遺跡土壙1[注6]がある。ここで出土した「大和型」瓦器椀は白石氏編年Ⅱ－3型式に比定できるが、この型式の中でも後出のもので、それらと共伴した「和泉型」瓦器椀はH類に相当するものと思われる。また、大阪府東大阪市若江遺跡井戸4[注7]では白石氏編年Ⅱ－2型式の「大和型」瓦器椀と共に若江遺跡で分類された瓦器椀d・f・g・h型式が出土しており、その中にはちょうど本遺跡瓦器椀E・F・G類に相当するものが含まれるようである。次に、直接年代比定はできないが、大阪府藤井寺市挾山遺跡3F—323—5区L7井戸において、「大和型」など他地域よりの搬入品と考えられている瓦器椀が挾山遺跡Ⅰ期（尾上編年Ⅰ－2期）[注8]の「和泉型」瓦器椀と共に出土している。この搬入品の瓦器椀は口縁部に沈線をめぐらし、外面は篦削りせず、内面見込みに連結輪状暗文が施されていることから白石氏編年Ⅱ－1に相当するものと推定されるものの、法量、器面調整等よりみて、この型式のなかでも遡ることが考えられる。そしてここでみられる「和泉型」瓦器椀は磨き調整前に篦削りが加えられたものでB類に類似したものである。また巨摩廃寺遺跡[注9]では白石氏編年第Ⅰ

段階に相当する「大和型」瓦器椀とともに、井戸18下層及び、井戸19でそれぞれB類に類似した瓦器椀が出土しており、井戸19では他に見込みに格子状及び密な平行線状の筐磨きを有したものもみられる。

続いて紀年銘を有する遺物を伴った「和泉型」瓦器椀の出土例をみていきたい。まず、承安二（1172）年、もしくは同四（1174）年と墨書された大阪府藤井寺市国府遺跡79年度A調査区池出土木簡と伴出した瓦器椀がある。[注10] この瓦器椀はF類に類似しており、[注11] 使用年代の一点を木簡の年代、つまり1170年代に比定することができよう。ついで、康和四（1102）年銘のある曲物を井筒として使用した大阪府藤井寺市津堂遺跡18トレンチSE01出土土器がある。[注12] 井戸枠内出土土器については曲物井筒墨書年号と比べ時期的に下降するが、井戸の掘削時期を示す掘形出土瓦器椀とは時期的に見合うようである。他に、本遺跡では対応した瓦器椀はみられなかったが、永楽通宝（初鋳1408年）と共伴して出土した大阪府藤井寺市挾山遺跡SD7781がある。[注13]

以上のことをまとめてみると次のとおりである。

瓦器椀H類は神並遺跡土壙Ⅰ出土例より白石編年Ⅱ－3型式でも後出したものと考えられる瓦器椀と併行関係にあることから13世紀前半頃に推定され、瓦器椀E・F・G類は若江遺跡井戸4でみる限り白石編年Ⅱ－2型式に平行したもので、12世紀中葉頃と考えられる。それは国府遺跡池1出土瓦器椀がF類に類似しており、その使用年代の一端を伴出した承安二年もしくは四年銘の木簡の年代（1172年もしくは1174年）に求められることから裏付けることができよう。体部内外面の筐磨きの状態からみてG類はF類に、F類はE類に比べてそれぞれやや後出したものといえるかも知れない。

瓦器椀B類は挾山遺跡3F—323—5区L7井戸、巨摩廃寺遺跡井戸18下層・井戸19でみられるように白石編年第Ⅰ段階からⅡ－1型式の中でも先行したものと併行するようで、津堂遺跡康和四（1102）年の紀年をもつ曲物井筒を有した井戸SE01掘形出土瓦器椀に類似しており、11世紀末～12世紀初頭の年代が考えられよう。以上、瓦器椀B・E・F・G・H各類の使用年代の一端を押えることができた。そして、ここではGとH類間に半世記に満たない時期差が推定されたが、両者間に位置する瓦器椀を想定しても、現状では、GとH類間には格差が認められるようである。続いて本遺跡出土例を中心に年代の空白を埋めると共に、はじめに出土瓦器椀A～G類が時期的流れの中でどの様な特徴を持って変遷していったのか検討を加えたい。

瓦器椀A類については、他と比べ法量において抜きん出ており、形態的にみてもかなり深味を持つ椀形を呈し、口縁部を丸く曲げ、端部をまるめるなど異質な点が感じられる。恐らく本遺跡出土瓦器椀の中で、年代的に最も溯るものと推定されよう。A類はSX401出土例のみで、これに属する瓦器椀111は瓦器小皿110を伴って出土した（第52図）。110は形態的にみるとちょうど長原遺跡SK203、SK022出土の土師器小形杯とされたものと類似しており、底部は丸味をもち、口縁部はつまみ出され明瞭な沈線が施されている。また、ここでは黒色土器との共伴関係はみられなかったが、瓦器椀A類は羽曳野市西琳寺遺跡井戸出土瓦器椀や、[注14] 長原遺跡SK022出土瓦器[注15]

椀の中に類似したものがみられる。瓦器椀B類についてはＳＫ408単独出土瓦器椀（第52図―112）の他、ＳＥ404ではやや器高が低くなるものの、B類瓦器椀114が瓦器小皿113、土師器大皿115を伴って曲物井筒内から一括出土している。類例を他に求めれば先述した挾山遺跡Ｌ７井戸、巨摩廃寺遺跡井戸18・19・20[注16]出土例に加えて八尾市木ノ本遺跡第６調査区ＳＥ―３出土瓦器椀[注17]がある。巨摩廃寺遺跡井戸19出土瓦器椀では見込みの篦磨きの形状に、乱方向、密な平行線状、格子状のものなど各種多様なあり方がみられる。一方、瓦器小皿113に類似したものが巨摩廃寺遺跡井戸20にみられる。これらの瓦器に伴って土師器小皿では口縁部が「て」の字状に屈曲したものや、その折り返しが退化しかけたもの、また、土師器大皿等の器種が各遺跡に共通して認められる。次にC類については、ＳＥ405でこれに属する瓦器椀140と共に土師器小皿139が出土している（第52図）。139は口縁部折り返しが無くなりつつあるもので、先述したB類に伴った土師器小皿に似たものである。またＳＥ420では、ＳＥ405出土瓦器椀140に比べて法量が縮少し、外面篦磨きもやや粗くなるがC類118、E類119、外面篦磨きが密であるがF類117が曲物井筒内から出土している（第52図）。

このような異なったタイプの瓦器椀の共存関係については、既に勝田邦夫氏によって、「白石氏のⅡ―２型式に若江遺跡のｃ～ｈの６型式が入ることになり、この間の変化が特に早かったのではないかと思われる。」という指摘があり、また若江遺跡、長原遺跡、挾山遺跡出土例より、「ｃ～ｈ型式が共存していて、これらが短期間に徐々に変化したと考えるよりもある程度並存しながら推移したと考える方が良いと思われる。[注18]」と説明されている。若江遺跡ｃ～ｈ型式はちょうど瓦器椀E～G類に対応したものと考えられるが、本遺跡ＳＥ420では瓦器椀E・F類の他にC類が共伴して出土している。また長原遺跡ＳＤ334第２ａ層[注19]においてもC・D・E類に類似した瓦器椀の共存がみられるようであり、さらに巨摩廃寺遺跡井戸19[注20]では見込みに乱方向、格子状、平行線状と様々な篦磨きが加えられたものが出土しており、平行線状の篦磨きを除いて乱方向のものが本遺跡B類、密な格子状のものがD類にそれぞれ相当するものと思われる。

次に、上述した瓦器椀C・D・E類を中心とした共伴例より時期的に下降する瓦器椀F・G類についてみていきたい。若江遺跡井戸３ではｅ・ｆ・ｈ型式の瓦器椀が一括で出土している。これらは本遺跡D・E・F・G類に類似したものである。また同遺跡井戸４でもｄ・ｆ・ｇ・ｈ型式が出土しており、これらも本遺跡E・F・G類に対応するようである。[注21]見込みに比較的粗い平行線状篦磨きが施され、外面には粗い篦磨き、内面は比較的密な圏線状に篦磨きされた瓦器椀G類が他の類と共伴した例としては、本遺跡ＳＥ420を切って掘り込まれたＳＥ417がある（第53図151～154）。ここでは、見込みに粗い格子状磨きをもつF類152とともにG類151・153・154が曲物井筒内から出土している。それぞれ法量、器形等に大きな差異は認められないが、154については外面篦磨きがE類のように極端に密に重ねて施されており、見込みと体部外面の篦磨きの状況には相関性がみられないようである。伴出した土師器小皿（148・149）は口縁部に２段の横撫でが施され、端部が立ち上がり気味になるものである。瓦器椀F類とG類との共伴例に限れば、勝

田氏があげられた長原遺跡ＳＥ004、ＳＥ024（大阪文化財センターの調査による）があり[注22]、他に東大阪市弥刀遺跡井戸4[注23]、国府遺跡79年度第4調査区井戸出土例等[注24]にも見受けられるようである。

瓦器椀出現以降、時期差は、基本的には体部内外面篦磨き調整の簡略化、見込みの篦磨きの形状変化、法量の縮少、高台の形骸化に示される。しかし、B～G類を通じた変化の傾向としては、容器としての特性である不透水性に係る内面では、篦磨きの粗略化はそれ程あらわれず、また、法量においても口径15～16cm、器高5.5～6cmとほぼ一定しており、椀としての機能に直接結びついた部分で大きな変化はみられないようである。そして、時期的な重なりを配慮したとしても先述したように単に時期差としてだけでは捉え切れない多彩な瓦器椀の共伴が認められた。そうすると、それらが広義の「和泉型」という地域性をもった瓦器椀の範疇に属するものであるが、一生産地で賄われたものではないことを示しており、おそらく複数の生産地、極端にいえば各集落周辺で自営的に適時製作されていた可能性も推定されてこよう。佐堂遺跡で出土したB～G類のそれぞれ特徴を備えた瓦器椀は、分散して存在した瓦器椀製作集団相互の影響の範囲の中で形成され、それらが重複して当中世集落に供給されたことを物語っているのかもしれない。

次に瓦器椀H・I・J類についてみていきたい。H類はＳＥ415から162、163、165～170（第54図）が、ＳＥ408から172～175（第54図）が出土している。G類まで体部内面の篦磨きは密に施されていたが、ここでは空白部をもって篦磨きが数条の圏線状に巡るのみで、これまで維持されてきた椀としての機能が失われていく過程を示すものといえよう[注25]。特徴としては、体部外面の篦磨きは完全に消失し、器形的には口縁部が比較的広い幅をもって外反するものもみられる。ＳＥ415出土瓦器椀で口径15.5～16cm、器高4.5～5cm、ＳＥ408出土瓦器椀で口径15～15.5cm、器高4.5～5cmを測り、やや法量が縮少し、両者は時期差をもつものとして捉えることができる。しかしＳＥ408出土の1点（172）のみ口径14.5cm、器高4.5cmと他に比べ小ぶりで粗雑なつくりのものもみられる。一方見込みの篦磨きの形状はすべて粗い平行線状であるが[注26]、篦先で刻まれたような極端に細い173、175や、2～3mm程度の太目の172、丁寧に等間隔で施された166、不揃いに雑になされた167、169など種々みられる。HからI類へかけては器形的には共通するが、器高はさらに低くなる。I類はＳＥ414から182～185（第55図）が出土している。口径約16cmと大きく開き気味になる184、185と、口径約14.5cm、器高4.2cmと法量が縮少化した182、183がある。見込みの篦磨きはH類と同様平行状であるが全体的に粗雑になる。またH類と同様に細く施された185や太目の182～184がみられるが、それらの篦磨きの形状と法量の大小には相関性は認められないようである。また184、185のように高台としての機能を果さないものもあらわれてくる。J類に至ってはＳＤ445出土の214、215（第62図）のようにすでに椀としての器形は失われており、見込みの篦磨きは内面の粗い渦状の篦磨きと一体化している。このようにH・I・J類へと、ひたすら椀として衰退の方向へ向かっていったことがうかがわれる。H類が13世紀前半頃、J類は永楽通宝を伴った挾山遺跡ＳＤ7781出土瓦器椀に比べ形態的に先行した使用時期が考えられることより、衰退化の現象は2世紀余の長期間にわたって徐々に進行し、供膳用具の主役から

脇役へ移った後もこれらの瓦器椀は命脈を保っていたことと推定されよう。[注27]

以上のように一律的な法量の縮少化と内面篦磨きの粗略化を示しながらも、器形的には、全体にわたって歪みが著しく、見込みの篦磨き、口縁部横撫で調整の強弱等にみられるように個体差も目立つことから、この段階ではすでに「規格性」といった意識が製作する上で失われていたのかもしれない。そして、出土遺構の性格にもよるがＳＥ415、ＳＥ408、ＳＥ414などにみられるように一遺構からの出土点数が多く、当時瓦器椀そのものの量が増加している傾向を推定できる。しかし、このような量的増加は椀としての機能を失うほどの製作工程の簡略化の裏返しの現象であり、製作者の結集等の生産体制にまでおよぶ変革にかかわったものではないであろう。むしろＨ類以降に示された単調さは、製作者・集団の少数化の結果であり、量産化のための技術改良・革新は果たされることもなく、供膳用具としての地位低下の一途をたどったことと考えることができよう。

このように、瓦器椀製作集団は、専ら椀・小皿を生産することで自己の立場を確立してきたが、それは瓦器椀Ｇ類の段階までであろう。椀としての機能の退化が始まるＨ類、さらにＩ類の段階に入ると、需要者の要求に答えられない程衰退化が進行しており、Ｊ類に至ってはすでに瓦器椀製作集団としての性格は失われている。一方、瓦器椀が完全に消滅するまで、供膳用具以外の他器種への生産が図られたのであろうか、Ｉ類の段階に瓦器三足釜、瓦器片口鉢[注28]（第55図―187）がみられる。瓦器三足釜はその当時多くみられた土師器羽釜と同一の器形をとったものではなく、かまどの機能を合わせもって三足が付くものである。煮沸用具の中で占める割合からみれば小量である。また、瓦器片口鉢も量的には微々たるものである。器形的には瓦器椀をそのまま大型化し片口をつけたもので、瓦器椀の製作手法がそのまま採用され、椀と同じ退化の姿をたどっており、在地の瓦器椀製作集団によって生産されたことが容易に推定できる。瓦器三足釜については瓦器片口鉢のように瓦器椀との共通性がみられず、また他地域においても出土していることより、在地の瓦器椀製作集団との関係は明確にしがたい。いずれにしても、瓦器椀成立とともに形成・維持されてきた当中世集落と入れ替わるように15世紀代に入って、新たに盛行期を迎えた宮町遺跡[注29]（第70図６）や、北方に位置した若江遺跡[注30]（第70図２）では、瓦器が、釜、鉢、甕等の日常雑器類に多くを占めるようになる。瓦器椀の消滅から瓦器普及への具体的移行過程は明らかにできなかったが、そこにはこれまでの瓦器椀製作集団だけにとどまらない土器製作集団全般にわたる生産体制の変革を窺うことができよう。

以上、佐堂遺跡出土の瓦器椀を中心に、極めて雑なまとめを試みた。ここでは前にも触れたが整理期間の都合上一部の一括遺物を中心に報告したにすぎない。また、他遺跡においての共伴関係の実態について多々誤って把握していることと思う。『本報告』で完全を期したい。

注１　高槻市教育委員会『上牧遺跡発掘調査報告書』（『高槻市文化財調査報告書』第13冊　1980年）
　　橋本久和「中世土器の地域色と流町」（『考古学研究』第26巻第４号　1980年）

注２ a. 大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター『長原』―近畿自動車道天理～吹田線建設に伴なう埋蔵文化財発掘調査概要報告書―(1978年)

b.（財）大阪市文化財協会『大阪市平野区長原遺跡発掘調査報告』Ⅱ―大阪市高速電気軌道第２号線延長工事に伴う発掘調査報告書―1982.3）

注３　大阪府教育委員会『挟山遺跡・軽里遺跡発掘調査概要』―藤井寺市野中・羽曳野市軽里所在―（1978年）

尾上　実「南河内の瓦器椀」（『藤沢一夫先生古稀記念文化論叢』1983年）

注４　（財）東大阪市文化財協会『若江遺跡発掘調査報告書Ⅰ遺物編』（1983年）

注５　白石太一郎「いわゆる瓦器に関する二・三の問題」（『古代学研究』54　1969年）

白石太一郎「『瓦器』の生産に関する二・三の覚え書」（『古代文化』第27巻第３号1975年）

白石太一郎「越智氏居館出土の瓦器」（『古代学研究』85　1977年）

注６　国道308号線関係遺跡調査会　神並遺跡―現地説明会資料―57.2.20（1982年）

注７　前掲注４

注８　前掲注３

注９　大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター『巨摩、若江北（その２）』―近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書―

井戸18下層（曲物掘方埋土）より、「大和型の範疇に含め、川越編年のⅠ―Ｃ型式に相当するものか。」という瓦器が、井戸19でも「大和型で川越編年のⅠ―Ｃ型式に当ろう。」という瓦器が出土している。

注10　大阪府教育委員会『国府遺跡発掘調査概要・Ｘ』（1980年）

注11　調査担当者である佐久間貴士氏から教示をえた。

注12　大阪府教育委員会『津堂遺跡発掘調査概要』（1984年）

注13　前掲注３

注14　羽曳野市教育委員会『古市遺跡群発掘調査報告書』（1979年）

注15　前掲注２―ａ

注16　前掲注９

注17　原田昌則　成海佳子氏の御好意により実見する機会を与えられ教示を得た。

注18　前掲注４

注19　前掲注２―ｂ

注20　前掲注９

注21　前掲注４　特に井戸３については完形品の出土が多く、ｅ・ｆ・ｈ型式の瓦器椀が一時埋納されていた可能性が考えられている。

注22　前掲注２ａ・ｂ

注23　東大阪市遺跡保護調査会『弥刀遺跡発掘調査概報』（『東大阪市遺跡保護調査会発掘調査概報集』1981年）

注24　大阪府教育委員会『国府遺跡発掘調査概要・Ｘ』（1980年）

注25　Ｈ類の使用時期頃から、土師器小皿、瓦器小皿の口径が８㎝程度に縮少し容量が減り、当遺跡では土師器大皿の出土はみられなかった。

注26　本遺跡ではＨ・Ｉ類は、見込みの篦磨きの形状はすべて平行線状であるが、和泉地域北部の大園遺跡においては連結輪状に施された瓦器椀も多く出土している（大園遺跡調査会『大園遺跡発掘調査概報２』1976.3）。

注27　瓦器椀消滅後、15世紀には木製椀が供膳用具の主流を占めていたことが推定され、瓦器椀が椀としての器形を失った14世紀頃にはかなり普及していたことであろう。また輸入陶磁器も遺構全体に見合う程出土しておらず、一部階層の所有物にすぎなかったものと思われる。

注28　片口鉢は佐堂遺跡では小破片しか出土しなかったが、中世遺跡としては一体のものと把握できる北接した美園遺跡の土壙より瓦器椀Ｉ類とともに１点出土している。

またこの片口鉢については、（財）大阪文化財センター小野久隆氏より実見する機会を与えられ多くの教示を得た。

注29　ａ．八尾市教育委員会『宮町遺跡発掘調査概要Ｉ』（1982）

ｂ．八尾市教育委員会『宮町遺跡発掘調査概要報告』（『八尾市埋蔵文化財発掘調査概報』1980、1981年度）

注30　前掲注４

第2節　中世の佐堂遺跡について

1.　古代末～中世の遺構の構成と変遷

第Ⅱ章第6節で述べたように調査幅が狭長で制約され、断片的資料であるが、当遺跡の調査の大きな収穫の1つが平安後期から鎌倉時代にかけての掘立柱建物群の検出である。ここではそれらの遺構がどのようなまとまりをもって成立し、変遷していったのか、その流れを追いかけ、ついで周辺の中世遺跡との関連の中で当遺跡の位置づけを試みたい。

掘立柱建物、井戸、土壙、墓、溝などの遺構は調査区北半部に集中して存在している（第68図）。それらは位置関係からすると用水溝ＳＤ445を南北軸にして大きく東・西二群に分かれて位置している。東群には1棟の掘立柱建物ＳＢ401、13基の井戸ＳＥ401・ＳＥ403・ＳＥ404・ＳＥ405・ＳＥ406・ＳＥ407・ＳＥ408・ＳＥ409・ＳＥ411・ＳＥ415・ＳＥ422・ＳＥ423・ＳＥ425、5基の土壙ＳＫ403・ＳＫ404・ＳＫ405・ＳＫ418・ＳＫ424、1基の墓ＳＸ401、1条の溝ＳＤ443がみられる。一方用水溝ＳＤ445を介して西群には5棟の掘立柱建物ＳＢ402・ＳＢ403・ＳＢ404・ＳＢ405・ＳＢ406、14基の井戸ＳＥ402・ＳＥ412・ＳＥ414・ＳＥ416・ＳＥ417・ＳＥ418・ＳＥ419・ＳＥ420・ＳＥ421・ＳＥ424・ＳＥ426・ＳＥ428・ＳＥ429・ＳＥ430、3基の土壙ＳＫ407・ＳＫ408・ＳＫ415、1基の墓ＳＸ402、3条の溝ＳＤ446・ＳＤ447・ＳＤ448が存在する。

以上に述べた東・西両群を構成する掘立柱建物を中心とした遺構は両群内において個々重複しており、数時期にわたって営まれたことが窺われる。遺構検出面、出土遺物、主軸方位、位置関係等によってそれらのまとまりを整理すれば下記のとおりで

東群

a小群　第7層上面で検出された。瓦器椀Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ類等が出土したＳＢ401、ＳＥ403・ＳＥ404・ＳＥ405・ＳＥ409、ＳＫ404・ＳＫ418、ＳＸ401、ＳＤ445で構成される。建物主軸方位は北より10°西へ振る。

b小群　第7層上面で検出され、瓦器椀Ｆ・Ｇ類等が出土したＳＥ406・ＳＥ407・ＳＥ411・ＳＥ422・ＳＥ423・ＳＥ425、ＳＤ443・ＳＤ445・ＳＫ403・ＳＫ424で構成される。溝主軸方位は北より約20°西へ振る。

c小群　第6層上面で検出され、瓦器椀Ｈ類を伴うＳＥ401・ＳＥ406・ＳＥ415、ＳＫ405、ＳＤ445で構成される。

西群

d小群　第7層上面で検出され、黒色土器Ｂ類椀を伴うＳＢ402・ＳＢ403、ＳＥ402・ＳＥ421・ＳＥ424・ＳＥ429・ＳＥ430、ＳＫ407、ＳＤ445で構成される。建物主軸方位は北より7°～10°西へ振る。

e小群　第7層上面で検出され、瓦器椀B類を伴うＳＫ408、ＳＤ445で構成される。

f小群　第7層上面で検出され、瓦器椀C・E・F・G類等が出土したＳＢ405、ＳＥ416・ＳＥ417・ＳＥ418・ＳＥ419・ＳＥ420・ＳＥ426・ＳＥ428、ＳＫ415、ＳＸ402、ＳＤ446・ＳＤ448・ＳＤ445で構成される。建物主軸方位は北より21°西へ振る。

g小群　第6層上面で検出され、瓦器椀Ⅰ類を伴うＳＢ404・ＳＢ406、ＳＥ412・ＳＥ414、ＳＤ447・ＳＤ445で構成される。建物主軸方位は北より28°西へ振る。

となり、小群相互の先後関係としては東群ではａ小群→ｂ小群→ｃ小群、西群ではｄ小群→ｅ小群→ｆ小群→ｇ小群の順序変遷が導き出される。

つぎに以上のａ～ｇ７小群について、それらを構成した遺構がどれほど同時期に存在したのか、適確にしがたいが、先の小群の順序変遷を踏まえて東西二群相互の時期的関連を求め、どのような流れの中で建物群が変遷していったのか復原的に検討してみたい。

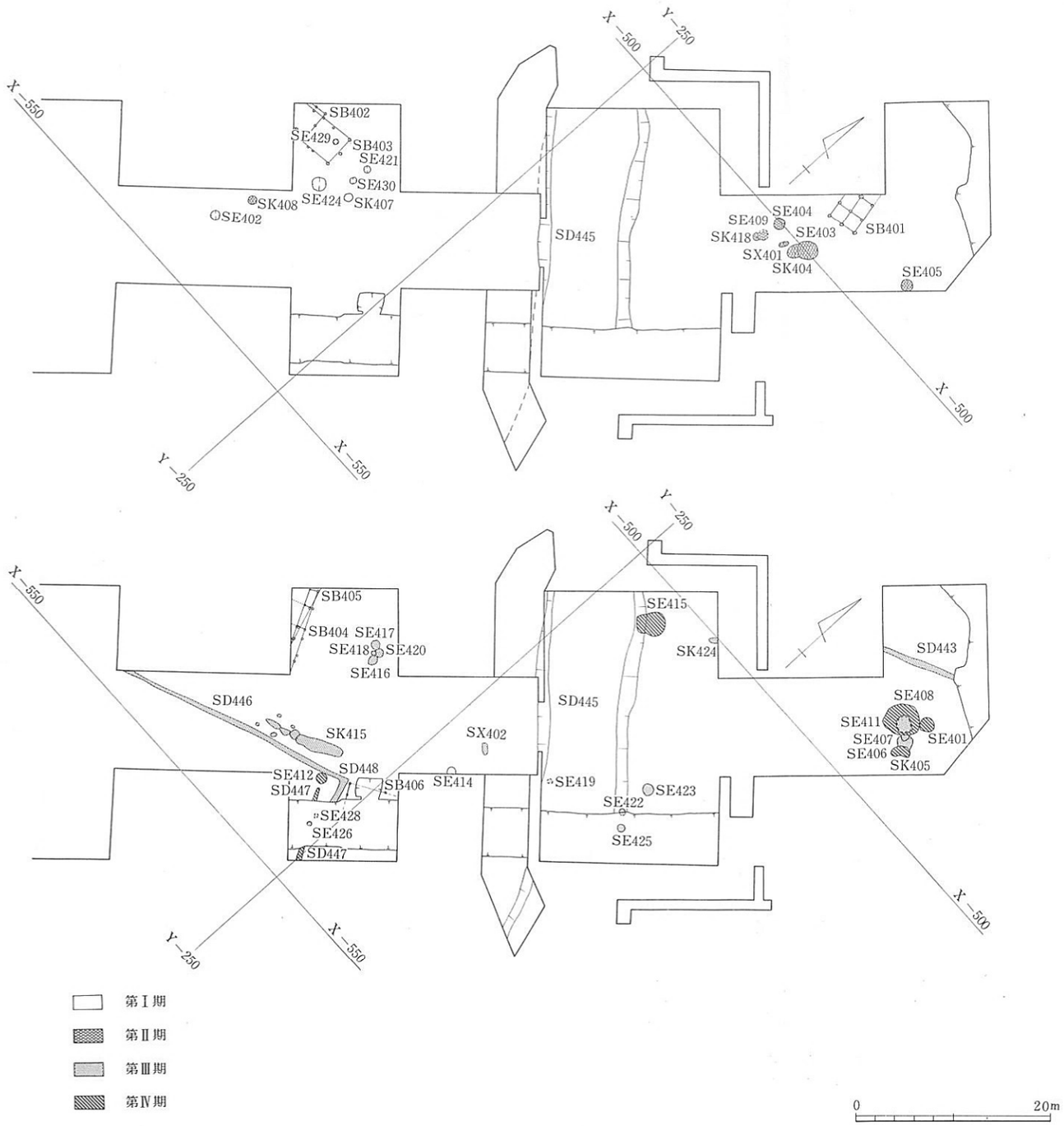
なおこれらの遺構の時期設定については、溝ＳＤ445にみられるように時期の異なる数層の埋土、堆積土をもち長時間にわたって存続した遺構[注1]も認められることから、ある程度まとまった資料が得られた井戸、土壙、墓を中心にして行なった。また遺構の年代観については本遺跡内で最も出土量が多い瓦器を中心としたものであり、第Ⅲ章第１節の瓦器椀の年代観によったものである。

第Ⅰ期　瓦器椀成立直前、黒色土器Ｂ類椀がみられる11世紀中葉～後半を中心とした時期。用水溝西方にｄ小群が造営される。西側は調査区外に含まれ全容は明らかでないが、４Ａトレンチ西方に主軸方位を北より7°西へ振る２間×１間以上のＳＢ402、北より10°西へ振る２間×３間以上の東西棟建物ＳＢ403が重複して位置している。これら２棟には建て替えがみられるが時期的前後関係は明確でなく、どのような機能、性格を備えたものか不明である。建物の東約３ｍには建物の建替えにともなって掘り替えられたのであろう１基の曲物井戸ＳＥ421と３基の素掘り井戸ＳＥ424・ＳＥ429・ＳＥ430があり、他に土壙ＳＫ407等の附属施設を配置し一定の居住区を形成している。またやや南に離れてＳＥ402、ＳＫ408もみられることより、さらに西方の調査区外にも掘立柱建物が存在することが推定できよう。また、居住区の東方、つまり用水溝ＳＤ445まで至る約20ｍの範囲には同時期の遺構が検出されておらず広場なり、畑地などとして使用されていたものと思われる。

第Ⅱ期　瓦器椀の成立過程を示す瓦器椀Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ類が認められる11世紀後半～12世紀初頭を中心とした時期。第Ⅰ期から引き続いて用水溝ＳＤ445西方にｅ小群、新たに東方にａ小群が営まれるが、ｅ小群では瓦器椀Ｂ類が出土したＳＫ408が唯一存在するのみで他に遺構は認められない。このことはやや先行した可能性の考えられる瓦器椀Ｂ類の時期以後、建物群はｅ小群からａ小群へと移動するかのように用水溝西岸では遺構の形成が途絶し、対岸のａ小群のみに遺構が継続して営なまれたことを示すものであろう。ａ小群では用水溝ＳＤ445から北寄りに約20ｍ離れてＳＢ401が位置している。ＳＢ401は主軸方位を北より10°西へ振る２間以上？×２間の倉庫と推定される建物で、南へ３～５ｍ近接して井戸ＳＥ403・ＳＥ404・ＳＥ409、土壙ＳＫ404

・ＳＫ418、時期的に先行した瓦器椀Ａ類が出土した墓ＳＸ401が存在し、東に約７ｍ離れて井戸ＳＥ405が位置する。恐らく、倉庫ＳＢ401と関連して１Ａトレンチと２Ａトレンチ間の調査区外に主屋等の建物が存在するであろうが、いずれにしても建物に南面して井戸等の附属施設を備えた一定の居住区の存在を推定することができよう。また第Ⅰ期にみられたように、居住区から用水溝ＳＤ445までの約15ｍの範囲には同時期の遺構は検出されず広場なり、畑地として使用されたものと推定されよう。このように遺構の上からは南を限る用水溝ＳＤ445以外屋敷地の範囲を明示するような施設は確認できない。居住区の周辺に広場、畑を附属した第Ⅰ期以来の居住形態を引き続いて維持してきたものと考えることができよう。

第Ⅲ期　瓦器椀Ｃ・Ｅ・Ｆ・Ｇ類の変化の中で捉えられる12世紀中葉～後半で、遺構の形成が最も盛んにみられ、用水溝西方にｆ小群、東方にｂ小群が併存する期間が認められる。ｆ小群ではｂ小群に若干先行して瓦器椀Ｃ・Ｅ・Ｆ類が伴って出土した井戸ＳＥ420がみられるが、瓦器椀Ｆ類が中心に出土した遺構はｂ、ｆ小群で併行して多くみられ、新たにｂ小群では主軸方位を北より約70°東へ振る溝ＳＤ443が、またｆ小群でも同じ主軸方位をもって35ｍ離れて平行に走る東西溝ＳＤ446が現われる。これらの溝は幅0.4ｍ、深さ0.3～0.5ｍ程の小規模なものであるがＶ字状に近い掘り込みを持っている。このうちＳＤ446は現在約26ｍまで確認されており東端では南に折れ溝ＳＤ448に接続し３ｍ程続いて行方を失っている。憶測の域を出ないがその西端は、延長が６Ａトレンチで検出されなかったため北に直角に折れて延びるものと想定されなくもない。そうすればｆ小群において、第Ⅰ期以来の居住区を踏襲して築造された主軸方位を北から21°西に振る大型化した建物ＳＢ405を西に寄せて、南北長は判然としないが南はＳＤ446、東は用水溝ＳＤ445、西はＳＤ446の北方延長部で限られた東西長約50ｍ（半町）の区画が想定される屋敷地となるのではないかと考えられよう。またその内部においては、ＳＢ405を中心にＳＤ445に面して建物前面（東方）約７ｍ離れて井戸ＳＥ416・ＳＥ417・ＳＥ418・ＳＥ426を配し、ＳＤ446の北縁に沿ってゴミ捨て場と推定される楕円状に長い土壙ＳＫ415を掘り込み、居住区を構成している。そして、さらに東方には約20ｍ離れて墓ＳＸ402があり、つづいて東を限るＳＤ445に至るが、その西岸には井戸ＳＥ419がみられる。恐らくＳＥ419は居住区内で建物と密接に結びついたＳＥ416・ＳＥ417・ＳＥ418とは異なった使われ方をしたようで、対岸に見受けられる井戸ＳＥ422・ＳＥ423・ＳＥ425と同様に用水溝を利用した洗場等に利用されたのかもしれない。また区画の外側にもＳＤ448に近接して井戸ＳＥ426・ＳＥ428が認められる。一方ｂ小群においては、溝ＳＤ443は北を限るものと推定され、掘立柱建物は検出されておらないものの、その南側に井戸等の遺構の拡がりが見受けられる。しかし、ｆ小群のように前時期の居住区を踏襲して営なまれた遺構は認められず、比較的分散してみられる。東方に井戸ＳＥ406・ＳＥ407・ＳＥ411、ＳＫ403があり、確認されたことではないが、これらを伴なった掘立柱建物の存在を調査区外に推定できる。また、ＳＤ445の東岸に接して先述したように用水溝を利用する洗場等に利用したのかＳＥ422・ＳＥ423・ＳＥ425、北寄りにＳＫ424が形成されており、生活領域の拡大を窺うことができよう。



第68図　遺構配置変遷図

第Ⅳ期　瓦器椀H・Ⅰ類が認められる13世紀代前半～中葉頃で、ｃ小群からｇ小群へと時期差が考えられ、建物群の移動が窺われる。ｃ小群は瓦器椀H類の時期で、第Ⅳ期の前半、ｇ小群は瓦器椀Ⅰ類の時期で第Ⅳ期の後半とする。ｃ小群では前代の溝ＳＤ443が埋まり失なわれるが、東寄りにおいて従来の場所を踏襲して井戸ＳＥ401・ＳＥ408が掘られる。遺構の中核をなす掘立柱建物は第Ⅱ期と同じように調査区外にひき続いて存在するのであろう。また用水溝ＳＤ445東岸付近においても北寄りになるが井戸ＳＥ415が掘削されている。やや遅れてＳＤ445西岸に現われたｇ小群では、掘立柱建物ＳＢ404は第Ⅲ期の居住区を踏襲して築造されているが廂を有し大型化するようである。また新たに東南約15m離れてＳＢ406が建てられる。これら２棟はともに主軸方位を揃えて北より28°西へ振っている。このＳＢ406と主軸方位を揃えて西方３m隔てて南北溝ＳＥ447が平行に延びており、溝の途切れた部分にＳＥ412が位置し、ＳＢ406の北方約６m離れてＳＥ414が存在する。このような一連の遺構によってＳＢ406を中心とした居住区が構成されるようである。この地は、第Ⅲ期において２基の井戸ＳＥ426・ＳＥ428が存在した場所でもある。南北長は判然としないが、ＳＢ406・ＳＢ404と主軸方位を同じくした溝ＳＤ447が西辺を、ＳＤ445が東辺を限るものとすると、やや小規模になるがこれらにとり囲まれた東西長約25mの屋敷地を想定することができよう。

以上のようにして２世紀余に及ぶ遺構の構成とその流れについて述べてきた。用水溝ＳＤ445は長瀬川右岸一帯の開発の拠点としてはじめて成立した第Ⅰ期掘立柱建物群とともに掘削されたものであろう。第Ⅰ期では西岸にｄ小群を構成する建物群が造営されており、ほぼ同規模と推定される建物の建て替え、井戸の掘り替えがなされ、居住区は維持されているもののそこには新たな動きは感じられない。第Ⅱ期に入ると西岸ではｅ小群が形成され、瓦器椀B類が出土した土壙１基を残して遺構の形成は途絶する。それと対照的に対岸に新しく倉庫を伴なったａ小群が現われる。ここでは倉庫を営みえる居住集団の存在を窺うことができる。このような集団とかって西岸でみられたｄ小群の居住集団との関係については、両時期を通じて居住形態が類似しており、ｄ小群のＳＢ402・403とａ小群ＳＢ401を比較すると、建物主軸方位、建物梁行長・梁行柱間寸法等を同じくしていることなど密接な関係が認められ、一つのつながりをたどれるのではないかと思われる。そうすれば第Ⅰ期から第Ⅱ期へかけての変化は、本来用水溝西岸でｄ小群掘立柱建物群を造営維持していた集団が、何らかの理由で居住地を対岸へ移動させたものとして理解することができるかもしれない。第Ⅲ期では瓦器椀F類の時期を中心にして遺構の形成が最も盛んになるとともに、建物、溝の主軸方位が西へ大きく振るようになる。また用水溝ＳＤ445を軸にして西岸にｆ小群、東岸にｂ小群の建物群が併存する状況が生まれ、新たにそれらをとり囲むように屋敷地の範囲を明示する区画施設としての東西、南北溝が設けられる。区画溝ＳＤ443・ＳＤ446・ＳＤ448と関連して、これまで単に用水溝であったＳＤ445は東西に大きく屋敷地を区分する機能も果すようになる。このように第Ⅱ期から第Ⅲ期において遺構の上から急激な変化が窺い知ることができよう。ｆ小群でみられた屋敷地は位置的にみれば、かっての第Ⅰ期のｄ小群の居

住地に重ねあわせたように形成されていることより、それは時間的推移に伴う居住集団の発展拡大を示すものと推定することもできよう。はじめてこの地を開発した集団の末裔が新たな開発に手を加えるとともに、自立性・安定性を備え、再び元の居住地に住いを営みはじめたとしても不自然ではないものと思われる。第Ⅳ期では前半、後半に分けられたようにc小群からg小群へと遺構の形成が移っていくようである。全体的に遺構は減少し、西岸の建物群を最後にして廃絶する。第Ⅳ期以降、つまり14世紀代に入ると、この地において大きな土地利用の変化がみられる。居住に関する遺構は認められず、数層に厚く耕作土が堆積する。ＳＤ445は、この時期においても灌漑用水路として残されるが、従来の居住地には北から30°前後西へ方位を振る耕作に伴う溝、人・牛の足跡、鋤跡等が数面認められるようになり、近世以降になってもひきつづいて耕作用井戸、野壺等が見受けられる。

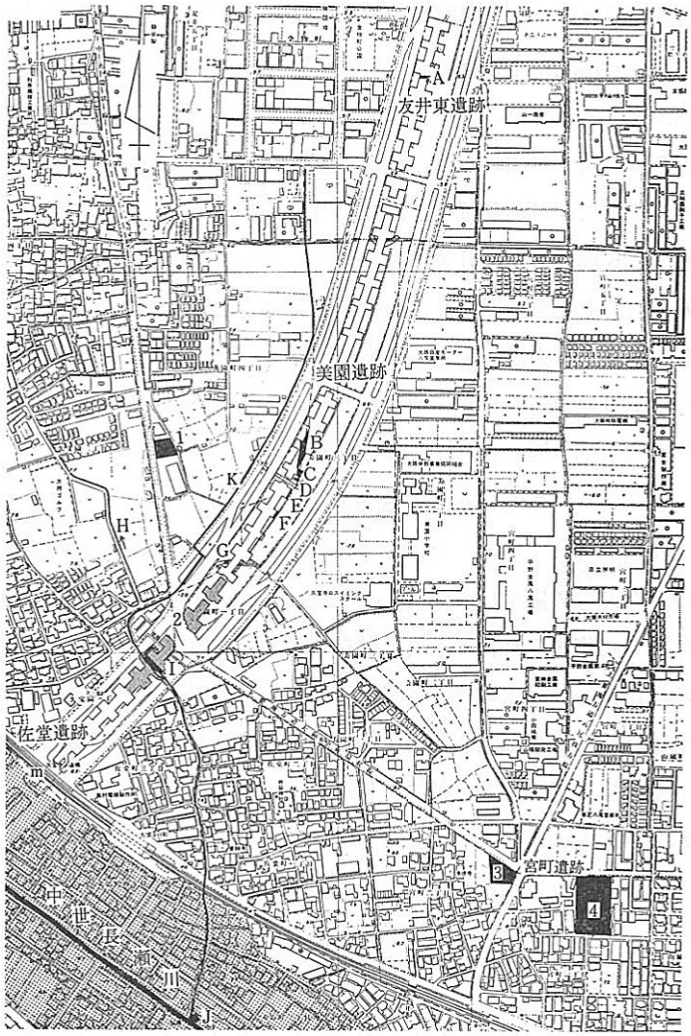
つぎに、建物群が形成、維持されていく過程の中で、それらの形態変化の規則性を示す主軸方位の変化について補足したい。全体に主軸方位は北より西へ傾いたものであり、時期が下降するにつれて北から西へ振る角度が大きくなっていく傾向が窺われる。第Ⅰ・Ⅱ期ではN—7°～10°—W、第Ⅲ期ではN—21°—W、第Ⅳ期ではN—28°—Wと分けることができる。推測の域を出ないが、この様な変化を美園遺跡で確認された7世紀後半の東西方向の畦畔[注2]や9世紀前半の東西棟建物に想定される条里地割の方位から窺うなら、それがどれ程面的に整備されていたかは別にしても、ＮＲ302の埋没後この地にはじめて成立した第Ⅰ期建物群は、その主軸方位の方向性からみて2世紀余りの時間的経過をもちながらも、かつて存在した旧地割線を意識して造営されたのではなかったのかと想像される。したがって主軸方位の北より西への振れ幅が小さく、南北の直線的地割に比較的近くなったのであろう。その後、第Ⅲ期を境にして建物・溝の方位は北より西へ角度を大きく振り、北西に流れを向けた長瀬川の流路に沿って建物群が形成される。この時期における主軸方位の急激な変化は、溝で区画した屋敷地の出現・居住地の拡大・集落南方を流れる長瀬川の堤防の築造[注3]に示された新たな開発の拡がりと密接に係わったものであろう。

2. 佐堂遺跡を中心とした長瀬川右岸周辺地域の展開

極く限られた資料を通して掘立柱建物群の変遷をとらえてきた。これらの建物群が集落を構成することは言うまでもない。ここでは建物群の南を流れる長瀬川との関連で、用水溝ＳＤ445を軸とした集落の広がりと、当遺跡を中心とした長瀬川右岸周辺地域について概観し、3世紀余の間にこれらの建物群がこの地でどのような性格を持って変遷していったのか明らかにしていきたい。

「中世」以前、当調査区は、旧流路の河岸周辺に、9世紀代の土器溜、土器棺墓等がわずかに形成される程度である。一方、旧流路右岸に拡がる美園遺跡では当遺跡より北東約600m離れた地点において7世紀後半の畦畔、9世紀前半の東西棟建物等[注4]が検出されており、古代律令制のもとで営まれた条里制耕地や古代村落の一端が偲ばれ、少なくとも古くは流路にあたり頻繁に洪水にみまわれたであろう当調査区と比較して開かれた土地であったことが窺い知れよう。

「中世」への動きの１つの契機となった流路の変遷時期については、すでに以前の調査で、中世の長瀬川が10世紀以後には当調査北半部に位置する旧流路（ＮＲ302）の南方約250ｍの位置を流れはじめていたことが指摘されている。[注5] 一方、今回の調査においてもそれに対応するように、旧流路（ＮＲ302）の最終埋没時期が流路北端部上層出土土器より10世紀後半頃と考えられ、奈良時代以降、約３世紀近くの間、流れが序々に北方へ押しやられて埋没してきたことも推定されるようである。そして川筋の固定化についても、13世紀以降に堤防が築かれていたことが長瀬川右岸で確認されている。[注6] しかし、11世紀後半頃にはすでにこの堤防から北へ約250ｍ離れ、旧流路が形成した自然堤防上に開発の拠点として第Ⅰ期ｄ群掘立柱建物群が現われる。また、出土遺物からみて、用水溝ＳＤ445の開削時期もその出現とほぼ同時期に求めることができる。さらにＳＤ445の前身として、ＮＲ302の埋没後もひきつづいて痕跡程度にその北岸に沿って流れていた小河川が生活用水として利用されてきたことも考えられ、新たに中世に入って、「開発」の手が加えられる直前の９～10世紀代にかけての短期間、その周辺には単発的にせよ、集落が存在したことも推定できよう。憶測の域を出ないが、川筋の固定化＝堤防治水工事が灌漑用水溝の築造と不可分の関係にあるとすれば、堤防築造時期は組織的な開発のはじまりを示すＳＤ445の開削時期まで遡らせる可能性も考えることができるかもしれない。



第69図　中世溝と周辺地形図（Ｓ＝1/10000）

つづいて灌漑用水路ＳＤ445の流路形態を明らかにし、それを軸にして北方へ続く美園、友井東遺跡で検出された中世溝との関連の中で集落の拡がりについて明らかにしていきたい。

前項で述べたようにＳＤ445は建物群と密接に関連し

つつ、その変遷とともに長期間使用されており、時期によって規模に変動がみられた、それはさらに建物群の廃絶後も引き続いて耕作に利用され、近世・近代を通じて現在もほぼ同位置に上・下に重なって水路が残されている。現時点ではＳＤ445は調査区をよぎって南東―北西方向に長さ約30ｍを検出したにすぎないが、その当時すでに長瀬川は流路を南方へ変えており、長瀬川に取水口を設けて約１ｍの比高差[注7]で下降する右岸の低地部、ちょうど美園、友井東遺跡が位置する地域へ灌漑水を供給していたことが容易に推定される。現状からすると、この溝は旧流路（ＮＲ302）の北岸を肩にして掘削されていることより、現長瀬川右岸に沿って帯状にのびた自然堤防地形部ではその延長流路を復原推定することが可能であろう。さらに推測を加えて、当初よりのＳＤ445の総延長の流路形態が、その灌漑範囲を現代までどこまでとどめ、どの程度復原できるのか疑問ではあるものの、これまでの佐堂遺跡、美園遺跡、友井東遺跡の調査で検出された中世に属する溝（ＳＤ445・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅ・Ｆ・Ｇ溝）と右岸堤防（ｍ）、現存する条理制地割、溝及び現地形を比較対照していくと以下のようになる（第69図[注8]）。

現長瀬川北岸Ｊ地点には、宝永元年（1704年）の大和川付替以後、取水樋として残された佐堂樋が設けられている。現在農業用水路は暗渠となっているが、この樋から枝線として北北西へ向かって若干屈曲しながら用水路Ｉ溝へつながっていく。Ｉ溝はＳＤ445に重複した石積、コンクリートでしっかり護岸されたものである[注9]。その延長部は大阪中央環状線を西側へ越えた地点でＨ溝とＫ溝の２本に分岐する。Ｈ溝は北北西へ旧河川に沿ってそのまま流れ、Ｋ溝は美園遺跡へ向かって北北東へ屈曲し、途中で現存する条理地割の範囲に入ると南北の直線的地割にのって流れる。Ｋ溝は大阪中央環状線建設に伴って道路北側に沿うように移設されたもので、本来は中央環状線敷地内に位置し、地形の影響を受けているかのように屈曲しながら自然堤防部を経て北流し、底地部へ導入されたものである。

このようにみていくと、ＳＤ445をはじめとして、Ｇ・Ｆ・Ｅ・Ｄ・Ｃ・Ｂ・Ａ各溝はＫ溝とよく重ね合わすことができるようである。それらはかって一連のものとして掘削され、旧楠根川へつながって排水していたものと思われる。そして洪水等で埋没しながらも、幾度も旧流路形態に沿って修復され、経年的に遺存してきたものであろう。したがって、現在みられる長瀬川右岸の灌漑水系と排水系は、美園遺跡検出の７世紀後半に属する畦畔にみられるように部分的には律令的性格を持つ条理制遺構を継承した可能性も否めないが、その大半は自然堤防上に集落が現われる平安時代後期から鎌倉時代にかけて新たに行なわれた低地部の再開発のもとで形成・維持されてきたものといえよう。

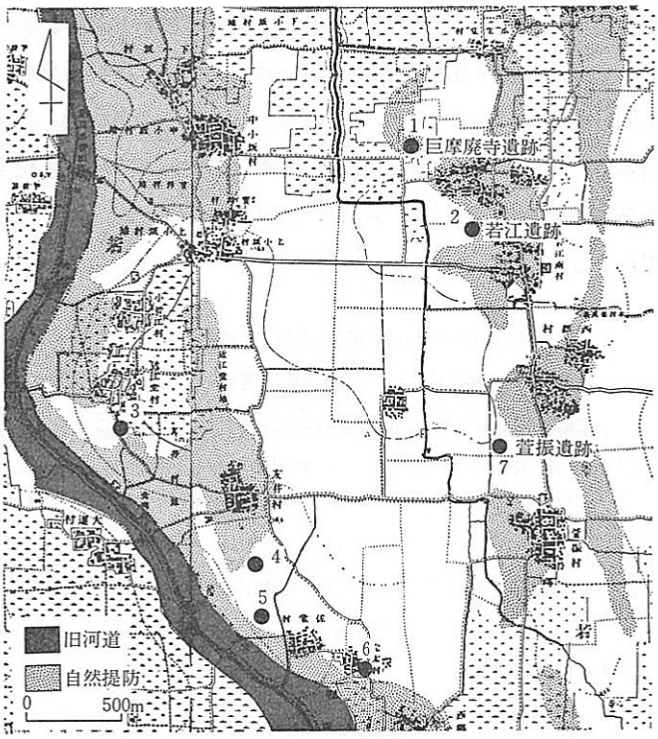
以上のように復原した用水溝ＳＤ445の流路形態を軸にして長瀬川右岸に広がる中世集落について述べていきたい。前項で掘立柱建物群の形成過程を大きく４期（第Ⅰ～第Ⅳ期）に区分して復原的に把握してきた。これらと関連してＳＤ445の北方延長部、つまり旧大阪中央環状線を隔てた美園遺跡の南寄り、Ｆ～Ｇトレンチでも、ちょうど自然堤防地形の北限に一致して13世紀代後半の井戸、土壙等が多くの遺物を伴って検出されている[注10]。それらは、当遺跡で検出した第Ⅳ期

の掘立柱建物群とひと続きのものとして集落を構成していると考えられる（第69図２）。またこの地点からさらに北西方向にのびる自然堤防上の北方延長約250mの地点（第69図１、第70図４）でも12・13世紀に属する井戸が数基検出されている。[注11]

当調査区においては、北半部に集中して位置した掘立柱建物群以外に、100m余南へ離れた長瀬川の流れに近い南半部分でも建物群としては捉えられなかったが、数基の井戸・土壙が散在している。それらは10～11世紀代の瓦器椀出現以前のもので、北半部の第Ⅰ期建物群と併存した状況も推定されるが、何分、検出された遺構が極くわずかであり明確にしがたい。しかし、少なくとも13世紀以降には、畦畔、人、牛の足跡等が一面にわたってみられることより、第Ⅳ期掘立柱建物群の南方は水田によって限られていたことが窺い知れる。一方、用水溝がのびていく北方につづく美園（先述したF～Gトレンチを除いて北側）・友井東遺跡でも居住に関する遺構は認められない。この時期の出土遺物の大半は用水溝からで、他からはほとんどみられず、その周辺が第Ⅰ～第Ⅳ期を通して、主要耕地であった可能性が強いものと思われる。

したがって、第Ⅰ・Ⅱ期において掘立柱建物群そのものは、調査区南半部でわずかに井戸・土壙等がみられたように小規模に散在していたためか、その拡がりは周辺では明確にできなかった。それに反し第Ⅲ期からは北方眼前に広がる低地部に耕地をひかえ、南を流れる長瀬川に沿って帯状につづく自然堤防上に、調査区（北東～南西方向）に沿って南北200m、東西は判然としないが200m以上の範囲で建物群が集中してしまうような状況が窺われ、特に第Ⅳ期にはそれが顕在化するようである（第69図１、２）。

上述した集落変遷の中で、第Ⅲ期に入って遺構・遺物が増加するとともに、溝で周囲を囲まれた屋敷地があらわれてくる。それは集落内部での特定の階層分化のはじまりを示したものと思われ、第Ⅳ期にかけて普及していくようである。また位置的には、調査区北半部に流れる用水溝の岸辺に営まれた掘立柱建物群はちょうど用水溝が自然堤防部から流路を低地部へ向け屈曲させた導入部へあたっており、想像を逞しくすれば、掘立柱建物群の居住者には用水溝の維持管理と深くかかわりをもった優位な側面を想定することができよ



第70図　周辺中世遺跡分布図

う。

次に当遺跡（第70図５）が拡がる長瀬川右岸流路に沿って続く自然堤防上に位置した周辺の中世集落に目を移したい。当遺跡より北西約１Km余離れて、東大阪市弥刀遺跡（第70図３）[注12]、南東約0.5Kmに八尾市宮町遺跡がある（第70図６）[注13]。弥刀遺跡では明確な建物遺構は検出されていないが、10世紀中頃前後から13世紀前半に属する井戸が計６基確認されている。位置的にみて当遺跡とは別の灌漑用水路を備えたものかと思われる。両遺跡間に耕地、非耕地がどのように介在し、他に集落が存在したのかどうか判然としないが、時期的には井戸からみる限り、12世紀中頃以降13世紀までのものが中心であり、当遺跡第Ⅲ期と同時期に盛行期を迎えるようである。また平安時代に入って新たに形成された遺跡であることなどからすると、佐堂遺跡の中世集落と相似た変遷過程をたどったものかもしれない。一方、宮町遺跡では穴太神社を中心に１町四方以上の寺域を有したと推定される千眼寺跡（第69図４）が確認されており、多数の出土瓦からその存続年代は平安時代まで遡り、室町時代まで至る時期が考えられている。そして、近辺では（第69図３）瓦器椀消滅前後の15世紀代から近世におよぶ遺構、遺物が多く検出されており、多数の日常雑器以外に、中国製磁器類の出土が目立ち、単なる農村集落にとどまらない千眼寺とそれに付随した集落の存在を推定することができる[注14]。しかし、ここでは佐堂・美園遺跡の中世集落が盛行した12～13世紀代の遺構・遺物は明確でない。逆に、宮町遺跡においてはそれらの集落が耕地化してしまう15世紀に入って盛行期を迎える。このように近接した佐堂・美園と宮町両遺跡間には、時期的併行関係は認められないようであり、佐堂・美園から宮町遺跡へという時間的流れの中に人々が３世紀余の間住みついてきた土地、集落の移動という、耕地とともに集落景観さえも変貌させるような急激な変化を窺うことができるのではないかと思われる。それは調査区掘立柱建物群第Ⅰ期～第Ⅳ期にかけてみられた「草深い農村」から中世寺院を擁し、伝統的に受け継がれてきた用水溝を軸にした小地域の範囲を越え、農業以外への適応性をも備えた新たな集落形態の形成でもあり、農村集落内部での特定の階層分化にとどまらない大きな社会的変動として捉えることができよう。

注１　黒色土器Ｂ類椀から、最上層では瓦器椀Ｊ類まで含まれ、それが年代幅を示すものとすれば、11世紀中葉から15世紀代にかけての年代が考えられる。出土遺物の大半は両岸に拡がる掘立柱建物群に伴なった遺物で、溝の埋め立て時等に混入したものであろう。

注２　美園遺跡現地説明会資料(1) 1981.10.17（大阪府教育委員会（財)大阪文化財センター）７世紀後半の遺構面から条里制坪境に合致した東西方向の畦畔が検出されている。調査担当者の岡本敏行氏に多く教示をえた。

注３　大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター『佐堂（その２）－１』－近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書－　1984年

注４　前掲注２

注５　前掲注３

注６　前掲注３

注７　現地表標高は当調査区でＴ．Ｐ．+7.9m 前後で平坦である。当調査区と比較して美園遺跡南寄りでは段差があり、約7.0mとさがり、北寄りで約5.6mと、徐々に北へ向かって低くなっていく。さらに北へつづく友井東遺跡では、北端部で約5.0mとなる。

注８　美園遺跡の調査担当者である小野久隆氏、渡辺昌宏氏と友井東遺跡の調査担当者である亀島重則氏に多く教示をえた。

注９　築留土地改良区事務所の大嶋廣喜氏より教示をえた。

注10　美園遺跡の調査担当者である小野久隆氏より教示をえた。

注11　美園遺跡（八尾市美園４丁目112―2所在）の調査担当者である米田敏幸氏と原田昌則氏より教示をえた。

注12　東大阪市遺跡保護調査会『弥刀遺跡発掘調査概報』（『東大阪市遺跡保護調査会発掘調査概報集』1981年）

注13　a.　八尾市教育委員会『宮町遺跡発掘調査概要Ⅰ』（1982年）

　　b.　八尾市教育委員会『宮町遺跡発掘調査概要報告』（『八尾市埋蔵文化財発掘調査概報』1980、1981年度）

注14　前掲注13ａ、ｂ

付　　章

Ⅰ　佐堂遺跡から出土した植物種子……粉　川　昭　平

表

第１表　佐堂遺跡植物種子同定結果……89

図　　版

図版１　植物種子

Ⅱ　佐堂遺跡から出土したウリ科植物の遺体について　……藤　下　典　之

挿　　図

第１図　古墳時代期の六（ＳＫ6010）より出土したヒョウタン仲間の種子№34の大きさの変異……94

第２図　ヒョウタン仲間の出土遺跡別にみた種子の大きさ……95

表

第１表　佐堂遺跡より出土したウリ科植物の遺体……93

図　　版

図版１　植物種子

1　佐堂遺跡から出土した植物種子

大阪市立大学理学部
粉　川　昭　平

大型の種子数を同定した。弥生中期ではオニグルミ、飛鳥〜平安時代前期ではカヤ・カシ類・ヒョウタン、平安時代後期でウメ・モモ・センダン・トウガン（藤下典之氏の論攷「佐堂遺跡から出土したウリ科植物の遺体について」を参照）がある。鎌倉時代になるとクロマツも出てくる。古代末〜中世のモモは、中型〜大型で細長いものが多く先端が短く鋭くとがるものが多く注目される。

第1表　佐堂遺跡植物種子同定結果

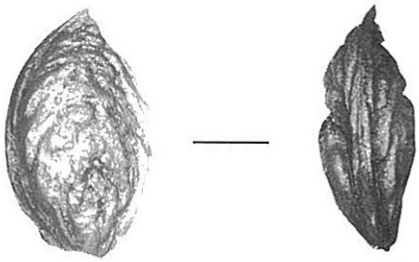
サンプルNo.	地区	遺構・層位	採取日	時期	点数	同定結果
1	Aトレンチ	弥生中期 足跡面直上	82 06 05	弥生中期	1	オニグルミ（大型の完全なもの1個）
2	Aトレンチ	弥生中期 足跡面直上	82 06 04	弥生中期	2	オニグルミ（中型の完全なもの1個 半分にわれたもの1個）
3	Aトレンチ	SD 301	82 03 24	飛鳥 〜平安前期	1	カシ属の堅果1個 （先端部欠失し、種の同定出来ず）
4	Aトレンチ	SD 301	82 03 24	飛鳥 〜平安前期	1	ヒョウタン類の果皮 （果の基部は完全。先端部(底)はわれている。果梗の5角形の着点はよく残る。内部には管束痕が放射状によく残る。頂部はフラスコ状に長くのびる事はないようである。）
5	Aトレンチ	SE 410 井戸内堆積土	82 02 16	平安後期	2	ウメ　（1個。先端部が少し欠けている。図版1—1） カシ属の堅果（先端部欠失し、種の同定出来ず。）
6	Aトレンチ	SE 408 井戸内堆積土	82 01 12	鎌倉	1	クロマツ（球果1個、大型。）

7	Aトレンチ	SE 403 掘形埋土 (暗青灰色シルト層)	81 11 09	平安後期	94	モ　モ (破片2個。やや完全—21個。多くは保存がよくなく細部はわからないが中型で細長く、先端が鋭くとがる。いくつかは黒くこげる。) センダン　(破片2個) トーガン？(69個)
8	Aトレンチ	SE 403 井戸内堆積土	81 11 09	平安後期	65	モ　モ (完全なもの40個。半分にわれたもの25個。小型で細長く、先端微突す。油桃か？表面黒くこげているのか？内部には至らない。図版1—2)
8	Aトレンチ	SE 403 井戸内堆積土	81 11 09	平安後期	15	センダン (完全な核(内果皮、15個) 1個を除き、大型で、最も大型のものは、6稜をもち、直径1cm長さ1.8cmにおよぶ。種の検討を要す。図版1—3)
9	Aトレンチ	SD 445 第5層	81 11 25	平安後期 ～鎌倉	1	モ　モ (大型1個。全く近代的なタイプである。先端部少し欠失。図版1—5)
10	Aトレンチ	SD 445 第5層	81 11 28	平安後期 ～鎌倉	1	モ　モ (大型1個。細長くひらたい。図版1—4)
11	Aトレンチ	SE 404 掘形埋土 (青灰色粘土)	81 11 10	平安後期	8	モ　モ(6個。細長く中型。先とがる。) センダン(大小2個)
12	Aトレンチ	SE 403 井戸内堆積層	81 11 10	平安後期	8	モモ(8個。細長く中型。先とがる。)
13	Aトレンチ	SE 414	82 01 19	鎌倉	2	モモ(2個。大小不完全。丸くない。)
14	Aトレンチ	NR 301	82 04 22	飛鳥～奈良	1	カヤ(1個。(2つにわれる))
15	Aトレンチ	SE 427	82 01 28	時期不明	2	モモ(2個。中型、細長い。先とがる。)
16	8Aトレンチ	古墳時代後期 足跡面上	83 05 30	古墳後期	1	モモ(小型。不完全)

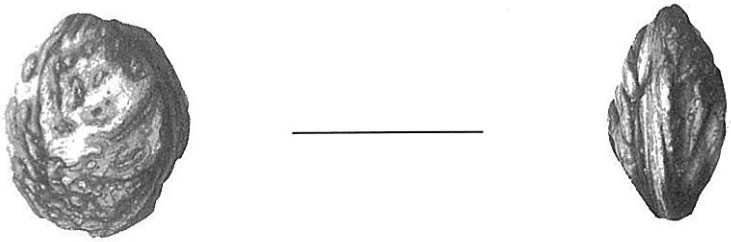
1

2

3



4



5

2　佐堂遺跡から出土したウリ科植物の遺体について

大阪府立大学農学部
藤　下　典　之

ウリ科栽培植物の種子は、イネ、クルミ、モモなどとともに有史前から近世にいたる日本各地の遺跡から高い頻度で出土している。1984年6月末現在、その遺跡数はヒョウタン仲間 *Lagenaria siceraria* STANDL. が108ケ所、メロン仲間 *Cucumis melo* L. が103ケ所に達し、筆者はすでにそれぞれの60と66遺跡から出土した種子を計測調査し報告してきた（参考文献）。大阪府下における出土と計測遺跡数は、今日までに両方の植物を合せて36と31遺跡にのぼり、ともに全国の中で最も多い。今回とりあつかった府下・八尾市在の佐堂遺跡から出土したウリ科植物の遺体の特徴は、①いままで2桁以上の種子数の出土がなかったトウガン *Benincasa hispida* COGN. の種子が、平安後期の井戸掘形埋土の中から69粒出た、②既往の調査では、ヒョウタン仲間の出土種子はほとんどの遺跡において非常に小型で、本邦の現生の栽培種に近い長さが14㎜以上の大型種子は、4遺跡から出土しているだけであったが、当遺跡の古墳時代前期の2か所の遺構から、小型種子にまざって大型種子が30粒あまり出た、③湿潤な住居趾に近い遺構からは、ヒョウタン仲間とメロン仲間の種子が伴出する例が多いが、本遺跡からは後者の種子が1粒も出なかった、④奈良～平安前期の溝から若干尖頭ぎみの球形をしたヒョウタン仲間の果皮片が出た、ことなどである（第1表）。

ここには、佐堂遺跡[注1]から出土した上述のような特色のあるウリ科植物の遺体について調査した結果をまとめたが、原稿締切りの期日が別の長編論文2編と重なり、充分な考察をする余裕もなく、そのうえに脱稿がおくれ、編集者に大変迷惑をかけてしまった。紙面を借りておわびしたい。

計測方法は、従来から筆者がとってきたものと同じで、種子を室内で充分に自然乾燥させ、吸

第1表　佐堂遺跡より出土したウリ科植物の遺体

整理No.	出土遺構	発掘日	推定時代	植物の種類		種子数 正常[b]	奇形	しいな	部分欠損	種子の大きさ 平均長 ㎜	平均幅 ㎜	長さ/幅	伴出種子
7	SAD-A19E, SE403 井戸掘形埋土	811109	平安後期	トウガン種子		69	0	0	0	10.60	6.32	1.67	モモ センダン
34	SAD-Ⅱ-C-7,107+47 CW-2, SK6010内	820109	古墳前期	ヒョウタン仲間種子[a]	大型	25	0	0	2	14.68	5.82	2.58	モモ
					小型	25	2	0	4	10.83	5.48	1.98	
					合計	50	2	0	6	12.97	5.65	2.29	
41	SAD-Ⅱ-C-7,104+47 SK6010(東西筋掘り)	820109	古墳前期	ヒョウタン仲間種子[a]	大型	5	7	0	4	14.1	6.1	2.31	――
					小型	25				10.82	5.51	1.96	
					合計	30	7	0	4	11.36	5.61	2.02	
				キカラスウリ種子		1	0	0	0	14.3	8.3	1.72	
4	SAD-1, Aトレンチ, 12-N SD305	820324	奈良～平安前期	ヒョウタン仲間果皮片		――				――			――

a 肉眼で大型、小型にわけたのちに計測した。　b 正常数＝計測数

水前の大きさに復元してから、正常、奇形、‘しいな’(empty seed)、部分欠損の各種子にしわけして種子数をかぞえたのち、正常種子全粒について、長さと幅を0.1㎜まで読みとれるルーペで計測した。

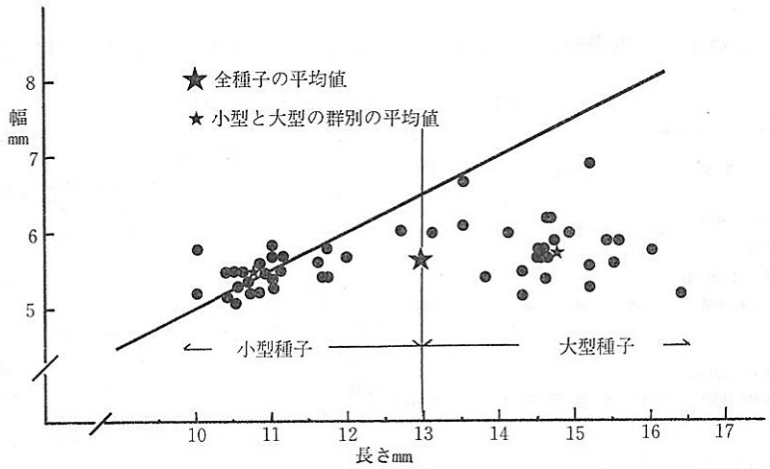
トウガンの出土種子については、いままで別の研究者によってカボチャまたはニホンカボチャと誤まった同定がなされた例が多い。そこで筆者は、既往の報告書に記載されている遺体の再調査を考えたが、出土数がヒョウタン仲間やメロン仲間のように多くなく、常に1～数粒と少ないために、遺体はほとんど逸散しており、たとえ保存されていても、種子の微細形態を観察するための非破壊的手法がみつからないために放置していた。今回は69粒も出土があったので、その一部を走査電顕にかけてカボチャとの微細な形態の差をも明らかにする予定であったが、上記のように時間がとれなかったので、本報では外部形態からだけの同定に止どめ、担当者の了解をえたうえで、後日、時間をかけて観察比較したいものと考えている。

出土種子数

トウガンの種子こそ他の遺跡には例のなかった69粒も出土したが、ヒョウタン仲間の全体での109粒は、遺跡当たりの出土数としては少なかった。両植物とも現生の一果に内蔵される種子数に対比しても少なく、後述するようにヒョウタン仲間では2遺構とも同じ仲間の別の種類（果実）の種子を伴出していたことから考えると、一種類当たりの種子数としてはさらに少ないことになる。

出土種子の大きさと形態からみた種類の同定

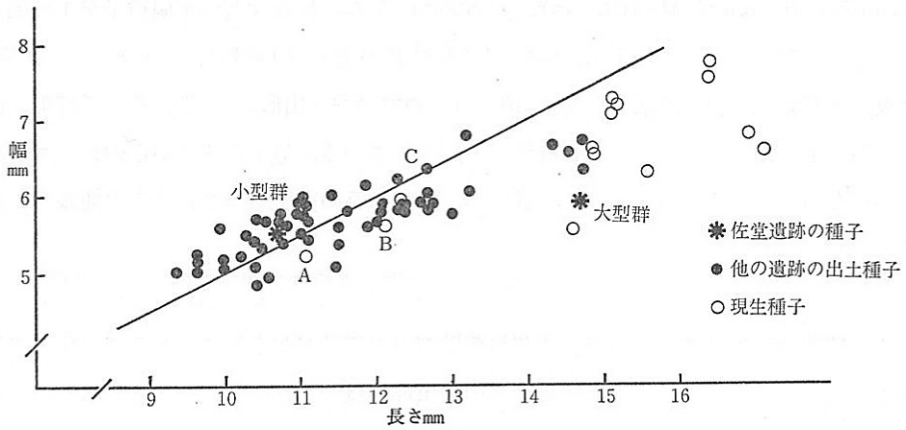
№7：平安後期の井戸掘形埋土から出土した69粒は、ニホンカボチャにまちがわれ易い形態をしているが、発芽孔の大きさや位置、種子側面の形態などから、トウガンと同定した（図版―1の写真1）。ただし、トウガンはメロン仲間やヒョウタン仲間と違って、植物分類学上は1属1種で種内に変種もなく、南方種（果実表面に最後まで毛茸のあるもの）と中国種（成熟すると無



第1図　古墳時代前期の穴（SK6010）より出土したヒョウタン仲間の種子№34の大きさの変異
斜めの直線は長さ/幅＝2を示し、斜線より上方は太身、下方は細身の種子となる

毛粉白となるもの）に分ける人がいる程度であるが、果実の形態はさまざまで、球型、枕型（直方体に近い）や一果が30Kg以上にもなるタイワンの長円筒型もあり、種子の形態にも変異がある。しかし、欧米諸国で重要な野菜にならなかったこともあって研究が進まず、種子の形態から果実の形を推定することはまだできない。トウガンは沖縄、タイワンから東南アジアや中近東にかけては需要の多い野菜であり、特に貯蔵性が高い点でも重宝な種目である（冬の間貯蔵できるとの意からの冬瓜がなまってトウガンになったとも言う）。ニホンカボチャの原産地はメキシコ、中央アメリカであるが、トウガンのそれはジャワを中心とした熱帯アジアとされており、平安時代（本草和名）より冬瓜、加毛宇利（カモウリ）の記載があることなどから、筆者は日本でも早くから栽培・利用されていたものと考えている。しかし、現在までのところ、弥生1（菜畑）、奈良・平安4（平安京、境田、城輪柵、布留）、中世1（鳥羽）、江戸1（一ツ橋）の合計7遺跡から、1～数粒単位で出土している程度である。成熟果を食用にすることが多いので、成熟した種子がもっと高い頻度で、しかも量的にも多く出土してもよいとみられるが、不思議なくらい少ない。しかし散発的ではあっても出土していることからすれば、トウガンの栽培・利用があったことはまちがいなく、種子を何らかの目的に利用し残さなかったのかもしれない。いずれにせよ、佐堂遺跡から始めてまとまった数の69粒も出土した事実は、トウガンの本邦への渡米・伝播の時期の裏づけやその経路の推定のうえでこれから有意義なものとなるだろう。

№34：古墳時代前期の穴から出土したヒョウタン仲間の正常種子50粒は、一見して大型と小型の2群に分けられた（図版―1の写真2）。1粒1粒の大きさを示したのが第1図であるが、この2群はそれぞれの変異のひろがり状態から、違う種類（果実）に由来したものと考えられる。大型群に入れた25粒の平均長14.68㎜は、既往の遺跡別出土種子の大きさ（第2図）からみると、8c中期～9cの坂尻遺跡（静岡）の14.71㎜、古墳時代後期の縄手遺跡（大阪）の14.54㎜、鎌



第2図　ヒョウタン仲間の出土遺跡別にみた種子の大きさ

佐堂遺跡は№34の小型群と大型群の平均値を示し、他の遺跡はそれぞれの計測種子全部の平均値を示した。Aはタイ奥地のAKHA族の栽培ヒョウタン、Bはセンナリヒョウタン、Cはナイジェリアの野生型ヒョウタン、斜めの直線は長さ/幅＝2を示し、斜線より上方は太身、下方は細身の種子となる。

倉時代の鳥羽遺跡（京都）の14.60㎜、中世の水原城館趾（新潟）の14.17㎜とならぶ本邦最大級の出土種子である。さらに№34の大型種子は長さ／幅の平均値が2.58で（第１、２図の長さ／幅＝2.0を示す斜めの直線より下右に分布する）、既往の出土種子の中では最も細身であった。種子の形態（細身と太身）と果実の形との関係については、翁橋遺跡（堺市1984）の報告書の中で若干ふれたが、数少ない出土完形果実内の種子の形態でみる限りにおいては、球型果実の種子は細身、フラスコ型および腰のくびれたヒョウタン型果実の種子は太身という関係がみられる。しかしこの関係は現生のものではあてはまらず、果実の形に関係なく種子は細身である（第２図）。このような実情から、№34の大型種子の強度な細身の種子がどのような形をした果実のものであったか速断できない。残り半数の25粒の種子は、平均長が10.83㎜、平均幅が5.48㎜で既往の遺跡出土種子全体の平均値に近い小型を示し、現生の栽培種の中で最も果実の小さい‘センナリヒョウタン’やナイジェリアの野生型のヒョウタンの種子よりも小さく、最も種子の小さいタイ奥地のAKHA族の装身具用ヒョウタン（未発表）に近いものであった（第２図）。筆者は従来から出土種子の大きさを遺跡ごとの平均値で示すやり方は、資料内容（構成する種類）を十分解析・表現できないので、遺伝的背景と環境による変動をも考慮しながら、大きさの変異を重視しなければならないとしてきた。佐堂遺跡出土のヒョウタン仲間の種子については、この№34と後述の№41も含めて、大きさの平均値のみを報告していたのでは、種類の同定を始めとして各種の推考に大きな誤まりを来たす格好の事例といえよう（第１図の小型、大型各種子群の平均値を示す小さい星印と、両群を一緒にした平均値を示す大きい星印の位置に注意）。

№41：古墳時代前期のＳＫ6010（東西筋掘り）から出土したヒョウタン仲間の種子もまた、大型と小型の２群に容易に分けられ（図版―１の写真３、第１表）、それぞれの平均長、平均幅については、№34と同様な内容を示した。また、この遺跡からはウリ科の野生植物のキカラスウリ *Trichosantes kinilowii* MAXIM. var. *japonica* とみられる大型の平偏種子が１粒出土している（図版―１の写真３）。この種類の種子は弥生時代の土居窪（愛媛）、タテチョウ（島根）、池上（大阪）、板付（福岡）、湯納（福岡）、10～11ｃの城輪柵（山形）、中世の草戸千軒町（広島）の各遺跡から１～25粒（ほとんどが５粒以下）出土している。地下の塊茎からのデンプン利用や種子の薬用もあったのであろうか。単に機械的に野生状態の種子がまぎれこんで埋蔵された可能性もある。

№４：奈良～平安前期の溝からヒョウタン仲間の１果に由来すると思われる果皮の破片が出土している。破片の厚みは２～３㎜で、底部や側壁部の大部分が欠損していたので、果形の復元は不可能であった。しかし、果形の推定に役立つ頭頂部が残っており、土圧で変形もしているが、その部分からみると、やや尖頭の球型（図版―１の写真４）のようであり、果皮片の厚みが上述のように薄いので大型の果実ではなさそうである。同じ遺構から種子が伴出していないので、前述の№34や№41のヒョウタン仲間の出土種子との関連は不明である。

本文の中でヒョウタンまたはメロンと表現せずに、仲間の字句をつけたのは、両者には分類学上の種（species）の下に、形態や生態の違う植物学上の変種（variety、メロン仲間ではネットメロン、モモルディカメロン、シロウリ、マクワ、雑草メロンなど40をこえ、ヒョウタン仲間ではヒョウタン、ユウガオ、フクベ、センナリヒョウタンなど）があるが、種子の形態で変種を識別することは不可能に近いので、種全体を一括して仲間として扱ったのである。一方、トウガンは１属１種で変種もないのでトウガンをあてた。

〔参考文献〕

藤下典之　1977　「草戸千軒町遺跡および尾道中世遺跡より出土した *Cucumis melo* L. の種子について」『草戸千軒町遺跡　1975』55～62. 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所

藤下典之　1980　「池上遺跡より出土した *Cucumis melo* L. の種子について、特に現生のメロン仲間の種子および他の遺跡から出土した種子との対比」『池上・四ツ池』6、105～124. 大阪文化財センター

藤下典之　1980　「本邦各地の遺跡から出土したウリ科植物の遺体について」『考古学、美術史の自然科学的研究』223～233. 日本学術振興会、東京

藤下典之　1982　「本邦各地の遺跡から出土したヒョウタン仲間（*Lagenaria siceraria* Standl.）の遺体について」『近畿作育会報』27、40～45

藤下典之　1983　「菜畑遺跡から出土したメロン仲間とヒョウタン仲間の種子について」『菜畑』40～48. 唐津市教育委員会

藤下典之　1983　「メロン：植物としての特性」『農業技術大系』4、1～44. 農文協、東京

藤下典之　1983　「メロン仲間（*Cucumis melo* L.）の系統分化と多様性」「育種学最近の進歩』24、3～21. 日本育種学会編、啓学出版、東京

藤下典之　1984　「出土遺体よりみたウリ科植物の種類と変遷とその利用法」『古文化財の自然科学的研究』628～644、古文化財編集委員会編、同朋舎出版、東京

藤下典之　1984　「翁橋遺跡より出土したウリ科植物の遺体」『翁橋』101～108. 堺市教育委員会

藤下典之　1984　江上AおよびB遺跡から出土したヒョウタン仲間 *Lagenaria siceraria* Standl. とメロン仲間 *Cucumis melo* L. の遺体について『北陸自動車道遺跡調査報告書，上市町木製品・総括編』107～118　上市町教育委員会

寺沢薫・寺沢知子　1981「弥生時代植物質食料の基礎的研究」『橿原考古学研究所紀要、考古学論巧』51～129

注１　佐堂遺跡の調査はその１、その２に分けて実施されており、ここでとり上げられた№34、№41ウリ科植物種子の出土遺構ＳＫ6010については『佐堂（その２）－１』を参照されたい。

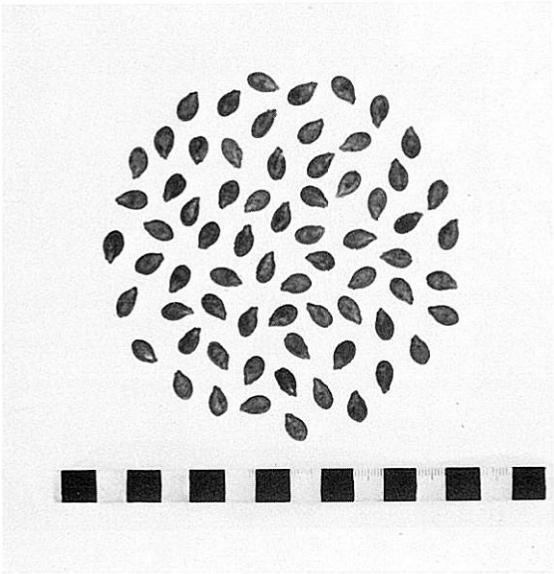


写真１

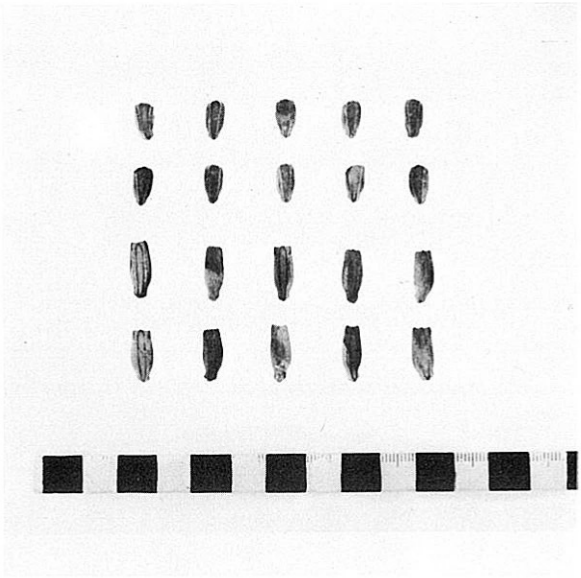


写真２

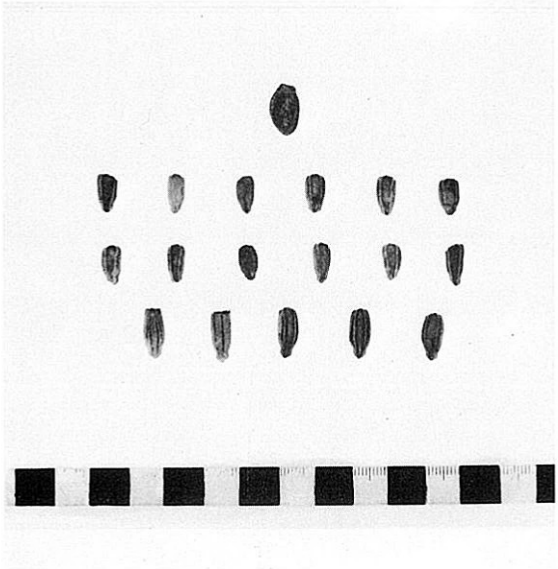


写真３

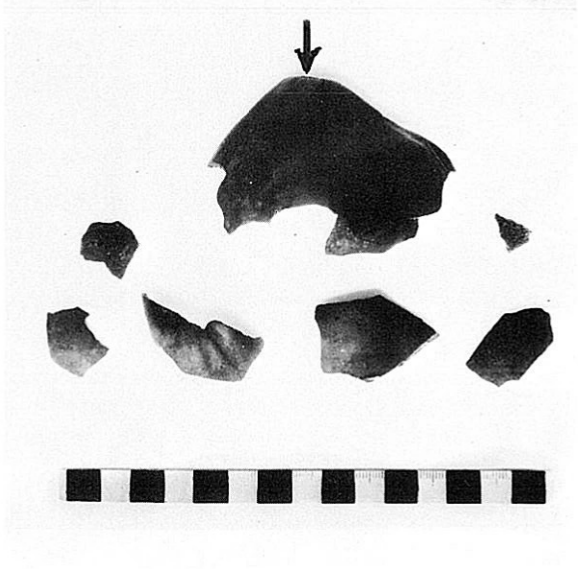


写真４

写真１．平安後期の井戸堀方埋土から出土したNo.7の69粒のトウガンの種子

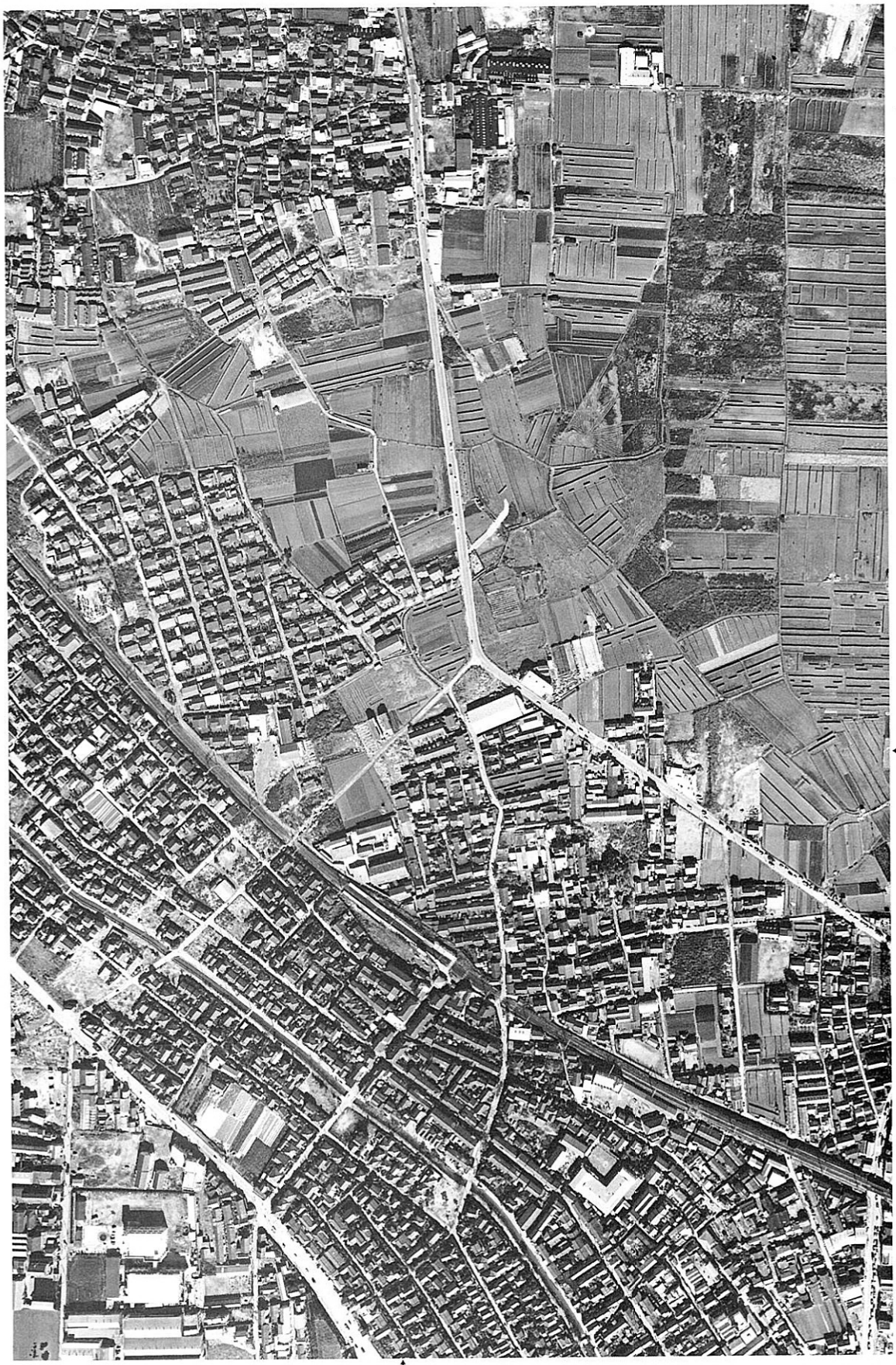
写真２．古墳時代前期の穴から出土したNo.34のヒョウタン仲間の小型種子（上の２列、第１図の左半分）と大型種子（下の２列、第１図の右半分、非常に細身である。）

写真３．古墳時代のＳＫ6010（東西筋掘り）から出土したNo.41のキカラスウリ（最上列）、ヒョウタン仲間の小型種子（２、３列目）と大型種子（最下列）

写真４．奈良～平安前期の溝から出土したNo.4のヒョウタン仲間の果皮片、矢印の位置は果梗のつく頭頂部（やや尖頭の球型果実か？）

図　　版

図版一　佐堂遺跡周辺航空写真



←矢印の交点付近が佐堂（その1）調査区

（1967年11月撮影）

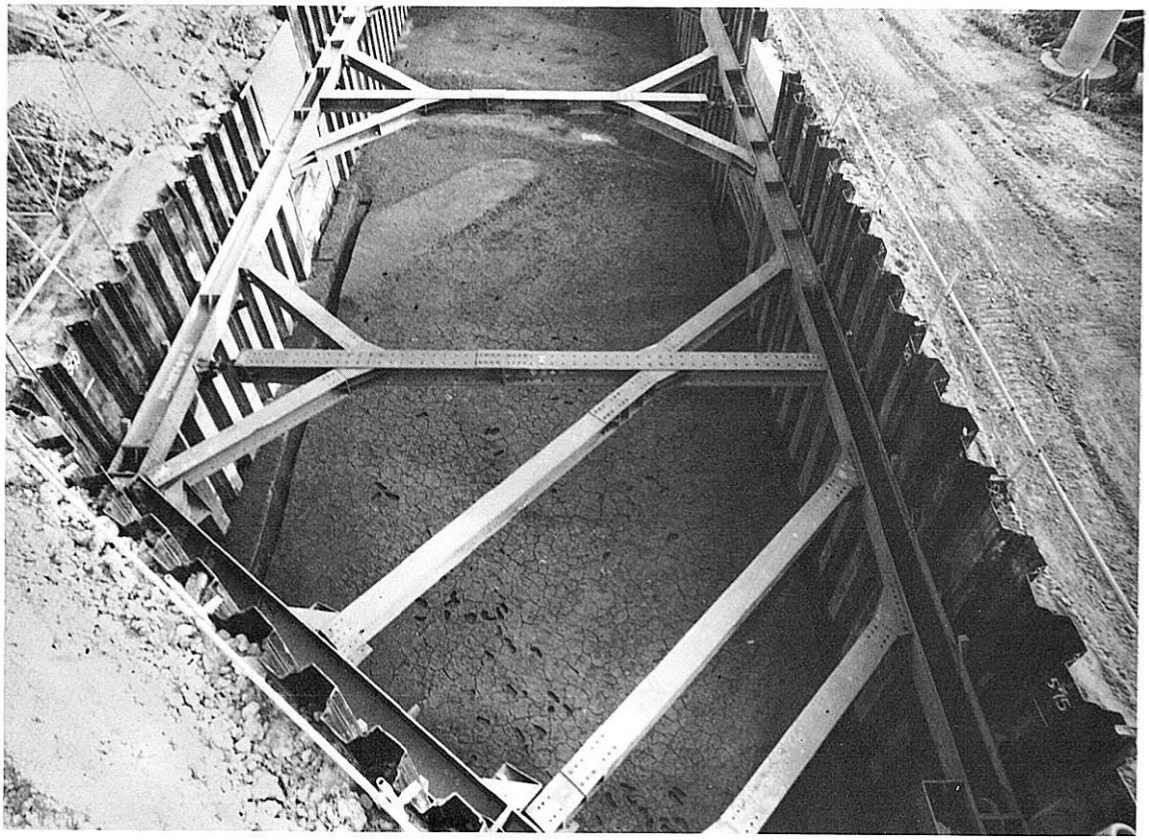
図版二　佐堂遺跡調査区航空写真（Aトレンチ）

図版二　発掘前全景

南より

北から

図版四　弥生時代中期遺構面



Aトレンチ　SA101・SD101（北より）

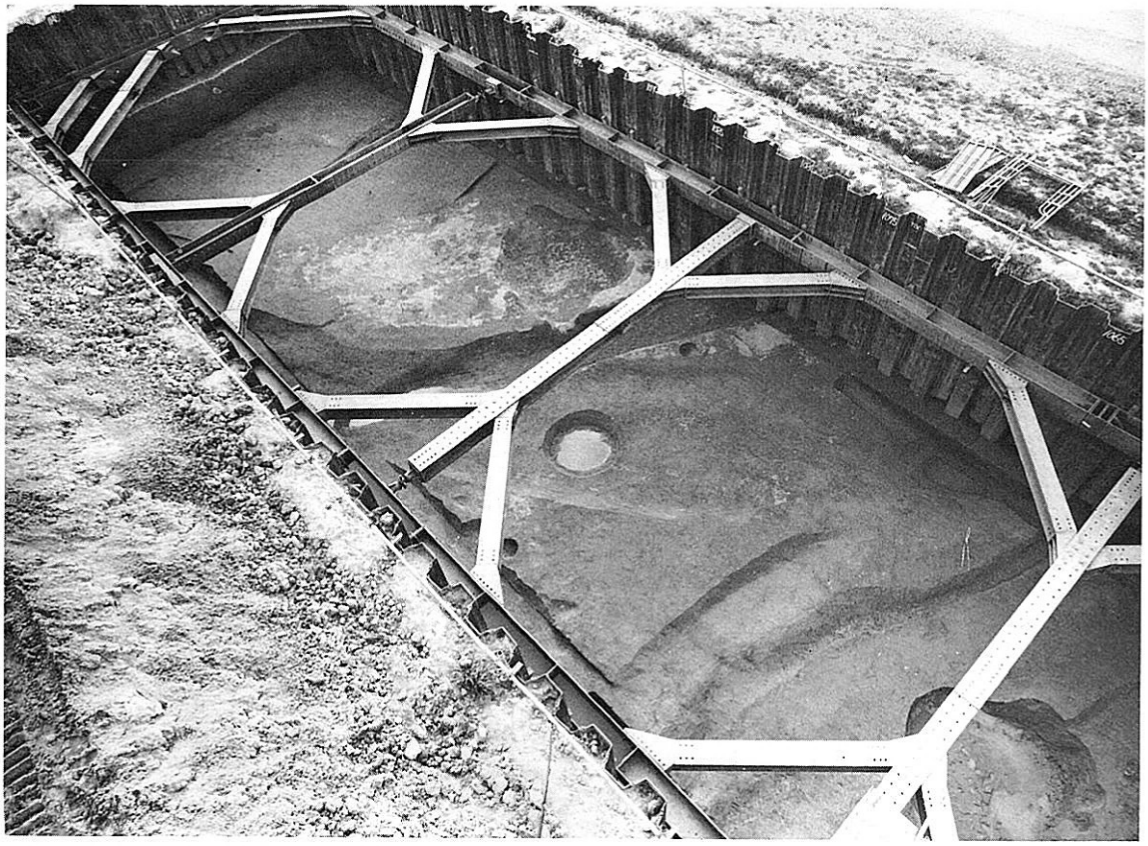
Aトレンチ　SA101・SD101（北より）

図版五　弥生時代中期遺構面

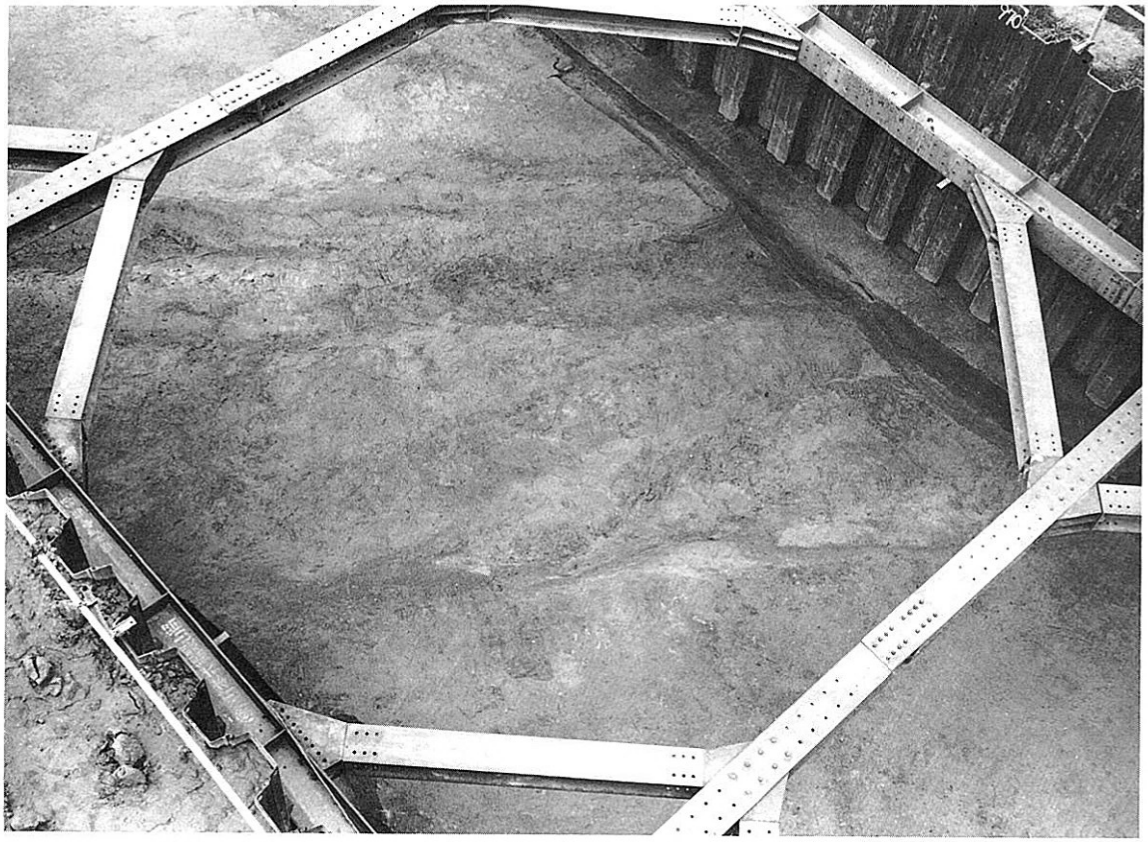
Aトレンチ　水田面　ＳＡ102～ＳＡ106（北より）

３Aトレンチ　足跡面（北より）

図版六　弥生時代遺構面

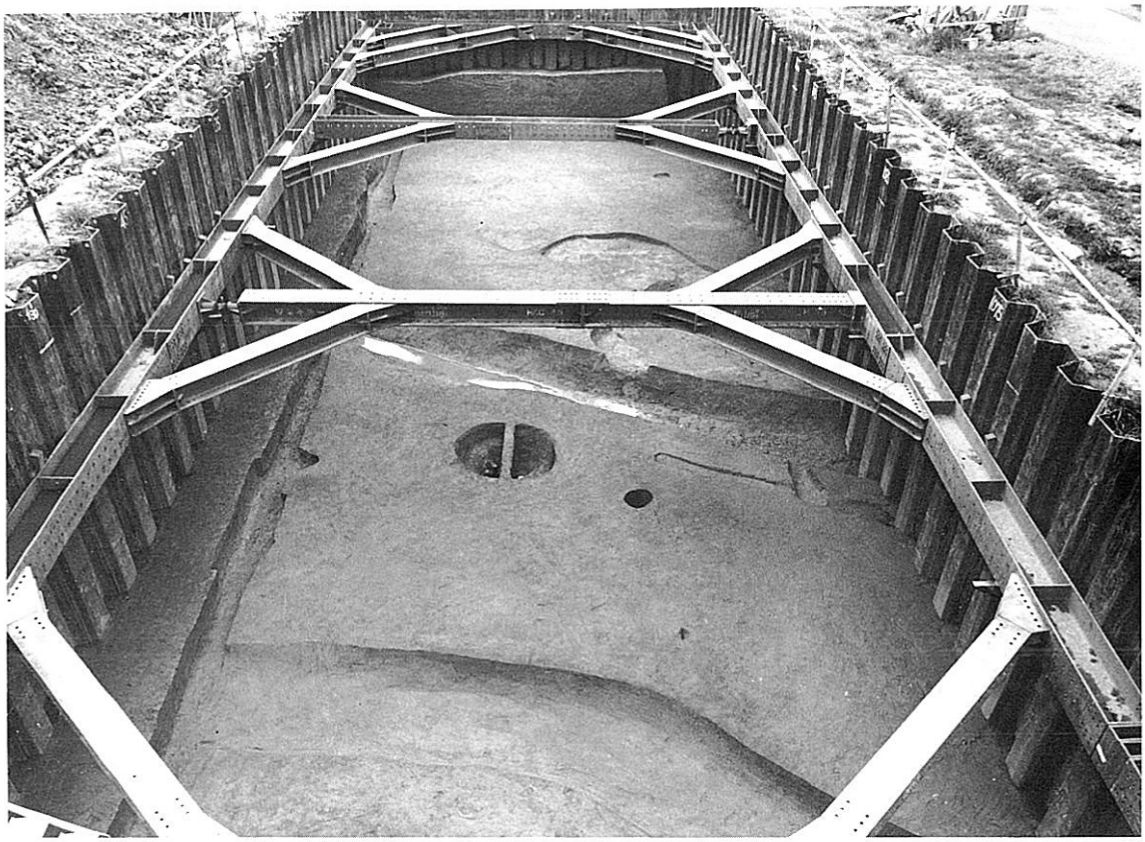


Aトレンチ　溝状落ち込み（東より）



Aトレンチ　自然流路（東より）

図版七　古墳時代（布留式併行）遺構面

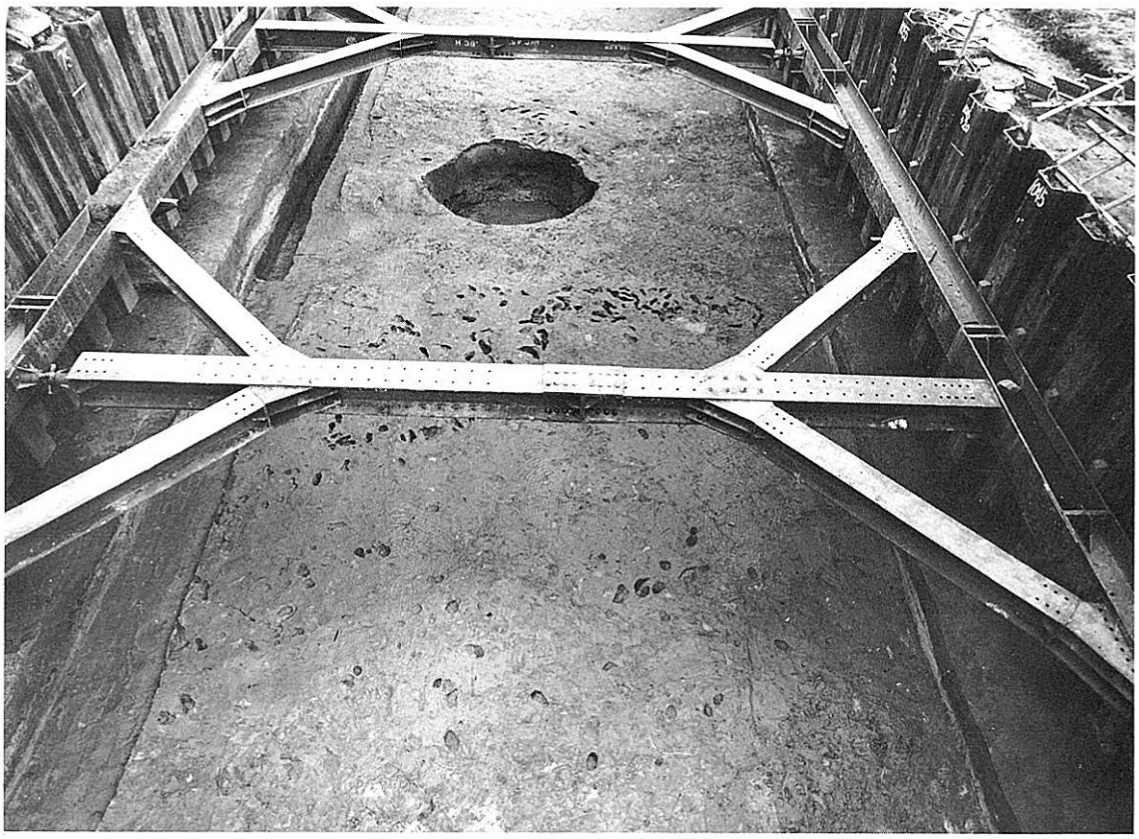


Aトレンチ　SD211・SE201・SD212（北より）

Aトレンチ　SE201

図版八　古墳時代中・後期遺構面

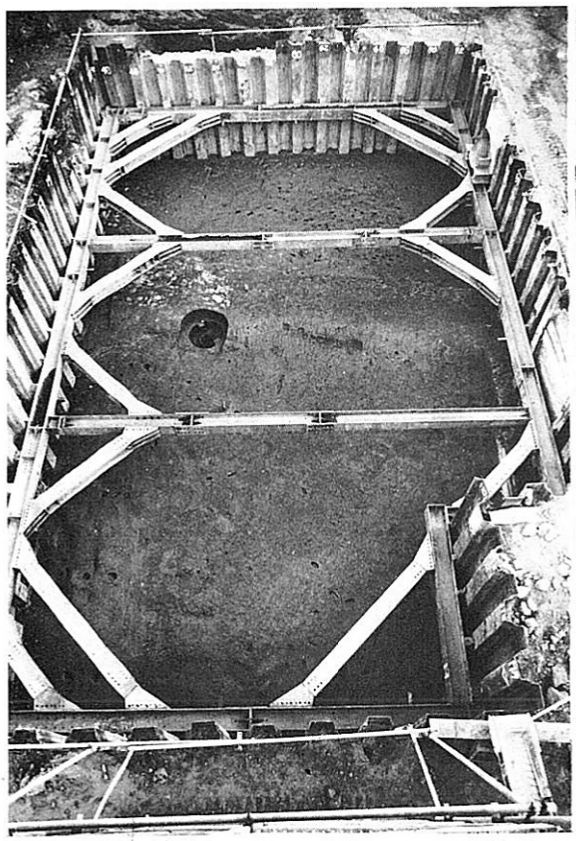
Aトレンチ　SA201（南より）



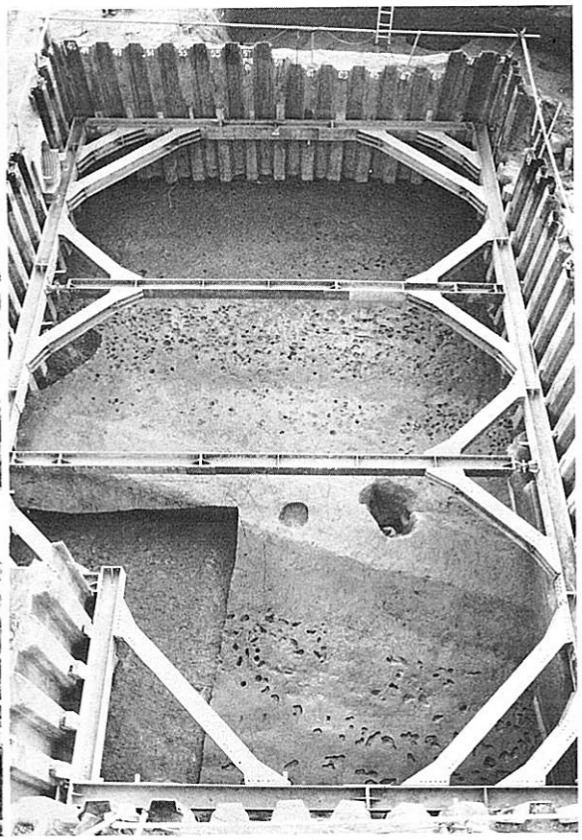
Aトレンチ　SA207（北より）

図版九　古墳時代中・後期遺構面

8Aトレンチ　SD213（南より）

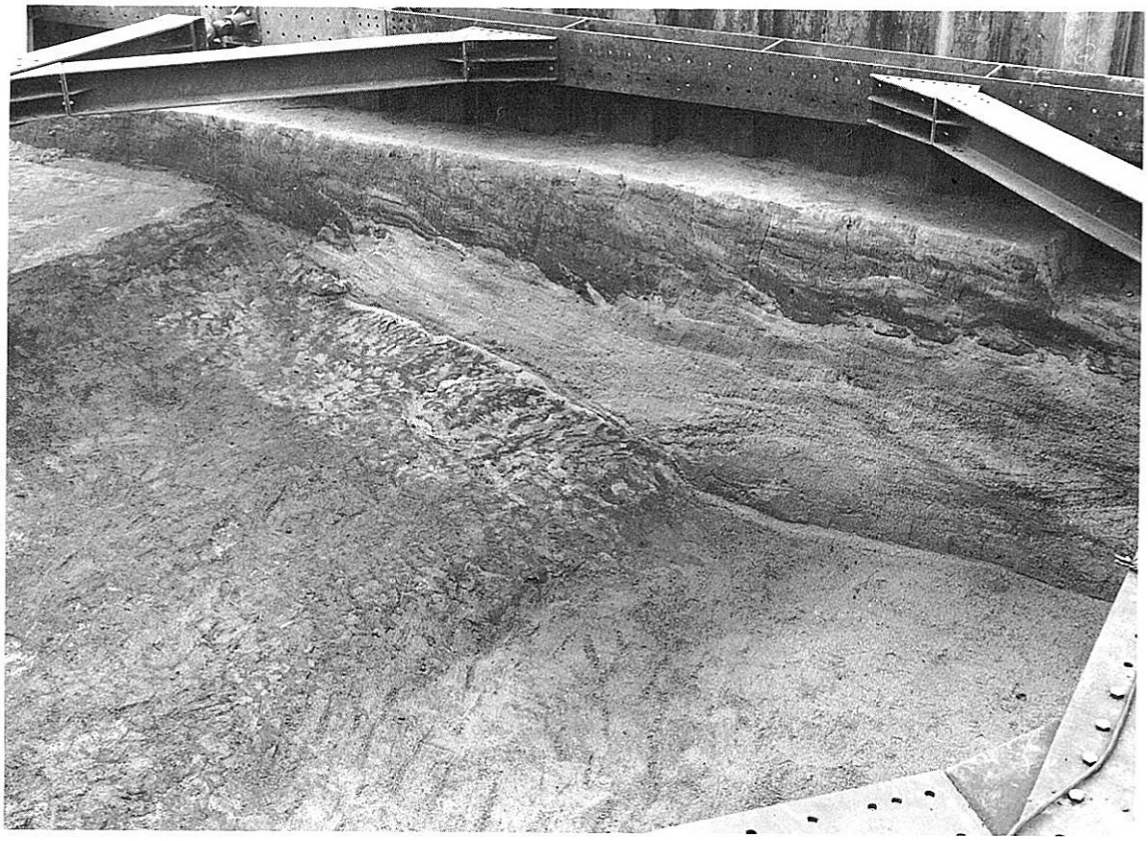


3Aトレンチ　SA202（北より）

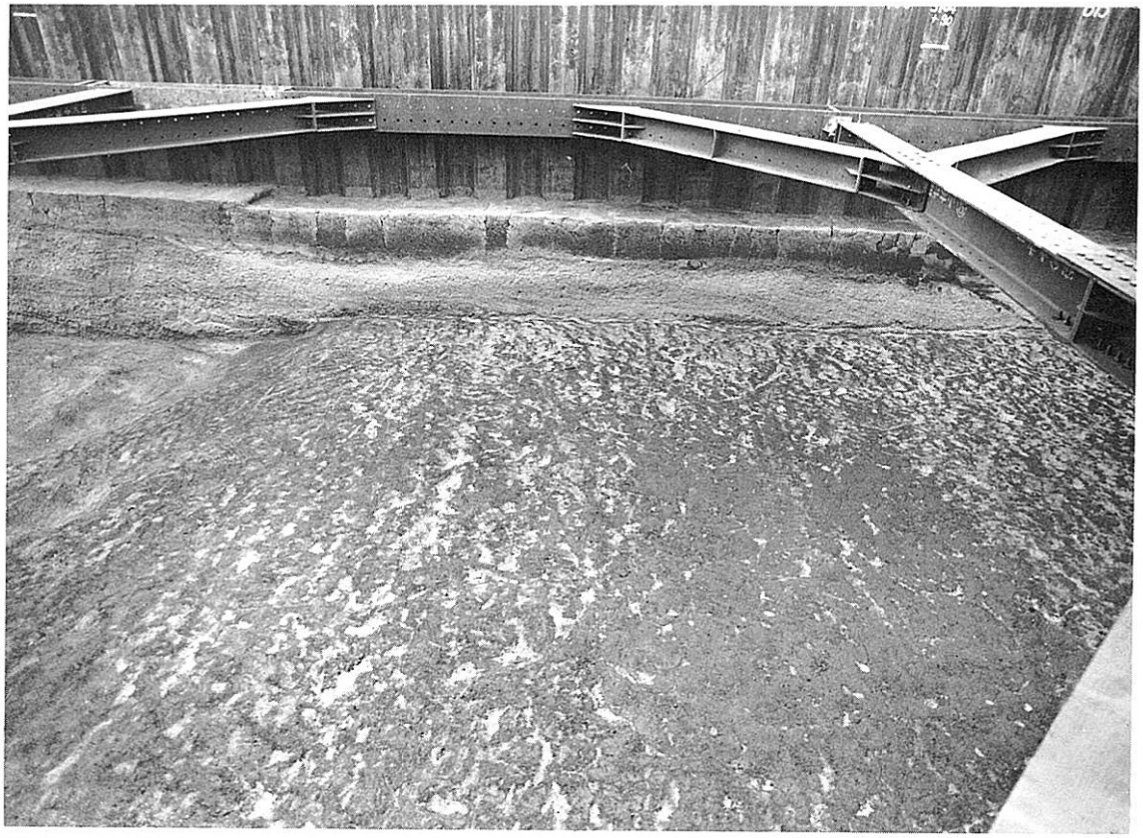


2Aトレンチ　SA205（北より）

図版一〇　奈良～平安時代遺構面

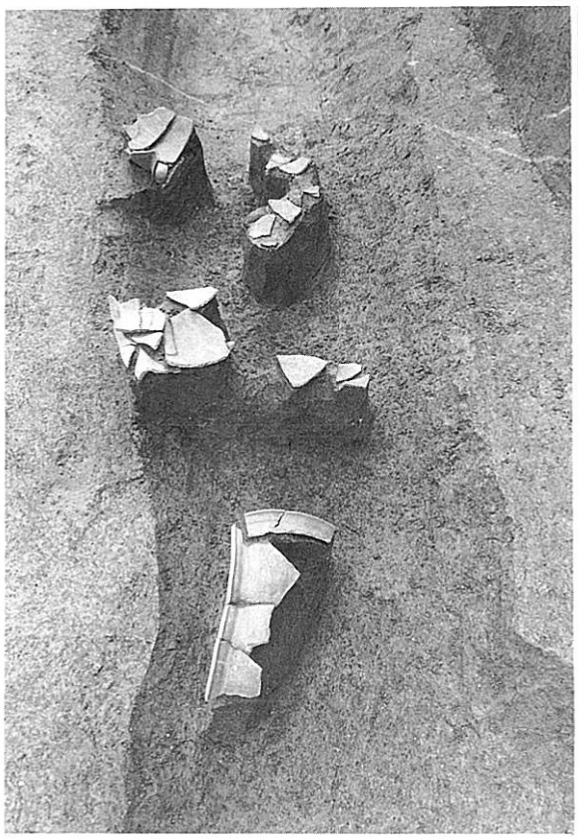


Aトレンチ　NR302



Aトレンチ　NR302

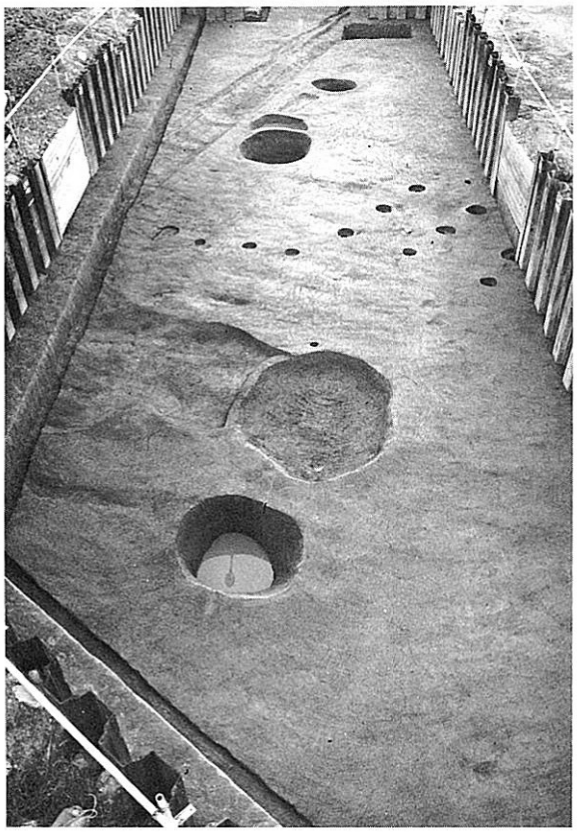
8Aトレンチ　SD302（東より）



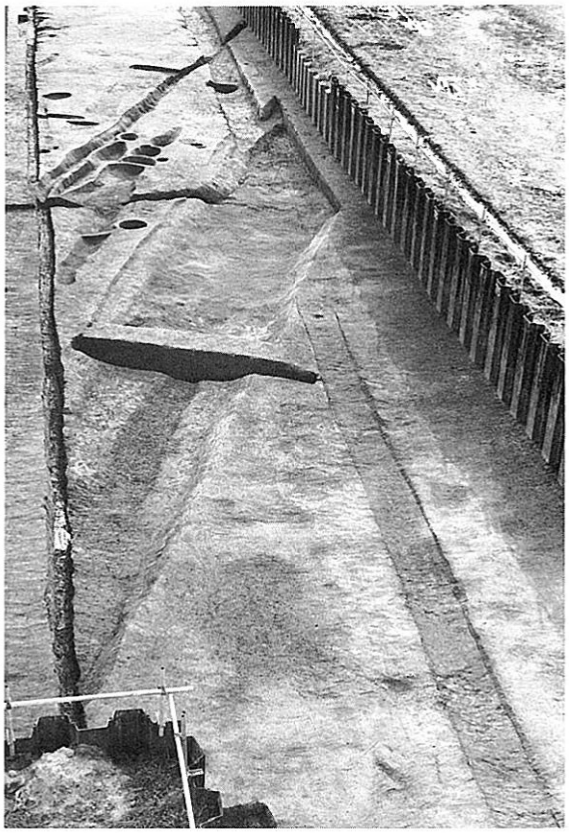
8Aトレンチ　SD302遺物出土状況

Aトレンチ　SX301

図版一二　平安後期～鎌倉時代遺構面



Aトレンチ　北端部（北より）



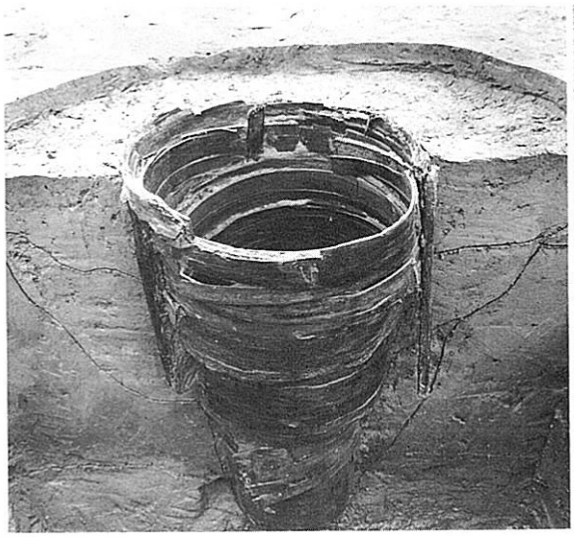
Aトレンチ　中央付近（北より）

1．Aトレンチ　SK402 馬歯出土状況
2．Aトレンチ　SB401
3．Aトレンチ　SK408
4．Aトレンチ　SE414

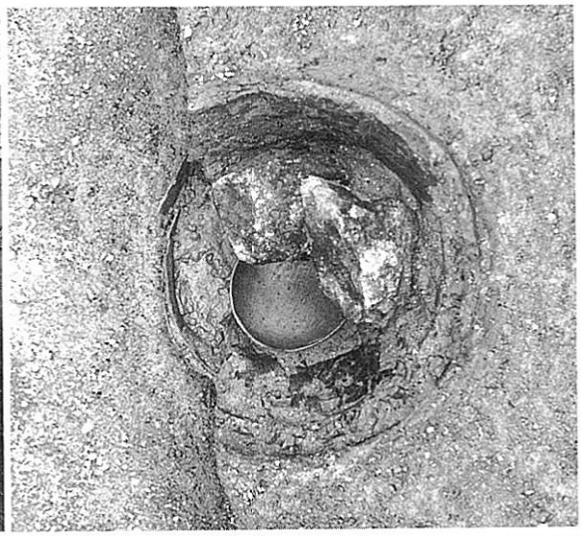
図版一三　平安後期～鎌倉時代井戸

S E401

S E412



S E410

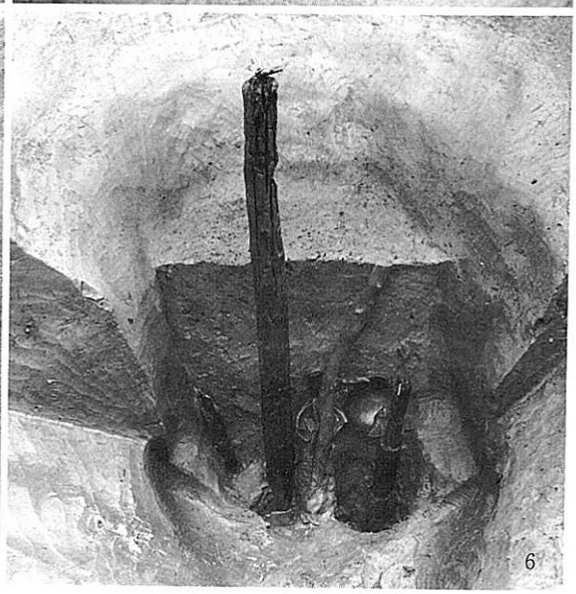


S E417

S E408

S E427

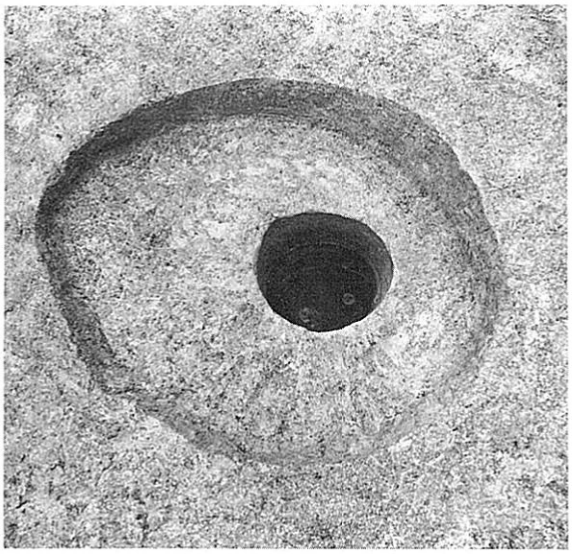
図版一四　平安後期～鎌倉時代井戸



1．ＳＥ420　2．ＳＥ416
3．ＳＥ416・417・418・420・421

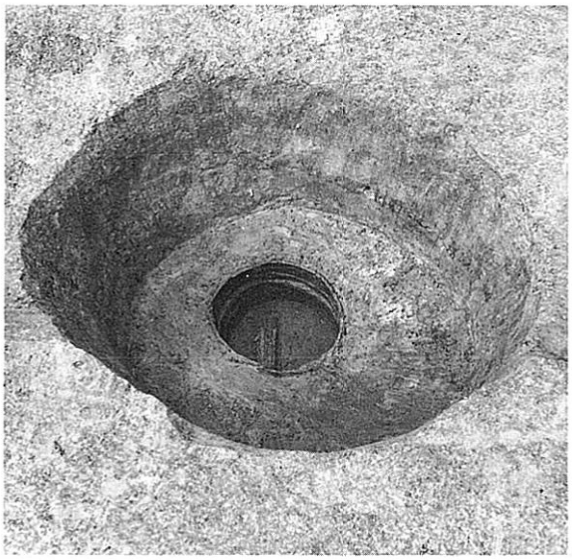
4．ＳＥ415 土層断面図　5．同　上 遺物出土状況
6．同　上 遺物出土状況

図版一五　平安後期～鎌倉時代井戸



ＳＥ404　土器出土状況
ＳＥ404

ＳＥ403　種子出土状況
ＳＥ403



ＳＥ402

ＳＥ411

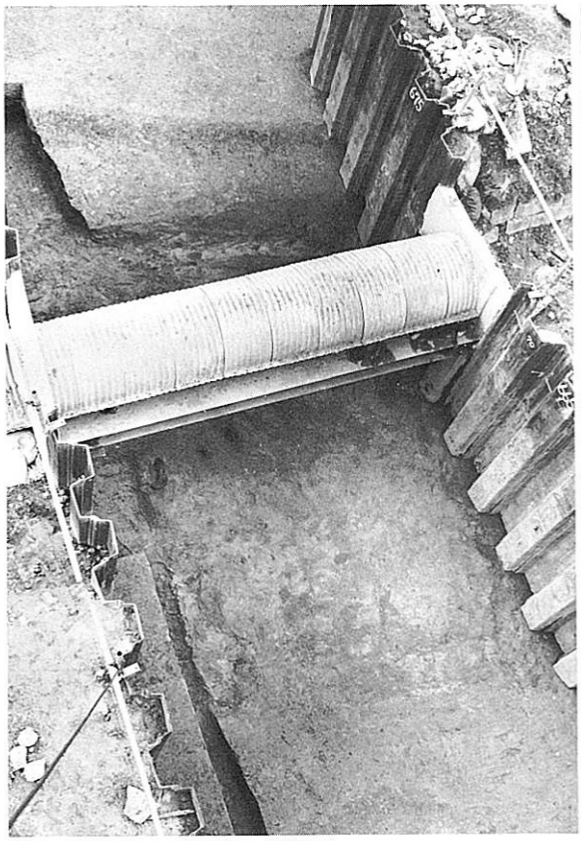
図版一六　平安後期～鎌倉時代遺構

S K418

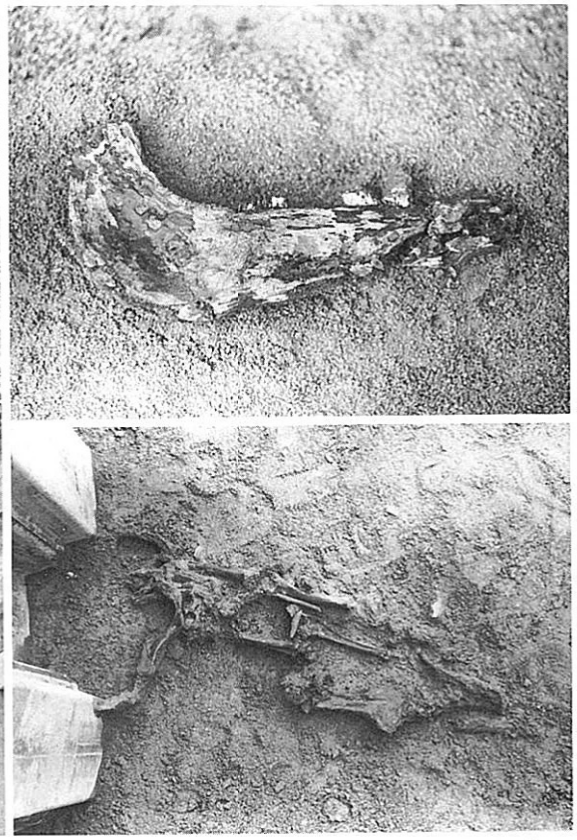
S X401

S X402

図版一七　平安後期～鎌倉時代溝



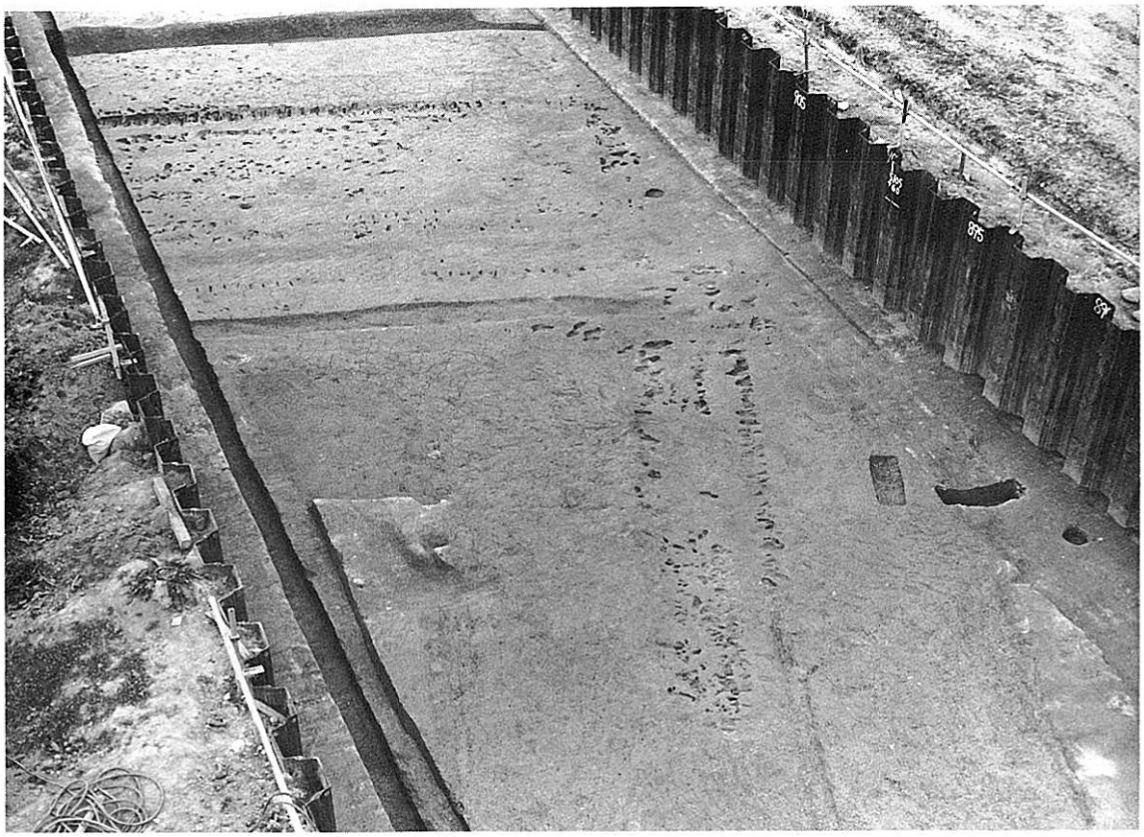
Aトレンチ　SD445（北より）



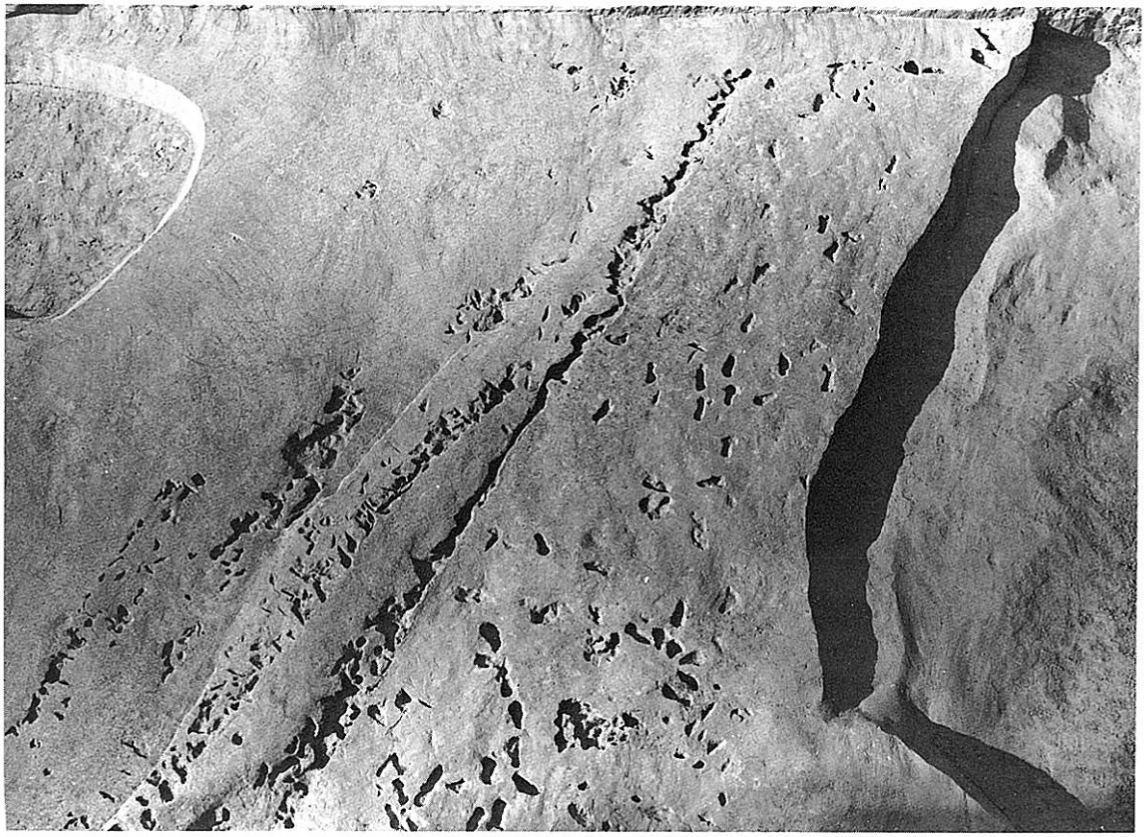
Aトレンチ　SD445 馬骨出土状況

2Aトレンチ　SD445（西より）

図版一八　中世水田面

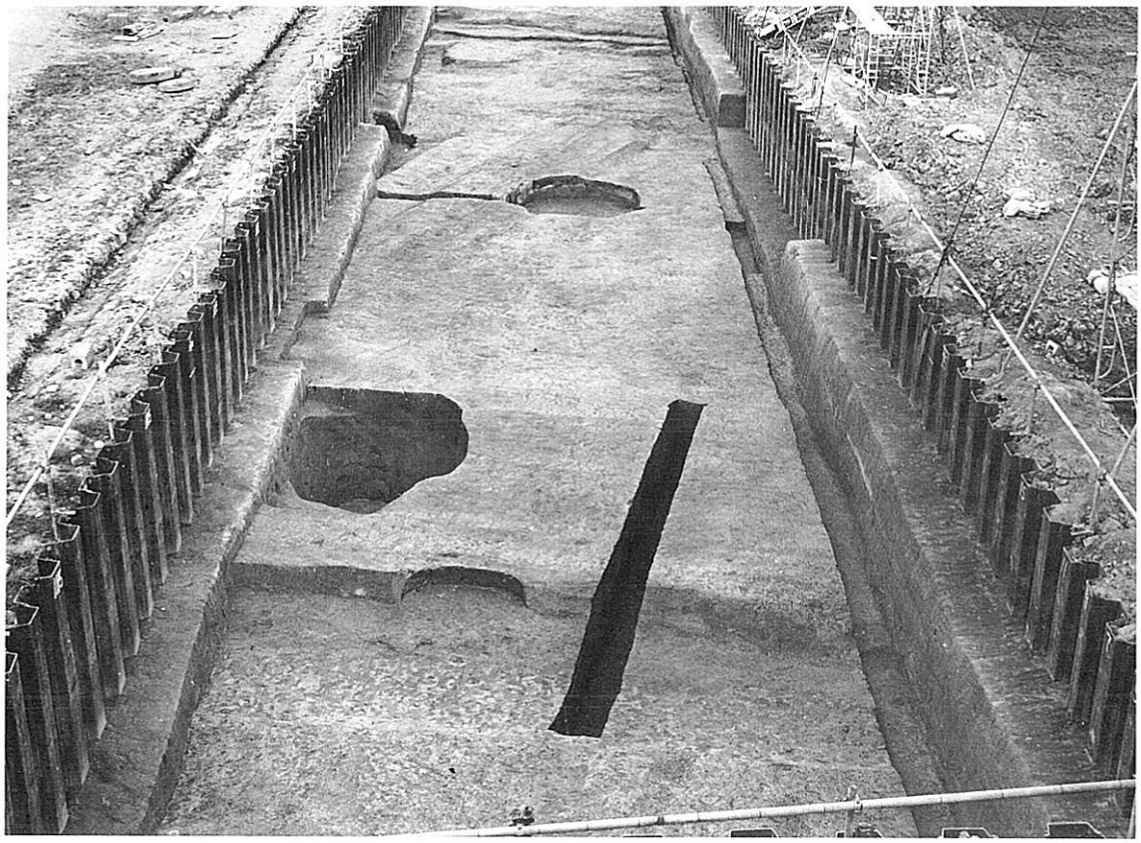


Aトレンチ　畦畔・鋤跡・足跡



Aトレンチ　鋤跡・足跡

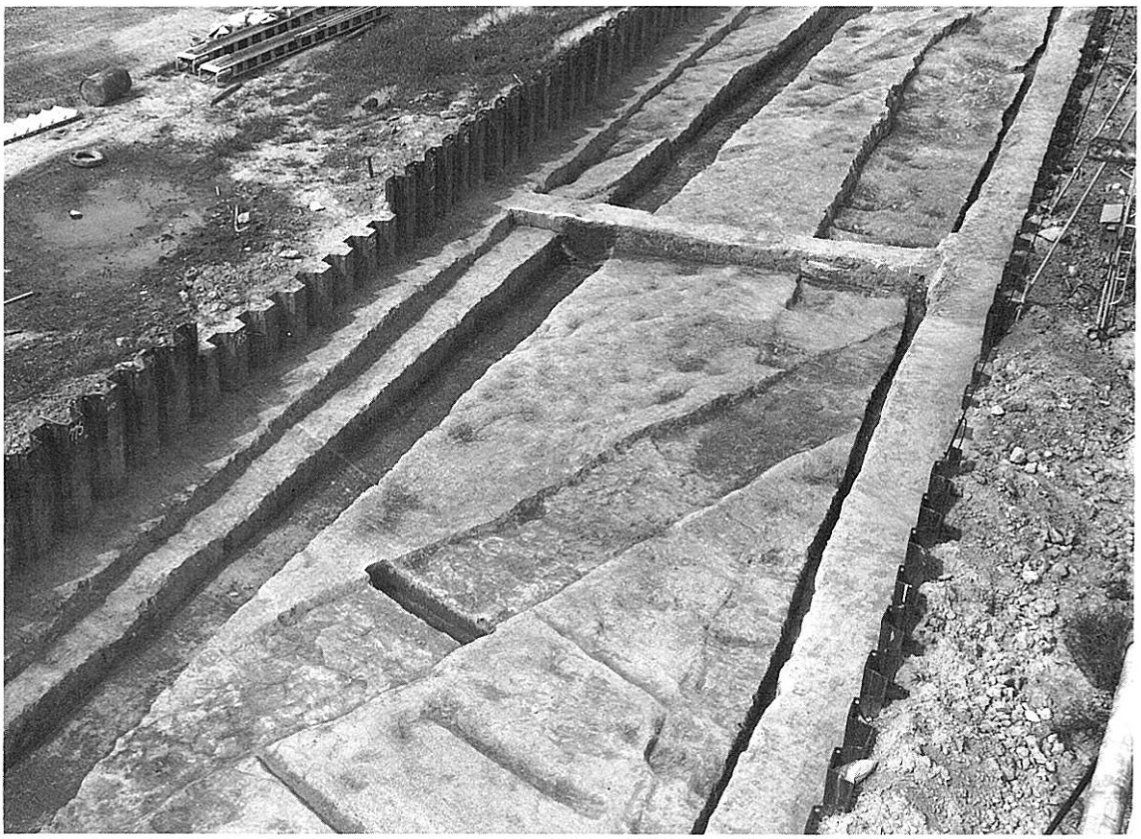
Aトレンチ　中央部　畦畔　SA401、SA402（北より）



Aトレンチ　南端部

図版二〇　中世・近世遺構面

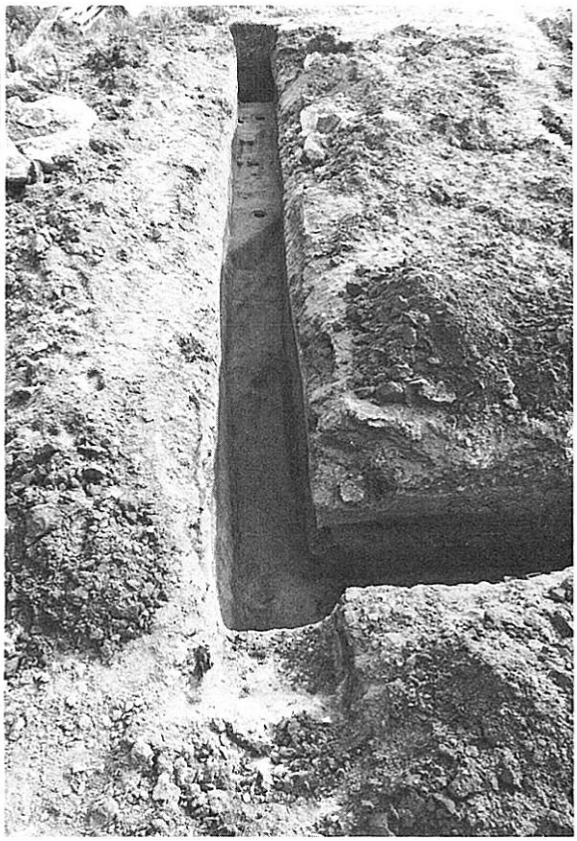
Aトレンチ　北端部（北より）



Aトレンチ　中央付近（東より）

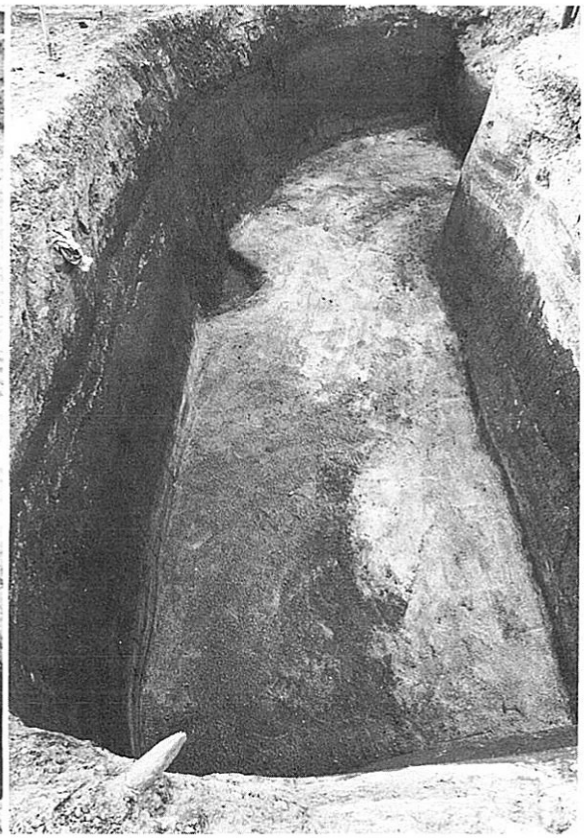
図版二一　工業用水管接続部及び水道管・用水路切り替え部

工業用水管接続部



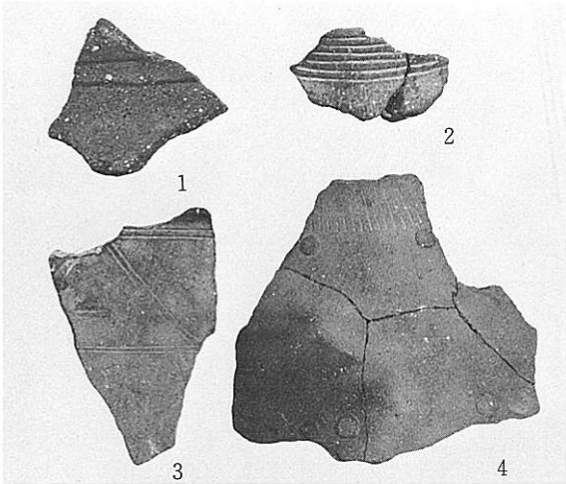
水道管切り替え部（東側）

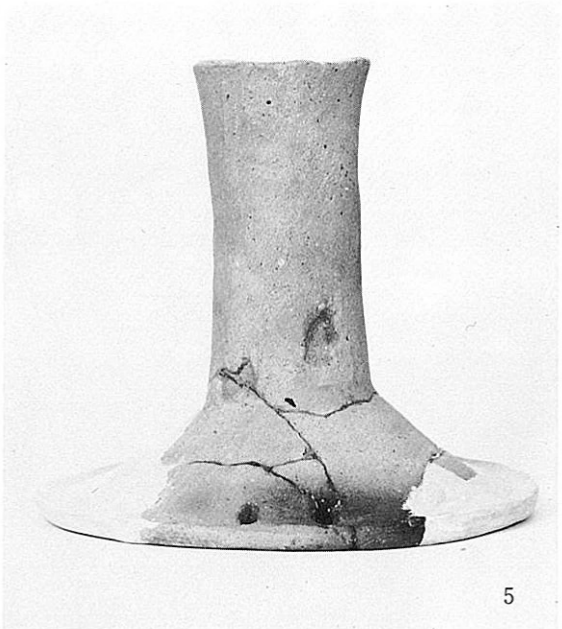
用水路切り替え部（東側）

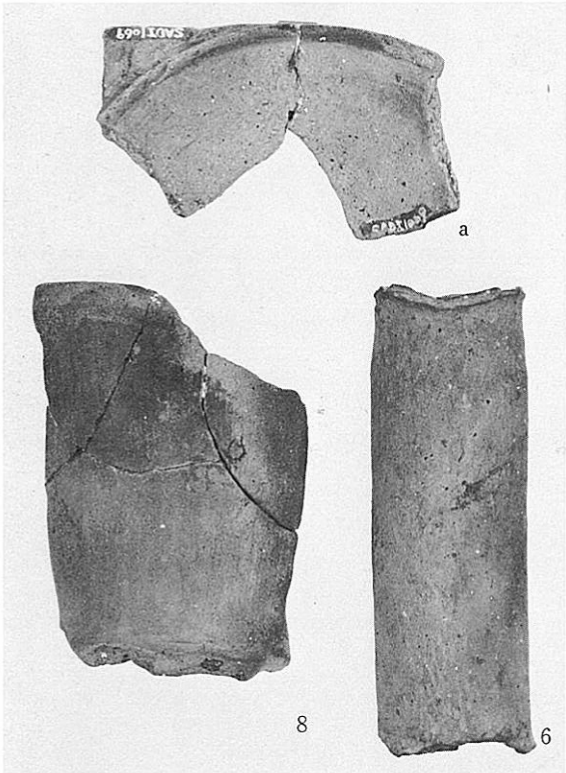


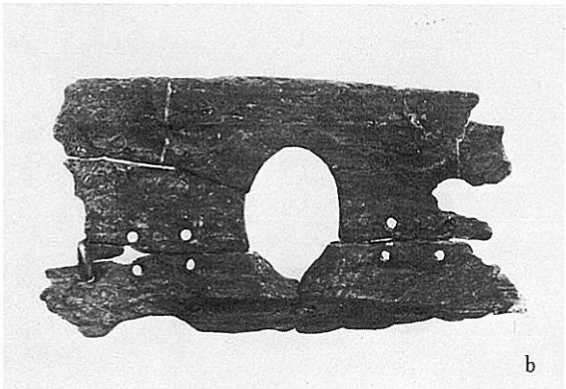
用水路切り替え部（西側）

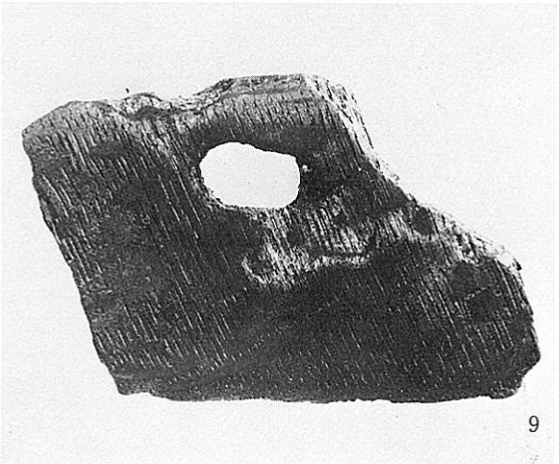
図版二三　弥生時代土器・木製品





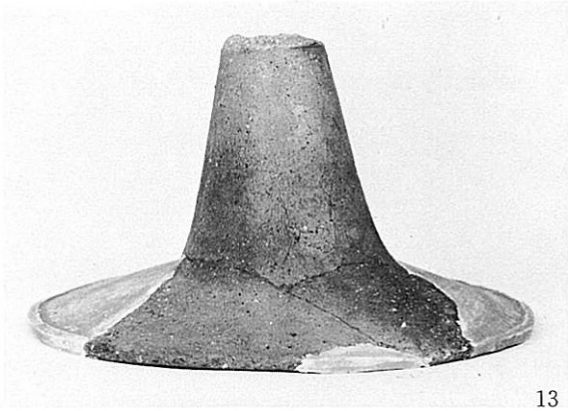






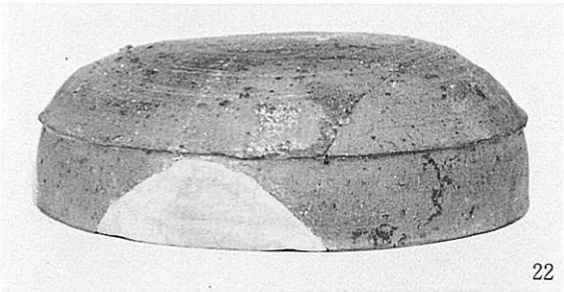
弥生時代中期流水堆積層（1～4、7）、溝状落ち込み（5、6、8、a）、自然流路（9、b）

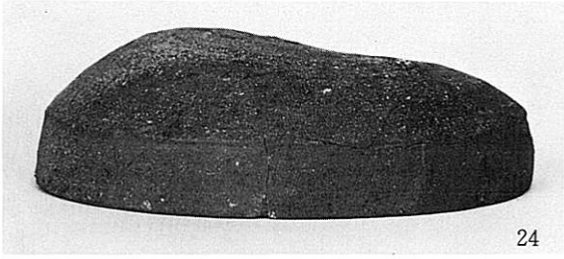
図版二三　布留式土器

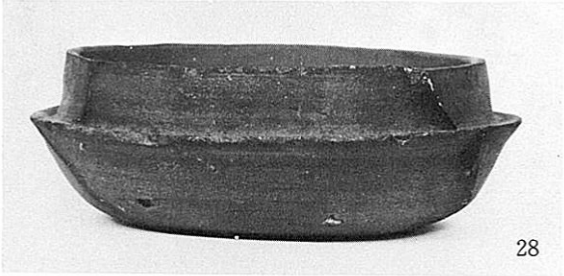


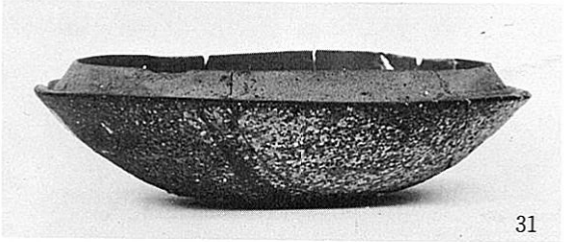
ＳＥ201(10～13)、ＳＤ209(15、16)

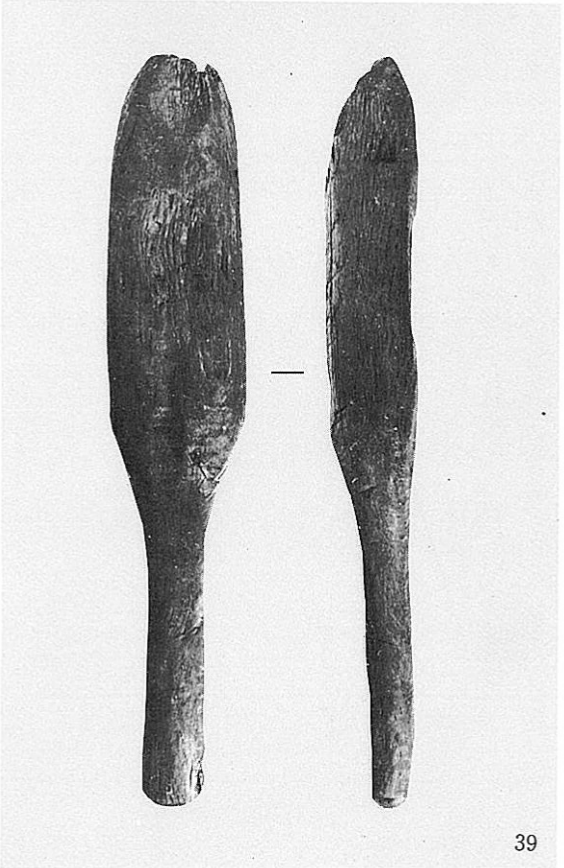
図版二四　布留式土器・古墳時代須恵器・古墳時代木製品











ＳＤ209(17、18)、畦畔（22、24、26、28、31)、暗灰色粘土層（39)

41

46

42

40

43

49

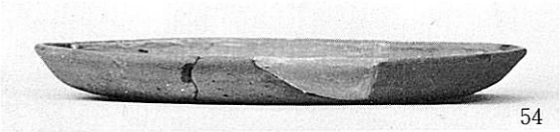
44

45

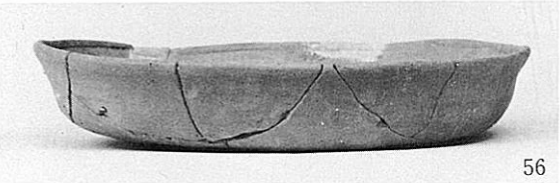
50

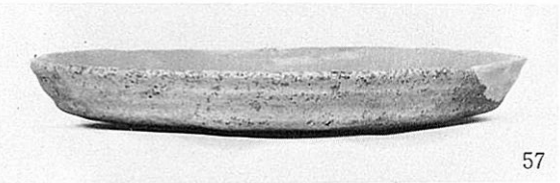
ＮＲ301(41～45)、暗灰色粘土層（46）、ＳＤ213(40)、ＮＲ302(49、50)

図版二六　奈良～平安時代土器

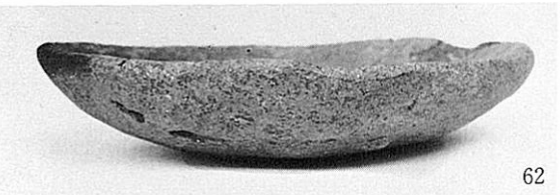

54

55


56


57

58


62

63

64

56

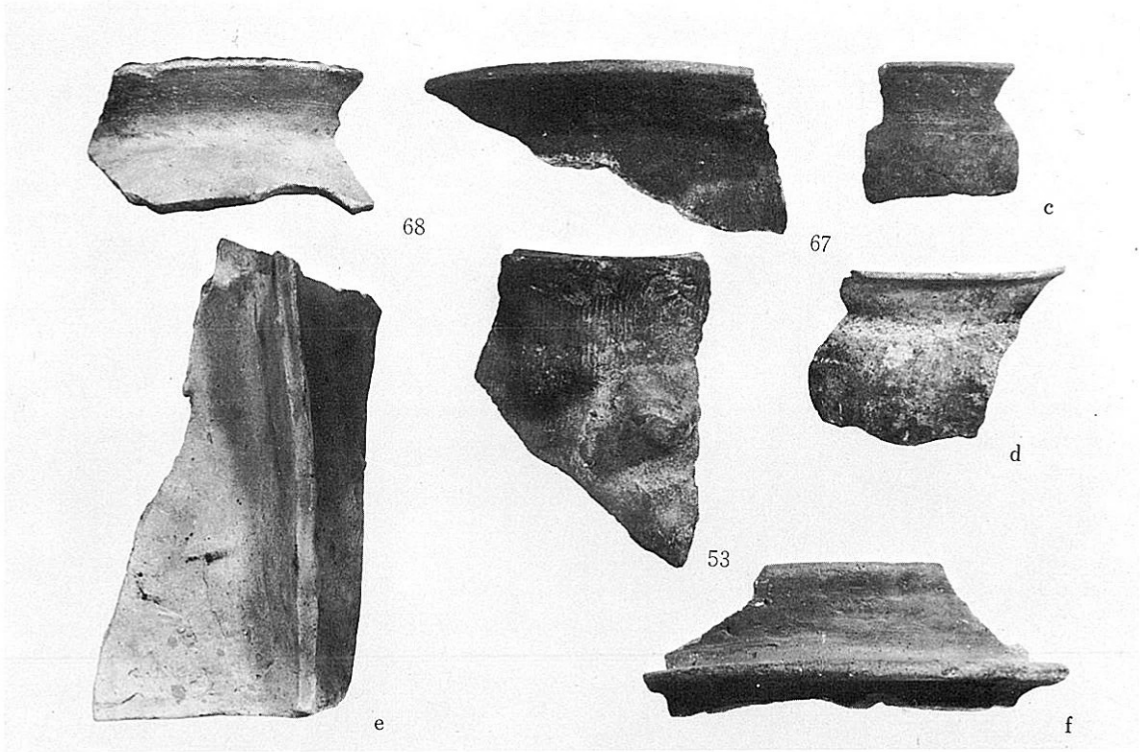
57

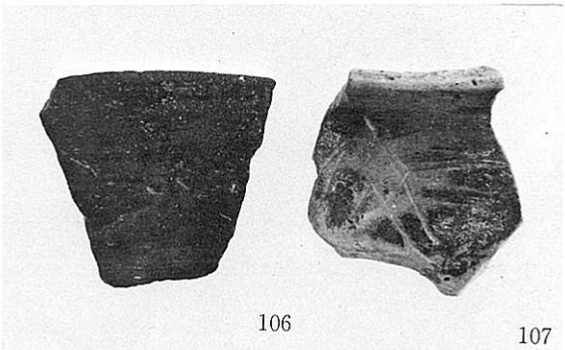
58

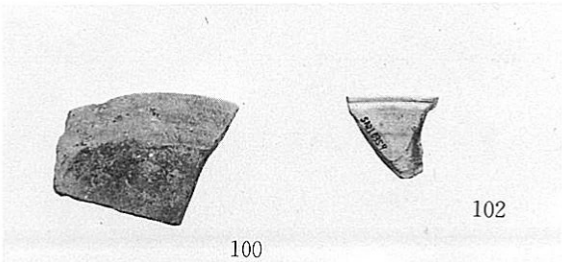
65

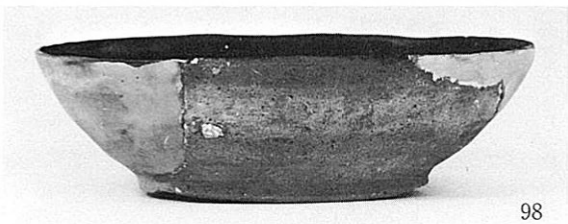
NR302(54～58、62～65)

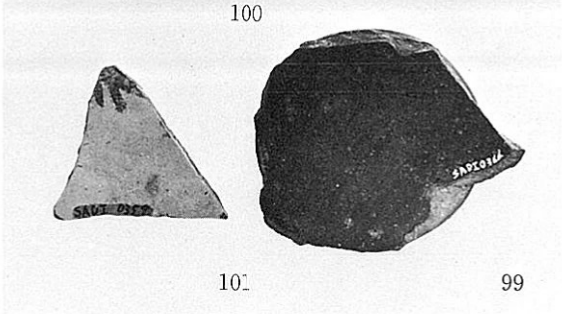
図版二七　奈良～平安時代土器





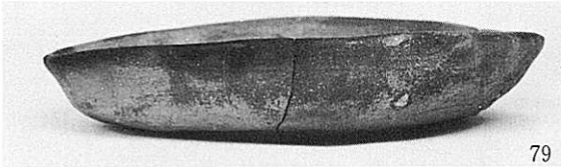


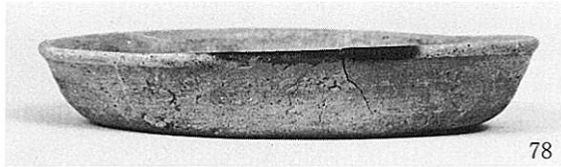


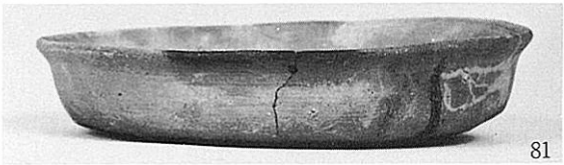


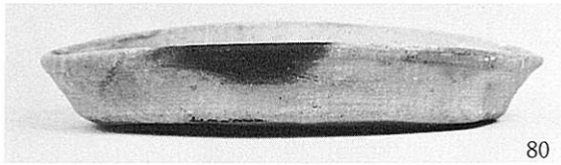
NR302(53、67、68、c、d、e、f)、SD302(77)、P301(97)、SE413(106、107)
SE402(99～102)、P302(98)

図版二八　奈良～平安時代土器


79


78

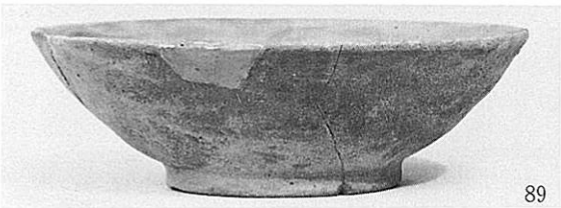

81

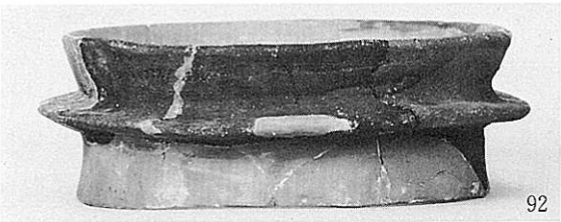

80

82

83

86


89


92

90

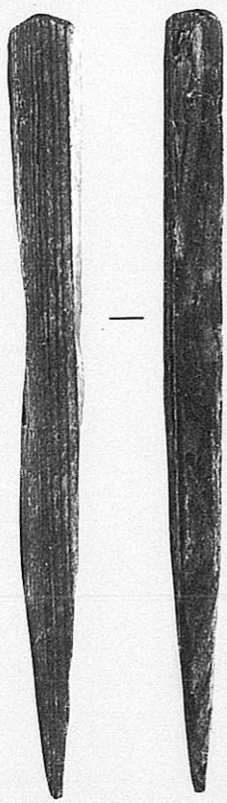
94

93

土器群302(78～83)、土器群301(86、89、90、92)、ＳＸ301(93、94)

図版二九　奈良～平安時代木製品

76



72

71

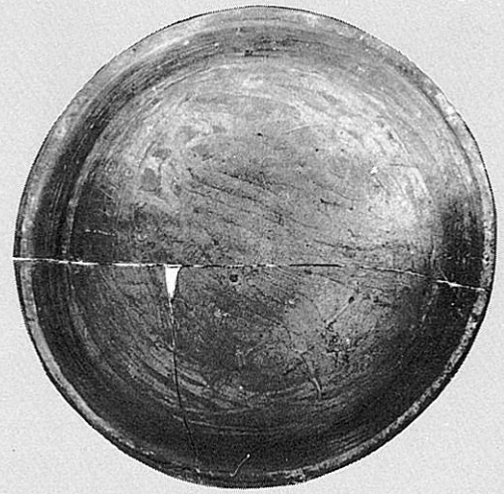
75

74

73

灰褐色砂層（76）、ＮＲ302(71～75)

図版三〇　中世土器



111

110

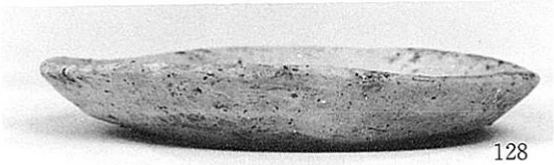
112

ＳＸ401(110、111)、ＳＫ408(112)

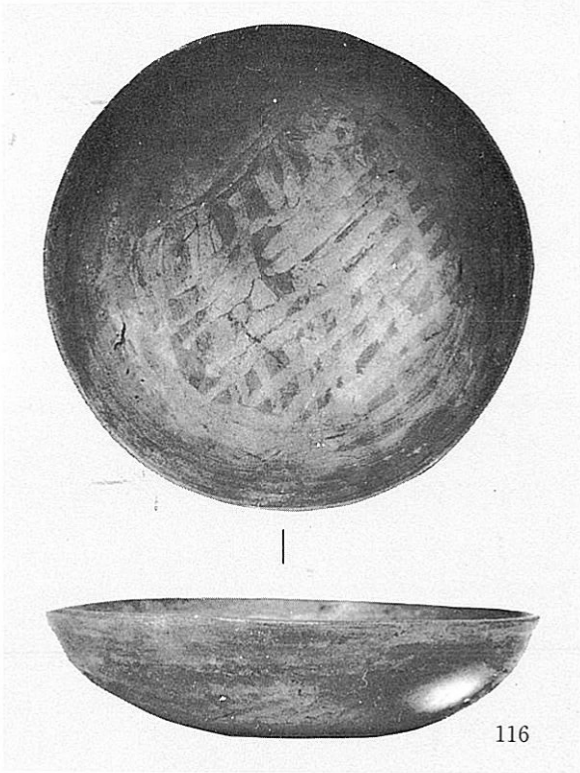
113

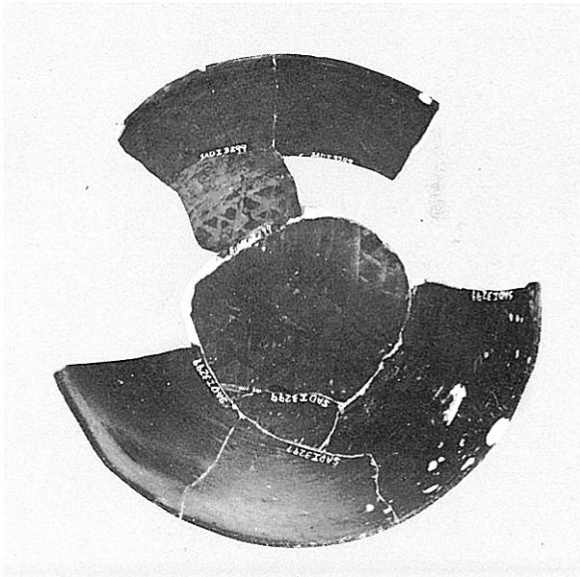
115

114


128

133

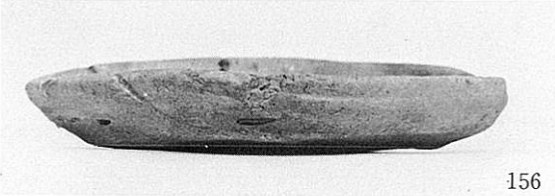

116

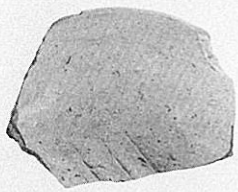


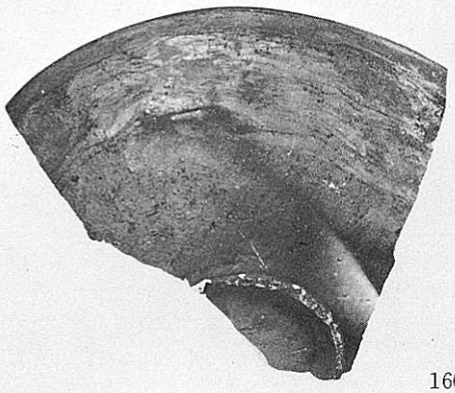
119

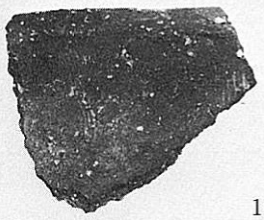
ＳＥ404(113～115)、ＳＥ420(116・119)、ＳＸ402(128、113)

図版三二　中世土器



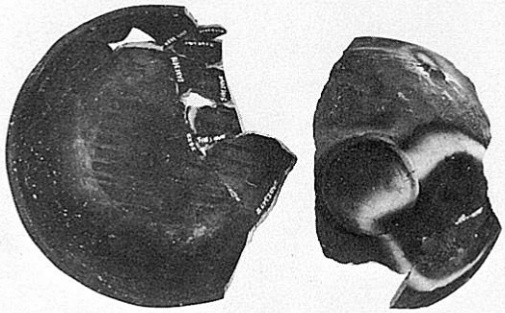






ＳＫ415(134～138)、ＳＥ416(156～161、ｇ、ｈ)

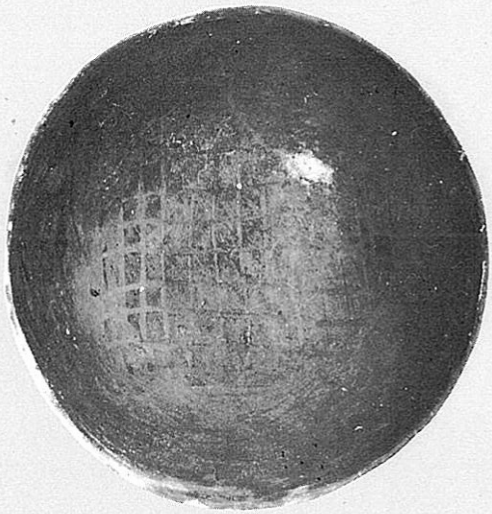
145



143　144

147

155

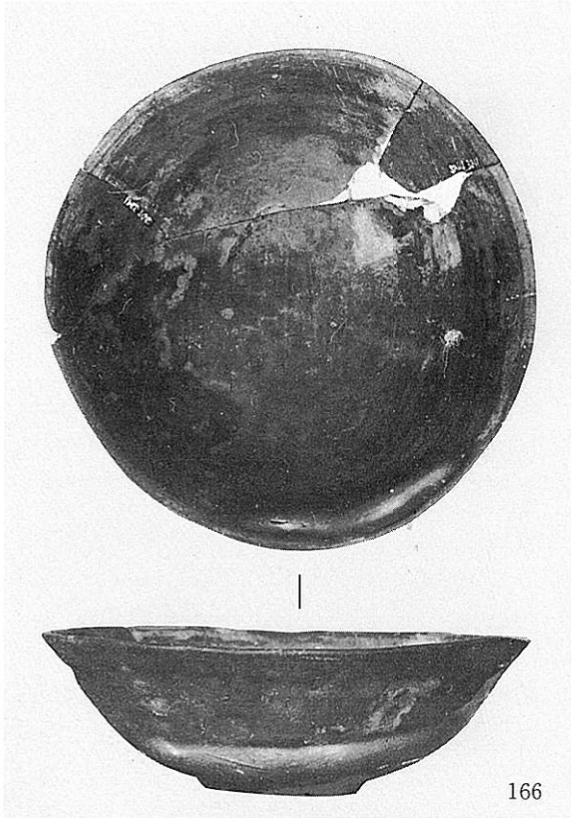


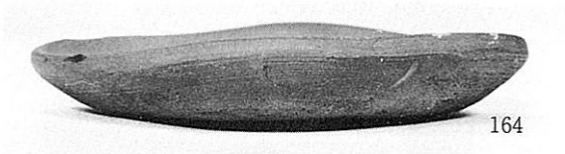
154

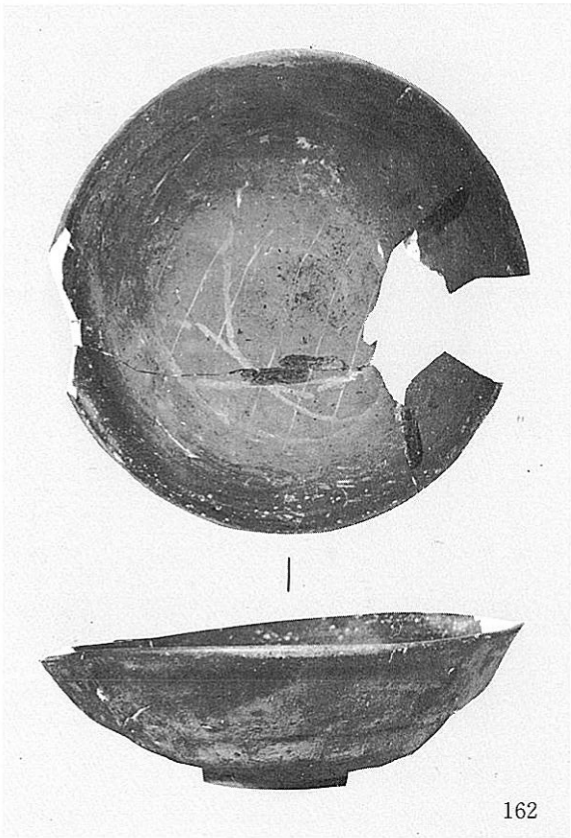
142

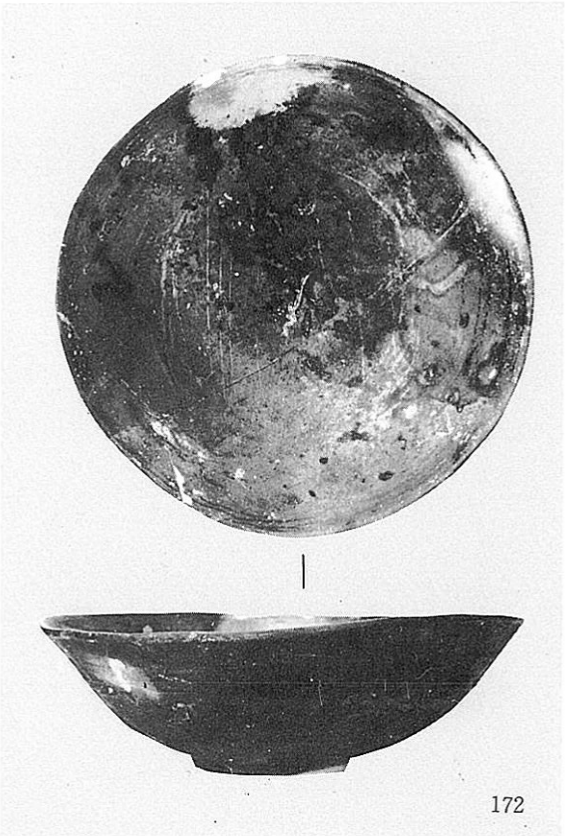
ＳＫ424(143～145)、ＳＥ417(154)、ＳＥ406(147、155)、ＳＫ403(142)

図版三四　中世土器









ＳＥ415(162、164、166)
ＳＥ408(172、175、176)

199

181

183

194

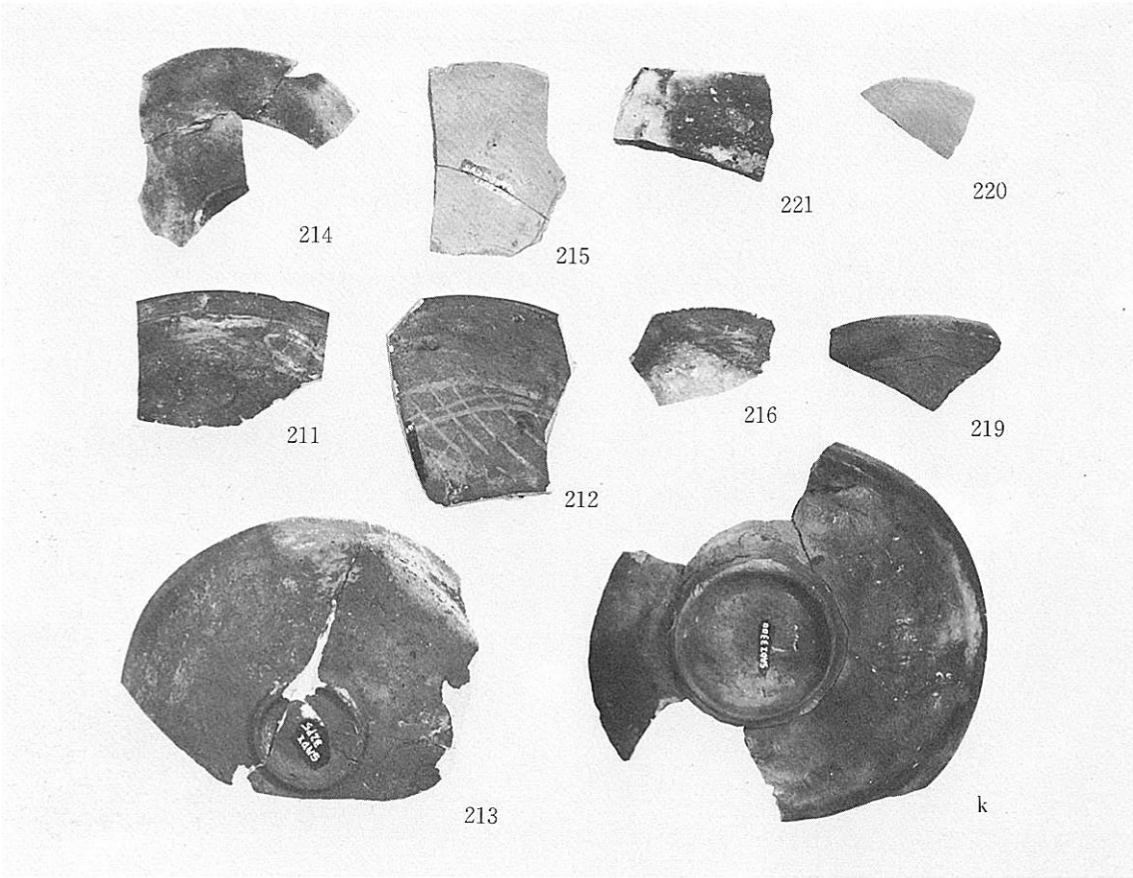
185

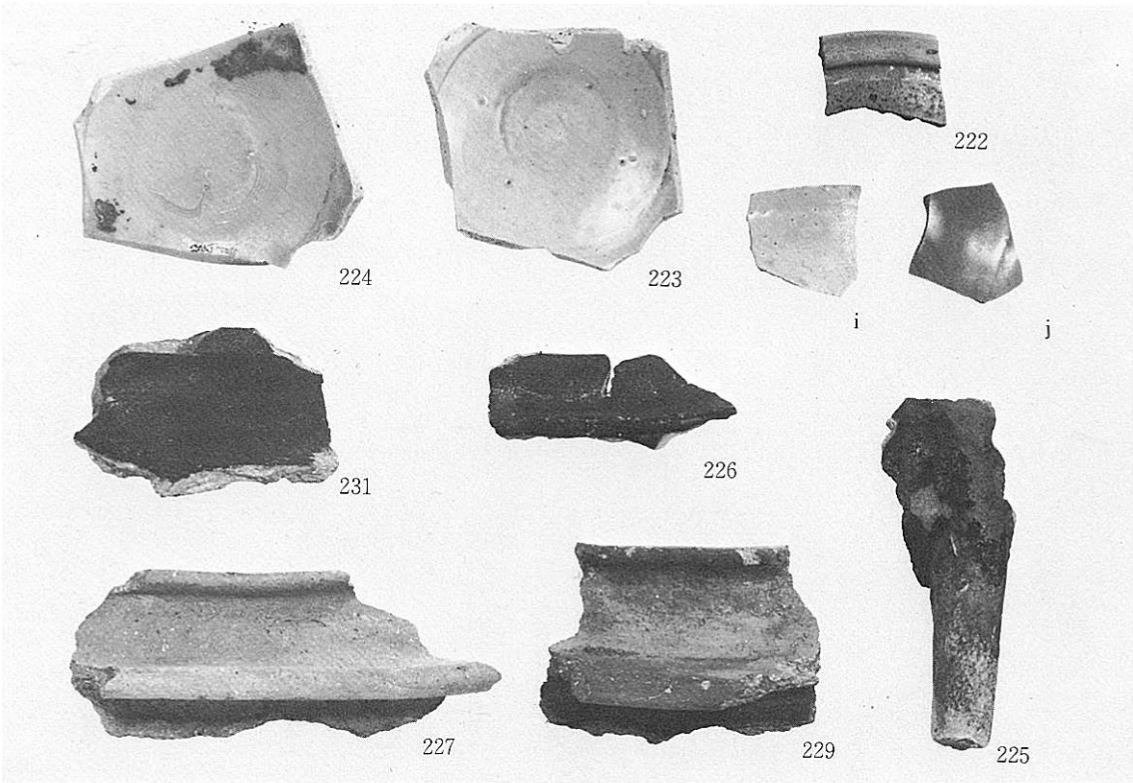
188

187

ＳＥ412(199)、ＳＥ401(181)、ＳＥ414(183、185、187、188、194)

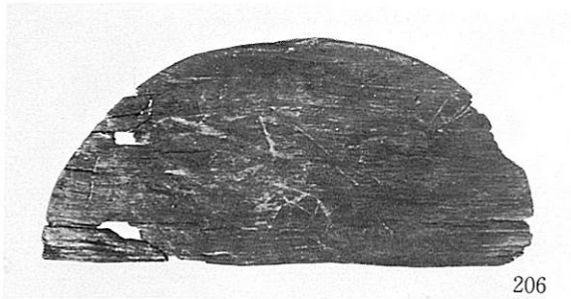
図版三六　中世土器



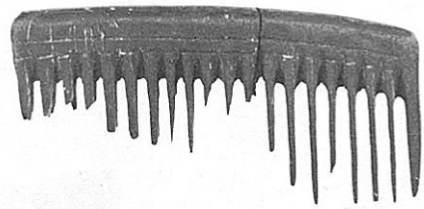


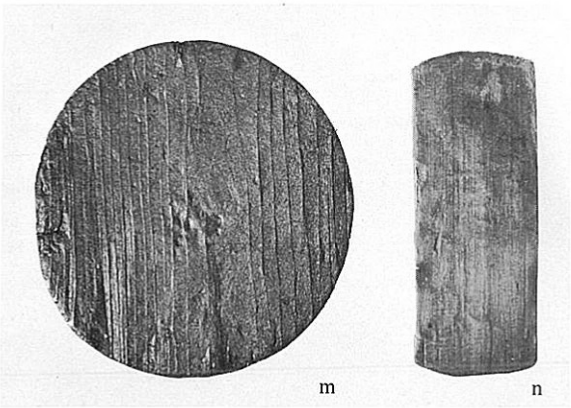
ＳＤ445 出土土器

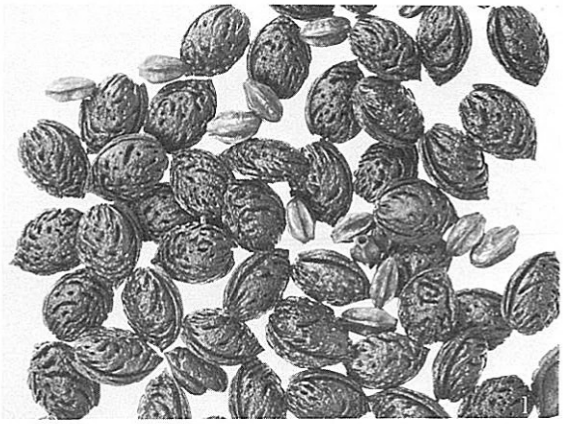
図版三七　中世木製品・種子


206

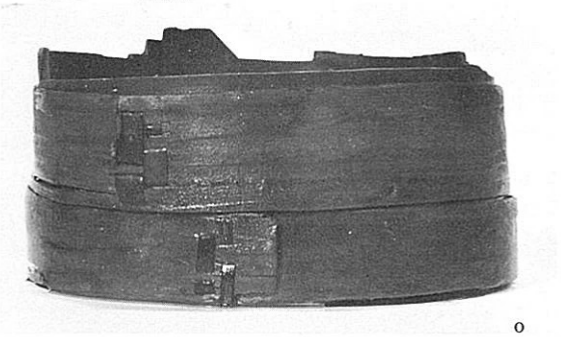
208

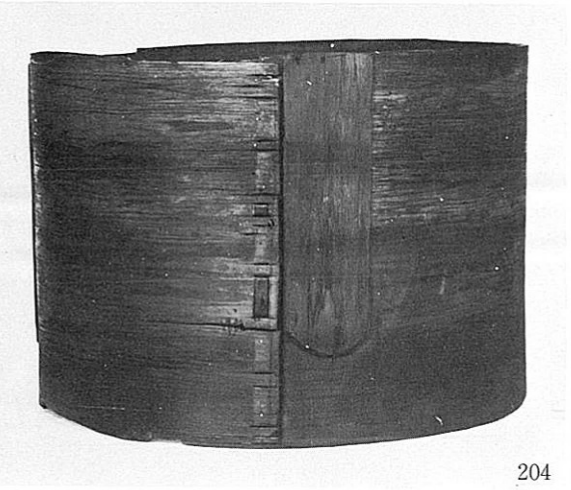

203


m　n



202

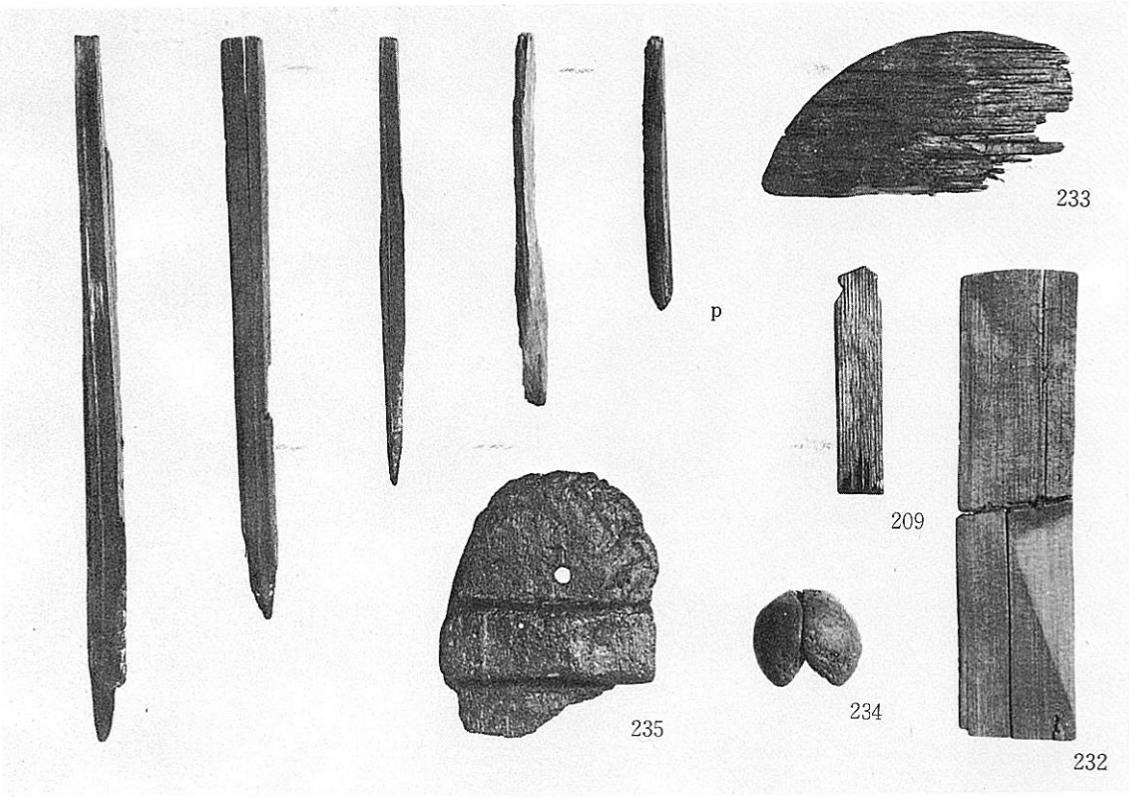

o


204

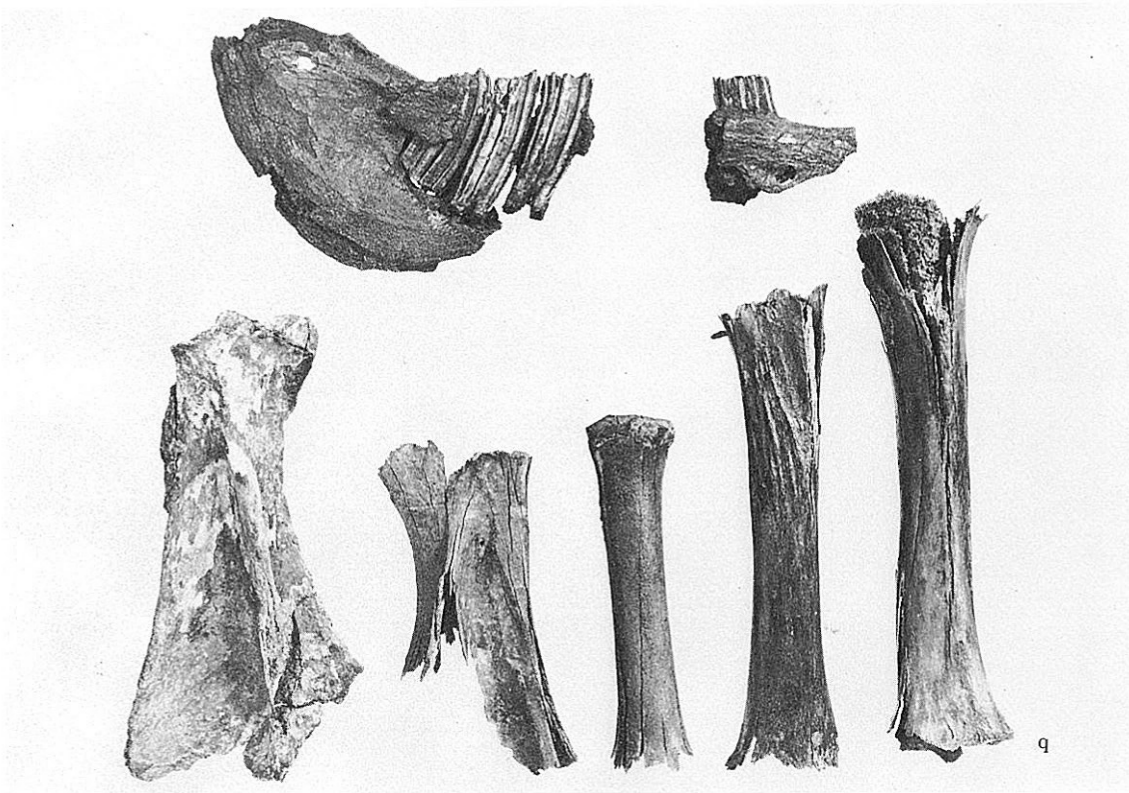
205

ＳＥ404(202、206)、ＳＥ416(ｍ、ｎ)、ＳＥ425（ｏ）、ＳＥ408(203)
ＳＥ410(208)、ＳＥ403(1、204)、ＳＥ411(205)

図版三八　中世木製品・獣骨



ＳＤ445 出土木製品



ＳＤ445 出土獣骨

佐　　堂
（その１）
近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

昭和60年１月31日発行

編集著作
発行者　財団法人　大阪文化財センター
大阪市城東区蒲生２丁目10番28号

印刷所　株式会社　中島弘文堂印刷所
大阪市東成区深江南２丁目６番８号